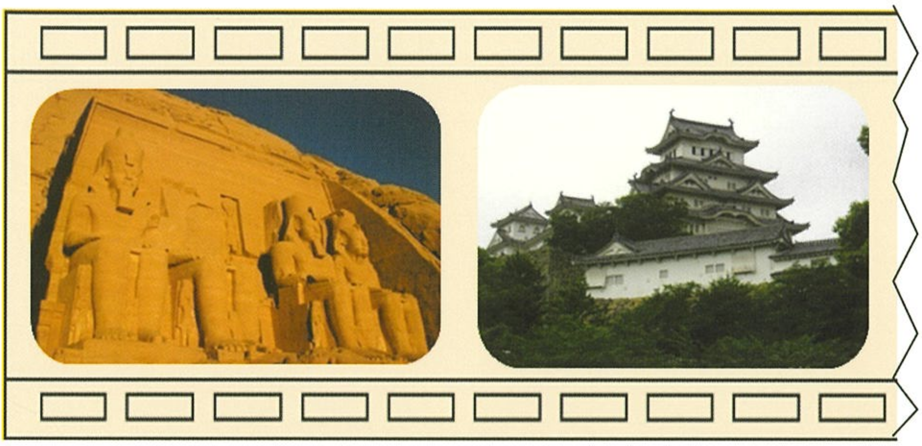
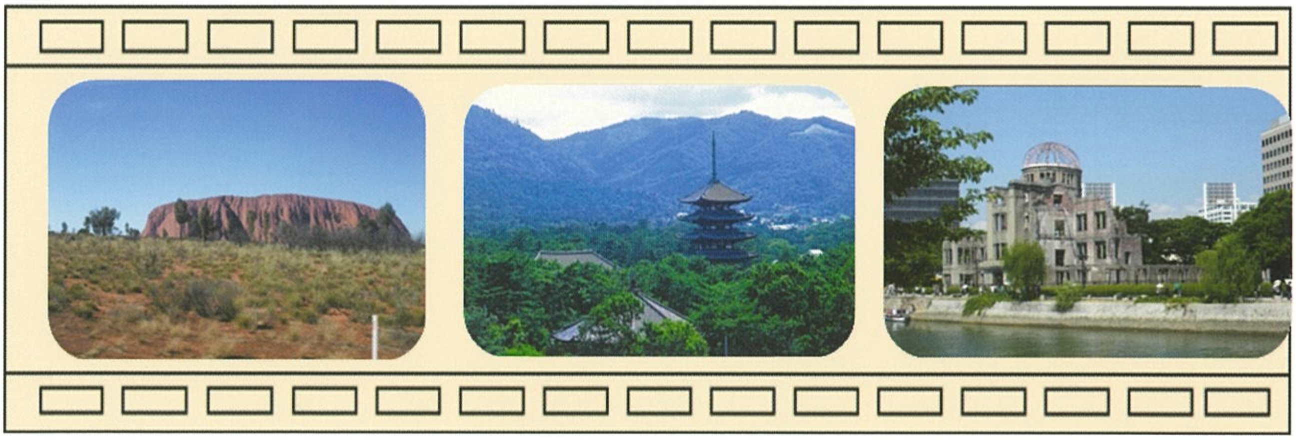
平成22年度「日本/ユネスコパートナーシップ事業」

地域・世界遺産学習を通してESDに！

ー地域・世界遺産の教材化の理論と実践ー





２０１１年３月

国立大学法人　奈良教育大学

地域・世界遺産学習を通してESDに！
ー地域・世界遺産の教材化の理論と実践ー

目次

まえがき　奈良教育大学教授　田渕五十生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
日本の世界遺産・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第Ⅰ部　理論的提言と大学での実践

第１章　世界遺産教育とその可能性
ーＥＳＤを視野に入れてー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第２章　ＥＳＤを視野に入れた世界遺産教育
ーユネスコの提起する教育をどう受け止めるかー・・・・・・・・・・ 16
第３章　ＥＳＤと世界遺産の教材化の視点
ー奈良の薬師寺を事例にしてー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第４章　『仲間と学び合った奈良の世界遺産』
ー大学における社会科教育法の実践記録ー・・・・・・・・・・・・・ 42

第Ⅱ部　教材化と授業モデルづくり

第５章　自然遺産　知床の教材化と授業モデルづくり
ー教材キット「守ろう地球のたからもの」の作成を通してー・・・・ 61
第６章　複合遺産「コルディリェーラの棚田群」の教材化
ー教材キット「守ろう地球のたからもの」に関わってー・・・・・ 82

第Ⅲ部　世界遺産学習実践研究会の優れた実践事例

○総合的な学習の時間での取組
【小学校】
①　「西大寺のひみつ発見！」西口美佐子（３年）・・・・・・・・・・・・・・・ 97
②　「追分梅林のシロップ作り」上田尚史（４年）・・・・・・・・・・・・・・ 102
③　「発信！！平城宮跡の保存！！」池見繁（４年）・・・・・・・・・・・・・ 106
④　「『東大寺』探り隊・広め隊・守り隊」小西慶子（５年）・・・・・・・・・・ 110
⑤　「校区再発見！地域の人々が大切にしてきたもの」寒川茂（５年）・・・・・ 114
⑥　「伏見のここがすごい」堀内敏一（６年）・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
⑦　「未来に残したい『美しい奈良』の風景を見つけよう」大西浩明（６年）・・ 124
⑧　「世界遺産を大切にできる社会をつくる」西谷隆詞（６年）・・・・・・・・ 128
【中学校】
⑨　「ふるさとに夢と誇りを持とう」井本章子（全学年）・・・・・・・・・・・ 132
○各教科等での取組
【小学校】
⑩　「暈繝(うんげん)彩色切り絵」山崎智子（５年図画工作）・・・・・・・・ 136
⑪　「すてき NARA 発見！」西村愛子（５年外国語活動）・・・・・・・・・・・ 140
⑫　「文字を深く学ぼうⅡ」辻倉史子（６年国語科書写）・・・・・・・・・・・ 144
【中学校】
⑬　「国際情勢と危機遺産」中原恭輔（社会科公民的分野）・・・・・・・・・・ 148

まえがき

奈良教育大学教授　田渕　五十生

「世界遺産のある奈良だから世界遺産学習ができるので、われわれの地域では無理です」とよく言われます。それに対して、私は次のように答えています。「あなたの地域にも優れた文化遺産や美しい景観があるでしょう。それを、できるだけ損なわない形で次の世代に遺すために、我々は『何をしなければならないか』、また『何をしてはならないか』を考える教育が大切ではないでしょうか」と。そのような考えから「地域・世界遺産学習」という概念が明確になってきました。世界遺産を学習した後で、「では、自分たちの地域で人々が誇りとする文化遺産は？」と問いかければ、世界遺産教育は全国どの地域でも実践可能な普遍性を持つものになるはずです。

本冊子は、世界遺産を通してＥＳＤ(Education for Sustainable Development＝持続発展教育)にどう迫るか、という視点から、さまざまな提言を行ったもので、次のようなⅢ部構成になっています。

第Ⅰ部は、地域・世界遺産教育（学習）とＥＳＤの関係についての理論的提言をしています。編者の田渕が過去 5 年間にわたって、奈良市教育委員会の先生方の実践に学びながら、まとめたものです。また、大学の初等教科教育法（社会）の授業で、「古都奈良の文化財」へ学生たちがフィールドワークを行い、その成果を 30 枚のスライドで構成する教材づくりの授業を対象化した実践報告も行っています。

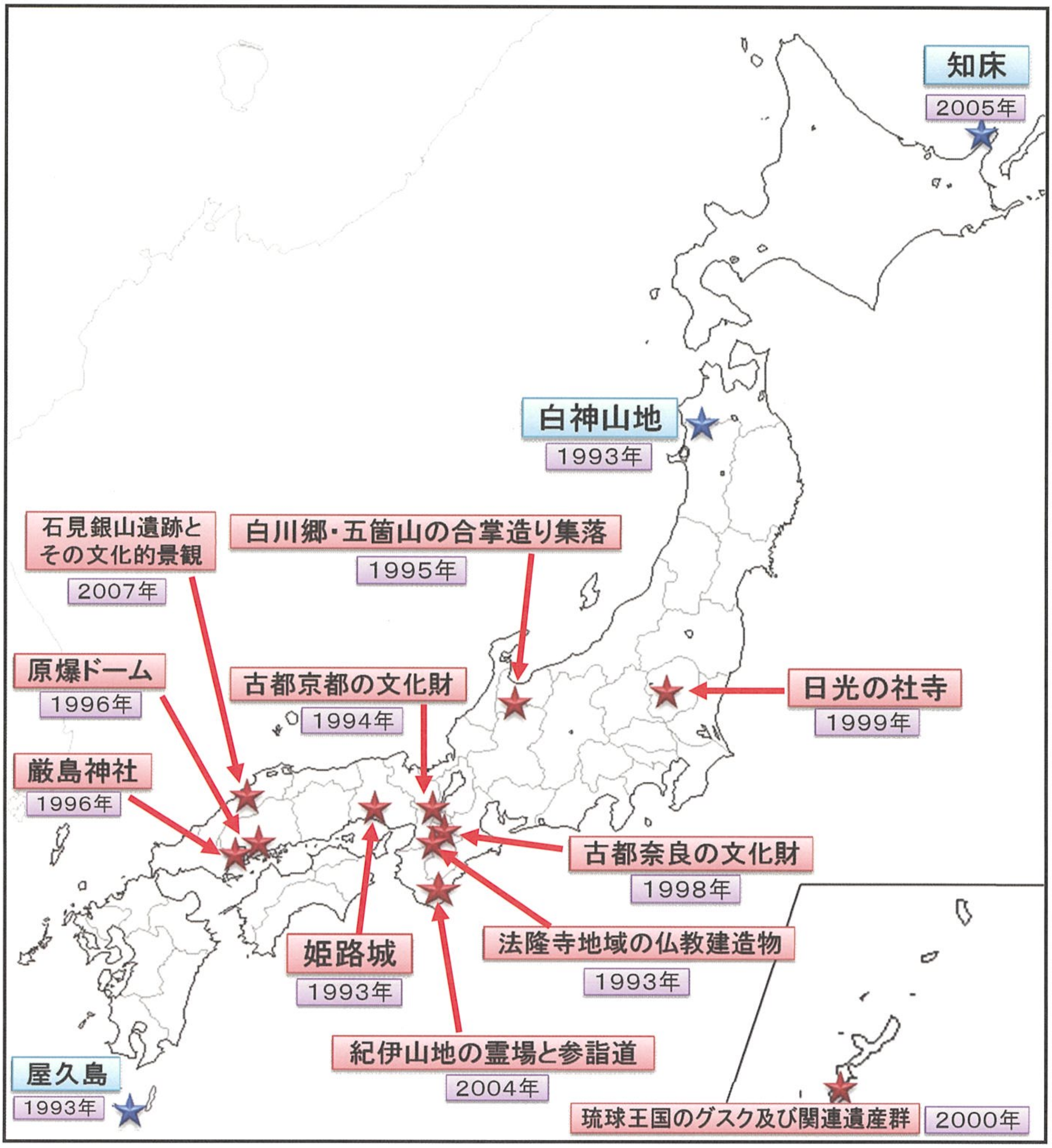
第Ⅱ部は、日本の世界自然遺産・知床とフィリピンの複合遺産・コルディエーラの棚田群を事例にして、どのような切り口から教材化したかというプロセスと、具体的な授業プランが示されています。対象とする学習者に応じて自由に変更し、授業づくりに活かしていただければ幸いです。

第Ⅲ部は、奈良市教育委員会の先生方の実践記録です。奈良市では 4 年前からＥＳＤを視野に入れた世界遺産学習、地域遺産学習に取り組んでいます。そしてお互いの実践を持ち寄り、毎年 1 回、実践研究会を開催してきました。そこで発表された優れた実践を 13 編、選りすぐって掲載しています。参考にしていただき、それぞれの地域で実践を深めていただければ幸いです。

最後に、授業モデルを作成してくださった奈良教育大学附属中学校の谷口尚之先生、鳥取県米子市立淀江中学校教諭の山下欣也先生にお礼を申し上げます。また、奈良市教育委員会教育推進係長の中澤静男先生にも感謝いたします。１３編の報告は、いわば中澤先生と一緒に実践され、対象化して実践の持つ意味がより深められています。

ＥＳＤは現代における市民教育(Citizenship Education)の中核に位置づくべきもので、重要な教育課題だと考えています。読者の皆さん！新しい教育課題に共に取り組んでいきましょう！

日本の世界遺産


知床
2005年
白神山地
1993年
石見銀山遺跡と
その文化的景観
2007年
白川郷・五箇山の合掌造り集落
1995年
原爆ドーム
1996年
古都京都の文化財
1994年
日光の社寺
1999年
厳島神社
1996年
古都奈良の文化財
1998年
法隆寺地域の仏教建造物
1993年
姫路城
1993年
紀伊山地の霊場と参詣道
2004年
屋久島
1993年
琉球王国のグスク及び関連遺産群
2000年

第Ⅰ部
理論的提言と大学での実践

第１章　世界遺産教育とその可能性

―ＥＳＤを視野に入れて―

田渕　五十生

はじめに

世界遺産がブームである。テレビのどのチャンネルにも世界遺産番組が登場し、旅行業界もより多く世界遺産を旅程に組み込んで、新しい顧客の獲得を競っている。一方、観光地をもつ地方自治体も世界遺産の暫定遺産へのリスト入りを目指して、誘致合戦を繰り広げている。

けれども、ユネスコがユネスコ協同学校（Associated School Project＝ＡＳＰ）を通して提起している世界遺産教育（World Heritage Education =WHE）への認識はきわめて低く、世界遺産教育という用語自体、まだ日本では十分に「市民権」を得ていない。

ここでの目的は、三つある。一つは、世界遺産をめぐってさまざまな不祥事件が生じている状況のもとで、意図的な世界遺産教育の必要性を確認することである。二つは、世界遺産はたんなる観光資源ではなく、豊かな教育資源に転化できるのを示すことである。三つは、国際理解教育、人権教育、平和教育、環境教育など、世界遺産をツールにすれば学習者はよりリアリティをもって学べる経緯を指摘することである。

まず、世界遺産への認識の実態を報告し、その背景に「世界遺産条約」（Convention Concerning the Protection of World Cultural and Natural Heritage）への浅薄な認識があることを指摘する。次に、世界遺産にはどのような種類があり、現在どのような問題が生じているのかについて報告する。そして、ユネスコの世界遺産教育の動向をトレースして、世界遺産教育の概念を整理する。さらに、世界遺産教育と国際理解教育、平和教育、人権教育、環境教育などとの関連を、具体的な教材事例を通して論究する。最後に、現在、ユネスコが提起している「持続可能な開発のための教育」（Education for Sustainable Development =ＥＳＤ）と世界遺産教育の関係について指摘し、日本ユネスコ協会連盟が提唱している「地域・世界遺産教育」という概念を紹介する。

世界遺産についての研究や論考は無数にある。けれども、世界遺産教育は緒に就いたばかりであり、奈良市教育委員会の組織的な取り組み以外には、実践報告も非常に少ない。そのなかで、2007年の『世界遺産教育実践事例集』[1]と2008年に奈良市教育委員会が副読本として出版した『奈良大好き世界遺産学習』は特筆されるべきものである。そして、実践を対象にした教育学研究については、筆者らの研究[2),3),4)]以外はほとんどない。本書は世界遺産教育についての体系的な論考ではなく、試論的なものである。まず、そのことを読者にお断りしておきたい。本書を通して世界遺産教育への理解が深まり、国際理解教育の領域が拡がることを願っている。

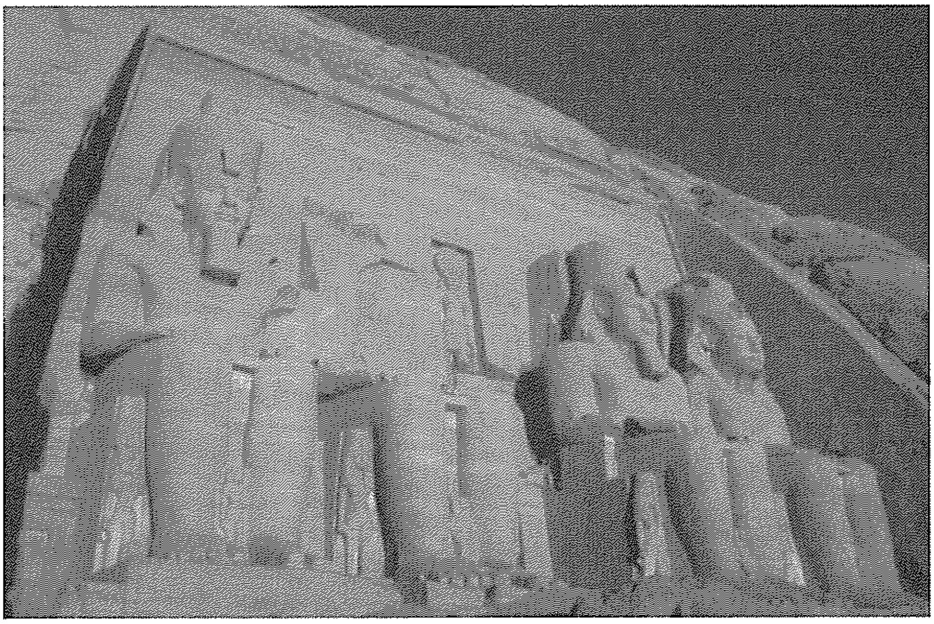
１．世界遺産をめぐる状況と世界遺産教育の必要性

１－１　一般的な世界遺産への認識と「世界遺産条約」

熱い世界遺産ブームと世界遺産教育への低い認知度。このギャップの背景には、「世界遺産条約」の真意が理解されていない社会の状況がある。世界遺産を「観光の目玉」にし

て新しい需要を掘り起こしたい観光業界の思惑。世界遺産の登録で「地域の活性化」を図りたい自治体。両者の思惑が合致して一面的な世界遺産の認識が定着したのである。「なぜ『世界遺産条約』が結ばれ、登録にどのような義務が伴うか」という本質的な論議が欠落したままなのである。それでは、どのような経緯で「世界遺産条約」が結ばれたのであろうか。

1960年代に、エジプト政府のアスワン・ハイダム建設により、アブシンベル神殿を含むヌビア遺跡が水没の危機に直面していた。当時は東西の冷戦下で、エジプトへの経済援助は米ソの覇権をめぐるデリケートな政治問題であり、さらなる救済資金の獲得は絶望的であった。そこで、ユネスコは、アブシンベル神殿は「エジプト一国の宝物」ではなく、「人類共通の宝物」というキャンペーンを展開し、アブシンベル神殿を約 60 メートル上の高台に移築してヌビア遺跡を保存したのである。政治的なデッドロックに陥っていた遺跡保存の課題を募金活動で解決したユネスコのキャンペーンは、国際協力の快挙として記憶されている。



【図1 アブシンベル神殿（写真提供 久保美智代氏）】

このキャンペーンが契機になって、1972年に「世界遺産条約」が締結され、「世界遺産基金」（World Heritage Fund）が設立された。経済力や技術力が弱く文化遺産や自然遺産を自国で守れない国や地域の遺産を国際協力によって保存しようという目的からであり、それが「世界遺産条約」の本来の趣旨であった。

日本が世界遺産条約に正式に加盟したのは 1992 年で、125 番目の加盟国であり、１９７２年の締結から約20年も遅れていた。遅れた理由の一つ日本には、すでに1950年に制定された「文化財保護法」があり、自国で文化財を保存できる体制が整っており、「世界遺産条約」に加盟する必要がなかったからである。

遅れたもう一つの理由は、1970年代初めの時代的な風潮である。田中角栄元首相の『日本列島改造論』に代表される経済成長至上主義の時代であり、当時の日本政府がユネスコの文化政策を軽視していたことは否定できないだろう。

１－２　「世界遺産ブーム」の影で

「世界遺産条約」に加盟した翌年の 1993 年には、「姫路城」、「法隆寺地域の仏教建造物」、「白神山地」、「屋久島」の４サイト（遺産や地域）が一挙に世界遺産に登録された。そうすると、そこへ観光客が殺到していった。その後、年々、登録サイトが増え、2007年には

世界遺産サイトが 14 ヵ所に達し、どこでも観光客が急増している。ちなみに、2007 年に登録された「石見銀山遺跡とその文化的景観」の場合、島根県の大田市観光課の統計によると、登録前の 2005 年には 340,000 人だった観光客が、2007 年には 713,700 人へと約 2 倍も増加している。

「観光業は煙突のない産業」といわれるように、新しい雇用を創出して地域経済への波及効果は非常に大きい。その状況を目の当たりにして、他の観光地も世界遺産の登録に向けて、地域を挙げて関係省庁に働きかけている。「平泉－浄土思想を基調とする文化的景観」、「富岡製糸場と絹産業遺跡群」、「飛鳥・藤原の宮都とその関連群」など、現在、9 サイトが暫定遺産リストに登録されているが、さらに 33 サイトが暫定遺産へのリスト入りに名乗りを上げているのである 5)。

このような観光業界の隆盛がある一方で、深刻な事態が生じている。人口 14,000 人の屋久島に年間 39 万人の観光客が押しかけ、貴重な植物の生態が踏み荒らされ、トイレの不整備から自然環境が破壊されている。また、伝統的な合掌造りが緑の稲田に映える「白川郷・五箇山の合掌造り集落」の白川郷の荻地区では、押し寄せる自動車や大型バスの駐車場を造るのために水田が埋め立てられて、観光バスの屋根越しに合掌造りを見るまでになっている。遺産登録の直前の 1993 年では 555,000 人だった観光客が、10 年後の 2003 年には 1,559,000 人へと 3 倍に急増し 6)、観光客目当ての土産物店やレストランが立ち並び、合掌造りの集落の景観にそぐわない違和感を与えている。ツーリズムによる景観破壊の典型である。

【 図2 白川郷　観光バスの屋根越しに見る合掌造り
（写真提供 山下欣浩氏）】

五箇山地区では、駐車場は集落外に設けられ、観光客は徒歩でなければ集落に入れない。筆者は、2008 年 3 月に当地の菅沼集落を訪れて観光協会の関係者と面談したが、「荻地区でこのまま俗化が進めば、世界遺産から削除されかねない」と危惧されていた。

世界遺産の登録は、「観光地にお墨付き」を与えることではない。人類の宝物としてその普遍性が認められただけではなく、保全や保存の義務が自国や地域住民に課せられていることを銘記しなければならない。残念ながら、昨今の暫定リストへの「登録ありき」の地方自治体の動向を見るにつけ、その皮相さや浅薄さに疑義を呈するしかない。「世界遺産条約」の第２７条には、「締約国は教育を通じて、自国民が世界遺産を尊重するように努める」という条文がある 7)。あらためて、世界遺産教育が必要なことを認識すべきであろう。

２．世界遺産の種類と危機遺産

２－１　世界遺産の種類

現在（2010 年 10 月）、世界遺産に登録されたサイトは 911 件にのぼり、その内訳は、文化遺産が 704 件、自然遺産が 180 件、文化遺産と自然遺産の両者を兼ね備えた複合遺産が２７件ある。登録されるには「顕著な普遍的な価値」(OUV=Outstanding Universal Value)をもっているという登録基準がある。文化遺産の場合は「国際記念物遺跡会議」（International Council on Monuments and Cites, 略称ＩＣＯＭＯＳ）が、自然遺産の場合は「国際自然保護連合（International Union for Conservation of Nature, 略称ＩＵＣＮ）が審査を行い、21 カ国で構成される「世界遺産委員会」(World Heritage Committee)で決定することになっている。ＩＣＯＭＯＳは専門家によるＮＧＯ（非政府組織）であり、ＩＵＣＮは各国政府と民間の自然環境保全に関する国際的な連合体である。

文化遺産とは、優れた普遍的価値をもつ建造物や遺跡などで、日本では「姫路城」や「法隆寺地域の仏教建造物」など 11 サイトが該当し、６つの登録基準に則して選定されている。

自然遺産とは、優れた価値をもつ地形や貴重な生物、美しい景観を有する地域であり、日本では「白神山地」、「屋久島」、「知床」が該当し、４つの登録基準に則して登録されている。

複合遺産とは、文化遺産と自然遺産の要素を兼ね備えている遺産で、世界に２７件ある。その一つが、「ウルル、カタ・ジュタ国立公園」である。オーストラリアの赤い心臓「エアーズロック」として有名で、当初は自然遺産として登録されていた。けれども、先住民アボリジニの聖地であることから、1994 年の「国連国際先住民年」を契機に、アボジリニの言語である「ウルル、カタ・ジュタ」（日陰のさすところ、沢山の頭の意味）という名称で、複合遺産として再登録された。「自然」と「文化」に峻別するのは西欧の植民者の発想であり、先住民のアボジリニからすれば一体の存在なのである。

隣国のニュージーランドの「トンガリロ国立公園」も、先住民マオリの人々が崇拝する聖なる山であったことから、同じように複合遺産として登録されている。先住民の立場からの登録変更の事例そのものが、文化の多様性に気づかせる具体的な教材になるのである。

２－２　無形文化遺産と登録基準の見直し

３種類の世界遺産に加えて、新しい概念の世界遺産が 2008 年 11 月から正式に発足した。それが、無形文化遺産である。歴史的な建造物や自然環境など有形の世界遺産とは異なり、人から人に伝えられた口承文化や伝統芸能などの「生きた文化」を保護し伝承しようとする遺産である。

2003 年に「無形文化遺産保護条約」がユネスコの総会で採択され、すでに、「人類の口承および無形遺産の傑作宣言」のリストに入っていた 90 件が、今回、第 1 陣の無形文化遺産として登録され、日本からは能楽、文楽、歌舞伎の 3 件がその仲間入りを果たした。そして、2009 の 9 月に、第 2 陣として 166 件が登録され、日本からは雅楽、京都祇園祭の山鉾行事、奈良の題目立などの 13 件が加えられて合計 16 件になった。

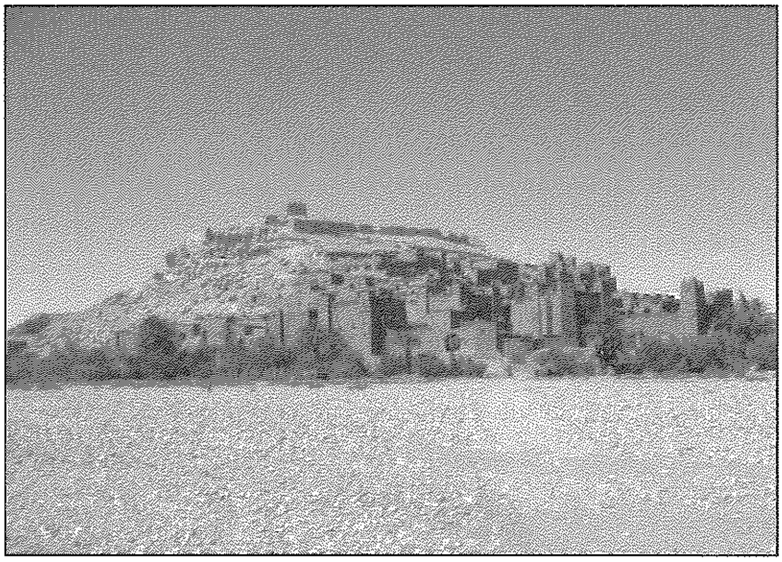
無形文化遺産の場合、有形の文化遺産が少ないアフリカ、アジア、南米からの登録

が多数ある。アフリカの優れた伝統芸能が登録されただけでなく、奴隷として連行された南米で、故郷を忍んで継承された歌や踊りの伝統芸能も登録されている。

文化遺産の登録基準についてみると、アフリカには世界遺産に登録された文化遺産は非常に少ない。そのサイト数は、イタリア１国に及ばない。登録基準が西欧文化の文脈に即したものだったからである。「本物か否か」を問う「真正性」(Authenticity)が、建築当時の材質であるか否かで厳しく判定された。その結果、ヨーロッパの「石の文化」に有利で、補修が必要なアジアの「木の文化」やアフリカの「土の文化」に不利だったのである。

けれども 1994 年に、奈良で開催された「専門家会議」で、材質が変わっても、それを扱う技術と、同じデザインで補修されたものであれば「真正性」をもつと解釈されるようになった。それが、翌年の「奈良文書」となって登録基準が柔軟に適応されるようになり、アジアとアフリカの文化遺産が増加した。やっと「木の文化」と「土の文化」への正当な評価がされるようになったのである。ヨーロッパ出身の専門家たちが自分たちの文化を相対化して「文化の多様性」に気づいたからかもしれない。

2007 年 8 月に、モロッコのサハラ砂漠北縁の世界遺産「アイット・ベン・ハドゥの集落」を訪問した。かつて、名画「アラビアのロレンス」のロケが行われたカスバ街道の集落である。そこでは、専門家の立会いのもとに、労働者たちが当時の材質である藁を漉き込んだ赤い泥土で城壁の修理をしていた。「真正性」は保たれているのである。このような相手文化の文脈に則して考えるという、ＩＣＯＭＯＳの登録基準の変化自体も、国際理解教育の教材になるにちがいない。



【図3 アイット・ベン・ハドゥの集落（筆者撮影）】

２－３「負の世界遺産」

文化遺産、自然遺産、複合遺産はどれも優れた文化や建造物、美しい景観や貴重な自然であるが、それ以外に「負の世界遺産」と呼ばれる遺産がある。正式にカテゴリー化された遺産ではなく、平和や人権の視点から、人類が犯した罪過を「負の遺産」として記憶にとどめようとする遺産で、別名「記憶の遺産」とも呼ばれ、登録基準の 6 番目の基準を用いて登録されている。その基準とは、「顕著で普遍的な価値をもつ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連があること（極めて例外的な場合で、かつ他の基準と関連している場合のみ適用）」[3]という遺産である。

「負の世界遺産」としては、ポーランドにある「アウシュビッツ・ビルケナウ、ナチスドイツの強制絶滅収容所」、広島の「原爆ドーム」が有名であるが、それ以外、セネガルの首都ダカール沖の「ゴレ島」と、南アフリカ共和国のケープタウン沖に浮かぶ小島「ロベン島」がある。

「ゴレ島」は、奴隷貿易の拠点であった。16 世紀から 19 世紀にわたって多くの奴隷たちが鎖に繋がれた収容施設があり、ここからアメリカ大陸に「積み出され」た悲劇の場所である。「ロベン島」は、アパルトヘイト時代の黒人専用の牢獄があった島で、ネルソン・マンデラ元大統領もこの島で 20 年近く牢獄生活を強いられた。

これらの建造物の保存は、平和教育や人権教育の視点からも非常に重要である。人間の記憶は風化しやすい。とくに、自己にとって不都合な記憶の場合、それを意識下に抑圧させる防衛機制が働き、容易に忘却させてしまう。そのとき、保存された建造物という「物」が、事実を「語る」教材に転化するからである。

２－４　危機遺産

2007 年 7 月に、ニュージーランドのクライストチャーチで開催された「第 31 回世界遺産委員会」で、「ガラパゴス諸島」(エクアドル)、「ニオコロ・コバ国立公園」(セネガル)、「サーマッラ遺跡群」(イラク) が「危機遺産」(World Heritage in Danger) に登録された。「ニオコロ・コバ国立公園」は、密猟とガンビア川のダム開発で野生動物への深刻な影響が懸念されている。密猟による危機遺産は、「ニオコロ・コバ国立公園」以外、アフリカに 9 サイトも存在している。とくに深刻なのは、犀とアフリカ象の密猟である。犀の角は漢方薬として非常に高価で、すでに数千頭にまで減少して絶滅危惧の動物になっている。

「サーマッラ遺跡群」は、イラク戦争による破壊と盗掘などの理由から危機遺産になった。同じ理由で、古代都市アッシリア帝国の首都であった「アシュール」遺跡も危機遺産に登録されている。同様に、アフガニスタンでも「バーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群」と「ジャムのミナレットと考古遺跡群」が危機遺産に登録されている。どのサイトも、「平和でなければ世界遺産は守られない」という教訓を物語っている。

「ガラパゴス諸島」は、ゾウガメなど固有種が多く、生息地に応じて嘴の形が変化したピンチ(小鳥)など、ダーウィンが進化論のヒントを得た島として有名である。1978 年に、自然遺産の第 1 号として登録された。しかし、観光客の急増に伴い、観光業に雇用を求めた多数の人々が本土から移住して自然景観が変化しただけでなく、猫やヤギなど新しく外来生物が浸入して生態系そのものが崩壊しかけている。ツーリズムと開発による環境破壊の典型であるが、危機遺産に登録されないまでも、増加する観光客が世界遺産に深刻な影響を与えているサイトは無数にある。

危機遺産を通して多くの学習が可能になる。世界地図に危機遺産のサイトを書き写し、その分布図から学習者の気づきを引き出させるのである。文化遺産の場合は、戦闘地域や民族紛争地域と重なってくる。自然遺産の場合は、南北問題の大きな経済格差、その貧しい南の国のなかでのさらなる所得格差が浮かび上がってくる。

また、資源をめぐる内戦が密猟の横行と無関係ではない。コンゴ民主共和国（旧ザイール）では、レアメタル（希土類）の争奪で激しい内戦が続いている。携帯電話機に使用さ

れる金属タンタルの８割がコンゴ民主共和国に埋蔵されており、内戦の無政府状態を利用して、多国籍企業が安価に採掘させている。そして、反政府勢力の武器調達では、しばしば象牙が支払い手段になっている。貧困と内戦、内戦に介入する周囲の国々、それを容認する豊かな国々の無関心、そのトータルな構造が貧しい住民を密猟に駆り立てているのである [9]。学習者にとって身近な携帯電話を切り口にして、危機遺産の学習、それをさらに発展させた南北問題や平和学習が可能になる。

3　世界遺産教育の動向と概念の整理

3－1　ユネスコの世界遺産教育の動向

1990 年代になって、ツーリズムによる景観の破壊、生態系の切断などの被害を受ける世界遺産が増加した。たとえば、コンゴの「カフジ・ビエガ国立公園」である。高地に生息するヒガシローランドゴリラなどを保護する目的で保護区として世界遺産になった。けれども、増加した観光客からの感染症によって多くのゴリラが死亡した [10]。逆説的であるが、ユネスコが世界遺産に登録したことが貴重な野生動物や生態系を破壊したのである。

このような世界遺産をめぐる状況をふまえて、ユネスコは、1994 年に「世界遺産教育」（World Heritage Education Project）をスタートさせた。実践者たちのなかから具体的な世界遺産の教材の要請が相次ぎ、1998 年に、『教師のための世界遺産教材キット』(”World Heritage Educational Resource Kit for Teachers”) が刊行された。そして、ユネスコ協同学校の重要な取り組み課題に位置づけられて、その推進のためにユネスコのブロック単位ごとにワークショップが開催されるようになった。

筆者も、2005 年の北京で開催された「第３回東アジア地区世界遺産教育ワークショップ」にはじめて参加して、日本における世界遺産教育の遅れに気づかされた。その会議で実践報告を行ったことが契機となってアジア太平洋地域のリソース・パーソン（助言者）に任じられ、2006 年のソウルで行われた「アジア・太平洋地区世界遺産教育推進会議」でファシリテーター（運営推進者）を務めた。

その会議で、東アジア５ヵ国のユネスコ国内委員会が「世界遺産教育の国内ワークショップ」を開催することが申し合わされ、開催費用として各国に 5,000 ドルが支給された。日本では、2007 年３月、奈良教育大学で、「ユネスコの提起する教育をどう受けとめるか－世界遺産教育（ＷＨＥ）と持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）を中心として－」と題するワークショップが開催された [11]。表題にあるように、2005 年からは、ＥＳＤを視野に入れた世界遺産教育が展開されるようになっている。

けれども、そのような世界遺産教育をめぐるユネスコの動向は、日本の教育現場には浸透しなかった。その原因は、ユネスコの教育を実践するユネスコ協同学校の加盟校が非常に少なく、あっても活動は「休眠状態」だったからである。

2004 年になって、帝塚山学院大学国際理解研究所の所長である、米田伸次氏を代表とする「日本ユネスコ協同学校ネットワーク」が設立され、やっと日本でのＡＳＰ活動が再開された。世界中に約 7,900 校のユネスコ協同学校があるが、日本は 2007 年時点で 20 校に満たなかった。そのような経緯をふまえて、日本のユネスコ国内委員会は、2008 年から、ユネスコ協同学校を「ユネスコスクール」と言い換えて、加盟校の増加に真剣に取り組み、2011 年２月時点で約２30 校を超えており、ＥＳＤの一環として世界遺産教育を位置づけ

ている。

3－2　世界遺産教育の概念の整理

世界遺産教育は、たんに世界遺産についての知識を与えるものではない。世界遺産の価値に気づき、大切に保存しようとする態度、未来に伝える義務があるという当事者意識、そのために何ができるかという実践的な意識やスキルなど、トータルな教育を目指している。トータルで広範囲な「世界遺産教育」をどう捉えるか、ここでは、世界遺産教育を次の三つにサブカテゴライズ（分類）して、どのような実践が可能であるか考えてみよう。

1．世界遺産についての教育	Education about　World Heritage
2．世界遺産のための教育	Education for World Heritage
3．世界遺産を通しての教育	Education through World Heritage

この分類は世界遺産に限定したものはない。地域にある文化遺産や自然景観についての教育にも通底している。そして、三つの教育は固定的なものではなく、相互補完的なものである。対象の価値を真に理解すれば、対象に対する振る舞い方も自ずから違ってくる。重要で必要なことは、世界遺産や地域の文化遺産の価値が内面化されているか否である。

4　世界遺産教育の可能性と教材化の事例

4－1　世界遺産についての教育

世界遺産についての教育では、「世界遺産条約」が締結された理由、世界遺産の種類、サイトのロケーション、各サイトがどのような基準で登録され、そしてなぜ残ったのかを知ることが教育内容（教材）になる。多くの世界遺産は「持続性の証明」であり、「幸運にも残った」ものである。そのかけがえのなさを確認させる学習が必要である。

例えば、「古都京都の文化財」は、「幸運にも残った」のである。第二次世界大戦末期に、京都は原爆投下のターゲットであった。原爆の威力を測定するためには、平坦な地形で広い市街地、まだ空襲を受けていない都市が条件であった。そこで選ばれたのが京都、広島、小倉、横浜、新潟であり、横浜が5月末に空襲を受けたことから除外された。

世界大戦の戦後処理を話し合う「ポツダム会談」で、トルーマン大統領に同行した陸軍長官ヘンリー・スチムソンの尽力があったから、京都が除外されたのである。近年、開示されたエール大学の「スチムソン文庫」によると、スチムソンは若いとき、京都を訪れて古都の文化的価値を熟知していた。参謀本部からの京都を投下地にする要請に対して、日本人の「心のふるさと」を爆撃すれば日本人の心をソ連陣営に追いやる危惧があると、参謀本部を懸命に説得していた事実が明らかになっている。調査した日米外交史の専門家、五百旗頭真は、「もし、ヘンリー・スチムソンとういう人が陸軍長官でなければ、京都に最初の原爆が投下されることは避けられなかったにちがいない」と断言している[12)]。

1993年に、日本における最初の世界遺産として登録された「姫路城」も、二度の危機を潜り抜けて残ったものである。一度目は、他の城と同じように明治維新時の「廃藩置県」に伴う「廃城令」による自主解体である。買い取り業者との契約書まで交わされていたという。中村重遠が運動したことから、陸軍省が管理することになって城郭が残った[13)]。

二度目は、第二次世界大戦中の1945年7月4日の米軍による空襲である。城外の市街

地の大半は焦土となったが、姫路城は無傷のまま奇跡的に残ったのである。爆撃機Ｂ２９の搭乗員としてこの空襲に参加したアーサー・トーマス氏が戦後50周年の1995年に、姫路市に招かれてインタビューに応じている。トーマス氏によれば、姫路城を目標から除外したわけではなかったという。夜間の爆撃であり、当時のレーダーは陸と水面を見分ける程度の精度で、日本の工業都市は海岸にあるため「陸」になると爆弾を投下し、引き返すときは「水面」になる前で爆撃を停止したという。そのとき、姫路城の堀の水面にレーダーが反応したため爆撃を中止したと推測されると語り､爆撃での死亡者に遺憾の意を表し、「見事な城が残っているのを見て、少しは心が晴れた」と回想している。神戸新聞の元記者の中元孝道は著書で次のように書いている。[14)]

姫路城が、あの激しいＢ２９の爆撃を免れたのは、偶然といえば偶然、奇跡的といえば奇跡的である。だが、奇跡を招き、偶然を呼んだ「必然」があった。｢堀｣が、大編成のＢ２９爆撃隊の侵入を阻み、城を守ったという事実である。

【 図4 焦土に焼け残った姫路城
写真提供 兵庫県立博物館蔵(高橋秀吉コレクション) 】

姫路城での本格戦闘は、歴史上皆無である。だから、ひたすら外敵の侵入を防ぐために穿たれた長大な堀の出番はなかったが、建築後はるか三百五十年を経た第二次大戦において、はじめてその役割を演じたのである。

紹介したのは一例に過ぎないが、それぞれのサイトが「幸運にも残った」理由を学習者に探求させる学習活動は、世界遺産の価値を内面化させるのに有効な教育内容である。

４－２　世界遺産のための教育

世界遺産のための教育とは、世界遺産の保存や保全に対する態度、世界遺産を保護して次世代に伝承しようとする当事者意識、世界遺産に対してどう振る舞うかについての倫理やモラルの教育である。

2008年に、世界遺産に対する不祥事が相次いだ。フィレンチェのサンタ・マリア・デル・デルフィオーレ大聖堂に落書きをした岐阜の女子短大生。石見銀山の坑道へ侵入し無許可で５キログラムもの岩石を採取して告訴された島根の大学生。熊野古道では牛馬童子の首

が切断された。そのような事態をふまえて、朝日新聞社は１１件の世界文化遺産の管理者や教育委員会に緊急アンケート調査を行ったが、回答した57件のうち４割にあたる23件が落書き被害にあっていた。（朝日新聞　大阪本社版　朝刊　2008.7.23）

ユネスコ事務局長の松浦晃一郎氏は、チリを訪問したとき、「イースター島のモアイ像に日本人の落書きが相次いでいるが、あなたはどう思うか」と記者会見で質問されて赤面したと、最新の著書で嘆いている。2006 年 3 月に、事件を起こした観光客は、帰国後、チリに召還されて裁判を受け、41 日間の拘留と罰金が科された。控訴の結果、イースター島での留め置きが考慮され、拘留１日と罰金（日本円で約 100 万円弱）が確定したという[15)]。

歴史的な記念物や貴重な自然環境に対してどのように振る舞うか、宗教施設での服装はどうあればよいのかなどは、教育というよりもマナーやモラルである。けれども、あえて取り上げなければならない状況にあることは確かにちがいない。

世界遺産のための教育での学習方法は、サイトを訪れて建造物や自然環境を直接肌で感じるフィールドワーク、その保存や補修に関わっている人物へのインタビュー、その二つが不可欠である。五感で感じる「物」との出合い、目に見えない「人」の想いにふれるインタビュー調査など、学習者が直接体験する学習を通して、「世界遺産を保全し次世代に伝達するのは自分たちだ」という当事者意識が涵養される。学習者の態度を変容させるのは、固有名詞をもつ人物との出合いである。

４－３　世界遺産を通しての教育

世界遺産を通しての教育とは、世界遺産を切り口にして、国際理解教育、平和教育、人権教育、環境教育などに迫る教育である。前節で紹介したように、「負の遺産」と「危機遺産」が格好の教材になる。

ここでは、世界遺産が国際理解教育のツールになる事例を紹介する。それは、「古都奈良の文化財」を構成する薬師寺の薬師三尊像の台座である。薬師寺の金堂には、巍巍とした薬師如来像が鎮座しているが、その台座は四つの図匠で装飾されており、その図匠に文化交流の痕跡が一目瞭然に確認できる。

【 図5　薬師寺の薬師如来の台座（模倣品）　（筆者撮影）】

図５に示すように、外縁の葡萄唐草はギリシャ、次の蓮華紋はペルシャがルーツである。中央の人物像はインドの蕃神に酷似している。さらにその下の四神図（東＝青龍、南＝朱雀、西＝白虎、北＝玄武）は中国や韓国など東アジア

に共通する図匠である。この台座には、ギリシャ、ペルシャ、インド、中国や韓国などシルクロード由来の文様が流れ込んでいる。この台座を通して、どの文化も孤立してあるのではなく、他の文化の影響を受けて存在するという文化の融合性や重層性に気づかせることができる。この薬師如来像の台座は、偏狭なナショナリズムの根底にある「文化本質主義」を打破する格好な教材になるにちがいない。

おわりに

最後に、「地域・世界遺産教育」という概念を提起したい。それは、「世界遺産教育は世界遺産のサイトがある地域では可能だが、サイトをもたない地域では実践が困難である」という謬見についてである。実態はむしろ逆であり、世界遺産のある地域では、あまりにも身近すぎて、優れた文化的な価値があっても、学習者がそれを「当たり前」と捉えてしまうのである。「当たり前」と捉えることは、そのことについて考えないことを意味している。

したがって、他の世界遺産と比較してはじめて、学習者は地域の世界遺産を意識的に見つめるようになる。空間軸をずらせて他の世界遺産と比較させる学習過程は、世界遺産をもたない地域での「地域遺産教育」にも有効である。一つの世界遺産を取り上げ、そこから自分たちの地域を見つめ直し、「自分たちの地域が誇りとする文化遺産は何だろうか、未来に残したい地域の美しい自然景観は」と問い直す学習を組織するのである。どの地域にも優れた文化遺産はあるし、人々に安らぎを与える自然景観は残っている。

東京都江東区の東雲小学校では、世界遺産の学習後、自分たちの地域の「たからもの」探しを行うグループ学習と発表会を組織したところ、「東雲の夕焼け」を挙げたグループが出てきたという。「このすばらしい夕焼けを守るために、東雲にこれ以上高いビルが建ってほしくない。このまま、きれいな夕焼けを守りたい」と、発表したという[16)]。　このように、地域の文化や自然を意図的に見つめ直し、地域へのアイデンティティを育む教育はどの地域でも可能である。

学習者が地域に真剣に立ち向かうとき、地域は豊かな教育力を発揮する。現地へのフィールドワークを行い、文化遺産を保存したり、自然遺産を保護したりする人々への聞き取り調査を行うと、地域の文化遺産や自然景観が愛おしくなる。そして、それらの文化財や自然景観は、過去から受け継いだたんなる「遺産」ではなく、未来から預かっている「宝物」であり、次世代に無傷でバトンタッチしなければならないものであるという認識に変化する。

「探検！発見！放っとけん！」という実践者の間で膾炙された標語は、そのような地域学習の意義を強調したものであろう。今回、「世界遺産教育とその可能性」という表題を掲げたが、「地域・世界遺産教育とその可能性」と書き改めなければならない。

注

1)ユネスコ東アジア地域世界遺産教育国内ワークショップ実行委員会編　『世界遺産教育実践事例集―つながり・多様性・変化―』 2007年

2)中澤静男・田渕五十生「奈良における世界遺産教育」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』　第15号　2006年

3)田渕五十生・中澤静男「ＥＳＤを視野に入れた世界遺産教育」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』　第 16 号　2007 年
4)中澤静男・田渕五十生「地域学習としての『世界遺産教育』」『奈良教育大学紀要』　第 57 巻　第 1 号　2008 年
5)日本ユネスコ協会連盟編　『世界遺産年報 2008』日経ナショナル　ジオグラフィク社　2008 年　p .36
6)同上書　p.42
7)奈良大学文学部世界遺産を考える会編　「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」『世界遺産学を学ぶ人のために』所収資料編　世界思想社　2000 年　p.256
8)青柳正規監修　『ビジュアル・ワイド　世界遺産』小学館　2003 年　p . 3
9)NHK「地球データマップ」制作班編『地球データマップ―世界の“今”から“未来”を考える―』　NHK 出版　2008 年 pp.51-55
10)平山郁夫監修『ＳＯＳ世界危機遺産』　小学館文庫　2006 年 p.104
11)谷口尚之・田渕五十生「ユネスコ東アジア地域世界遺産教育国内ワークショップの報告」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』　第 17 号　2008 年
12)五百旗頭真「時代の風―回避された京都への原爆―」（毎日新聞　大阪本社版　朝刊　2007,1,14）
13) 清野賢司『総合学習に役立つ　みんなの世界遺産　②　わたしたちの国―日本』岩崎書店　2000 年　p.41
14)中元孝道　『姫路城　永遠の天守閣』神戸新聞総合出版センター 2001　pp.306~307
15)松浦晃一郎『世界遺産―ユネスコ事務局長は訴える』　講談社 2008 年 pp. 243－244
16)多田孝志・手嶋利夫・石田好弘『未来をつくる教育　ＥＳＤのすすめ－持続可能な未来を構築するために－』　日本標準ブックレット 2008 年　p.46

第２章　ＥＳＤを視野に入れた世界遺産教育

－ユネスコの提起する教育をどう受けとめるか－

田渕　五十生

はじめに

現在、ユネスコは「持続可能な開発のための教育」（Education for Sustainable Development　以後ＥＳＤと略称)とともに「世界遺産教育」（World Heritage Education 以後ＷＨＥと略称)を推進している。その二つの教育には、それぞれ固有の目的と教育内容（カリキュラム）があり、学習方法も異なっている。けれども、両者を別個のものとして実践するよりも、ＥＳＤのツール（道具）として WHE を実践すれば、両者はより充実していくことになると考えられる。また、学校教育における社会科や理科、地理や歴史や生物などの教科や科目に世界遺産を学習教材として用いれば、学習者により切実さを感じさせ、興味・関心を抱かせることにちがいない。

ここでは、まず、ＥＳＤと従来の教育目標との違いについて論究し、ＷＨＥとの共通点を明らかにする。そして、筆者の大学での実践報告をする。それは、文化交流の事実を確認した国際理解教育につながる実践である。ｓらに、一つの試みとして、危機遺産リストに登録された世界遺産を教材にした授業案を示した。それらを通して、世界遺産教育の活性化に貢献できれば幸いである。

１．ＥＳＤとＷＨＥ

ＥＳＤの目的についてはすでに多くのことが論じられている。ここでは、「公正さ」（equity）というキーワードで、従来の教育とＥＳＤの根本的な違いを整理してみる。

“Education for Sustainable Development”の” Development”には、多様な意味が含まれている。「開発」と訳せば、「自然を破壊する」というイメージを与えかねない。それを "Sustainable Society”　または”Sustainable Future”　と言い換えれば理解しやすい。[1)] 豊かな自然や豊富な資源など、自国の国民だけが独占して、他国の国民が排除されるような国際的な不平等や不公正があってはならない。また、清浄な水や大気や資源を現代人だけが享受して、それらの資源を消費してしまったり、地球の生態系を破壊してしまったりして、次世代の人々が享受できない世代間の不公正があってはならない。ＥＳＤは、そのための教育であり、従来の教育と次の点で異なっている。

① 国民的な目標と地球市民的な目標

国民国家においては、義務教育をはじめとする教育は、その国の社会の発展のための教育が行われる。極端にいえば、自国の発展や自国民が最優先にされ、他国や他国民のことは二の次に位置づけられている。それに対して、ＥＳＤは、全地球的な視点から地球社会の持続発展が目的におかれている。先進国と開発途上国の国家間の富の偏在をどう解決するか、よりマクロ（巨視的）である地球上の社会的な公正や公平が目指されている。

② 現在志向と未来志向

従来の教育の目的は、現世代の人々の立場からのもので、次世代の人々の幸せを視野に入れた発想は不十分である。ＥＳＤでは、未来に対して責任をもつ人格の育成が目指されている。未来から見て、持続可能でない現実を相対化するカリキュラム編成が行われている。世界が直面している地球規模な諸課題（Global Issues)、たとえば、環境問題、人口・資源問題、地域紛争・平和問題、人権抑圧問題などである。とくに地球環境については、大気や水や資源など、現世代の人々が使い尽くしてはならないという世代間の校正が目指されている。したがって、公正をキーワードにすれば、ＥＳＤは国際間の空間的公正と世代間の時間的公正を目的としているということになる。

③ 環境教育から生物多様性の教育へ

従来の環境教育とＥＳＤの決定的な違いは、人間も生物多様性のなかの一存在であるという自然観である。それは、自然と共に生きてきた人々のライフスタイル、今なお自然と共生している先住民の叡智、「人間は自然によって生かされている」ことに通じている。

それは、「環境教育」から「生物多様性の教育」へというコペルニクス的な転換を意味している。人間のための自然環境という「地動説」から、人間も生きとし生ける「命の連鎖」である生態系の一部を占めるに過ぎないという「天動説」への転換である。

多くの自然遺産が「放置すれば、その生物種が絶滅ないし絶滅の危惧がある」という理由で世界遺産に登録されている。２００９年に、白神山地を訪問する機会があった。そこでは、かつて伐採したブナ林を復原するためにブナの若木を移植する植林活動が展開されている。けれども、成長の遅いブナは、樹勢の強い他の雑木に光を阻まれて枯死直前であった。それが自然の摂理であり、切断されてしまった自然の生態系の回復は不可能なのである。

④ ＷＨＥとＥＳＤの共通点

世界遺産教育の目指すものとＥＳＤと共通している。すなわち世界遺産は、その国民の宝物でなく、人類共通の宝物であるという認識である。また、何世代にもわたって保護されてきた世界遺産は、現世代の人々だけのものではなく、次世代の人々にバトンタッチしなければならないという認識では共通している。そのためには、「何をしなければならないのか」、また「何をしてはいけないのか」を明確にする教育が必要になる。

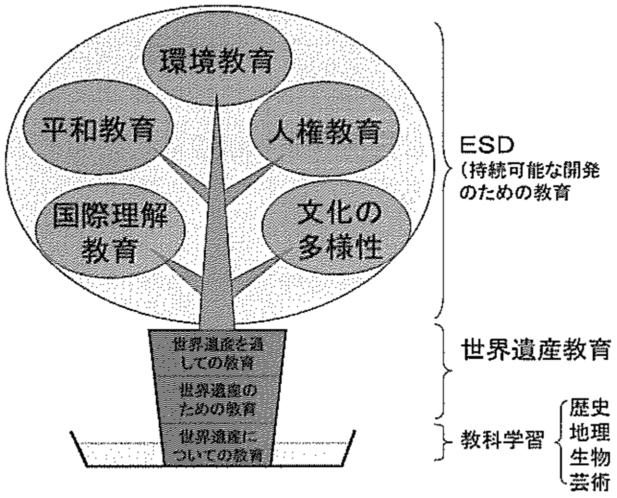
「世界遺産条約」(Convention Concerning the Protection of World Cultural and Natural Heritage) の契機になったのは、エジプトの「ヌビア遺跡」であったことは前章でふれた。ＥＳＤでもＷＨＥでも、かけがえのない地球環境と世界遺産を未来に伝承する責任感の育成が目指されている。たんに、過去から受け継いだものとしてではなく、「未来からの宝物」として現世代の人々が預かっているものという認識が必要である。

２．ＷＨＥとＥＳＤの関係

ＷＨＥは、たんなる世界遺産についての知識を与えるものではない。世界遺産の価値に気づき、大切に保存しようとする態度、未来に伝承する義務があるという責任感、そのために何ができるかという実践的なスキルなど、総合的な教育を目指している。総合的な教育を目標にする点でも、WHE と ESDは共通している。世界遺産教育を分類して図１のよ

うに概念図で示せば、ＥＳＤとの関係が明確になる。

図１　ＷＨＥとＥＳＤの概念図　(筆者作成)



１）世界遺産についての教育　Education about　World Heritage
２）世界遺産のための教育　Education for World Heritage:
３）世界遺産を通しての教育　Education through World Heritage

２．１．世界遺産についての教育

世界遺産についての教育のカリキュラムとして、次のようなことが考えられる。

一つは、世界遺産についての知識やその価値に気づかせる教育である。どのような経緯で「世界遺産条約」が成立したのか、どのような基準でそのサイトが世界遺産に登録されたのか、世界にはどのような世界遺産があり、地域にどのような世界遺産があるのか、知識を深め、その価値に気づくことである。

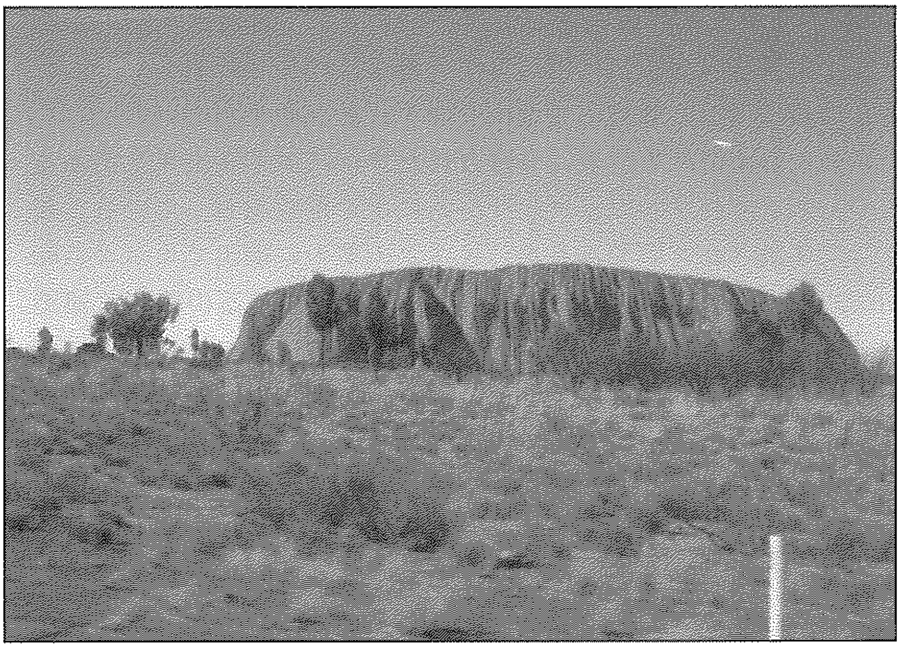
二つは、世界遺産をめぐる問題点についての理解である。現在、多くの世界遺産が危機にさらされている。世界遺産に登録された結果、観光客が押しかけて、環境破壊が進行しているサイトも少なくない。ツーリズムやコマーシャリズムによるサイトの変質である。そのような問題についても学ぶ必要がある。

三つは、サイトのなかの住民の生活についての理解である。アジアやアフリカで貴重な野生動物を保護するために特定の地域が世界遺産に登録され、そこで居住していた先住民の人々が締め出された。登録に伴ってさまざまな規制が設けられ、先住民の人々の伝統的な生活が困難な状況に陥っているケースさえある。残念ながら、先住民や少数者の叫びは無視されている。

以上のような世界遺産をめぐる明と暗の両面の学習を通して、世界遺産についての多面的な見方を育て多角的な考え方を養い、社会への健全な批判力も身につける養うことができる。その具体的な授業案については５節で詳しく紹介する。

２．２．世界遺産のための教育

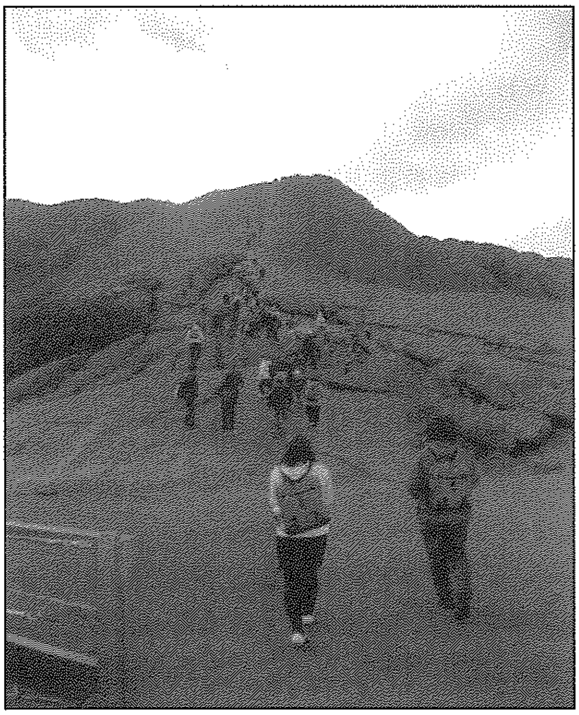
世界遺産のための教育とは、世界遺産に接する態度に焦点を合わせて行う教育である。宗教的な記念物や貴重な自然に対して、どのように振る舞うのかというモラルや倫理の教育である。



【図2 ウルル、カタ･ジュタ国立公園（筆者撮影）】

２０１０年８月に、オーストラリアの世界遺産「ウルル・タタジュタ国立公園」を訪問する機会があった。かつて「エアーズロック」と呼ばれた自然遺産である。それは、当時の植民地総督ヘンリー・エアーズに因んで命名された。１９９４年の「国連の国際先住民年」が契機になって、そこに住む先住民の「天地創造」の伝承と関わる文化的な要素が考慮されて複合遺産として再登録されたのである。

高さ３４８メートル、周囲９、１キロメートルの巨大な一枚岩で、赤砂岩の岩肌が太陽光線の角度によって時々刻々と変化し、その光景は神々しく魂を揺さぶられるほどの荘厳さである。ウルルは先住民のアナング人々にとって「精霊が宿る聖地」であり、現在でもそこでさまざまな通過儀礼が行われている。傾斜が緩く山頂に登りやすい「登山道」には、「この山はわれわれの聖地です。登山しないでください」と各国語のメッセージが掲示板に貼られている。ホテルのロビーには、宿泊者のサービスのために、ウルルの日の出と日の入りの時間が掲示されているが、その掲示の最後に、”Anangu ask that you choose not to clime Uluru”と記されており、しかも黄色のマーカーで強調されている。



【図3 警告を無視して登山する人（筆者撮影）】

けれども、日本人観光客のほぼ８割が

先住民アナングの人々の要請を無視して登山する。登山には最低でも２時間はかかり、トイレがないためにそこで用を足す登山者もいる。そのような行為の背景には、世界遺産に対する旅行を主催する会社の認識不足がある。ある観光旅行会社のパンフレットには「エアーズロック、登頂チャレンジ、リュックサックプレゼント」というキャッチコピーが躍り、「エアーズロックサンライズ観光と登山にチャレンジ！展望ポイントから朝日を浴びるエアーズロック鑑賞後、登山に挑戦します（所要時間約２時間３０分。登られない方または登山中止の際は周辺の散策にご案内します」と記載されている。

シリアの首都ダマスカスの中心街に世界遺産に登録されたウマイヤド・モスクがある。シリアやヨルダンで最古のモスクで、メッカ、エルサレムに次ぐ権威をもっている。最初はキリスト教の教会として建設されたのであるが、イスラム勢力の進出でモスクに転用された。「新約聖書」に登場する使徒パウロが説教したといわれている由緒ある建造物である。

２００９年９月に、そのモスクを訪問したが、内部の静謐で厳粛な雰囲気に宗派を超えた宗教心をそそられた。そこでは、厳格な服装の規制が外国人女性に課されている。タンクトップやホットパンツから露出した肌と頭髪を覆うフード付きの衣服が用意され、その着用がモスクに入堂するための条件になっている。相手の文化を尊重し、相手の文化に則して行動する、それが宗教的な礼儀作法であろう。

けれども、ウルルでは、アナングの人々の宗教的な感情を逆撫でするような行為が罷り通っている。自然遺産から複合遺産へ再登録された経緯を理解していれば、登山を推奨するのではなく、登山を自粛する理由を説明しなければならない。観光旅行会社、旅行の参加者も含めて世界遺産の前でどのように振る舞わなければならないのかという倫理や行動様式を学ぶ場が必要である。

２．３．世界遺産を通しての教育

ＷＨＥでは、世界遺産をケーススタディにして、国際理解や国際協力の重要性に気づかせ、平和や人権の意義を確認させることができる。したがって、国際理解教育、平和教育や人権教育と密接な関係をもっている。危機にさらされている世界遺産の多くが紛争地や戦争地域にロケーションしている。内戦が終わって修復工事が再開されて、カンボジアのアンコールワットは危機遺産から脱却できた。経済的に不平等な社会が、貧しい人々を密猟に駆り立て、貴重な野生動物が生息する自然公園が危機遺産に登録されている。

そのような危機遺産を事例にして、われわれは、平和や文化的な寛容や社会的な公正の意義を、より切実に学ぶことができる。地球環境が保全され、平和、人権、社会的な公正が尊重される社会が「持続可能な社会」(Sustainable Society) である。その点で、ＷＨＥはＥＳＤとは密接な関係をもっており、両者を連携させて実践することが必要である。

３．地域に即したＷＨＥの実践報告

３．１．地域の世界遺産を教材にした実践

ユネスコが１９９８年に出版した"World Heritage Educational Resource Kit for Teachers"には、さまざまな指導事例が示されている。けれども、それらの事例は、一般化された事例が中心で、それぞれの国や地域で実践するには、現地の実態に即しての工夫が求められる。

奈良県には世界遺産が 3 サイトもある。「法隆寺地域の仏教建造物群」、「古都奈良の文化財」、「紀伊山地の霊場と巡礼道」である。日本の 14サイトのうち、３サイトが奈良県に集中している。したがって、地域の世界遺産を教材化することは、地域への愛着を育て、地域へのアイデンティティ（帰属意識）を育成するのにきわめて有効である。けれども、地域の世界遺産についてのみの学習は、しばしば地域自慢の地域埋没主義に陥りやすい。したがって、他の地域や世界遺産と結び付けて、文化の共通性と個別性の視点から学習することが大切である。

具体例を「法隆寺地域の仏教建造物群」にとってみよう。１９９３年に、法隆寺地域は、姫路城とともに日本最初の世界遺産として登録された。そこを訪れた韓国の旅行者は、その雰囲気に懐かしい感情を抱くという。古代に、韓国からの技術者が建築に関わっているからにちがいない。とくに、五重塔の美しいグラデーションは有名である。一番下の屋根の面積が一番上の二倍である。最上階の屋根の一辺を１にして、次の屋根の一辺を１・１、次を１・２，次を１．３，そして最後の屋根の一辺を１・４へと拡げている。ルート（√）２は、約１・４１４１３５６・・・であり、１・４は、ルート２の近似値である。

観光バスのガイドさんはその卓越さについて、誇りをもって語っている。けれども、その比例美は韓国の扶余の定林寺をはじめ韓国の石塔に共通している。また、金堂の壁画は、中国の敦煌の漠高窟の影響が一目で分かる。このように、法隆寺地区の世界遺産は中国文化や韓国文化と密接に関係している。

次に、「古都奈良の文化財」であるが、その一つである東大寺の大仏は、中国の洛陽の龍門石窟の大仏をヒントにしている。また、二つの塔で有名な薬師寺の伽藍配置は、韓国の慶州の四天王寺や仏国寺の伽藍の配置と同じである。このように、他の文化と比較することを通して、文化の共通性と個別性に気づかせることが必要である。

次に示すのは、筆者が大学の「中等教科教育法（社会）」の講義で実践したものである。それは、映像をふんだんに使用して、地域の世界遺産を取り上げて、他の地域の世界遺産と関係づけて、文化交流の意義や文化の多様性に気づかせたものである。

３．２．授業の目標

① 奈良県の世界遺産が、中国や韓国、そしてシルクロードを通しての文化交流の成果であることを理解して、国際的な性格をもつことに気づかせる。

② どの文化も孤立してあるのではなく、他の文化の影響を受けて、それぞれの地域で文化的な変容をしてきたことを、映像やフィールドワークを通して確認する。

３．３．授業の展開

古代における文化交流の意義を確認する授業

ⅰ法隆寺の金堂は、壁画で有名であるが、それと類似した壁画が中国の敦煌の石窟寺院の壁画にある。両者の画像を示して、7世紀末から8世紀初めの文化交流の実態を確認する。

ⅱ東大寺の大仏の原型になったのが、中国の洛陽の龍門石窟寺院の大仏である。その両者の画像を通して、大仏の造営が、中国や中央アジア諸国に共通している文化であり、その影響を受けていることを確認する。

ⅲ東大寺の正倉院には、当時のままの輝きをもつカットグラスが保存されている。1950年代にイランで表面が風化したカットグラスが発掘され、正倉院のカットグラスがイランからきていることが明らかになった。両者の画像を通して、シルクロードの文化交流の歴史を確認する。

以上のように比較する教材を通して、「確固とした日本文化が存在する」という文化本質主義への疑問を抱かせることができる。また、どの文化も孤立していないこと、他の文化の影響を受けて、日本文化が形成されてきた歴史的な経緯を確認させることができる。

４．新しい CHALLENGE—危機遺産の教材化

学習者に世界遺産の価値に気づかせ、世界遺産への態度を変容させるのに有益な方法が、危機遺産に指定された世界遺産を教材として取り上げることである。まず、その教材化の意義について記述する。そして、一つの授業プランを提示する。

４．１．危機遺産を教材化する意義

危機遺産を通して、北の豊かな国々と南の貧しい国々の経済格差（南北問題）や開発途上国の貧困など、さまざまな問題を学ぶことができる。２０１０年現在、「危機遺産（The World Heritage in Danger ）に登録されたサイトが３４件ある[2]。その内訳は文化遺産が１８件、自然遺産 が１６件、合計３４件で、世界遺産全体の約４％である。それらの地域別の内訳は、アフリカが１５件、アジアが１０件、中・南米５件、北米１件、ヨーロッパ３件となっている。

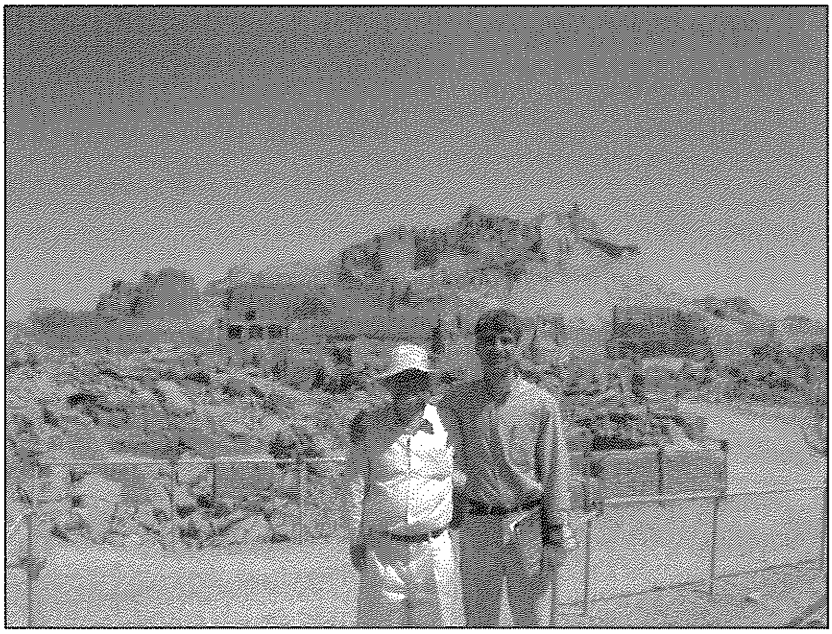
危機にさらされる原因として、次の５点が指摘されている[3]。一つは、戦争または紛争。二つは、地震などの自然災害である。三つは、都市化と観光開発。四つは、周辺の大規模な工事が世界遺産に影響を与えているケースである。五つが、商業のための密猟による自然遺産の危機である。次に、その具体例を紹介する。

第一の危機遺産の多くは、戦争または紛争地域に集中している。その典型がアフガニスタンのバーミアン遺跡である。ムスリム原理主義のタリバン政権によって大仏が破壊された。破壊されたのは大仏だけでなく、女性の人権も踏みにじられた。また、現在、戦火にさらされているイラクでは、古代アッシリア帝国の首都アシュールの発掘調査が中断され、砂漠のなかに放置されている。

それとは逆に、平和が回復したことから、危機遺産から脱出した世界遺産もある。その典型が、内戦が終わって修復作業が行われたカンボジアのアンコールワットである。また、クロアチアのドブロブニク旧市街も危機遺産から脱却した。旧ユーゴスラビアの内戦で、旧市街の建物が破壊されてしまった。けれども、平和が回復すると、市民たちは散乱した石材を積み重ねて街並みを復元した。これらの事例は、世界遺産の保存には平和が不可欠であることを教えてくれる。さらに、ドブロブニクの事例は、世界遺産の保存や保護の主体が、市民のひとりひとりの意識や行動にあることを教えてくれる。

第二の自然災害の典型は、イランのバム遺跡である。２００４年に発生した震度６、３の大地震で、シルクロードに栄えた街が完全に崩壊してしまった。１０万人いたバムの人々のうち約３万人が死亡した。２００６年９月に、現地を訪問してその被害の大きさに驚かされた。街は瓦礫の山で、人々は貨物船のコンテナの仮設住宅で生活していた。

高く聳えていたアルゲ・バム城砦は、日干し煉瓦で建設されていたので、粉々になって崩壊していた。復旧工事が開始されていたが、復旧には数十年間かかると現地の技術者は語っていた。



【図4 地震で崩壊したアルゲ・バム（筆者撮影）】

その他、地震による被害として、アゼルバイジャンのバクーの城塞都市がある。復元工事には多額の資金と修復技術が必要である。けれども、それらの国の経済力は弱く、修復技術も不足している。したがって、国の境界を超えた経済援助と技術援助が必要になる。

本来、「世界遺産条約」は、その国の経済力が弱くて保存の困難な文化遺産や自然遺産を、世界や人類の共通の遺産として保存することを目的にして締結されたのであり、そのために「世界遺産基金」が設けている。観光資源にお墨付きを与えたり、観光地をブランドにしたりすることでない。「世界遺産条約」の趣旨をあらためて確認する必要がある。

第三の典型が、ネパールのカトマンズ盆地の建築群である。無秩序な観光開発で近代的なビルが立ち並び、美しい木造建築の寺院や街並みがコンクリートのビルの谷間に埋もれようとしていた。けれども、ユネスコの警告を受けて、開発を規制して危機遺産から脱却した。同じように、伝統的な建造物がコンクリートの高層建築にとって代わられようとしているのが、イエメンのザビードの歴史地区である。世界遺産を保存しようという意識が行政担当者や住民になければ、歴史的な景観は損なわれてしまう。

この都市化と観光開発は、けっして開発途上国だけではなく、先進国にも共通している。

たとえば、広島の原爆ドームの周辺の景観である。危機遺産に指定されてはいないが、原爆ドームの周囲で、高層マンションの建築が進行している。放置すれば、原爆ドームは高層建築群に囲まれてしまうだろう[4]。建築許可を出した行政当局、それを黙認する市民の意識が問われている。

【図5 高層建築に囲まれた原爆ドーム（筆者撮影）】

第四の大規模な工事が原因で危機遺産に陥ったケースが、アメリカのイエローストーン公園である。かつてそこには、バッファローやグリズリーなどの野生動物が生息していた。イエローストーン河が刻む渓谷と熱水と石灰岩が造った景観美で、１９７８年に、自然遺産の４つのすべての登録基準を満たす世界遺産として登録された。しかし、河川の上流で鉱山の開発計画が立てられ、１９９５年に危機遺産に指定された。その危機を真剣に受けとめて開発計画を中止して、自然環境が復元されて、２００３年に危機遺産から脱却した。[5] 自然に起こる山火事はそのままにして自然の回復力にまかせた。また、家畜に有害という理由で駆逐されていたオオカミをカナダから移植して、生物連鎖のバランスを保つようにしたのである。

ごく最近まで、危機遺産に登録されていたのが、ドイツのケルン大聖堂である。ライン川の対岸での都市再開発によって１０３メートルの高層建築が計画され、大聖堂の景観が損なわれようとしていた。けれども、２００６年に、再開発計画が見直されて、その危機は回避されたという。

そのような景観の保存か経済の開発かのジレンマは、世界遺産か否かを問わず、世界中の普遍的な論争である。これらの論争をディベートやロールプレイで学べば、社会に対する多面的な見方や多角的な考え方を育てることが可能である。

第五の商業のための密猟による危機遺産の典型は、コンゴの５つの国立公園である。密猟による危機遺産化は、アフリカの他の自然公園に共通し、貴重な野生動物が絶滅寸前になっている。住民を密猟に駆り立てているのが、貧困である。世界遺産を観光の資源にして、一部の富裕層がホテル経営やサファリ観光で富を得て、住民たちは貧困のまま放置されている。その経済格差が密猟を生み出している[6]。

密猟が横行する背景には戦争や紛争や内戦もある。中央アフリカのチャドで２００６年８月に、象牙を切り取られた１００頭以上の象が死体で発見された。内戦が長期にわたり、その象牙で武器の調達が行われているのである。中央アフリカでは、自国の通貨への信頼度が低く、持ち歩きできる象牙が、貨幣として機能しているからである[7]。

密猟した象牙や犀の角を購入する外国の消費者も、間接的に密猟に加担している。象牙

を印鑑や装飾品として珍重する消費者がいて、密猟品の国際的なシンジケートが成立する。象牙輸入国の第一位が日本で、第二位が中国であり、東アジア地域の消費者の倫理や意識が問われている[8)]。生活のため密猟する人々、密猟した象牙の装飾品を居間で鑑賞する人々、その両者を通して、世界の構造的な経済格差の問題が見えてくる。密猟品のグローバル・ネットワークを通して経済倫理も見えてくる。この横行する密猟は、社会を批判的に読み解くリテラシーを育てる教材になる。

4．2．危機遺産を教材化する授業プラン

世界遺産教育で重要なのは、知識（contents）ではなく、ものの見方や考え方（perspective）である。危機遺産について断片的な知識を与えるのではなく、断片的な知識をどう構造化するかである。事実と事実の関係に気づかせ、その関係がどのような構造になっているのか、学習者に考えさせる授業が必要である。そのような思考のフィルターを通して得られた知識は、その問題を解くだけの個別の知識ではなく、他の問題を解決するのにも応用の利く普遍的な知識である。いわば、ある部屋のキー(鍵)ではなく、すべての部屋のマスターキーになる知識である。そのような、概念的な知識を獲得させる学習プランを提案する。

ⅰ）用意するもの

① 世界の大きな白地図
② 赤、緑、金の３色の丸いシール
③ ５色のマジックインク
④ 危機遺産の登録と危機遺産から脱却したリスト

ⅱ）学習の展開

① ４人から６人のグループを編成する。
② 世界の白地図をグループごとに配布する。
③ 危機遺産に登録された文化遺産には赤いシールを貼る。
④ 危機遺産に登録された自然遺産には緑のシールを貼る。
⑤ その分布状況から気づいたことについて話し合う。そして、何が原因かについて討論する。

＜予想される意見＞

・ほとんどが貧しい開発途上国に集中している。
・南半球に多く、北半球には少ない。
・戦争や紛争や内戦地域と重なっている。

⑥ 危機遺産に登録された理由について討論させる。

＜予想される意見＞

・文化遺産の場合、戦争や紛争や内戦と関係がある。
・自然遺産の場合、自然公園が大半で、貴重な動物の保護区であるケースが多い。

⑦ 危機遺産に登録された理由について、原因が同じものをマジックで囲み、分類する。
⑧ 危機遺産を脱出した世界遺産には金色のシールを貼り、脱出した理由を聞く。

・カンボジアのアンコール遺跡－平和の回復、国際的な経済支援、保存や修復のための人材育成の技術援助
・アメリカのイエローストーン－大規模な工事の中止、生態系の復元への努力

⑨ 自分たちの地域に、同じような環境破壊や景観の破壊はないかを話し合う。
⑩ 世界遺産に登録されるメリットとデメリットについて話し合う。

この学習プランでは、まず、世界地図にシールを貼って事実を確認する（作業学習）。シールが集中した地域について意見を出し合う（ブレーンストーミング）。事実と事実の関係を発見し、それらの関係を構造化する討論学習が組み込まれている。そして、危機遺産を脱出した新しい情報を得て、従前の学習で獲得した知識と統合して、課題解決への展望を模索する学習過程になっている。

この学習には、正解や結論はない。話し合いの過程そのものが重要で、自分なりの意見を出すこと、他者の意見を聞いて自分の考えを構成することが重要なのである。そのような討議や討論を通して、世界遺産に対する当事者意識を育てることが目指されている。

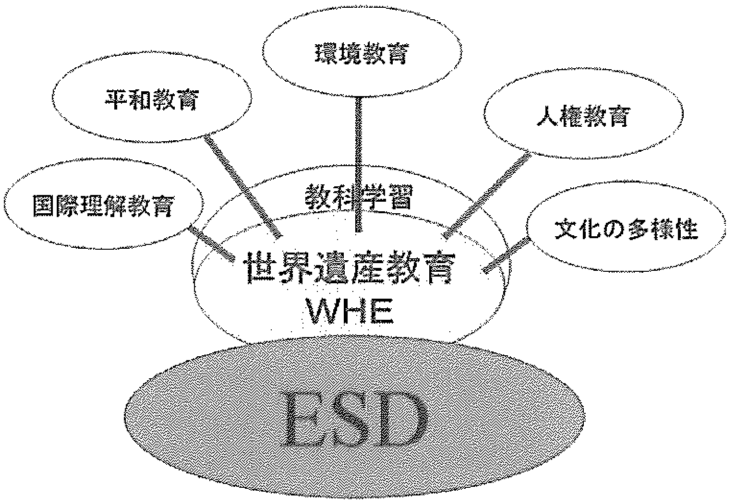
おわりに

奈良市には世界遺産に登録された寺社が数多くある。それらは、どれも豊かな緑のなかに建っている。もし、周囲に緑地帯がなくて、裸のままの建築物であれば、けっして美しくはないにちがいない。古都奈良文化財の美は、歴史的な建造物と自然環境が織りなした景観美である。

【図6 奈良市眺望　写真提供 奈良市観光課 】

奈良市は、第二次世界大戦の被害を受けなかった。けれども、寺院にある重要な仏像、は空襲を想定して、山中の寺院に疎開されていた。国宝や重要文化財を戦火から避けて保存するためであった。もし、歴史的建造物が焼失しておれば、それらの仏像は博物館のガラスケースのなかに入れられて、美術品としてガラスのなかで鑑賞されていたかもしれない。仏像のもつ宗教的雰囲気は、静かな緑に囲まれた寺院に安置されて、はじめて感銘深く受けとめることができる。

図７　ＷＨＥを通してのＥＳＤ（筆者作成）



インダス川のモエンジョダロをはじめとする多くの世界遺産が、自然破壊が進行したときに、それらの文明が衰退したことを物語っている。環境の悪化が自然遺産を崩壊させ、やがては文明そのものを崩壊させるのである。したがって、世界遺産は、鉱山の坑道のカナリヤにたとえることができる。かつて、石炭の鉱山労働者（坑夫）は、カナリヤを鳥篭に入れて坑道に入った。微量な毒ガスの流出をカナリヤが事前に察知するからである。カナリヤの異常な動きを見て、坑夫たちは避難し、生命を救うことができた。世界遺産の崩壊、は文明の崩壊の前兆なのかもしれないのである。

図７に示すように、世界遺産教育を通してＥＳＤに迫ることができるのである。

注

１）国立教育政策研究所 ESD 教材研究会　『中等教育における持続可能な発展を題材とした科学的態度の育成を目指す教材の開発研究：中間報告書』（日本学術振興会　科学研究費基盤研究 B）2006

２）日本ユネスコ協会連盟編　『危機にさらされている世界遺産リスト」『UNESCO 世界遺産年報』　２０１１年　ユネスコ協会連盟　p.３０

３)小学館 DVD BOOK 『NHK　世界遺産１００　特別版　危機にたつ世界遺産　３４』
2006
小学館　p.3

４）中国新聞「原爆ドーム・厳島神社世界遺産登録１０年『苦境越え明日へ残す』」　2006 年 11 月 27 日　夕刊

５）平山郁夫監修　『SOS 世界危機遺産』　2006　小学館　pp.196-199

６）山際寿一「危機にある世界遺産コンゴの現場で考える」　平山郁夫監修　『SOS 世界危機遺産』2006　小学館　pp.74-77

７）朝日新聞　「命を奪う　密猟の牙押収の８月　ゾウ１００頭の惨殺体」大阪本社版（夕刊）2006 年 10 月 6 日

8）朝日新聞「象牙密輸、外国組織関与か」大阪本社版　（朝刊）2006 年 10 月 25 日

追記：本稿はユネスコのアジア・太平洋地域の本部バンコク事務所が 2010 年に配布した教師用指導書（"A Teacher's Guide　INCORPORATING EDUCATION FOR SUSTAINABLE DEVELOPMENT INTO WORLD HERITAGE EDUCATION"の作成に関わり、筆者が担当した第 3 章"Localization of WHE with perspectives of ESD – Pedagogy, practices and challenges　"に加筆したものである。

第３章　ＥＳＤと世界遺産の教材化の視点

―奈良の薬師寺を事例にして―

田渕　五十生

はじめに

奈良市の郊外に「西の京」と呼ばれる一画がある。そこには、唐招提寺と薬師寺が１キロメートルの範囲に並び立ち、訪問者は新旧全く異なる雰囲気を味わうことができる。鑑真和上にちなむ唐招提寺は、欝蒼と繁った森のなかに古色蒼然とした姿で森閑と建っている。

それとは対照的に薬師寺伽藍には、色彩豊かな堂宇が立ち並び、東方のパラダイスである薬師瑠璃光浄土をこの世に現出したかのようである。けれども、５０数年前は崩れた土塀に囲まれた廃寺同然で、そこに儚い美を感じさせるほどであった[1)]。創建当時の堂塔は東塔のみで、鋳造仏の最高傑作、「国宝の中の国宝」と称せられる薬師三尊像も朽ちて雨漏りのする仮金堂の中に鎮座していた。

薬師三尊像の価値については、次のようなエピソードがある。第二次世界大戦後に、アメリカをはじめとする連合国軍は日本に賠償金を求めなかった。第一次世界大戦後に、ドイツに課した過酷な賠償金が、敗戦国民の被害者意識を掻き立て、復讐心を煽ったヒトラーのナチス勢力を台頭させた歴史的な経緯あり、その歴史的な事実を教訓として学んだからである。そのとき、アメリカの美術史家たちから、「賠償金の放棄の代償に薬師寺の薬師三尊像を」という声が上がったほどである。それほど薬師三尊像の「美術品」としての価値は高く、世界的にも周知されていた。岡倉天心は「薬師寺の金堂三尊をまだ拝んだことのない人は、幸福である。あの三尊を拝して受ける最初の大きな感激を味わう機会がのこされている」と逆説的に言ったほどである[2)]。

現在では、中門に回廊が連なり、重量感あふれる二層の金堂が高く聳え、その脇持であるかのように東西に塔が屹立している。「巍巍蕩蕩」と称えられた薬師三尊像もその存在感に相応しい居場所を得たかのようである。そして、低層の長屋根で覆われた大講堂が背後に控えている。金堂と東西の両塔の均整美は、充実した体躯の薬師如来に優美な日光菩薩（左脇）と月光菩薩（右脇）が脇持として腰を近づけて寄り添う姿に対応しているかのような印象を抱かせる。

この薬師寺の伽藍の復興には、ＥＳＤ（Education for Sustainability ＝持続可能な開発のための教育）のヒントが満ち溢れている。ここでは、薬師寺を事例にして、世界遺産を切り口にしたＥＳＤの教材化について考えてみたい。

１　薬師寺伽藍の復興

１－１　高田好胤師が目指したもの

薬師寺伽藍の復興には多くの人々の尽力があった。そのひとりが「百万巻写経勧進」で金堂の再建を訴えた高田好胤師である。高田好胤師は、ひとりひとりが「般若心経」を写経して仏さまと「結縁」し、「納経料」として千円を寄付する「勧進」で建築資金を獲得し

ようと考えた。千円×１００万人で１０億円。とてつもなく遠大な計画である。大企業や著名人の大口寄付ではなく、仏縁を結んだ個人の写経の勧進を開始した１９６８年から8年後の１９７６年に金堂が再建された。

この名もなき個人の勧進による金堂の復興は、東大寺の復興に関わった鎌倉時代の重源上人の精神に通じるものである。源平の乱による「南都炎上」で大仏殿は焼失し、大仏も膝から上は溶解してしまった。その復興を任されたのが６１歳の重源上人で、上人の『勧進帳』には「尺布寸鉄といえども、一木半銭といえども」という文言が書かれていた。一切れの布や鉄くぎ、木ぎれでもわずかな銭でいい。そのような小さな喜捨を集めて復興しようとしたのである。

その精神は、『続日本記』のなかにある聖武天皇の「大仏造立の詔」の「もし、さらに人有りて、一枝の草、一把の土を持ちて、像を助け造らむと情（こころ）に願わば、恣（ほしいまま）に聴（ゆる）せ」の文言で有名な「一枝の草、一把の土」を踏まえたものである。

庶民の寄付による復興という精神は、江戸時代の公慶上人にも受け継がれる。戦国末期の騒乱で、大仏殿はふたたび灰燼に帰し、大仏の損傷も激しかった。江戸時代の初めまでは大仏のお顔は、銅板が張り付けられただけの木製で、雨風をしのぐ屋根もなく野ざらしのままであった。

大仏の痛々しい姿に涙した公慶上人は、若き日に大仏の復興を志したという。上人も「一針一草の喜捨」を呼びかけて、本州の北端の陸奥から南端の薩摩と大隅まで全国行脚し、大仏復興の資金調達に生涯を賭けた。その一念が江戸幕府を動かし、大仏の復興から大仏殿の再建に至ったのである。

高田好胤師も「発菩提心、荘厳国土」というスローガンで全国を行脚した。その陰で支えたのが安田英胤師をはじめとする薬師寺一門の僧侶集団であった。この「百万巻写経」による勧進運動は、かつての重源上人、公慶上人に並び「昭和・平成の伽藍復興」として記憶に留められるべきである。

「百万巻写経」は、現在、すでに７３０万巻を超えている。その浄財で、金堂に引き続き西塔、中門、回廊、大講堂と次々に再建されていった。当初、高田好胤師は金堂の再建のみで休止し、他の堂塔の再建は次世代に託す考えであった。けれども、宮大工、西岡常一棟梁の篤い働き掛けと安田英胤師の周到な配慮によって現在の伽藍になったのである[3)]。なにはともあれ、薬師寺の一大伽藍は、権力者ではなくいとも小さき普通の庶民の浄財を集めて復興されたのである。

人知を超えた仏さまとの関係のなかで、善男善女が自発的に浄財を献じて伽藍復興を達成した意味はいくら強調しても協調され過ぎることはない。個人の力の小ささや無力さを痛感させるのが、現代社会である。けれども、この薬師寺の復興の事実は、個人の価値、ひとりひとりの果たす役割、人と人のつながりを重視するＥＳＤの精神に通じる具体的な教材の事例になる。

１－２　ヒノキの命への畏敬

伽藍の復興は、建設資金があればできるものではない。用材のヒノキ（檜）がなければ

木造建築の再建は不可能である。京都の東福寺の再建が戦前に行われた時、すでに台湾からヒノキが運ばれて使用されている。１９７０年代、日本国内には金堂の再建に必要なヒノキは払底していた[4]。

伽藍の復興には膨大な量のヒノキが必要であった。それを可能にしたのが、高田好胤氏を裏方で支えた薬師寺の僧侶たちの自然への畏敬の念、その価値観を示した立居振舞であったことは余り知られていない。

伝統建築による再建に拘る西岡常一棟梁を伴い、僧侶たちは台湾に用材の買い付けに赴いた。台湾の中央には高峻な山脈が走り、その麓の高山地帯に自然に生育したヒノキが残っている。けれども、柱材になるヒノキを大量に入手することは容易ではなかった。仏教に篤く帰依する母堂の願いを聞き入れて山林主は金堂のヒノキの売却に同意したという。柱材を伐採するとき、生駒昌胤師はヒノキ一本一本に線香を手向けて「あなたの命をいただきますが､その命を奈良の地でお寺の柱として活かしていただきます｣と祈りを献じた。さらに、命をいただくだけでなく、新しくヒノキの植林に着手する法要も行った。[5]「人間は自然によって活かされている」という自然への畏敬の念、それを示した薬師寺の僧侶の姿に山林主が感銘してヒノキの大量購入が成立したという。その後、ヒノキの輸出は台湾政府によって禁止された。

現在、奈良で興福寺の金堂の再建が進められている、けれども、その建築に要するヒノキの確保は日本だけではとうてい無理で、外国からも調達が不可能で、ヒノキではなくケヤキ（欅）を柱材にするという。それもアフリカのカメルーンから輸入するというのである。幸運にも、薬師寺はヒノキを入手できた。ヒノキの用材の確保にちなむエピソードもＥＳＤの典型教材になるにちがいない。

２　世界遺産と国際理解教育

２－１　青丹よし

青丹よし　奈良の都は　咲く花の　匂うがごとき　今盛りなり

平城京の繁栄を詠った「万葉集」の小野老の歌である。「青」とは建物の連子窓の青色、柱や木枠の部分が「丹」（朱色）に塗られ、それが屋根瓦の黒色と漆喰の白壁のなかに浮かび上がっていた。その色彩の美しさを詠ったのである。薬師寺の境内に立てばその華麗さが実感できる。

朱色の顔料は、丹土と呼ばれ、酸化鉄のベンガラ、あるいは硫化水素と水銀の化合物である。日本でも産出され、縄文時代からすでに使用されていた。また、内部が朱色で彩色された古墳も多い。

青色の顔料は、別名、岩緑青と呼ばれ、孔雀石を砕いて作ったのである。当時の日本では入手困難で、朝鮮半島から輸入され高価であった。

また白壁と対照的に映える黒い屋根瓦は、朝鮮半島からの技術者（瓦博士）の技術指導を受けて、はじめて大屋根を覆うことができた。大工の棟梁も、仏像を鋳造する仏師も、中国や朝鮮半島からの技術者に依存していたのである。

いうまでもなく、文化は空を飛んでくるのではなく、生身の人間が運んできたものである。当時からすでに国際交流が盛んに行われ、その結果、日本の古代文化は成立したので

ある。

２－２　四神図は当時の東アジアの「国際標準」

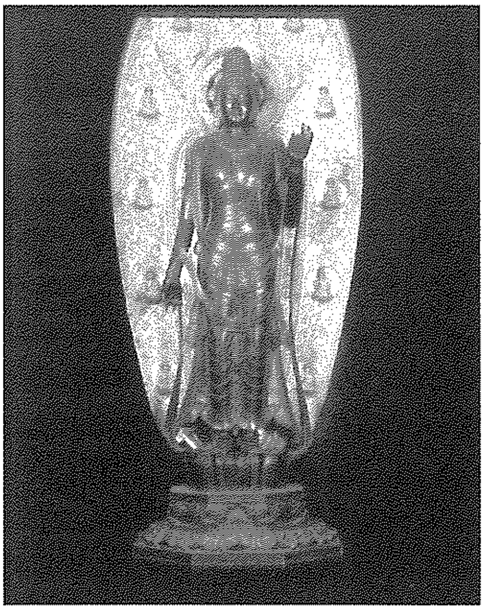
２０１０年１月１日から、「平城遷都１３００祭」が奈良県の各地で催され、平城宮跡に大極殿が復原された。その大極殿も青、朱、白、黒の四色に彩られているが、その四色は四神図に由来している。四神とは、四方の神で、東は青龍、南は朱雀、西は白虎、北は玄武で、玄武の「玄」は「玄人」（くろうと）いうように黒である。それを四季にたとえて青春、朱夏、白秋、玄冬と呼んでいる。また、大相撲の青房、白房、赤房、黒房もルーツは同じで、東、西、南、北の四方を示している。

薬師寺の薬師三尊の台座には四神図が装飾されているが、ほぼ同時代の高松塚古墳やキトラ古墳の壁画にも描かれており、当時の東アジアに共通する「国際標準」の図匠であった。冒頭の「青丹よし」の歌は、たんに建物のカラフルな色の美しさのみを讃えたのではなく、国際交流の結果入手された最先端の思想、技術など国際色の豊かさをも讃えているのである。

３　世界遺産と平和教育

３－１　東院堂の聖観音菩薩立像と四天王

【薬師寺聖観音菩薩立】



薬師寺の回廊で最も美しいのが北側から見る東回廊である。遮蔽物のない中空の消失点に向かって柱と壁がリズム感をもって収斂する美さは格別で、西洋の修道院にも共通している。その回廊を隔て、歴史を感じさせる退色したままの東院堂がある。鎌倉時代に造られた国宝の建造物である。中央に大きな黒塗りの厨子が仏法を守護する四天王に守られて置かれており、厨子のなかには長身（１，８８ｍ）の聖観音菩薩立像が安置されている。金堂の薬師三尊像に勝るとも劣らない傑作である。

厨子の四方を守護する四天王像の顔面を凝視すれば、それぞれの顔にかすかに彩色が残っているのがわかる。東方の持国天には青色が、南方の増長天には朱色が、西方の広目天には白色が、北方の多聞天には黒色が、四神図に対応する四つの色が四天王に塗られている。

第二次世界大戦中に、この聖観音菩薩立像は軍部に目をつけられて危機にさらされていたという。肌の美しい黒光りの光沢は、レア・メタル（希土類）であるバナジウムの含有率が高いからである。バナジウムは、当時の花形戦闘機、「零戦」の触媒として必要不可欠な金属であった。バナジウムが払底したとき、軍部はこの聖観音菩薩立像に注目したのである。

もし、戦争が長引いていれば、この貴重な仏像も鋳潰されていたかもしれない。戦争が人々を狂気に駆り立てるのである。狂気が貴重な文化遺産を破壊させた事例は、バーミアン大仏を破壊したアフガニスタンのタリバンの勢力だけでない。

３－２　鋳潰された仏像の身代わり

第二次世界大戦中に、日本の寺々から梵鐘が供出され、大砲や砲弾に転用されたことは記憶に新しい。梵鐘の形は仏像を模したものである。撞木を当て部分は蓮弁で装飾されているが、それは仏陀の座す場を意味している。梵鐘の上部の突起物は、仏陀の羅発（らほつ＝巻き毛）であるという。『平家物語』の冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり～」というように、梵鐘を通して人々は「仏陀の声」を聴くのである。その仏陀の身代わりである梵鐘を武器に変えたのは、わずか今から７０年前のことなのである。

梵鐘を鋳潰したのは日本だけではなく、ロシア革命期にも行われた。２００６年にロシアを旅行する機会があり、修復作業が行われている教会をいくつか訪問したが、地方の教会にはほとんど鐘がなかった。共産党が政権を執ると、まず教会の尖塔を破壊し、鐘を撤去したという。なぜなら、教会の鐘こそ、教会と民衆を結び付けていたからである。戦争や革命の狂気が文化遺産を破壊するのは、洋の東西を問わない。

ミレーの名画「晩鐘」に込められた静謐な宗教性はあまりにも有名である。頭を垂れて静かに祈る人物像の絵から鐘の音が聞こえてくるようである。目を凝らして見ると、遠景に教会の尖塔が描かれている。

４　世界遺産と人権教育

４－１　大仏爆破と女性の人権抑圧

東大寺の大仏は、唐の則天武后が洛陽の龍門の奉先寺に造立させた大仏がヒントになっている。けれども、それに先立ちアフガニスタンのバーミアン渓谷や中国の山西省にある大同の雲崗の石窟寺院でも大仏は造られている。当時、中央アジア経由の仏教では弥勒信仰が流布しており、弥勒菩薩が降臨するとき（弥勒下生）は五穀豊穣が約束され、人々の身長も大きくなると信じられていたという。その信仰が大きな仏像をつくらせた歴史的な背景である[7]。ただし、東大寺の大仏は弥勒ではなく、蘆舎那仏という太陽神に似た仏で、放射状の光背は太陽の光を放ち荘厳である。

タリバン政権が偶像崇拝の象徴であるバーミアンの大仏の爆破を予告した。当時のタリバン政権は、テロリスト「アルカイダ」の影響を受けていた。そうすると世界中の世論がアフガニスタンに注目し､宗教的に非寛容なイスラム原理主義に対して非難の声を上げた。けれども、それまで、タリバン政権によって行われていた女性の人権を蹂躙する政策にはほとんどの国や地域の人々は無関心であった。女性たちは、全身を覆い隠すブルカの着用を強いられて家庭のかに閉じ込められ、学校に行って教育を受ける権利さえ抑圧されていた。

けれども、大仏が危機に瀕すると「貴重な文化遺産を守れ」という大合唱が湧き起こった。タリバン当局は､「生きた人間の人権蹂躙では沈黙しながら、文化遺産では声をあげるのか」と反論して爆破された。[8]事件後､「バーミアンの大仏は自ら崩れ落ちることで、アフガニスタンの女性たちの人権問題を訴えた」と自省的に受けとめようとした新聞論調もあった。

轟々と湧き上がる非難抗議を無視してバーミアンの大仏は爆破された。その３ヵ月後の

２００１年に、ニューヨークで「９・１１」事件が起こる。文化を破壊するものは、人権をも蹂躙するのである。

４－２　本を焼く国では人間も焼く

思想や言論の弾圧の典型は、秦の始皇帝による「焚書坑儒」であろう。都合の悪い書物（当時は、紙が使用されていないので、木簡や竹簡）を焼き、数百人名の儒者を生き埋めにした。紀元前２１３年の事件である。

この事実は、古代の独裁者の所業として記録に留められている。それから、２２００年も経過した２０世紀に、やはり同じような文化弾圧事件が中国で起こっている。「文化大革命」期の「批林批孔」運動である。儒教や仏教など宗教は封建的という理由で、儒教の書物が焼かれ、寺院が破壊された。また、多くの知識人が収監され、その人権が蹂躙された。

２００５年、新疆ウイグル自治区の仏教遺跡を訪問した。そのときに目にしたトルファン郊外のベゼクリク千仏洞の破壊の跡を今でも鮮明に思い起こすことができる。壁画に描かれた顔という顔が打ち潰されていたのである。中世のイスラム勢力の侵攻期の偶像破壊の被害にしては損傷が風化していない。聞けば、１９６０年代後期の「文化大革命期」のものであるという。「文化大革命期」の狂気と混乱によって多くの文化遺産が破壊され、とくにチベットではその被害が大きかった。現在は、文物を破壊する暴力は行使されていない。けれども、「漢化政策＝同化政策」というソフトな形でのチベットやウイグルなど少数民族のアイデンティティへの攻撃は継続されている。

ドイツでも、「焚書」が行われた。１９３３年１月にヒトラーが首相になり、同年５月１０日、ユダヤ人や社会主義者たち２４人の本が「反ドイツ的」という理由で焼却された。マルクス、エンゲルス、アインシュタイン、フロイトなどの書物である。

約２万冊の本が焼かれたベルリンのオペラ劇場前の広場の一角に、それを記念する穴が空けられガラス板で覆われている。穴の壁面にプレートが張ってあり、そこには「本を焼く国では、ついには人間も焼くだろう」という文言が刻まれている。「焚書」の対象となったハインリッヒ・ハイネの言葉である。

ハイネは「ローレライ」の歌詞で日本人にもなじみ深いドイツのロマン派を代表する詩人である。「焚書」が行われて１０年も経ないうちに、ナチスは数百万人を焼き殺すホロコーストを開始した。じつは、ハイネの言葉は、ナチスの「焚書」に先立つ１００年も前に書かれているのである。

５　ＥＳＤと人間の生きる意味

５－１　ＥＳＤと人間関係と回復

人々の喜捨による薬師寺の伽藍の復興と、戦争や革命の狂気が引き起こす文化破壊、権力者による文化弾圧と権力誇示の歴史について紹介してきた。ここで、ＥＳＤと人間関係の回復というテーマで考えてみる。ＥＳＤの目標には、人間と人間の絆の回復が謳われているからである。

現在、教育界にも競争原理が持ち込まれ、社会格差の再生産機能としての教育が、その弊害が自覚されながらも改善されないままで「持続」されて現在に至っている。アトム（分

子）化した社会の個人は、地域社会や周囲との人間関係が「断絶」し、自分でありながら自分である実感（アイデンティティ）がもてない状況に陥りやすい。

ここでは、つながることのなかった少年刑務所の訓練生と視覚障害者という二つの集団が薬師寺でつながった小さなエピソードを紹介する。それは、「世界遺産は誰のものか」という問いかけであり、視覚障害者が世界遺産に接することができる配慮が必要なことを訴えているのである。

5－2　目の見えない人へのジオラマ（模型）

薬師寺の大講堂の左隅に、写真１のような薬師寺の伽藍のジオラマが置かれている。視覚障害者が手で触って、中門、回廊、東西の両塔、金堂などの位置関係が分かる模型で、点字の解説文も貼り付けられている。

写真１【薬師寺のジオラマ】

この模型は、筆者が篤志面接委員を務める奈良少年刑務所の訓練生が４ヵ月かけて作成したのである。篤志面接委員とは、入所者の面談にあたるボランティアであるが、１６年間にわたり、新入所者や釈放前の収容者や希望する個人の面談を筆者は行ってきた。

２００９年４月に、新しく着任された平田利治所長との懇談のなかで、この視覚障害者用のジオラマの製作を提案し、同じ篤志面接委員である薬師寺の大谷徹奘師の尽力で奉納されることになった。

この奉納の契機は、英国で見た視覚障害者用の大聖堂のジオラマであった。筆者は、１９９４年から１年間、英国ヨーク大学に留学の機会を与えられた。ヨークには、カンタベリー大聖堂に次ぐ権威をもつヨーク・ミンスターがある。大司教がいるのはカンタベリーとヨークだけである。奥行きが１６０メートルもあり、世界でも３番目に大きな大聖堂である。正面に２つの尖塔が立ち並び、身廊と翼廊が十字に交差する部分に７０メートルの中央塔が聳え、巨大だが優美な建造物で英国におけるゴシック建築の最高傑作といわれている。

西側の正面から堂内に入ると、まず目に入るのは盲導犬用のマットとその横に置かれた視覚障害者用の１メートル四方の大聖堂のジオラマである。そのかたわらに普通の民家が将棋の駒ほどの大きさで置かれているので、大聖堂の姿と大きさがワンタッチで分かるのである。もちろん、点字の解説もある。

ヨーク・ミンスターを訪れて、目の見えない文化をもつ人々への行き届いた配慮に驚かされたが、視覚障害者への心配りはピーターズバラやウインチェスターなど他の大聖堂で

も行われていた。そのとき、痛感したのは日本の神社仏閣には視覚障害者への配慮も気配りもなぜないのかという疑問であった。いつの日か、「日本の名刹といわれる社寺にもこのようなジオラマが置かれると、視覚障害者たちもイメージできるはずである。もし、少年刑務所でそうすれば、視覚障害者が喜んでくれるだろう」という趣旨の話をさせていただいた。すると、平田所長は「早速やりましょう」と担当の教官を呼んで具体的な計画に取り掛かることになった。そして、その呼び掛けに８人の訓練生が応えてジオラマは完成したのである。

５－２ 人の生きる意味

ジオラマの奉納の法要は、山田法胤管主、村上執事長、奉納の仲介者の大谷徹奘師以下の薬師寺の関係者と平田利治所長、中川富士雄首席矯正処遇官、直接指導に当たった中野裕章法務技官はじめ奈良少年刑務所関係者が立ち合って、２０１０年１月１７日に、厳かな雰囲気のなかで執行された。「眼病平癒の薬師寺に最も相応しい寄進である」と山田法胤管主から心の込もった謝辞が述べられた。そして、製作に最後まで関わったＴ君の作文が中川首席処遇官によって代読された。(「朝日新聞」　2010,1,18, 奈良版　大阪本社)

読み上げられた作文は、胸に感銘深く響き、「人と人の関係の絆」や「人が生きることの意味」について考えさせられた。冗長であるがそのまま再録する。当日、配布された作文である。

左官科職業訓練生の感想文

左官の職業訓練が半年過ぎた頃に目の不自由な人達が手で触って分かる薬師寺の模型を作ることになりました。模型作りで失敗も沢山しましたが，失敗から学びながらなんとか作品を完成させました。

この作品を作る過程でぼくは沢山のことを学び成長することが出来ました。最大の成長は相手の立場に立って物事を考えられるようになったことです。目が見えない人がこの模型を触ってどう感じるか，どう理解してもらえるかということを考えながら作りました。そのことを通して，所内生活でも相手の立場に立って物事を考えられるようになったり相手を思いやったりすることが出来るようになりました。

また，無心になって取り組むことによって心が穏やかになって来ました。そうすると人間関係も落ちついて来ました。

そして，ぼくも人の役に立つことが出来るということを実感し，すごく大きな自信になりました。今までぼくは人に嫌われる存在でした。人に喜んでもらえるという事はありませんでした。今は自分が作った物が人の役に立ち喜んでもらえることがすごく嬉しいです。

これから私は自分の存在を誰かに喜んでもらえるように，そんな目的を持って生きていこうと思います。

平成２２年１月１７日

奈良少年刑務所左官科職業訓練生

指導に直接当たった中野先生によれば、このジオラマを製作するなかでＴ君の表情が日

に日に柔和になっていったという。T君の心の中に「何か」の変化があったにちがいない。

奉納式の後に、筆者もT君と面談したが、じつに爽やかな表情の顔をしていた。「あなたたちがしたことは、数百万もいる視覚障害者への素晴らしいプレゼントですよ」と声を掛けると、顔をくしゃくしゃにして喜びにあふれていた。そして、T君は次のように話してくれた。

「この作業に加わるようになって、はじめて自己を見つめることができるようになりました。屋根の瓦や垂木などを、目の見えない人にどのように分かってもらえるか、他者のことをはじめて真剣に考えるようになりました。そして目の見えないハンディを負っていながら、そのハンディを彼らが受容しているのに対して、非行理由を自分の生い立ちのせいにしていた自分の小ささに気づかされました。今、やっと「自己受容」できるようになりました。」

そして、最後に、「先生、もう大丈夫です。僕は更生できますから、安心してください」ときっぱりと宣言してくれた。入所者と面談していつも痛感させられるのは、自分の言葉による自己表現力の弱さと語彙の少なさである。自分の考えや思いや感じを言葉に表現して相手に伝える経験、自分を対象にして客観的にみる体験が少なかったのではないかというのが、少年刑務所の教育担当の先生方の意見である。けれども、T君は、そのとき、きわめて抽象的な「自己受容」という語彙を使用したのである。収容中に自己の内面を見つめる機会が与えられたからにちがいない。

少年刑務所の先生たちの少年たちに接する熱心な取り組みに、筆者はつねに啓発させられている。筆者はふと思う。もし、釈迦が生きていれば、このような刑務所のなかで「あなたは、あなたであることにおいて、すでに貴い」と説法をしているのではないか、一と。

入所者との面談では、少年たちの話を聞けば聞くほど、「人は犯罪者になろうとしては生まれてこない」という確信をもつ。「もし、少年たちと同じ状況に置かれていたら、筆者も少年たちのように行動していただろう」という気持ちになり、他人事（ひとごと）ではなくなるのである。そして、なぜ、入所者の周囲に少年を支える人たちがいなかったのかという怒りや悔しさが込み上げてくるのである。

T君の述懐は、人権の根底にある自尊感情、自己肯定感の重大さにふれたものである。それは、「人は他者に役立つことで生かされる」という「人の生きる意味」や「人生の喜び」という人生の真理に到達している。刑務所の訓練生がジオラマの製作で目の見えない人々に奉仕することで、逆に訓練生の人生への目が開かれたのである。

２０１０年８月には、別の訓練生によって平城宮跡大極殿のジオラマが製作され、平城遷都事業協会に献呈された。そしてビジターセンターに置かれて覚障害者が触れるようになっている。ＥＳＤには、分断された人間関係を回復することも目標に掲げられている。「少年（boy）は周囲から期

図１【世界遺産のロゴマーク】

待される体験を通して、はじめて成人（man）になることができる」というのは、『怒りの葡萄』の作家、ジョン・スタインベックの言葉である。

おわりに

図１は、世界遺産のロゴマーク（標識）である。このロゴマークは何を象徴しているのであろうか。大学の講義でも市民向けの講演でも、この図を示して「何に見えますか」とか「何を象徴していると思いますか」と筆者は、問いかけている。

そうすると多様な答が返ってくる。「丸いのは地球ではないか」とか、「中の四角形は人間の文化ではないか」とか、「真ん中の尖った形がペン先に似ている」とか、「人間が祈っている合掌ではないか」とか、「中の四角形を周囲の円が大切に守っている」とか、「円と四角形が繋がっていることから自然遺産と文化遺産がお互いに補い合っている」というような答えさえ返ってくる。受講者は、それぞれの答えに共感しながらうなずき、イメージがどんどん膨らんでくる。

「曲線は自然が創り、直線は人間が作った」といわれている。自然遺産と文化遺産を象徴させたというのがユネスコの見解である。けれども、いわゆる「正答」も「正解」もない。それぞれの意見とその根拠を聞いたあと、次のような考えを筆者は話すことにしている。

> 戦争中の日本や革命期のロシアで梵鐘が鋳潰されました。仏や神という人間を相対化させる存在を否定したわけです。フランスの画家ミレーに「晩鐘」という傑作がありますが深い感動が伝わってきます。１日の仕事を終えて遠くから聞こえる鐘の音に感謝の祈りを捧げる若い農民の夫婦を描いたものです。おそらく今日の１日の糧を感謝しているのでしょう。また、無事に１日の業を終えたことへの感謝が捧げられているのかもしれません。あの絵から伝わる感動は見る人によって違うでしょうが、私は感謝して祈る姿の中に、幸福があるというメッセージをミレーは伝えたかったのではないかと思っています。
>
> 祈りであるとか合掌する手を象徴するという意見がありますが同感です。地球または自然と繋がった文化遺産の形は祈りの造形でないかと勝手に考えています。合掌は掌をピタッと合わせる形と、中を中空にする形があるそうです*。インドでは蓮華の蕾（未生）の形を表すといわれています。蓮は仏教を象徴する花でもあります。インドでは合掌して「ナマステー」と挨拶しますが、それは「私はあなたを尊敬します」または「敬意を表します」という意味だそうです。
>
> 尊敬または敬意を英語では「RESPECT」と言いますが、そのリスペクトがキーワードではないかと思います。自然をリスペクトする、文化遺産をリスペクトする、それに関わった人をリスペクトする。生きとし生ける命をリスペクトする。風雪に耐えて残された文化遺産や自然遺産に対する敬意、そして生かされている自分への感謝、すべてのものに対する感謝の念ではないかと考えます。

世界遺産のロゴマークは、そのような内面的な精神をも象徴しているという解釈は筆者の個人的な見解である。けれども、自然遺産や文化遺産という物質的なモノだけでなく、その背景にある精神的な要素、祈りやレスペクトも重要である。

世界遺産はたんなる観光資源ではない。世界遺産を通して、われわれは地球の悠久な歴史や人類の歩みについて考えることができる。また、文化の多様性や自然への畏敬、平和や人権、人の生きる意味などについても、謙虚に自省する機会が与えられる。その意味で、世界遺産は教育の宝庫でもある。そのことが、筆者を世界遺産教育に駆り立てている原動力である。

注

1) 町田甲一『薬師寺』中央公論美術出版　１９６３　年　p.6
2) 同上書　p.5
3) 寺沢　龍『薬師寺再建　白鳳伽藍に賭けた人々』草思社 pp140-146
4) 同上書　p.17
5) 安田英胤　『住職がつづる薬師寺物語』　四季社　２００４年　p.142
6) 太田信隆『まほろばの僧　高田好胤』草思社　２００５年　pp.151-154
7) 宮治昭　「東大寺大仏とその源流　毎日新聞　大阪本社版　夕刊　2010.9.10
8) 高木徹　『大仏破壊―バーミアン遺跡はなぜ破壊されたのか―』　文芸春秋　２００４年　ｐ.２９６
9) 佐藤知範　『図解　仏像のみかた』西東社　1995年　p .95

（注記：本稿は「福山市立大学の開学記念論集」（2011年4月刊行予定）のために書いた原稿の一部であり、それを転載させていただいた。）

第４章　『仲間と学び合った奈良の世界遺産』

―大学における社会科教育法の実践記録―

田渕　五十生

１．はじめに

「世界遺産教育は世界遺産がある地域だから実践可能だ」というのは謬見である。ＥＳＤ（Education for Sustainable Development）の観点に立てば、どの地域にも未来に残したい自然景観や次世代に伝えたい文化遺産が存在している。したがって「地域・世界遺産教育」という考えに立てば、「世界遺産教育」は、どの地域でも実践可能な普遍性をもっている。また、どの発達段階でも実践可能である。「総合的な学習の時間」を活用すれば、小・中学校の全学年を通して「地域を愛し、地球の未来を考える」ＥＳＤ実践は展開できる。その経緯は大学教育でも同じである。地域に拘る学習が、地域を突き抜けてグローバルな地平に通じる普遍性をもっている。

筆者は２回生の「初等教科教育法（社会）」を担当しているが、４年前からは地域の世界遺産を学習材に据えた参加型授業を展開してきた。授業者がどのような願いを込めて学生に臨み、学生がどのような学びをしたかについて報告したい。

この講義は、仲間の教育力に依拠している。換言すれば、集団的な学びの組織化ということができる。中学校、高等学校と受験を意識した授業の中で、学生たちには、「学習＝個人的営為」という固定観念が定着してしまっている。大学に入学後、大人数教室で一方的に講義を聴く受動的な授業が多く、授業への主体的な参加は行われにくい状況に置かれている。

けれども 100 名以下のクラスサイズの場合、4~6 名の学習集団を組織すれば、受講者は互いに啓発し合える学びの場を共有することができる。そのためには、何を言っても冷笑されたり批判されたりしない許容的な雰囲気づくりが必要である。また、集団の規模も 6 名が限度であり、それ以上であれば、必ず傍観者が出てしまう。受講生が 50 名以内であれば、4~5 名が望ましいことは言うまでもない。

地域の教育力について言及すれば、「ハードとソフト」、「物的資源と人的資源」、すなわち、地域にある博物館や資料館などの教育施設とそこに関係する学芸員やボランティアガイドとの協働（コラボレーション）により，相乗効果を発揮することができる。博物館や資料館であれば、展示物、掲示物などの「モノ自体が物語る」が、学芸員の解説が加われば、教育効果はさらに深化される。

その際、留意すべきことは、学芸員やボランティアガイドに「丸投げ」にしないことである。現地での体験談の試聴であっても、必ず疑問や質問を学習者に事前に準備させて臨むべきである。「引率の先生から、『すべてお任せいたしますから、よろしくお願いします』と依頼されることがあるが、その無責任さにはあきれる」というボランティアガイドの怒りを聞くことがしばしばある。

まず、学習者だけで直接に見聞して、自分たちの気づきや発見をさせる事前学

習を組織し、その後，学芸員やボランティアガイドさんの解説を聞かせるべきである。なぜなら、自分たちの気づきと専門的な解説との間のギャップが意識でき、そのギャップを埋めるために、どのような準備が必要であったかが明確になるかである。学びには、そのような「後知恵」が多いのである。

今回、筆者は「古都奈良の文化財」について、世界遺産センター的役割を果たしている「なら奈良館」と，そこを事務所にして活動している「奈良観光ボランティアガイドの会」と連携して授業実践を展開した。そのような「ハードとソフト」、「物的資源と人的資源」に依拠する教育の有効性は、すべての段階の教育に通底するものと確信している。

2. 初等教科教育法(社会)のねらい

筆者の講義のねらいを要約すれば、以下の３点であろう。

① 地域の世界遺産を題材にし、小学校社会科の教育目標、教育内容、教育方法について、仲間と相互啓発しながら理解を深める。
② 自分たちの地域奈良を対象化して意識的に学ぶために、地域のボランティアガイドや奈良国立博物館と連携して、仲間と共に世界遺産サイトへのフィールドワークを行い、その成果をパワーポイントの教材作成に結実させる。
③ 社会科の教材研究の基本である自分の足を使った体験を通して、学ぶことの楽しさや面白さを実感させ、教師教育の必須な条件である「学ぶことの楽しさ」に気づかせる。

3. 講義の概要

ここで講義の概要を以下の１～５に記しておきたい。

3. １学習集団づくりと「概念砕き」

まず、オリエンテーションで「この講義で何を学びたいか？」と問いかけて集団討議を行い、授業への参加意欲を高めた。座席指定をして６人グループを編成して、「講義対話カード」や各種のレポート課題について常にグループで相互批評を行い、多面的な見方や他者の考えに触れるように配慮した。そのようなプロセスを経て、学生たちのバラバラな群れ的状態が、グループ活動になり、最後の教材作成では、「目的を共有する学習集団」に変容していった。そして、グループ間の意見交換を通して「社会科＝暗記科目」という固定観念も徐々に変化していった。

3. ２奈良の世界遺産についての文献学習と相互啓発

奈良の世界遺産についての理解を深めるために、テキスト『奈良大好き世界遺産学習』[1)] を読ませて、「そうだったのか奈良の世界遺産―３つの発見―」と題してレポートを書かせて相互批評を行った。その後、過去最も優れた教材を作成した先輩を招いて教材のデモンストレーションをしてもらい、俄然、「われわれも！」といい刺激が与えられた。

「指導案の書き方」の講義では、６年生の歴史学習の「大陸の文化に学ぶ」(天平文化）を題材に指導案を書かせてその相互批評の後、報告者が書いた指導案を

示し（モデリング）、実際にパワーポイントを用いて天平文化についての講義を行い、受講者の関心を高めた。さらに筆者の論文「世界遺産教育とその可能性―ＥＳＤを視野に入れて―」[2)]の書評を書かせて相互批評を行った。そのような「仕掛け」で学生の奈良の世界遺産についての教材製作のモーチベーションは徐々に高まっていった。

３．３「なら奈良館」と国立博物館「大遣唐使展」へのフィールドワーク

形象（イメージ）化されない知識を暗記する言葉主義の社会科教育が罷り通っている。学生たちはその被体験者である。「ホンモノ」に触れさせ、地域に熱い思いを抱く人物に出会わせることは、彼らの感性を刺激し、知的探究心を喚起させる。

多くの学生が、「教科書の太字で書かれた『遣唐使』という言葉の背後に、このようなモノやコトや物語があったのかと圧倒された」とレポートに記していた。また、なら奈良館でのボランティアガイドの説明に「もっと知りたい！」と興味を掻き立てられ、次のフィールドワークへの心構えが醸成されていった。

３．４フィールドワークの実施と教材製作

学科も専攻も違う学生６人が、放課後に２回も学外でフィールドワークを行うこと自体、大変である。ゲストティーチャーの招聘、現地学習の問題点は講師にすべてを任せてしまうことである。それを防ぐために、今回、2度のフィールドワークを課した。１回目は、自分たちだけで現地を訪れ「グループで最低でも３０の質問をするように」と、より多くの疑問・質問を準備させることにした。２回目は、その疑問・質問をぶつけながらボランティアガイドから解説を受けることにした。

フィールドワーク後は、その成果をパワーポイントで教材作成するグループ学習を組織した。「学習＝個人的営為」と考えていた学生にとっては、放課後、集団での討議は刺激的であったと語っている。作成した教材は１４回目と１５回目の講義で9グループ全てがプレゼンテーションを行った。1回目のプレゼンテーションでは準備不足が目立ったが、2回目には発表の質も向上していた。失敗からも学び合っていたのである。他グループの発表を通して、8つの世界遺産サイトと奈良町について学び合ったことはいうまでもない。

３．５体験への振り返り

「講義対話カード」や各種のレポートをグループで相互批評するだけでなく、優れたものを全員にフィードバックして全体での学びに転化させた。そして、最後に、「この講義を通して学んだもの３点」に絞ってレポートするように指示をした。お互いの学びをクラス全員でシェアするためである。５３名の受講者からレポートが提出され、それを『仲間と学び合った奈良の世界遺産』[3)]という冊子に編集して配布した。

同じ授業を受けながら、受講生の学びの内容は多岐に亘っていた。けれども、一つだけ共通するものがあった。それは、世界遺産サイトを訪問して、自分たちの学びをパワーポイント教材にした体験活動が最も印象深かったという報告が多かったことである。

学習における体験活動の意味はいくら強調しても強調し過ぎることはない。けれども体験は体感的なものであり、時間の経過とともに風化していく。共通体験を対象化して集団で考察することで、多様な意味づけが行われ、体験の持つ意味が深化され、視野が拡大される。そして、学びの結果を一つの作品に完成させるプロセスを通して、体験を想起できる状態になる。「人は体験から学ぶのではなく、体験の振り返りから学ぶのである」というJ・デューイの指摘は、このような「体験の経験化」の重要性を指摘したものであろう。

4．授業のシラバスの提示

以下に示したのは、第1回のオリエンテーションを行って、学びへのモーチベーションを高めた後に配布したシラバスである。講義は、ほとんどシラバス通りに実施された。

表1 「初等教科教育法(社会)」のシラバス

小学校における社会科の目的は何か。また、どのようなカリキュラムを編成し、どのような教授＝学習過程を組織すれば、その目的を達成することができるかについて、参加型の授業を通して一緒に学びたいと考えます。また、教材づくりの訓練として、奈良の世界遺産を教材化して、グループでパワーポイントの教材を作成してもらいます。
授業予定
1.　オリエンテーションⅠ：この講義で何を学びたいか？　グループ討議
2.　「講義対話カード」の相互批評　フィールドワークのグループ編成　先輩の作品鑑賞
3.　社会科はなぜ生まれたのか？　社会科誕生の経緯　講義形式で行います
4.　バンコク出張で留守。海外青年協力隊経験者からイスラムの人々・文化の講演
5.　木原元校長先生の特別講演「社会科はSocial Studies（社会研究科）である。「モノが語る社会科―弥生の土笛を通して―」
6.　学習指導要領は何を求めているのか？：学習指導要領のカリキュラム編成原理
7.　指導案の書き方、指導案とは？地域の世界遺産をどう教材化するか？「地域の歴史」「国際的な天平文化」の指導案を持ち寄り集団討議
8.　田渕の指導案に基づいた、「天平文化」の講義。「万葉集」の魅力＝言霊
9.　第1回、フィールドワーク：「なら奈良館」（近鉄奈良駅4F）9時集合
10.　3・4年生の地域学習をどう授業化するか？ビデオ視聴を通して考える
11.　5年生の産業学習：「日本の農業」の教材化：モノ教材　ビデオとグループ討議
12.　6年生の歴史学習：「現代と過去との対話」としての歴史学習論　ダイヤモンドランキングで「日本の経済復興」の主要因を考える。参加型学習の授業づくり

13.　フィールドワークの発表の準備
14.　フィールドワーク発表 1：パワーポイント 30 枚のスライド 13 分間で 5 組
15.　フィールドワーク発表 2：パワーポイント 30 枚のスライド 13 分間で 4 組と課題説明

参考図書

① 文科省　『小学校指導書社会編』（生協で購入する。教員採用試験には必携）
② 奈良市教育委員会『奈良大好き世界遺産学習』　無料送呈
③ 田渕五十生「世界遺産教育の可能性―ＥＳＤを視野に入れて」無料送呈

評価

参加型授業なので、①出席重視。②「講義対話カード」の記述内容。③課題レポート『奈良好き世界遺産学習』と「世界遺産教育とその可能性－ＥＳＤを視野に入れて－」への書評。④「大遣唐使展」の鑑賞レポート。⑤グループ作品などの総合評価。

備考

① 「古都奈良の文化財」の８サイトへのフィールドワークを行います。グループで放課後または休日に時間調整をして行ってください。（同僚性の訓練）。結果をグループ単位でパワーポイントの作品にして発表する。（ＩＴＣ教材作成の基礎力）
「奈良で学ぶ意味」の確認と「知ることは楽しい」という経験をしてもらいます。

５．受講生の学び：「講義対話カード」と「最終レポート」

５．１「講義対話カード」での学びの記録

受講登録者は５８名であったが、４名は途中で受講を放棄して講義に出なくなった。１５回のすべての講義に出席したのは９名と少数であった。介護実習と重複して出席不可能になったからである。介護実習による１回のみの欠席者９名を加えれば、約３分の１が全出席したことになる。ここでは、全出席したＨさんと、介護実習と重なって１回欠席したＳさんの「講義対話カード」を紹介する。シラバスと対応させながら、受講者の学びを読み取っていただきたい。

５．１．１　Ｈさんの「講義対話カード」の紹介

第１回（4 月 12 日）：オリエンテーションⅠ：この講義で何を学びたいか？

社会の授業のイメージとしては、先生の話を聞き、知識を頭につめこめる。といった感じでした。しかし、この授業では、“自分から学ぶ姿勢”が大切であり、先生との対話が多くあるように思い、楽しい授業を自分が行うためには、自分自身が楽しい授業を知っている必要があると思いました。シラバスを読むと、これから自分が何をどう学んでいくのか、ということを考えることができるので、皆で討議し合った内容をふまえて、何を学び、何を得てそれをどうしていくのか、ということを

これからの授業で学んでいきたいです。

第2回（4月 19 日）:「講義対話カード」の相互批評　グループ発表を通しての集団的学習論

対話カードの総合評価をしていると、同じ講義を受け、同じ時間をすごしても、感じ方は様々で、これはまさに興福寺の阿修羅像が様々な神とされていたことにつながるのではないかと思いました。自分で学んだことが、こんなにもすぐに普段の授業でつながったことに驚きました。また、先輩方の発表を見て、聞いて、フィールドワークをする時にも、学ぼうとする姿勢（例えば予習をして質問を考えるなど）が必要だと思いました。自分が発表を考える時は、昔の事、人、物が、今の時代にどのような影響を与えているのか、ということに着目してみようと思います。

第3回（4月 26 日）: 社会科はなぜ生まれたのか？：社会科誕生の経緯

社会科をなぜ学ぶのか、私にははっきりとした考えが思い浮かばず、周りの子が話すのを聞いて、“そういう考えがあるんだな”とか、“そんな見方はおもしろいな”とか、何も浮かばなかった自分が少し情けなく思えました。今まで自分がどれだけ、「暗記する教科」として社会科を見ていたか思い知りました。教える立場になった時、社会科がある意味も知らず、目的も曖昧なままだったら・・・と、もしものことを考えるだけでもゾッとします。他人の考えを聞き、学び、そこから自分の考えを深めていきたいです。今日の授業では、よい反省ができ、また、学びたい気持ちがなんだかわいてきたように思います。

第4回（5月 10 日）: ゲストスピーカー：海外青年協力隊経験者の講演

今回の授業で、お二人の先生の講義に共通していたことが、どんな場面でも、“対人間”として人と関わりはじめることの大切さだと思いました。国と国とのコミュニティがあるように、人と人とのコミュニティが当然であり、異なる部分も多様に存在しうることです。物事に対して、一点的な視点や考えを持ってしまえば、そこから良い方向に進んでいくことはないでしょう。私は外国の教育にはあまりわからず、日本との違いも知りません。これはまさに「無知の知」の発見であり、新たな一歩への大きなステップになるように思え、これからの学びが楽しみです。

第5回（5月 17 日）: 木原先生の特別講演　「社会科は Social Studies（社会研究科）である

今日の講義で特に重要、かつ、なるほどと思ったのが、「質問と発問」のことでした。私たちはつい、何かを考えようとする時、“○○とは△△です”と言ってしまいがちである。問いかける授業、つまりテストや課題など音のない声ではなく、その子の音のある声、表情から読み取ることのできる思考力を引き出す授業、それがどの教科を展開するにあたっても言えることなのではないでしょうか。学習の材料と

なるネタ探しの旅、これからの大学生活をそんなふうに考えてみると、毎日がちょっと楽しくなるかもしれないと思います。

第6回（5月24日）：学習指導要領は何を求めているのか？：カリキュラム編成の原理

教科書を見てみると、“同心円”といわれるように、まさに向かうところは“社会”であり、自分たちが社会の中で生きていくための学びが詰まっているなと思いました。指導要領と教科書を照らし合わせると、それぞれが意図すること（身に付けて欲しい能力や理解など）がよく見え、どんな目的で、どのような内容をどう授業で展開すると、より効果的な授業が行えるのか、また、行うべきなのか、ということを考えられるように思えます。授業に奥行きのあるもの。そんな内容を考えたいです。

第7回（5月31日）：指導案の書き方。「国際的な天平文化」の指導案を持ち寄り集団討議

指導案を考えていた時に、教科書のみで授業を進めていくと、社会の深さを子どもたちに味わってもらいにくいかな、と思いました。社会科といえば、教科書、地図帳、資料集など、授業で使う教材が多かったことが思い出されます。先生の指導案を見て、いかに社会科の授業が深いのか、わかったように思います。加えて、指導案を見ていると、そこに“授業の実際”が見えるような気がして、だからこそ、指導案が授業の設計図である、という意味がよく理解できました。

第8回（6月7日）：田渕の指導案での講義　PPTで世界遺産教育の可能性について講義

今日の授業の中で「もっと知りたい」「おもしろい」・・・。このようなことを何回も思いました。先生の引き出しの多さ、内容対象に関する知識の量と扱い方、話の展開方法、実際に様々な所へ行った時の話、全てが“さすが”という様な感じでした。アルカイック・スマイルなど、先生の口からぱっと出てきた言葉に興味がわき、そしてもっと知りたくなり、学びたくなりました。それは先生の言葉が“単語”ではなく“言霊”だったからだと、そう感じています。簡単なことではないけれど、自分が教師になったら、自主的に“学びたい”と思える今日のような授業展開を取り入れたいです。

第9回（6月14日）：第一回、フィールドワーク：なら奈良館

なら奈良館で、ガイドさんの話を聞いていると、先生が言う“質問を用意すること”の必要性を改めて感じました。自分が、何のどんなことについて知りたいのか、どういうところに疑問を持っているのか、そのことが明確でないと、ガイドさんの講義をただの“おはなし”にしてしまうんだと思いました。今回は短時間での説明

でしたが、春日山が自然のものであるのに“文化”遺産であること、など、興味がどんどんわいてきました。よりよいフィールドワークになるように、しっかりと予習をしていきます。

第１０回（6月21日）：3・4年生の地域学習をどう展開するか？

皆のレポートを読んでいると、ほとんどの人が、“歴史に興味が出た”とか、“もっと知りたいことが増えた”など、プラスの要素を、大遣唐使展から多く得たことが伺えました。また、今日はビデオが映らないというハプニングがありましたが、なんだか、もともと先生が講義をする予定だったかのように思えて、先生の知識の多さ、活用する力、様々に感じることがあり、“もし自分だったら・・・”そう考えると私の未熟さが浮き出てきました。月曜１コマ、少し朝がきついですが、やっぱり“休みたくない、授業にでたい”そう改めて思いました。

第１１回（6月28日）：5年生の産業学習をどう展開するか？

皆が書いた遣唐使展のレポートを読んで、“行く必要がなかった”と思った人は、やっぱりいないんだなと思いました。きっかけは“課題のため”だったかもしれないけど、それぞれが得るもの・得ることができたものは、深いものがあるんだろうな、そう感じます。今日の授業では、先生が教室に入って来た時から、“この野菜は何に使うんだろう”“どんな内容なのかな”など、興味がわいてきました。先生が来るだけでその日の授業に対するモチベーションが上がる。すばらしいことだと思います。児童・生徒のモチベーションを良い方向に導くにはどうするべきか・・・まだまだ学びたいです。

第１２回（7月5日）：6年生の歴史学習はどうあればいいか？：参加型の歴史授業作り

戦後の日本の復興について考える時、カードを使うのは良い方法だなと思いました。ページにしてしまえば、“たったの”１ページ。でも、その１ページには何ページ分もの大切なものが詰まっているように思えます。“こんな改革があった”と言ってしまえばそれで終わってしまうところかもしれない・・・でも、それでは“社会科”の授業とは呼べないと思います。なぜ、どうして、誰が何のために・・・疑問と対話しながらできるように、もっと視点を多く得ることが自分には必要です。

第１３回（7月12日）：フィールドワークの発表の準備

最初の能面の話、深いな・・・と思いました。私的には、女にも男にも見えるし、でも表情がないように感じました。しかし、先生が、角度を変えて、怒っている、笑っている、悲しい・・・そんな顔を見せたとき、“あ、やっぱりそうなんだ、深いものだから私たちに教えてくれたんだ”とそう思いました。同じ一つのものでも、扱い方を変化することで、見ている側に“考えさせる”機会を与えることになりま

す。7月 23 日の発表では、ただ聞かせる発表ではなく、“考えて、考えを深めてもらえる”そんな発表がしたいです。

第14回（7月 23 日）：フィールドワークの発表1

今日の発表を通して思ったことは、“自ら足を運ぶ”ことの価値です。他のグループの発表を聞いていると、その場に行って、見たり、聞いたり、感じたりした人だからこそ言えることがたくさんありました。現代では、ネットが大きく広まり、バーチャルに様々なものが見られます。しかし、教師になって授業をする時に、うすっぺらな内容で授業すべきではないし、子どもたちに失礼だとも思います。フィールドワーク、なんだか最初は“歩くのが疲れる”とか思っていた自分に喝を入れたいです。その場でしか得られない、“見えない空気”を感じ取ること、それがフィールドワークの１つの魅力だと思います。

第15回（7月 26 日）：フィールドワーク発表2

今日の発表は劇を取り入れたり、タイムスリップを使ったりと多様で、楽しみながら、でも、学習はしっかりとできたように思います。前回に比べるとどの班もクオリティが上がっていて、これこそ“人と人が学びあう”ことのすばらしさだと感じています。学んで終わり、見て終わり。そんな日々はつまらないし、常に学び続ける五感を持っていると、どんどん良い学びができ、それを今後活かす事が、学ぶ意味なのだと思います。知識がある・経験があるからこそできる問いかけ・発問・・・教師になるまでに、もっとまだまだ学んでいきたいです。

5．1．2　Sさんの「講義対話カード」の紹介

第1回（4月 12 日）：オリエンテーションⅠ：この講義で何を学びたいか？

私が考える「理解する」ということは、ただ知るだけでなく、見て、聞いて、説明できるようになって初めて「理解する」というものであるが、そのためにはまず当たり前だと思わず、知ろうとすることが大事であると改めて気づかされました。これからの 15 回の授業で得るものが多いと思うので、積極的に意見を述べ、また他の人の意見を聞き、自分の世界観や考え方を広げることができるように頑張ります。

第2回（4月 19 日）：「講義対話カード」の総合評価　グループ発表を通して集団的学習論について学ぶ

建造物にしても植物にしても、それぞれの歴史や特徴があり、身近にあるものだったとしても、知らないことが多いことに気づいた。昔の人々が思いや願いをこめて造った物を、今を生きる私たちが力を合わせて、守っていかなければならない。そのためには、その文化財や宝のことを知ろうとし、理解する必要がある。それに

よって守ろうという意識が高まるからである。教師になったら、子どもたちに同じように伝えていきたい。

第３回（４月 26 日）：社会科はなぜ生まれたのか？：社会科誕生の経緯（実習で欠席）

第４回（５月 10 日）：ゲストスピーカー：海外青年協力隊経験者の講演

自分たちが知らなかった世界の話を聞くことができてよかったです。私たちが持っている固定概念というものは、本当に恐ろしいものであると改めて実感しました。何よりも恐ろしいと思ったのは、学校がなく、言葉がしゃべれないからといって、子どもたちの未来がつぶされることです。そんな子どもたちがいるのは、子どもたちのことを何も知らないが為にサポートもできないからだと思う。まず、子どもたちのことや、他国の文化観、価値観を知り、そのために何ができるかを考え、自分たちができることをやってみることが子どもたちのためになるのではないかと考えさせられました。

第５回（５月 17 日：木原元校長先生の特別講演　「社会科は Social Studies（社会研究）である」。

私は心理学専修なのですが、子どもの関心をひく授業というものに非常に興味を持ちました。確かに自分の経験上面白いと思った社会の授業は先生がつらつらと話をする授業ではなく、何かについて考えたり、参加したりする授業でした。子どもたちが関心を持つものは一体何なのかを考えるのも大事だと思いますが、まず自分が興味関心を持つ好奇心を持つことが大切なのだと改めて実感しました。

第６回（５月 24 日）：「学習指導要領」は何を求めているのか？：学習指導要領のカリキュラム編成原理

大遣唐使展を見に行くのが楽しみになりました。教科書に載っている資料を説明するだけでは単純に知識を説明しているだけにすぎない。自分が興味・関心を持ったものを実際に見て、聞いて、その時に感じた気持ちを伝えることによって、子どもたちにも同じような体験をしてほしいという思いも伝えることができるのではと思います。そのために、子どもたちには自分で調べて、知り、興味・関心を持つことの重要性を養ってほしいという願いをこめて指導案を考えていきたいです。

第７回（５月 31 日）：指導案の書き方、指導案とは？地域の世界遺産をどう教材化するか？：「地域の歴史」「国際的な天平文化」の指導案を持ち寄り集団討議

今回自分が書いた指導案と他人の指導案を読み比べてみて、その人のそれぞれの個性が指導案に出ていることと、どれだけ児童の興味・関心が魅かれるかはその教師次第だと感じました。先生がおっしゃっていたように、教科書を要約するだけでは意味がない。引き出しを多く持っている先生の授業は子どもたちの関心を引くも

のになるのだと気づき、また引き出しを多く手に入れるような体験をしなければならないと思いました。

第8回（6月7日）：田渕の指導案に基づいた講義　PPTで世界遺産教育の可能性について講義

自分と同じ2回生が作成した指導案を見て、衝撃を受けました。感心しましたが、感心しているだけでなく、刺激を受け、負けないように頑張ろうという気持ちを持つことが必要なことだと思いました。その後の先生の授業と指導案の内容を見て、学びには実際に見て聞いて考えることが大切だと感じました。教科書をつらつらと読むだけでは、子どもたちの学びは狭い範囲のものでしかなくなる。教師の引き出しの量が、子どもたちの学びの量になる。いかに子どもたちの興味・関心を引くかを考えた時、教師自身がまず知的好奇心を持つことが鍵を握っていると思います。疑問は新しい発見を生み出すものだから、疑問を解決し理解して面白いと感じたことを子どもたちに面白いと感じてもらえるような授業づくりについて考えていきたいです。

第9回（6月14日）：第一回、フィールドワーク：なら奈良館

なら奈良館に行って、見学させていただき、とても貴重な体験ができました。見たことがある、聞いたことがあるということがいっぱいあったのですが、それは本当に理解しているとはいえない。何も知らないことを自覚して、実物を見て話を聞くことで学びを得ることができ、小学生の時の授業で習ったことを親や誰かに言いたくて仕方がなかったという気持ちを思い出しました。自分が感じたように、子どもたちにも感じてほしいという思いを忘れずにしたいです。実際に世界遺産を訪れる時には柱や建物そのものから歴史を感じ、ガイドの木村さんの話を聞き、パワーポイントで伝えることができるように学んできます。

第１０回（6月21日）：3・4年生の地域学習をどう展開するか？

私たちが、存在して当たり前だと思っているものはいろいろな人の支えによって成り立っていることに改めて気づかされました。自分たちが住んでいる地域で疑問や発見を見つけるものを目的として、行動してみたいと思いました。子どもたちにも同じように、疑問や発見を見つけてほしいのですが、そのためには自分自身が知ろうとする、知りたいという気持ちを持つことを前提として、子どもたちをひきつけるような授業づくりができるようになりたいです。

第１１回（6月28日）：5年生の産業学習をどう展開するか？

実際に野菜を見て値段や産地や時期といったその野菜ごとの特色を知ることが出来る授業というのは非常に興味深いものでした。子どもたちに実際にスーパーや八百屋に行って野菜がどこ産なのかを調べて地図にチェックするということをやって

みたいと思いました。普段何も気にせずに食べている野菜がどういうルートで自分たちのもとへ来るのかを知ることによって、日本の産業を知り、食べ物や日本を愛する心を忘れずに、大切にしていってほしいと思いました。

第１２回（7月5日）：6年生の歴史学習はどうあればいいか？：歴史学習論　参加型の授業作り

歴史とは過去を知り現代に生かすものだと認識していました。しかし、今日の講義を受け、未来をどう展開するかという一番大切なことがわかっていなかったのだと気づきました。「歴史とは現代史である」という言葉の通り、現代を生きる人々が語っているものです。逆に言えば、現代の人が語ること全てが真実であるとは限らず、塗り替えられた歴史である可能性がないとはいえないことに恐ろしさを感じました。私が知っていることが真実かどうかはわからない。だからこそ色々な観点から物事を見る力つけなければならないと思いました。

第１３回（7月12日）：フィールドワークの発表の準備

先生の最初の話のオチがおもしろかったです。1500円は痛い出費ですね。元興寺について調べると、たくさんあって、それだけ有名なもので貴重なものであると改めて知りました。みんなが合う日というのはとても少なく、困りますが、その分の１回１回大切にしていきたいと思います。協力してやることの意義についてもう一度考えてみたいです。

第１４回（7月23日）：フィールドワーク発表１

自分の班の発表については、なかなかみんなで集まることが出来なくて、作業が難航していたのですが、無事終わって良かったです。時間が押していたので、最後のほうはあまり聞いてもらえなかった気がして、それが残念でした。調べて発表するに当たって、１人で調べるよりグループのメンバーと力を合わせて調べることによって、知識の幅や見解の幅が広がり、考えを深めることが実感できました。これは小学校社会科教育においてもぜひとも身に付けてほしい力です。自分の体験から子どもたちに知ってもらいたいことを教えることも大事ですが、時には子どもたち自身が体験し、その中で学ぶことも大事だと思います。体験することによって興味を持つことが、学ぶことの第一歩になってほしいです。

第１５回（7月26日）：フィールドワーク発表２

前回より発表のクオリティーが上がっていて、すばらしかったと思います。発表を終えての感想としては、パワーポイントを使うことにおいて画像を活用できるので、それを最大限に生かして視覚的に知る、ことを知れた。これは社会科の授業において説明的な授業にならないために効果的な方法だと考えました。何をどれだけ多くの人々に伝えることができるのか。その思いを胸に留めてこれから先取り組ん

でいきたいと思います。先生の最後の生徒として学ぶことができて本当に良かったです。ありがとうございました。

５．２．１「最終レポート」での学びの記録

１５回目の講義でパワーポイントによる教材が発表された後に、筆者は次のように呼び掛けた。

すべての講義が終わりました。皆さんの受講態度やレポート課題や教材作成の水準は、私が期待したものを超えていました。２６年間の大学の教員生活で最も手応えがありました。このように納得できる授業ができたのははじめてです。いい思い出を持ってこの大学を去ることができます。皆さんに感謝すると同時に皆さんを誇りに思います。

私は、「教育とは教師の言霊（ことだま）だと何度か言ってきました。言霊とは、願いを込めて祈りを託して語れば、それが実現するという古代人の世界観です。『万葉集』のいくつかの歌を紹介しましたが、皆さんは、私の言霊に応えてくれました。

できたら受講者全員の学びを共有化しましょう。それぞれ学んだ内容は違っているはずです。６０人で６０通りの学びがあると思います。１５回の講義を通して学んだものの内実を３点に絞ってレポートしてください。それを印刷して冊子にしてお返しします。

その時、「最終レポートの書き方」と題する要項を配布したが、その内容は、読者への導入として「はじめに」の文章を書き、学んだ内容を３点に絞って小見出しをつけて報告し、最後に締めの文章を書くというもので、Ａ－４で１枚という制限を加えた。さらに、タイトルについては、「授業を受けて」とか「講義から学んだもの」というような抽象的ものでなく、読む人を引きつける個性的なタイトルにしてくださいというものであった。５４名の受講者の内、１名を除き５３名から課題レポートが提出され、７１ページの『仲間と学び合った奈良の世界遺産』[3)] と題して刊行された。

紙幅の関係上、講義の全体像が伝わる２点のみを紹介する。

５．２．２　Ｉさんの「理想の社会科授業」のレポート

初等教科教育法社会の授業は前期の授業の中でも、ひときわ下準備の必要な授業だった。それは、小まめに課せられるレポートに加え、実際に国立博物館に行くことや、グループ内で日程を合わせながら二度古都奈良の文化財を見て発表せねばならなかったからだ。正直、体力的にはしんどかった。しかし、その授業も終了し、こうして学びを振り返ってみると、自分は貴重な体験をしたな、とつくづく思う。特に、社会という教科の面白さを児童に伝えたらいいか分からなかった私は、田渕先生の授業を受けたから、手本としたい授業が頭に浮かぶようになったと思う。これから、授業の中で是非真似したい点を三点、挙げていこうと思う。

１．「体験重視」

まず一つに体験型の授業であったことである。先ほども述べたが、この授業には何より「現地に行って肌で感じる」ということが重視されていたと思う。ただ椅子に座って聞くほとんどの大学の授業とは異なるが、これこそ知的好奇心をくすぐることだと感じた。なぜなら、室内にいてただ教科書の中でのみスケールの大きな歴史や地理などを教えたところで全く現実味がないし、空想に終ってしまうからだ。触れて、見て、自分で感じることで、「その次」が知りたくなると私は思う。

２．「フィードバック」

次に、この授業では一人の意見や考えたことをみんなで分かち合っていたことが挙げられる。講義カードの内容にしてもそうだし、何かの事柄を考えたときも、その内容をグループの人数分刷ってきて、みんなで共有をした。その中にはおのずから他者を認めるという動きが生まれてきていた。自分の考えは自分だけのものとするのではなく、他者にも知らせ、思いもよらなかった視点から感想を聞かせてもらうことで、自身の意見の成長につながることもある。ゆえに、私はこの方法が自分が教員として教える際の何かヒントになるのではないかと考えた。

３．「奈良の地で学ぶということ」

最後に、私がこの授業から将来自身の授業で使いたいと思うことに、世界遺産の学習やフィールドワークを通して、奈良だからこその学びとは何かを知ったということがある。この大学に入学する時も「ここが奈良であることを活かした」授業とは何かを尋ねられたが、その時の私は曖昧にその場をとりつくろっていたにすぎなかったように思う。しかし、今ならその答えをすっきり出せるような気がする。それは地の利を活かすことだと思う。例えば、歴史のある部分を授業で行ったとしても、それを実際に自分で見に行けるかどうかは運次第と言えるが、世界遺産を三つも抱える奈良県はその点有利なことが多いように思う。すぐ近くに文化があることを活かして初めて、奈良で学んでいると言えるのではないかと私は考える。

この授業は、たくさん考えてたくさん動いた本当に濃い授業だったと思う。私もこんな授業ができる教員になっていたい。そのためにも、今できることを肌で感じ、知的好奇心を忘れずに学び続けていきたいと思う。

５．２．３　Nさんの「好奇心からの学び」のレポート

この講義の一番の魅力は、参加型の講義であることだ。参加型授業であるということは、個人の探求心や好奇心の持ちようで学びの質や量が変わってくる。そのため、学びたいと思う強い気持ちが必要である。この授業は、その学びたいという気持ちを、様々なグループ活動やゲストティーチャーを通して、引き出してくれる授業だった。だから、この授業を受講したことは、大変価値のあるもので、三つに絞

りきれないほどの学びがあった。しかし、これから三つに絞って紹介していく。

1．知ることの楽しさ

まず一つ目は、知ることの楽しさである。遣唐使展を見に行ったこと、フィールドワークで実際にその場所を訪れたことなど、ただ単に講義を聞くだけのものでなく、自分自身の足で見た・聞いた・知ったというものはとても魅力的だった。また、その場所を訪れ、見ることで様々な疑問点が浮かんでくる。その疑問点を一つ一つ解決していくことが、楽しさの一つでもある。社会という授業は、教科書を開いて学習するというものだけでなく、実際に自分の目で見て確かめ、理解することができるからこそ、他の授業では味わうことのできない楽しさを感じることができる。

2．奈良で学習する意味

奈良には様々な伝統的文化が残っている。奈良に住んでいて、この奈良の良さを知らないということは恥であると思った。奈良にある文化遺産、自然遺産を通して、奈良には素晴らしいものがあるのだと感じるだけでなく、この文化を守り、残していかなければいけないと考えた。また、伝統的な文化が私たちに希望を与え、日本の偉大さに気付かせてくれた。奈良で学習する意味とは、伝統的な文化を通して、「興味を持つ」という知的好奇心を育てることである。

3．協調性

グループの人たちと時間を合わせてフィールドワークの平城宮跡を訪れることや、パワーポイントを作るために、みんなで考えることの重要性をとても感じた。グループのみんなと協力し、助け合うからこそグループ学習には意味があるのだと思う。また、お互いの時間が合わず集まることが難しいなどの大変や苦労を互いに分かち合うことも必要である。グループ学習で上手くはかどるにこしたことはない。しかし、苦労を一緒に共有することで、出来上がったときの達成感や喜びを共に共感することができる。このように、苦労をし、仲間と協力し合うことで、協調性を身に付けることを学んだ。

これらのこと以外にもたくさんのことを学ぶことができた。しかし、一番初めに書いた「知ることの楽しさ」が一番、学習していくことにあたって大切なことだと思う。知ることが楽しいと分かると、どんどん自分から学ぼうとする意欲が湧いてくる。そのように、子どもたちの知的好奇心を誘うような授業展開が必要だと感じた。大人になっても、「知ることの楽しさ」を忘れてはいけない。

6．成果と課題

１５回分の「講義対話カード」や「大遣唐使展」の課題レポート、「講義の最終レポート」など、数多く提出された記録を概略して、筆者なりに彼らの学びを要約すると、次の４点として纏めることができるだろう。

６．１　社会科教育法としての学び

「社会科=暗記科目」という固定観念を壊し、社会科が地域社会に出かけて自分

なりに社会研究をする(Social Studies) 教科であることへの気づき。また、グループでの参加型学習を通して多様な見方や考え方をシェアする有効性を確認している。

また、奈良国立博物館、なら奈良館、世界遺産サイトへのフィールドワークを通して、体験のもつ意味を理解して、社会科の教材研究の要諦を把握したようである。

6．2　奈良と地域の世界遺産についての学び

「あらためて奈良で学ぶ意味を確認しました」とか「奈良で学べることは幸運です」という趣旨の記述が多く、地域が対象化でき、意識的に地域を見つめる姿勢が育っている。その契機を作ってくれたのが、ボランティアガイドである。奈良を愛し、それを他者に伝えようとする人物に出合えた成果である。人を変革させるのは、単なる知識ではなく、そこに関わる人物との出合いである。

6．3　教師を目指すものとしての学び

他の教科教育法に比して負担が大きかったが、怨嗟を上回る「何か」があった。それは感動ではないかと推測している。ホンモノに触れて驚き、現地を訪れて疑問を抱き、それをガイドにぶつけて納得する、そのような面白さを満喫したはずである。学生のレポートには「知ることの楽しさ」とか「学ぶことの面白さ」とか「社会科は楽しい」という意見があった。自分が感動したものでなければ学習者の感動にならない。その意味で「学び続ける者のみが教える資格がある」というメッセージを受けとめてくれたようである。

6．4　集団的な学び

学びや学力をどう捉えるか多様な考えがある。知識量や概念など数値で計測可能なものがある一方、学ぶ意欲や態度など計測不可能なものもある。受講者はグループでディスカッションをしたり、グループでフィールドワークをしたりして、協働して教材作成を行った。過去の被教育体験では、学びは個人的な営為であり、この講義での集団的な学びは、最初は当惑であったが、最後には醍醐味へと変容している。そのような記述が「最終レポート」に見られた。また、「最終レポート」の大半に、体験活動の重要性とグループワークでの学びの豊かさが述べられていた。

翻って考えてみると、我々の学びは、他者とのコミュニケーション（対話）を通して、相互に納得し了解しながら構成されるものである。特に社会科では、同じ体験をしながら、その受け止め方は多様である。なぜなら、個人の生活経験や生活台が家庭層や地域性により異なっているからであり、その多様性に気づくことが、社会性を学ぶ第一歩になるからである。

6．5　残された課題

世界遺産サイトへのフィールドワークを行い教材作成する筆者の実践は、本年度で４年目であるが、作成した教材をどう教育現場に還元させるかまでには至っていない。受講者が作成した教材が、奈良市内の小中学校の世界遺産学習や県外の修学旅行の事前学習に使用されるように尽力すべきであった。そうすれば、教材作成をした受講者たちの効力感はより高まったであろう。大きな課題である。本年度で定年退職する筆者には、奈良の地でリベンジするチャンスは与えられていない。今後

の課題としたい。

7． おわりに

元興寺へフィールドワークをした教材発表は、クラスに感動を覚えさせる内容であった。その発表には、ボランティアガイドのNさんのガイドとして感銘を受けたエピソードが紹介されていたからである。元興寺の境内には『万葉集』の歌碑が立っている。それは、元興寺の僧（ほうし）が詠んだ歌である。（巻6の 1018）

> 白玉は　人に知らえず　知らずともよし
> 知らずとも　我し知れらば　知らずともよし

「白玉」とは、真珠である。真珠は、他の宝石に比べ地味であり、その価値を知る者は少ない。けれども、真に価値を知る者には、その貴重さはかけがえのないものである。最終的な価値判断は、価値を知る者がするのである。

この「白玉」は、自己に置き換えて解釈することもできる。自分の価値、相手に対しての心遣いや配慮は、他人（ひと）には理解されないかもしれない。他人（ひと）には知られないが、自己の内面が了解し、自己の良心に恥じることなく納得ができればそれでいい。「少なくとも仏陀は理解してくれている」という自己肯定感を詠っているとも解釈もできる。

案内をした年配の女性に、そのような解釈を交えてNさんが説明をすると、彼女はしばし佇み、ぽろぽろと涙を流したというのである。「努力しても努力しても、その善意が伝わらなくて、今、苦しんでいる娘にこの歌を送ります」とノートに記録して、逆にNさんが感動させられたという話である。学生たちは、そのエピソードを教材に組み込んで発表したのである。

学生たちは、炎天下を2日間もフィールドワークをし、作品制作まで何時間も費やしている。時には、仲間との葛藤や摩擦があったはずである。「協力することの難しさと同時に協力して教材を作り上げる充実感を感じました」という趣旨の記述が「最終レポート」に多くあった。そのような経験を共有していたから、その感動的なエピソードが語られた時に、クラスの雰囲気が一変したのであろう。他のグループメンバーも教材作成で同様な経験を共有している。ボランティアガイドの感動がグループメンバーに伝わり、その感動がクラスに伝播したのである。教育とは感動の組織化ではないかと思わされたほどであり、「教えることは学ぶことである」と実感させられた。

また、この元興寺の僧の歌は、「近代教育の父」と称せられるペスタロッチの思想に通じるものがある。人生にあって、その人の努力は必ずしも報いられるものではない。むしろ、誤解されたり曲解されたりして、善意や尽力が通じないことが多いのが現実である。けれども、最終的な判断は、自己の内面や良心への矜持、それを判断基準にすべきであろう。

もし、ペスタロッチが生きていたなら、教育現場で、子どもたちへの善意や保護者たちへの配慮か伝わらなかったり、曲解されたりして、無力感に苛まされて

いる教師たちの傍らに立って、励ましの言葉を投げかけているのではないだろうか。

教育という営みには、教師の言霊が実現する充実感がある一方、努力し尽力しても報いられない徒労感が背中合わせになっている。ペスタロッチは、「教師の偉大さは、その徒労感に耐えることの中にある」と指摘している。

今回、筆者が受講生に託した願いは「学ぶことが楽しい！」「知ることは面白い！」という実感を味わってもらうことであったが、それと同様に、仲間とともに教材研究をする協調性の涵養も願っていた。新任教師がどんどん潰れていく過酷な現状で必要なものは仲間の窮状を放置しない同僚性の回復である。「自分一人だけ」という心理的陥穽に陥った時、子どもも教師も潰れていく。励まし合える同僚を周囲に持つこと、そして、価値判断は最終的には自己であるという元興寺の僧やペスタロッチの思想を内面に持つことを願っている。

注

1）奈良市教育委員会　『奈良大好き世界遺産学習』　２００８

2）田渕五十生　「世界遺産教育とその可能性―ＥＳＤを視野に入れて―」『国際理解教育』　第 15 号　２００９

3）54 名の受講生と田渕五十生　『仲間と学び合った奈良の世界遺産』平成 22 年度奈良教育大学学長裁量経費報告書　２０１０

第Ⅱ部
教材化と授業モデルづくり

第５章　自然遺産　知床の教材化と授業モデルづくり

―教材キット「守ろう地球のたからもの」の作成を通して―

谷口尚之　奈良教育大学附属中学校教諭
田渕五十生　奈良教育大学　教授

１．はじめに

2009年6月、スペインのセビリアで第33回世界遺産委員会が開催され、新たに13件(自然遺産2件、文化遺産11件)が世界遺産リストに登録された。また、ドイツの「ドレスデン・エルベ峡谷」(文化遺産)が橋の建設のために2番目の削除物件となった。その結果、世界遺産リストに登録されている物件数は、自然遺産176件、文化遺産689件、複合遺産25件の計890件となった。また、今回の委員会で、危機遺産リストに登録されていた遺産30件のほか、通常の世界遺産リストから147件の保全状況の審査が行われた結果、2件が危機遺産リストからはずれ、新たに3件が加わり、危機遺産のリストには現在31件が登録されることとなった。

2008年の世界遺産委員会で日本の「平泉の文化遺産」が「登録延期」とされたように、近年、ユネスコは、新規登録を抑える傾向にあり、世界遺産委員会を補佐するICOMOS(国際記念物遺跡会議)やIUCN(国際自然保護連合)による審査も厳しくなっている。特にOUV=Outstanding Universal Value、すなわち「顕著な普遍的価値」がより厳密に問われるようになっている。

世界遺産は、地球誕生の時代からの時間経過の中で形成されてきた地形や地質、絶滅危惧種や固有種を含む生態系などからなる自然遺産と、人類の歴史や文明の進歩、秀でた技能や英知を刻み込んだ文化遺産、そしてその両者を併せ持つ複合遺産に分類される。それらは、単に過去からの遺産ではなく、「人類共通の宝物」として我々いまを生きる世代の者が、過去の世代から受け継ぎ、無傷で次の世代へ、さらにその次へと手渡して行くべきバトンである。

だが、各地の世界遺産をめぐる状況は安穏としたものではない。世界遺産条約は、エジプト・ヌビア遺跡の保存活動を契機としたことからもわかるように、本来は「人類共通の宝物」をいかにして保全・保護し、次世代に受け継ぐかという趣旨にもとづいて生まれたものである。しかし、世界遺産への登録を「観光の目玉」としてのお墨付きを与えるものと捉え、地域経済を活性化させる起爆剤と受け止める向きも少なくない。

筆者が世界遺産教育に関心を持つようになった2006年、『ニューズウィーク日本版』(2006.5.31.発行)が「世界遺産が危ない―観光ブーム、温暖化、乱開発　地球の宝が消えていく」と題した特集を組み、世界遺産の危機に警鐘を鳴らしていた[(1)]。それまで、自然遺産の崇高なまでの美しさや文化遺産に見られる過去の人類の精緻なまでの文明の偉大さに感動を覚え、それらを自らの授業や校外学習の場で生徒たちにも伝えたいと思い、実践してきた筆者にとって、記事に書かれた「ユネスコ登録は逆効果」という見出しは衝撃的

であった。

こうした状況を改めていくためには、世界遺産委員会や ICOMOS、IUCN などによる管理体制の強化だけではなく、締約国自身の不断の努力が必要となる。時には国際機関の協力の下で政情の安定が図られねばならない事例もあり、また国内法の整備が急務になるケースや観光業への一定の制約が必要になるケースもあるだろう。だが、そうした対応策の基盤には、ＥＳＤ(Education for Sustainable Develoment ＝持続可能な開発のための教育)につながる形での世界遺産教育の推進が不可欠である。

ユネスコは早い段階からその必要性を意識し、199 年にはユネスコ世界遺産センターと、ユネスコ協同学校プロジェクトネットワーク(ASPnet)によって「World Heritage Educational Resource Kit for Teachers（教師用世界遺産教育教材)」の配布とプロジェクトが始め、日本でも 2000 年に日本語版が刊行された(2)。しかし、発行部数がきわめて少なく、その内容が様々な学校現場を想定していたために具体性を欠く所があり、日本の学校現場で普及することはなかった(3)。

日本における世界遺産教育は未だ市民権を得ているとは言い難いが、その定義については、田渕と中澤による論考(4)、およびそれを受けてまとめられた田渕と祐岡による論考に示されている。すなわち、世界遺産についての知識や理解を深め、その意義を内面化させて世界遺産の大切さを次世代に伝えようとする態度を育成する「世界遺産についての教育」(Education about the World Heritage)と、世界遺産を事例として文化の多様性、平和や人権、環境問題や地球の気候変動、過度の観光化などのグローバルイシューに迫る、いわばＥＳＤにつながる「世界遺産を通した教育」(Education through the World Heritage)である。田渕は奈良市教育委員会とともに世界遺産学習実践研究会を開催し、あるいは『奈良大好き世界遺産学習』(副読本および教師ガイド)を作成するなどして、世界遺産教育の普及発展、実践の蓄積を行ってきた。

また淡野は、世界遺産の保護・保全にあたっては、世界遺産のもつ価値の重要性に対する人々への一層の啓発教育が必要であり、学校における体系化された教育が必要であることを指摘している。そして、小学校社会科教育、中学校社会科(地理的分野)及び、高等学校地理歴史(地理Ａ、地理Ｂ)における世界遺産の教材化を図り、世界遺産の登録基準を具体的事実と照合させて学ぶことによって世界遺産の真の価値を理解させることを提起している(5)。けれども上記の先行研究では、世界遺産教育の必要性については言及していても、具体的な指導案レベルまで踏み込んだ学習指導の提案には至っていない。　世界遺産教育に対する一般の認知度は今なお低く、日本の学校現場では社会科や理科などの教科教育のレベルにおいても、また「総合的な学習の時間」の学習テーマ設定というレベルにおいても、実践の積み上げが乏しい実情にある。特に自然遺産については環境教育の立場からのアプローチが多く、先述の世界遺産教育の定義に沿う形での授業実践はほとんど見られず、管見する限り、白神山地を教材として取り上げた服部が、国語科のなかで白神山地への入山規制問題について肯定側と否定側に分けたディベート討論会に取り組んだ実践を知る程度である(6)。

世界遺産教育をめぐるそうした状況のなか、昨年、筆者は日本ユネスコ協会連盟が三菱東京 UFJ ファイナンシャルグループの支援を得た教材キット「守ろう地球のたからもの　世界遺産編」の制作に関わることとなり、オーストラリアの複合遺産であるウルル・カタ

ジュタとともに、日本の自然遺産である知床を担当することとなった。筆者が知床の教材化を引き受けたのは、前年に当地を訪問し、その自然の素晴らしさに魅入られただけでなく、そこに世界遺産学習の教材としての切り口をいくつも見い出していたためである。

筆者が知床を訪れたのは、ユネスコと IUCN が現地への調査団派遣を行った 2008 年である。別海町から中標津町にまたがる「新酪農村」の広大さに圧倒されたあと、根室半島の東岸を北上して羅臼町を目指した。羅臼から知床横断道路を走り、途中の知床峠で羅臼岳の雄姿をカメラに収め、ウトロへ向かうためであった。横断道路の途中、羅臼ビジターセンターという案内標示を偶然目にして立ち寄った。

そこで筆者は二つの事実に出会い、知床という地域に観光客として立ち入ることの意味を再認識させられた。その一つは知床インフォメーションマップに記されたヒグマの目撃情報である。知床では人里やキャンプ場にヒグマが姿を見せることも珍しくはないと知っていても、地図上に赤ペンで日付と「○○でヒグマ目撃」と書き込まれ、「人を見ても立ち去ろうとしないヒグマがいます」という注意書きを見て、人間とヒグマの生活圏が重なり合っている事実を改めて認識させられた。当然、それは街中や公園をシカが我が物顔で歩いている奈良の状況とは次元が違うのである。けれども、世界自然遺産・知床を訪ねた観光客や大自然での野趣味あふれるキャンプを楽しみたいと思う人たちにとって、奈良でシカにシカ煎餅を与えることと、知床でヒグマやキタキツネにエサを与えることにどれ程の差異があるだろう。筆者もエゾシカやキタキツネに出会ったり、川でヒグマがサケを補食している姿を見られたらなどと期待していたのである。

(写真① ヒグマが穴を開けたビールやジュースの缶)

もう一つは、案内カウンターに置かれていたビールやジュースの空き缶である(写真①)。その横腹には鋭い穴が空いており、それがヒグマによって飲まれたものであることは明らかであった。ヒグマの生息域に人間が入り込み、人間の残した飲食物の味を覚えたヒグマが、人間の生活圏に出没するようになった証拠である。人間と自然との共生、とりわけ野生生物との共生のために何が大切かを痛感させられた。筆者の前に置かれた空き缶を通して、知床の厳しい現実を突きつけられたのである。

翌日はウトロ港から観光船に乗り、海から知床半島西岸を眺めた。知床半島の先端部へ向かう一般道はなく、観光客が陸路で世界遺産地域を訪ねることはできないからである。また、自家用車は知床の観光スポットである知床五湖までで止められ、その先のカムイワッカの滝へは夏場のみシャトルバスが運行されている。さらに、知床五湖周辺では環境省が高架木道を設置し、電気柵も設けて、ヒグマと観光客との不幸な出会いを防ぐ努力をしている。また、知床五湖周辺では散策の際にガイド引率を義務づけることも検討されている。知床ではそうしたエコツーリズムへの様々な取り組みが進められていることも、世界遺産学習の教材とするに相応しい要素を兼ね備えていると思われた。

そして、筆者は知床五湖の散策道入口に立てられた「ヒグマと共存するために」と題した環境省の掲示板の長文のメッセージに釘付けされた。「ソーセージの話を知っています

か」というその文章は、今から 10 年余り前、観光客が投げ与えたソーセージの味を忘れられず人家の近くに現れるようになった雌のヒグマの話であった。彼女に何とか人間の怖さを教え、森に帰らせようとした努力も空しく、彼女はついに子どもたちのいる小学校付近にまで出没するようになった。そしてそこにはもっとも過酷な結末しか残されていなかった。観光客の何気ない"好意"がこのような悲劇をもたらすことが記されていた。これは児童生徒に提示することが躊躇される辛い話だが、世界自然遺産・知床を通して、自然と人間の共生のあり方を深く考えるための教材になると考えた。

本稿では、世界自然遺産・知床を事例として取り上げ、先述の教材キット「守ろう地球のたからもの 世界遺産編」の授業案を示し、これに解説と指導過程の意図を加えながら、未だ実践事例の少ない世界遺産学習の授業モデルの一つとしてこれを提起したいと考える。

2. 世界遺産学習の教材としての知床の価値

知床を世界遺産学習の教材として扱うにあたって、まず、世界自然遺産・知床の持つ「顕著な普遍的価値」は何かを、該当するクライテリア(登録基準)とも照合させて確認しておきたい。さらに 2005 年に知床が登録される際、世界遺産委員会から勧告された内容についてもみておきたい。それは世界自然遺産・知床に出された「宿題」であると同時に、国に対して出された「宿題」でもあり、その対応が知床を教材化する上でも重要になるからである。もう一つ押さえておきたいのは、「知床=手つかずの自然の宝庫」という先入観についてである。知床がアイヌの言葉で「シリエトク=大地の果て」に由来する地名であることはよく知られている。今でこそ半島中程まで両岸を国道が走り、半島を横断する道路も開かれ、人間が知床の奥地まで入り込むようになった。だが、元々はシリエトクの名のとおり、人間を寄せ付けない険しい山々と深い谷、そして原生の森に包まれた「手つかず」の地域である。けれども、その知床も実は「人の手で守られた」自然であることを確認しなければいけない。この点も教材として知床を考える上で忘れてはならない点である。

2. 1. 知床の世界遺産登録についてー知床の持つ「顕著な普遍的価値」とはー

知床は、2005 年 7 年 14 日、南アフリカ・ダーバンで開催されていた第 29 回世界遺産委員会で世界遺産リストへの記載が決定された。日本で 13 番目、自然遺産としては 1993 年の「白神山地」「屋久島」以来 12 年ぶりで 3 件目の登録であった。

世界遺産登録前の 2003 年、環境省と林野庁が新たな世界自然遺産候補地の検討を行うために設置した「世界自然遺産候補地に関する検討会」は、知床を「流氷が育む豊かな海洋生態系と、原始性の高い陸域生態系の相互関係に特徴があり、世界的な絶滅危惧種の重要生息地となっている(H15.5.26.付報道発表)」として候補地に選定していた。

世界遺産委員会は日本からの推薦を受けて審査を行った結果、次の2つのクライテリア(登録基準)[7]に該当するとして登録を勧告した。

クライテリア(ⅱ)[*新基準の(ix)]「生態系」

行動に移す義務を負うことである。その際は、特定の立場の人に一方的な負担を強いたり、対処療法的な手立てを講ずるのではなく、持続可能な手法で保全・保護するための知恵を絞ることが求められる。以下、勧告への対応について触れておきたい。

（勧告①について）

これは登録審査の過程で IUCN が、推薦地の海域部分を十分拡張するようにと指摘していたことを受けたものである。環境省はこれを受け、海域の推薦区域を 3 ㎞に拡張し、2005 年 12 月には、この拡張海域を新たに国立公園に編入する法的な手続きが完了している。

（勧告②について）

2008 年 2 月、ユネスコ世界遺産センターと IUCN の担当者が調査団として来日し、東京で日本政府から世界遺産登録後の経緯の説明を受けたあと、知床を訪れ、策定中の海域管理計画について学識者らと意見を交換し、さらにサケ科魚類の遡上を妨げていたダムの改修工事の現地視察などを行った。もともと前年の夏までの来日予定であったが、冬の知床を見たいという調査団の希望で日程が変更されたという。

調査団の目的は、登録時の勧告に対する日本側の対応や措置の進捗状況を評価することであったが、特にトドなど海棲哺乳類のエサとなるスケトウダラの減少などへの対応、つまり遺産海域の海洋資源の保全等に向けた海域管理計画の策定状況を確かめることであった。IUCN はトドをレッドデータブックで絶滅危惧種に登録しており、2004 年には知床海域のスケトウダラの乱獲で貴重なトドが減少しているとして、「海洋保護区」を設置して、漁業を規制するよう日本政府に求めていたからである。

トドはかつて知床周辺に数千頭が回遊し、1980 年代には年間最大 700 頭近くが捕獲されていた。90 年代になって激減し、現在では 100 頭程度である。但し、日本海側では増加傾向にあり、年間 10 億円程の漁業被害もあることから、北海道内では年間 120 頭の捕獲が認められている。日本はスケトウダラの減少をめぐり、トドの保護と漁業者の生活権を天秤にかけた海域管理計画の策定を迫られたのである。しかも知床の目の前には国後島があり、北方四島周辺海域の漁業管理にはロシアとの協議・協力が不可欠になる。

知床での視察を終えた調査団は、斜里町で記者会見し、次のような要請を行っている。

・絶滅危惧種の海棲哺乳類トドの禁猟を検討すること。特に食用として利用することは避けるべきである。
・サケマスの遡上を阻害するダムの撤去を含めた改善を促進すること。
・流氷が減少するなか、地球温暖化の影響について調べ、知床においても対策を検討する専門委員会を設置すること。

（勧告③について）

知床は日本で 3 番目の自然遺産だが、常設の専門家組織として、日本で初めて「科学委員会」が組織され、勧告の「海域管理計画」を策定することが同委員会に委ねられることになった。調査団が来日した際も同委員会が海域管理計画について答弁し、日本では行政府だけでなく漁業者自身が水産資源管理に主体的に参画し、自主的管理措置も重要な要素になっていることを説明した。

2008 年 2 月、環境省と北海道は「多利用型統合的海域管理計画」をまとめた。その主な目的は、海洋生態系の保全と持続的な水産資源利用による安定的な漁業の両立を図ることであった。それは、海洋環境や海洋生態系の保全及び漁業に関する法規制、並びに海洋

・知床は北半球で最も低緯度に位置する季節海氷域であり、季節海氷の形成による影響を大きく受け、特異な生態系の生産性が見られるとともに、海洋生態系と陸上生態系の相互関係の顕著な見本である。

クライテリア（ⅳ）[*新基準の(x)]「生物多様性」
・知床は多くの海洋性及び陸上性の種にとって特に重要であり、これらの中にはシマフクロウ、シレトコスミレなど多くの希少種が含まれている。
・知床は多くのサケ科魚類、トドや鯨類などの海棲哺乳類にとって世界的に重要である。
・知床は世界的に希少な海鳥類の生息地として重要であるとともに、渡り鳥類にとって世界的に重要な地域である。

なお、日本から提案した「自然景観」は基準に合致しないとされた。

つまり、世界自然遺産・知床の「顕著な普遍的価値」とは、「季節海氷の影響を受けた、海と川と森が一帯となった生態系がみられること」であり、「多くの国際的希少種の動植物の繁殖地や越冬地になっていること」である。そして、海氷は海～川～森の各生態系を結ぶダイナミックなリンクの源であり、鳥類や海生哺乳類の特異な越冬地や卓越した景観を提供するものとして、知床の自然に不可欠の要素となっている。

２．２．登録にあたっての「勧告」

世界遺産委員会は、知床の世界自然遺産への登録を勧告した際、日本に対して登録後に実施すべき措置として、次の５点を挙げている。

①遺産地域の海域部分の境界線を海岸線１ｋｍから３ｋｍに拡張するための手続が法的に確定した段階で、地図等を世界遺産センターに送付すること。
②登録後２年以内に、海域管理計画の履行の進捗状況と遺産地域の海洋資源の保全効果について評価するための調査団を招くこと。
③２００８年までに完成させる海域管理計画の策定を急ぐこと。その中では海域保全の強化方策と海域部分の拡張の可能性を明らかにすること。
④サケ科魚類へのダムによる影響とその対策に関する戦略を明らかにしたサケ科魚類管理計画を策定すること。
⑤評価書に示されたその他の課題（観光客の管理や科学的調査などを含む）についても対応すること。

これらは知床地域の自治体や住民だけでなく、日本政府あるいは日本国民に課せられた大きな宿題であった。そして勧告②の調査団受け入れの際に顕著な取り組みや進展が確認できない場合は、危機遺産への登録や登録削除もあり得ると受け止めるべき宿題であった。そして、これらの勧告は、世界遺産への登録が「ゴール」ではなく、まさに「スタート」であることを教えている。すなわち、過去の世代から託された「地球のたからもの」を未来の世代に継承するために、何をしなければならないか、何をしてはならないかを考え、

レクリエーションに関する自主的ルール及び漁業に関する漁業者の自主的管理漁業を基調とするものであった。知床の海洋生態系を特徴づける指標種として、魚介類，海棲哺乳類，海鳥・海ワシ類を選定し、サケ・マス類の回遊や遡上産卵の実態をつかむ、自然遺産内のダムの改良工事を進めるなどの方針を示した。さらに、スケトウダラについては採捕漁の上限を設定し、資源管理協定にもとづいて未成魚を保護し、地元漁業者にも操業自粛期間や区域の設定などの自主管理の実施を求めている。

調査団はこの海域管理計画が短期間のうちに地域と協議して策定されたことを評価する一方、その計画を実現するための具体的な実行計画が必要であるとし、特にストウダラとトドの保護管理に向けた、科学的知見に基づく長期的な検討が必要だと指摘している。

この海域管理計画の策定に関わった桜井・松田(8)はその論考のまとめとして、次の点を指摘している。

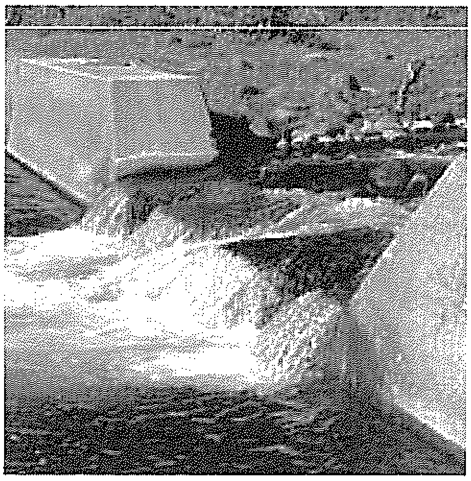
「知床海域管理計画においては、水産庁はステークホルダー(利害関係者)として関与していない。世界遺産海域における漁業者の自主管理の取り組みを所轄する中央官庁は環境省という前例ができた。自然遺産の生態系は、そこに存在する持続可能な漁業を含めて維持されることになった。これがユネスコとIUCNに理解されたという点が重要である。」

筆者の勤務校では1969年から臨海実習を実施し、その中で生徒が班単位で漁家を訪問し、沿岸漁業の実際を漁業者自身から直接聞き取るという取り組みを続けている。福井県の小浜、和歌山県の加太、三重県の答志島と実習地は変遷し、時代が移ろうとも、漁師さんの人情あふれる対応は一貫して不変であった。そして、漁に対する真剣な姿勢に生徒たちは常に感動し、学んだことを報告集にまとめてきた。そして、いずれの漁師さんたちからも、漁業資源を次世代に受け継ぐために未成魚をリリースし、網目を制限し、操業期間を制限し、稚魚・稚貝を放流するなどの自主管理をしていることを教えられた。現在も訪問している答志では海を育てるためには森を育てなければならないと、伊勢湾に注ぐ河川の上流での植林にも積極的に取り組んでいる。知床の海域管理計画の基調にある漁業者の自主的管理漁業は、海とともに生きてきた日本の漁民に共通する、不文律ともいえる。

(勧告④について)

知床の自然を特徴づける海洋生態系と陸上生態系の相互関係を考える上で、サケ・マス類の遡上はきわめて重要な要素である。そのため、IUCNの調査団も遡上の障害となる治山ダムや砂防ダムについて、ダムそのものの撤去も含めた改良をさらに進めるよう林野庁、道に要請した。先述の科学委員会は、自然遺産地域内にある治山ダムなど100基の工作物のうち、87基を現状維持、13基を改良すべきと判断し、林野庁・道が25基のダムについて大幅な改良を加えた。その結果、一部で新たにサケ・マスの遡上も確認されたという。

自然遺産地域をはじめ、道内のダムの多くは防災を目的としたものだけに、IUCNが求めるとおりに撤去すれば済むということにはならない。サケ類の遡上を妨げないために、人命が脅かされるというのは人道上の問題である。その意味で、サケ類の遡上率の改善が見られたルシャ川でのスリット方式のダム改良工事などは、人の暮らしと生態系の保全・保護を両立させようとする好例になる。



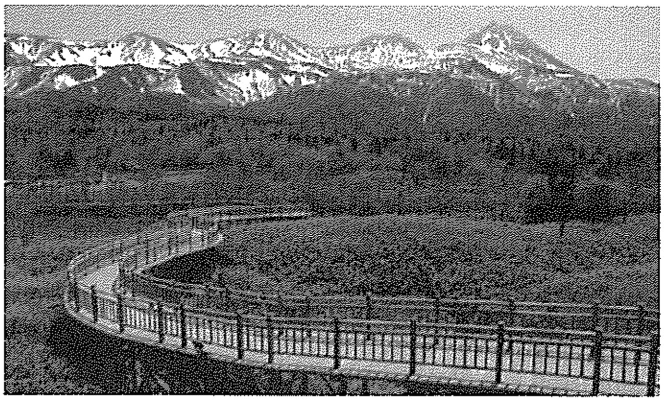
（写真② ルシャ川のダムに作られたスリットで魚が遡上しやすいように段差に切れ目を入れている。2010.3.8.付YOMIURI ON-LINEより）

「世界遺産を通した教育」のなかで扱う、環境問題や人権・平和、多文化共生などをめぐる課題は、一方を採れば他方は立ち行かない、二者択一では解決できない問題が多い。「Ａが正しくＢは誤りだ」という論理を主張するだけでは、持続可能な社会づくりへの歩みを進めることができないのである。百点満点の結論でなくても、互いの立場を認めながら、譲れるところは譲り、より良い解決策を導き出すという姿勢が重要なのであり、世界遺産教育やESDで培いたい素養なのである。

（勧告⑤について）

人が時間とお金をかけ、ときには体力を遣ってまでして観光に出かけるのは、日頃の仕事から解放されたい、心身の疲れを癒し、リフレッシュして明日への活力を充電したいなどの理由によるのだろう。世界遺産に登録された自然遺産や文化遺産は、そうした人々の願いに応えるだけの値打ちのある感動を与えてくれる。だがそれ故に、登録の可能性がありそうな遺跡や景観などを有する国や自治体、地域は是が非でも世界遺産委員会への推薦を得ようとする。世界遺産に登録されることは第一級の「観光名所」であることを世界が認めたことであり、その地域は観光業を中心に経済的な恩恵に浴すると考えるからである。しかし、世界遺産への登録は、締約国にその物件の保全・保護の責任を追わせることを意味している。それを自覚しなければ、津波のように押し寄せる観光客によって、「人類のたからもの」はまさに踏みにじられ、取り返しのつかない傷を被る事態になりかねない。

知床が世界遺産に登録された当初、静かだった「大地の果て」にも観光客の波が押し寄せて、知床五湖に通じる道路に渋滞の列が出現し、手つかずの自然が傷つけられるのではないかという声も聞かれた。筆者が訪れた 2008 年の夏には幸いにして一時のブームは収まり、ホテルの方に尋ねると、もう少しお客様に来ていただかないとと客足の低迷に心配顔であった。



（写真③知床五湖に整備された木道）

知床では、環境省・道とともに自治体やＮＰＯなどが連携協力して観光客への対応や啓蒙活動を進めている。先に述べた羅臼のビジターセンター、知床五湖近くにある知床自然センター、斜里町ウトロの知床世界遺産センター、羅臼町に完成した環境省の知床世界遺産ルサフィールドハウスなど、観光に訪れた人が世界自然遺産・知床を学習し、理解するための施設も充実している。また、先述のように知床五湖には植生保護とヒグマ対策として電気柵のある高架木道も整備されている。

筆者はこの木道を歩きながら、数年前に訪れたニュージーランドでアオラキ（マウント

・クック）へのトレッキングの際に歩いた木道を思い出した。はじめは散策路を迷わないためのものと早合点していたが、それが自然遺産を観光客が踏み荒らさないためのものであることを後で教えられた。知床もまた、ここが「ヒグマたち野生生物の生活の場」であり、人間がそこにお邪魔しているのだということを一人ひとりの観光者が自覚し、「ヒグマに出会わないのが一番の付き合い方」であることを理解してこの木道を歩かなければならない。

夏場のマイカー規制も大切な取り組みである。知床観光のスポットの一つである、温泉の流れるカムイワッカの滝へは本数の限られたバスでしか行くことができない。筆者がバスに揺られて滝まで往復する間もエゾシカやキタキツネが姿を見せたが、この道をマイカーが土埃を巻き上げて行き来すれば、彼ら野生動物はその行き場を失い、ときには命を失う事故にも遭いかねない。排気ガスが自然の森を痛めることは必至である。

ビジターセンターなどでは、知床での観光のあり方、ルールをパンフレットや掲示物で丁寧に知らせ、それらの機関が HP でも実に細やかに「してはならないこと」を具体的に示して警告している。

後述する知床の授業案では、そうした様々な機関や団体が観光客に守るよう呼びかけている知床ツーリングのルールやマナーをもとに、人が野生の動植物と接するときの「しなければならないこと」と「してはならないこと」を考察させる場面を設定している。

２．３．「人の手で守られた」手つかずの自然

知床を紹介する写真や映像は、それがまさに手つかずの自然であることを示している。たしかに知床の森は、一部を除いて、海岸線から高山帯まで自然の植生がそのままに存在し、野生動物も本来の生態を保っている。けれど、多くの人々が「手つかず」と思っている知床の自然も、ウトロの奥地、岩尾別と幌別の台地で農業が試みられ、高度経済成長期には開拓跡地に乱開発の危機が迫った過去がある。時の斜里町長は、イギリスのナショナルトラスト運動に学び、町が土地を買い戻して自然を保護する「しれとこ 100 平方メートル運動」を展開し、全国からも支援を得て現在の自然景観を守り抜いた。恥ずかしいことだが、筆者もそうした事実を知らなかった。「知床＝手つかずの秘境」というのは刷り込まれた思い込みであった。

以下、「100 平方メートル自然の森・トラスト運動」の HP に「知床の自然と開拓」と題してその経緯が紹介されているので、転載したい。

> 知床の岩尾別・幌別地区は、大正 3 年に開拓の鍬が入って以来、戦前・戦後を通して国の開拓計画によって、本土からの入植者が開墾を試みた場所だった。しかしこの地区は、道路はもちろんのこと、水利も悪く、台地は転石に覆われ、入植地として最悪の条件だった。入植者たちはこのような環境の中にあっても、さまざまな工夫や努力によって農業を営んでいたが、開拓政策や社会状況の変化等により、昭和 50 年頃までに、次々とこの地を離れた。
>
> この間、昭和 39 年に知床は、原生的な自然の価値が評価され、我が国で最も原生的自然の価値を持つ地域として、全国で 22 番目の国立公園に指定された。その結果、秘境知床として一躍全国の注目を集め、特に昭和 46 年の「知床旅情」の大ヒットは、空前

の知床ブームを巻き起こし、国立公園利用者の急激な増加を招いた。
さらに、この頃「日本列島改造論」による土地投機ブームは知床にも押し寄せ、開拓跡地が不動産業者によって買収されはじめ、その面積は 100ha にものぼった。開拓跡地は国立公園内とはいえ、一度不動産業者等に渡ってしまえば乱開発が予想される。そこで、開拓跡地の保全、原生林の再生を夢みていた当時の斜里町長が、イギリスのナショナル・トラスト運動に注目し、昭和 52 年 2 月に「しれとこ 100 平方メートル運動」のスタートを発表した。土地の買い取りや植樹費用等にあたる金額 8000 円を一口として、「しれとこで夢を買いませんか」のキャッチフレーズで寄付を募った。この運動は自然保護に関心を持つ全国の人々から賛同を得られ、また運動を支援する報道にも後押しされて、各地から寄附金が寄せられた。
平成 9 年 3 月、運動参加者はのべ 4 万 9,024 人、金額では、5 億 2,000 万円となり、「しれとこ 100 平方メートル運動」の目標金額が達成された。またこれを機に、保全した土地の譲渡不能の原則を定めた条例を制定し、未来永劫この森を守り続けることを明確にした。そして「知床 100 平方メートル運動」は、現在、新たな活動「100 平方メートル運動の森・トラスト」へと発展を遂げている。」 (http://www.town.shari.hokkaido.jp/100m2/undo.html)

人が何もしなければ自然は守られるのかもしれない。しかし、その自然に危機が迫ったとき、自然保護への強い信念と行動力がなければ、自然を次代に継承することはできない。
同じ世界自然遺産である白神山地にも世界遺産登録前の 1970 年代終わりに、青森と秋田を結ぶ青秋林道建設の計画があったのである。過疎に苦しむ一帯町村の活性化と白神山地のブナの利用が目的であった。この計画もまた青森・秋田両県の自然保護団体が粘り強い運動を展開した結果廃案となり、白神のブナ林は「顕著な普遍的価値」あるものとして世界遺産登録されるに至った。
アメリカのイエローストーン国立公園では、自然発火の山火事は極力、人の手で消さないのだという。その一方で、絶滅してしまったオオカミをカナダから移植して、かつての生態系を回復させようとしている。
自然を保全・保護するということは、自然の生態系を壊さない、野生の動植物のいのちを奪わないことであると同時に、人間が傷つけたり、歪めてしまった自然の生態系（例えば人が持ち込んでしまった外来種のために固有種が減少したり、絶滅したような例）を、人間の手で本来の姿に回復させることでもある。
知床の自然を守り抜いた人々の努力の歴史と、それが今も継続されているという事実は、知床をまったく手つかずの自然と思いこんでいる生徒の既成概念を転換させ、自然と人間の関わり方を捉え直す好教材となる。
本章のまとめとして、世界遺産学習の教材としての知床の価値を以下の①～③に整理しておきたい。
①知床の持つ OUV（顕著な普遍的価値）について
・季節海氷の影響を受けた、海と川と森が一帯となった生態系がみられることと、多くの国際的希少種の動植物の繁殖地や越冬地になっていること。
・海氷がもたらす海～川～森の各生態系のダイナミックなリンク、すなわち、一つのいのちが次のいのちの源となり、さらにそのいのちが次のいのちを育むという「いのち

のつながり」が、児童生徒の目にも明瞭に示しうる。これはまさに ESD のキーコンセプトそのものである。

②登録時の世界遺産委員会からの勧告について

・この勧告は、世界遺産登録の本旨そのものを児童生徒に理解させる好事例となる。すなわち、世界遺産地域の環境保全・保護こそが世界遺産登録の本意であり、締約国はそのための様々な措置を講じる義務を負うことを事実を通して学ばせることができるからである。以下に具体的な整理をしておきたい。

・自然遺産・知床には、「絶滅危惧種の海棲哺乳類トドの保護及びそのためのスケトウダラの採捕制限」及び「サケ科魚類の遡上を妨げるダムの撤去を含めた改良」という課題がある。つまり国際的希少種の保護や生態系の維持と地域のステークホルダーの生活基盤の保持という二律背反的立場の持続的な両立を図る課題である。これは知床に限らず、世界遺産サイトを抱える全ての地域に共通する課題であり、さらに各国や各地域における「わが町のたからもの」を維持管理する上で必然的に生ずる課題でもある。従って、この課題を教育の視点から取り上げる価値は高いと考える。

・世界遺産と観光という課題もまた、知床に限らず、ほぼすべての世界遺産サイトに共通の懸案になっている。世界に認められた「人類共通の宝物」をぜひ自分の目で見てみたい、実際に歩いてみたいというのは人情であり、観光に地域の活性化を期待することもまた当然である。同時に、それらのサイトが世界遺産たる「顕著な普遍的価値」を保ち得たのは、それらが人間の様々な経済的利害の対象となって破壊や損傷を受けることから免れてきたからであり、特に自然遺産についてはその意味合いが強い。今、世界遺産に登録され、人間の興味や余暇の楽しみの対象となり、観光という経済活動の具にされた結果、各サイトの OUV が危機に晒されている。自然遺産・知床の自然を堪能し、そこに生きる野生動植物を間近に見たい、触れ合いたいという観光客の願いと知床の持つ OUV をいかに両立させるかは、政府や地域自治体の課題でもあるが、同時にそれは知床を訪れる観光客自身の課題でもある。その意味からも教育の場で、知床の自然・野生の動植物と観光のあり方を考察することには大きな価値があると思われる。

③「しれとこ 100 平方メートル運動」について

・知床の「手つかず」の自然が、実は地域住民をはじめ全国からの支援者による「しれとこ 100 平方メートル運動」などによって守られてきたことはすでに述べたとおりである。人類が高度に文明を発達させ、地球上のほとんどを Ökumene に換えようとしている現代では、人間が何もしさえしなければ、自然は守られるというのは安直すぎる考えであり、人間が自らの強い意志と行動力で自然や環境を守ろうとしなければ、持続可能な未来社会は見出せない。ナショナル・トラスト運動に学んだ知床の自然保護運動は、その意味から教育の場でも高い有効性を持つ教材と思われる。

3. 授業づくりの実際

筆者が自然遺産・知床の授業案を作成する契機となったのは、先に触れたとおり、日本ユネスコ協会連盟と三菱東京 UFJ ファイナンシャルグループの支援による教材キット「守

ろう地球のたからもの 世界遺産編」の制作であった。この制作意図の一つは、世界遺産が ESD に迫る有益なツールになることの指摘であり、もう一つは、世界遺産を①人権・平和、②環境の保全、③文化の多様性、④人間的なつながり・連帯・協調の４つの切り口から捉えて ESD につなげる論拠を示すことである(9)。なお、教材集は今年秋には刊行され、日本の教育現場に配布されるだけでなく、英語と中国語に翻訳され Web 上で世界に配信される予定である。

自然遺産・知床は、制作意図にある ESD に迫る教材として、とくに「②環境の保全」の事例とすることとし、筆者が担当したものである。なお、このあとに掲載する授業案は、その教材集のものに加筆修正を加えたものである。

３．１．授業のねらいの設定

本授業の主題は、次のとおりである。

> 海と川と原生の森が育んだ多様な生態系がみられる知床の自然をとおして、「いのちのつながり」をとらえ、自然保護のために私たちができることと、してはならないことを考える。

制作した教材集を実際に活用してもらう小・中学校現場の先生方に、教材としての知床の価値をまとめてつかんでもらうことを意図した表現にした。そして、知床を教材として扱う意味を次のように提示している。

> 知床の素晴らしさは､川と海と原生の森が育んだ多様な生態系が見られることにある。知床は海氷が接岸する北半球最南端の地であり、この海氷がもたらすプランクトンがサケ類などの魚介類を育て、そのサケ類が河川を遡上し、ヒグマやオジロワシなどに捕食され、これらの動物のフンや死がいが植物の栄養となって知床の森を豊かにする。こうした海陸一体となった食物連鎖が見られる貴重な自然環境が残っているのである。また、知床にはシマフクロウやシレトコスミレなどの絶滅危惧種、ヒグマやエゾシカ、トドやアザラシなどの大型ほ乳類、また絶滅の危機にある海鳥の生息地であり、オオワシのような渡り鳥にとっても重要な地域にもなっている。
>
> 世界遺産登録時に出された「勧告」をもとに、サケ類の遡上を妨げるダムの問題や増える観光客と野生動物との不幸な出会いも例示しながら、自然保護やエコツーリズムのあり方を学ぶ契機とするとともに、この貴重な自然は、ナショナル・トラスト運動に学んだ地元の人々と全国の支援者によって守られ、その運動は現在も継続していることにも触れる。

上述のような主題と教材観のもとで、授業のねらいを次のように設定した。

> １．知床には絶滅危惧種にあたる動植物のほか多様な生態系が見られ、それらは海氷がもたらすプランクトンに始まる、陸海一体となった食物連鎖が育んでいることをつか

む。
2．知床にはなお、観光客と野生の動植物との共生を図るエコツーリズムのあり方やサケ類の遡上を妨げるダムの問題などがあることを知り、それらを解決していくための知恵と行動力が、知床の自然を未来に受け継ぐために大切であることを知る。
3．知床の貴重な自然環境は、これを保護し、受け継いできた幾多の人々の積極的に努力に支えらえてきたことを知る。

ねらいの1では、世界遺産としての知床の OUV を明確に児童生徒のものにすることを挙げている。知床の素晴らしさ、他に例を見ない価値が何なのかを、できれば画像や動画を用い、感動を持って伝えたい。そして海氷がもたらす海～川～森のダイナミックなつながりを画像や地図あるいは図式やフラッシュカードなどを用いて子どもたちに分かりやすく示したい。授業者が ESD に迫る課題に展開したいと思うあまり、この1のねらいにあたる学習過程を”流す”扱いにしてしまわないよう、特に小学校段階では留意する必要がある。

ねらいの2および3では、具体的な事例を通して世界遺産への登録の本旨について、子どもたちの内面化を図りたい。すなわち、世界遺産登録は”ゴール”ではなく、「地球のたからもの」を託された国にとっての”スタート”であることを、観光客と野生の動植物との関係やダムの撤去や改良あるいは、絶滅危惧種の保護と地元漁民の生活といった例を通して、子どもたちに考察させたい。その際は、次の点にも留意したい。

・観光やダムの問題、トドの保護とスケトウダラ漁の問　題などは、いずれも容易に「正解」が出せる課題ではない。授業では班や個人が結論を導き出すまでの思考の過程が大切にされ、子どもたちが自分なりの根拠を示して意見を表明することに重心を置きたい。
・授業時間数の関係や授業が行われる地域や校種・発達段階も考慮し、観光、ダム問題、漁業問題の全てを取り上げようとして子どもたちの討議や意見表明が不十分にならないよう留意する。

3．2．学習指導の展開例

具体的な学習指導の展開例は、次頁を参照願いたい。
なお、指導の対象は小学校高学年～中学校を想定しているが、特に中学校社会科の地理的分野または「総合的な学習の時間」等を想定している。

以下、学習展開例の学習活動ごとの留意点等を述べておきたい。

なお、事前学習の時間を確保できるようであれば、次の調べ学習を課題として出しておきたい。

①日本の 14 か所の世界遺産サイトの場所と名称。
②自然遺産サイトである「白神山地」「屋久島」については、どのような点が評価されて(「顕著な普遍的価値」)登録されたのか。

[学習展開例]

	資　料	生徒の学習活動	教師の働きかけ
導入	資料① (北海道・知床半島の地図帳・掛地図)	・地図帳で、知床半島、オホーツク海、アムール川の位置を確認する。	・海陸一体となった知床の自然の営みを理解するために、知床のロケーションをつかませ、遺産地域が海域にも及んでいることにも気づかせる。 ※知床の自然や動植物の様子を伝える画像や動画を準備したい。
展開	写真① (サケを補食するヒグマ) カードシート ワークシート[1]	・発問に対する答えを考え、自由に発言する ・班ごとに相談してカードシートを並べ替え、知床の自然を保持する「いのちのつながり」のしくみを考え、発表する ワークシート[1]の答えを各自で記入し答えを確認する	*Q.「ヒグマは海を食べ、知床の森は海に育てられている」といわれます。どういう意味でしょうか？* ・海～川～森の生態系のリンクへの気付きを促す ・写真①を見せ、発言を引き出す。 ・カードシートを切り離し、班単位でフラッシュカードを並べ替えさせ、海～川～森の「いのちのつながり」のしくみを考えさせる。正しく並べ替えた班に、そのように考えた理由を発表させる。 ・ワークシート[1]の空欄に言葉を記入させ、正解を確かめて、上の発問に対する答えを確認させる。
	写真② (ヒグマが穴を空けたビール缶) 写真③ (路上を移動するヒグマ)	・写真②を見て、気づいたことを発表し合う ・野生動植物の生息域に人間が不用意に入り込むことが、野生動物に何をもたらすかを知る ・写真③を見て、野生生物と人間の生活圏が重なっている、現在の知床の様子をつかむ。	*Q.(写真②を見せて)これは、何の写真でしょうか。* ・写真のビール缶やジュース缶は穴があき、つぶれていることに気づかせる。*「穴を空けたり、つぶしたりして飲もうとしたのは、誰か」*と問い、いくつかの回答を得たあと、ヒグマの仕業であると知らせる。 ・*「ヒグマはビールやジュースがおいしいことを、なぜ知ったのか」*と問い、自由に発言させたあと、人間による餌付けやゴミの放置が原因であることを知らせる。 ・写真③を示し、人間が道路や建物をつくって、野生動物のすむ森に入り込んだ事実を伝える。
	資料② (「97-Bまたの名をソーセージ」) ワークシート[2] 資料③ (知床自然センターHP資料)	・先生の読み聞かせを聴き、その感想を述べ合う。 ・ワークシート[2]の問いに対する回答を班で話し合い、発表する。 ・資料③から、知床で求められる自然保護のためのマナーを知る	*Q.人間の食べ物の味を覚えたヒグマはどのような行動を起こすでしょうか。それは、私たちの暮らしにどのような影響を与えるでしょうか。* ・資料②をゆっくりと読み聞かせる(あえて資料は配付せず、子どもたちには頭の中で想像しながら聴くように指示する)。 ・[2]への回答を通して、野生生物の生息地に入ったときには、何に留意し、どのような態度を取るべきなのかを、当事者意識を持って考えるように指導する。 ・班で話し会った結論を全員の前で発表させ、自然保護協会の出している指針(資料③)を知らせる。 ・知床では、資料③のような啓蒙活動のほか、高架木道の設置やパーク＆ライド方式の導入、散策時のガイド引率の義務化などの方策が取られていることを紹介する。
まとめ	ワークシート[3] 写真④ (イエローストーン国立公園)	・ワークシート[3]に答え、自然保護のために、人は何をすべきで、何をしてはいけないのかを考え、発表する。	・アメリカのイエローストーン国立公園でとられた自然保護の例をもとに、日本の自然遺産や身近な自然の保全、野生生物との共生のためにどのような考え方や行動が大切かを考えさせる。

資料②「97-Bまたの名をソーセージ」

彼女はまだ若い３歳のメスだった。最初の出会いは２年前の秋。深い森の中だった。親別れしたばかりの１歳、豊かな大地と自然に育まれ、伸びやかに生きていた「知床の子熊」。やがて訪れる悲劇を…、まだ誰も知らなかった。

彼女は翌年の夏、幌別に現れた。ウトロの街が近い。道路わきで、アリの巣を掘っていた。アリはクマの好物だ。そこへ車が何台も通りかかった。みな目を奪われていた。突然、誰かが「ソーセージ」を投げた。知らせは、まもなくスタッフに届いた。「なんて愚かなことを…。」 怒りがこみあげた。すぐに駆けつけた。…遅かった。既に姿は無かった。　それがきっかけだった。…彼女は禁断の味に取り付かれた。「人間のそばには、食べ物がある」そう学んでしまった。道路に現れる度、車の列ができた。誰かがまた食べ物を与えたかもしれない。もう人間など恐れてはいないようだった。「道側のヒグマ」北米でも、そうだった。キャンパーからエサが投げられた。やがて…人間がエサになってしまった。

悲劇は繰り返された。危険は避けなければならない。最後は、撃ち殺すことになる。人間とヒグマには、ほどよい距離が必要だ。このままでは危険だ！スタッフはゴム弾や花火で追い払った。何度も何度も！しかし効果はなかった。ヒグマはエサに固執し危険も恐れなくなる。人間の食べ物は魅力的だった。だからこそ教えなければならない。「人に近づけば恐ろしい目に遭う。」 最後の警告を選んだ。10 月末、彼女を生け捕りにした。檻の中へ、唐辛子入りスプレーが噴射された。「もう森からでてくるな」悲劇を避けたかった。祈るような思いだった。もがく彼女と同じくらい、スタッフの胸は傷んだ。誰もこんなことはしたくなかった。山奥へと彼女を離した。首に発信機を付けて…。しかし、願いは叶わなかった。

翌年の春、ついに彼女はウトロの街に現れた。やがてゴミ箱をあさるだろう。街角でばったり出会えば、どうなるか？ 人間を恐れないクマが何をするのか？答えを知ってからでは遅いのだ。ある日の朝、彼女は小学校のそばに現れた。藪の中でシカを食べていた。覚悟は決まった。スタッフ４人で包囲した。彼女は突然逃げだした。いつもと何か違う。危険な臭いがしていた。その先には学校がある。やがて通学時間だ。子供たちがやってくる。車で追いかけた。飛び降りたスタッフが銃を構えた。朝の静寂を銃声が破った。もんどりうって、ヒグマは転がった。横たわる黒い体、もう動かない。瞳は光を失った。

１本のソーセージが、死ななくてもよい命を奪った。苦い思い出が残された。１本のソーセージがなければ、彼女は知床の大地に生まれ、知床の土に帰っていけたのだ。

（知床五湖入口の掲示板「ソーセージを殺したのは誰だ？」より）

資料③「自然と正しくふれあうときのマナー」

1. 野生動物に近づかない！
2. 絶対に餌を与えない！
3. ペットを連れて歩かない！
4.車の走行はゆっくりと
5.遊歩道や登山道から外れて歩かない！
6. 植物を採取しない！
7.ゴミを捨てない！

（知床自然センターのＨＰより抜粋）

３．２．１．準備物について

○学習展開例で扱う資料・写真

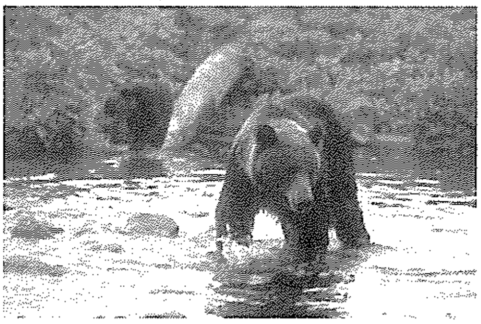
・資料①「知床半島の地図(世界遺産地域を明示)」

・資料②「97-B またの名をソーセージ」(＊本文中に掲載)

・資料③「自然と正しくふれあうときのマナー」(＊前頁に掲載)

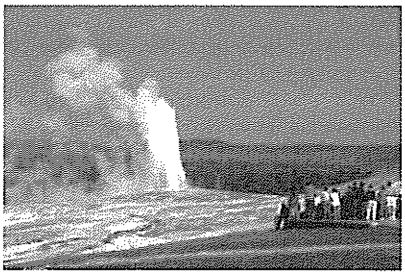
・写真①「遡上するサケを補食するヒグマ」(右)

・写真②「ヒグマが穴を空けたジュース・
　　　　ビールの空き缶」(＊本文中に掲載)



・写真③「路上を移動するヒグマ」(右)

・写真④「イエローストーン国立公園(米国)」(下)



・カードシート(文字とイラスト)

　「オホーツク海北方からの海氷(海氷の絵)」

　「大量のプランクトンやオキアミなど(オキアミの絵)」

　「オホーツク海の魚(サケ類の絵)」

　「鳥類・トド・ヒグマなど(ヒグマなどの絵)」

　「ふんや死がい(ふんや死がいの絵)」

　「知床の森(緑豊かな森の絵)」

・掛地図(北方アジアが示されているもの)

・DVD(「守ろう地球のたからもの 豊かな自然編」に付録のものなどを利用)

○ワークシートの内容

・[1] は、知床の海氷～川～森とつながる「いのちのつながり」を、分かり易く解説した文を穴埋め式の問いに仕立てたもの。

・[2]は、家族で知床を訪れ、道路脇でエゾシカに出会った場面を設定し、そこでシカにお菓子をあげようとする弟や、近づいて写真を撮ろうとする父親にあなたはどんな言葉をかけ、どんな行動を取るかと問いかけるもの。

・[3]は、同じ自然遺産であるイエローストーンでは、なぜ人の手で山火事を消そうとしなかったり、エルクなどの脅威になるオオカミをカナダから移植したのかを考えようと問うもの。

3．2．2．導入部について

導入部では、知床半島のロケーションを正確につかませることを第一に指導したい。そのためにも、アムール川・サハリン・千島列島・オホーツク海を含む北方アジアが示された掛地図や地図帳を準備し、それぞれの位置関係を地図上で確認する。また、自然遺産・知床のコア・ゾーン(核心地域)とバッファ・ゾーン(緩衝地域)を地図で確認し、知床では海岸線から 3 ㎞までの海の部分も世界遺産地域になっていることにも着目させておきたい。そして、できれば知床の雄大な自然景観や海氷、それがもたらすアイス・アルジー(海氷に閉じこめられた高濃度の海水が深層水の働きを担い、海氷の下面に張り付いた珪藻類の大繁殖を導く現象)、クリオネなどのプランクトンの様子やオキアミを補食する鯨やアザラシたち、スケトウダラやサケ類などのオホーツクの魚類やそれを補食する海棲哺乳類たちの姿、遡上するサケ類とそれをエサとするヒグマやシマフクロウなどの様子を、できれば画像や動画で見せて、知床の素晴らしさを十分に伝えたい。

3．2．3．展開部について

(展開１)「ヒグマは海を食べ、知床の森は海に育てられている」といわれます。どういう意味でしょうか？

ここでは、世界遺産・知床の「顕著な普遍的価値」となっている、海～川～森の各生態系のつながりに着目させたい。展開１の冒頭の問いは、それへの投げかけである。導入部で画像や動画を用いていれば、ここはスムースに流れると思われるし、導入部でビジュアル教材が使えない場合は、遡上するサケ類を補食するヒグマの様子を示した写真①をヒントにするよう指示をした上で、準備物で示したようなカードシートを用意し、班単位で「海氷」→「植物性プランクトン→動物性プランクトン」→「オホーツクの魚類」→「鳥類や海棲哺乳類・ヒグマなど」→「ふんや死がい」→「知床の豊かな森」という”いのちのつながり”を考えさせ、一つの班に代表で前に出てもらってフラッシュ・カードを黒板に貼り付け、その回答について説明させる。授業者は生徒の説明を補足しながら、冒頭の言葉が意味する生態系のリンクについて押さえる。なお、ワークシート[1]への記入と解答の確認は、時間が足りない場合は振り返りの課題とすればよい。

(展開２)「(穴の空いたジュースやビールの空き缶の写真を見せて)これは何の写真でしょうか？」

ここでは、ヒグマが飲んだあとのジュースやビールの空き缶の写真をもとに、野生の動植物と人間の関わり方について深く考えたい。写真②は拡大投射して生徒たちにしっかりと見せ、どの空き缶も胴の所に鋭い穴が空いていることに気付かせ、これが誰に飲まれたものかを問い、さらに「なぜ野生のヒグマがジュースやビールがおいしいということを知ったのだろうか」と問いを重ねていく。ここは生徒と授業者のやりとりが大切になる。生徒の答えを受け入れたり、深めたり、角度を変えたりしながら、問題の核心である、野生動物への人間の関わり方に迫りたい。人間の不注意や軽はずみな好意がジュースやビール好きのヒグマを生み出したという話は、それだけで終わらないということを次の展開でし

っかりと深めていく。

（展開３）「人間の食べ物の味を覚えたヒグマはどのような行動を起こすでしょうか。それは、私たちの暮らしにどのような影響を与えるでしょうか。」

ここでは、「１．はじめに」でも紹介したソーセージと呼ばれたヒグマの話がメインになる。環境省が観光スポットの知床五湖の散策路入り口に立てた掲示板に記されたこの話は、初めて読んだ筆者も強い衝撃を受けた。

知床五湖の散策路にもヒグマがしばしば現れる。自然センターでは熊よけの鈴やいざという場合のスプレー缶などを販売しているが、何よりも大切なことは「クマに出会わないこと」だという。かれら野生動物の生息地に人間がお邪魔しているのだという意識を観光客は持たなくてはいけない。ソーセージの話は残酷すぎて、授業で扱うことには躊躇もあるが、それを教材として取り入れなければならない程に事態は深刻である。知床への観光ブームは一時ほどではないものの、自家用車やレンタカーでサファリパークを楽しむように、ヒグマやエゾシカ、キタキツネとの出会いを求めたり、知床岬付近まで入り込んでキャンプをし、テント内に食べ物をむき出しで置き忘れたり、テントのすぐ近くで食事の支度をしたり、あるいはペットの犬を連れてきたりする観光客が少なくない。ここでは、資料②の話を敢えて文書を配布せず、授業者がじっくりと読み聞かせ、生徒たちの頭の中で情景を思い描かせ、この出来事の重さを感じ取らせたい。

読み聞かせの後、生徒の数人に率直な感想を発表させ、その思いを全体で共有したい。ワークシート2は蛇足になるかもしれないが、子どもたちの当事者意識を高めるために準備している。授業者の読み聞かせと生徒の感想の場面で、ねらいが達成される場合は省いても構わないし、あるいは読み聞かせの前置きとして個々の考えを確かめるのに入れ込むやり方もある。

展開３のまとめとして「自然と正しくふれあうときのマナー」（資料③）を読ませて、野生生物の生息域に入ったときに人間がしなければならないことと、してはいけないことをしっかりと確認したい。

３．２．４．まとめと補足について

まとめとして提案しているアメリカ合衆国のイエローストーン国立公園の例は、学習の発展として実践してもらえればと考え、付け加えている。世界最古の国立公園でもあるイエローストーン国立公園は 1978 年に世界自然遺産に登録されたが、1995 年～ 2003 年の間は危機遺産にリストアップされた経緯がある。イエローストーンを流れる川の上流で、金や石油の採掘計画が浮上し、あるいは観光に伴うゴミなどの問題、水質汚濁、バイソンの個体数減少などが深刻化したためである。その後、鉱山開発が見直されたり、公園の管理体制が強化されて危機遺産から除外されたが、ここでは極力人の手による自然の管理をせず、たとえ山火事になってもそれが自然に起きたものであれば、必要最低限の消火活動に止め、自然鎮火を待ち、自然の回復力を人が支えるという。またかつて牧場主によって絶滅させられたオオカミをカナダから移植したが、これはかつてこの地域に見られた、本来の生態系を取り戻す目的で行われたことであった。

自然環境を保全・保護するために、人がこれを汚さない、傷つけない、破壊しないということは当然のこととして、さらには本来の生態系を回復させるための、緊急的な措置と長いスパンでの取り組みをしっかりと見据え、世界遺産条約の締約国としての責務を果たしていかなければならない。イエローストーン国立公園での取り組みをもとに、ほかの世界遺産サイトではどのような取り組みがなされているか、日本の白神山地や屋久島ではどのような課題があり、どのような対応が実施されているかなどを事後の学習テーマとすることも有効ではないかと思われる。

最後に、本学習指導例では勧告の中で強く求められていた「絶滅危惧種のトドの保護とスケトウダラの漁業制限問題」や「サケ類の遡上を妨げるダムの撤去や改良の問題」、さらに「知床を守ったしれとこ 100 平方メートル運動」を学習展開例には取り込んでいない。いずれの課題も、世界遺産を通した ESD という観点からは、最優先で取り上げるべき課題であり、筆者も前章でその重要性を強く述べている。にもかかわらず、それらを入れなかったのは、１時間での学習活動を想定したためである。したがって、中学校の総合的な学習の時間で数時間を充当できる場合や、中学校３年生の公民的分野、あるいは高等学校の地理や現代社会などで知床を扱う場合は、上記の課題を取り上げて、世界遺産登録の本旨を正しく理解させるとともに、持続可能な未来社会を形成する担い手となるために、自分たちは自然とどのように向き合い、日々の生活において何をなすべきかを考察させるような学習活動を立案したい。

４．おわりに

筆者がＥＳＤと出会ったのは、2006 年 3 月、東京で開催された「国際理解教育とユネスコ協同学校計画(ASP)に関する第 3 回協議会」である。同協議会で永田佳之氏(現聖心女子大学)からＥＳＤとは何かというレクチャーを受け、筆者自身、新鮮な感動を受けた。それは、何のために日々の教育実践を行うのかという、学校教育の根幹に関わる問いへの回答であり、勤務校が掲げる５つの教育目標と軌を一にする理念であったからである。以後、勤務校では「ＥＳＤの理念にもとづく学校づくり」を研究主題とし、教科・総合的な学習・生徒会活動等、学校の教育課程全般や施設設備、学校運営の方向性も含み込んだ Whole School Approach を目指した教育実践研究を進めてきた。そのなかで筆者は社会科の立場から、本学の田渕が提唱する「世界遺産をツールとするＥＳＤ」の考え方に学びながら実践を行い、教育研究会等の場でその成果と課題を発表してきた。特に地理的分野で「危機遺産」を取り上げ、それらのサイトの危機の中身と分布を切り口に、世界遺産を未来に受け継ぐためにしなければならないことと、してはならないことを考察させ、世界遺産条約の本旨への理解とＥＳＤの課題に迫る授業を試行した。また勤務校では「奈良めぐり」と称したフィールドワークを主体とする文化財学習を実施してきた。それは子どもたちに本物を見せ、文化財が持つ普遍的な価値を理解させ、素晴らしさを味合わせることをねらいとするものであるが、今、これにＥＳＤの要素を取り入れた実践を模索しているところである。

本稿で提示した学習指導例は、こうしたこれまでの実践の経緯を踏まえ、小学校高学年から中学校における世界遺産学習のモデルプランとして提案するものである。ただ本稿に

おいて、この学習指導案を用いた授業実践による成果と課題を示していない点は遺憾に思う所である。これは筆者が校務の関係から、昨年度より授業を担当していないためであるが、ぜひ時宜を得て本指導案による授業を行い、改めてその実践から導かれる成果と課題を明らかにするとともに、本学習指導案の改善を図りたいと考えている。

昨年 9 月、奈良教育大学と財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)の共催で、国際フォーラム『世界遺産と観光』が開催された。筆者も「奈良における ESD と観光教育～世界遺産学習を通して～」と題した報告をした。そのなかで、世界遺産への登録が過度の観光ブームを招来し、結果として”世界遺産への登録は誤りか”という事態を引き起こしているとして、ガラパゴス諸島や白川郷を例示し、さらに世界遺産を通して ESD に迫ることができることの例として、環境問題を抱えるタージ・マハルや、気候変動による海氷の減少で生態系の維持が懸念される知床、危機遺産から脱したアンコール遺跡、宗教的排他性がもたらした悲劇であるバーミヤン遺跡などを取り上げた。筆者が報告を終え、ほっとしていると、まもなく演壇に立ったインド・デリー大学の若手教員から厳しい現実を突きつけられた。「先程タニグチからタージ・マハルについて大気汚染で白壁が汚れ、酸性雨で大理石が溶解している、地下水の汲み上げて尖塔が傾いてきているなどの話があった。確かにそれらが事実であっても、インドでは観光はきわめて重要な産業であり、まさに雇用の問題なのだ。タージ・マハル観光のための周辺整備や遺跡の維持管理は、この地域に大きな雇用を生み出している。」という指摘であった。同フォーラムでは、石見銀山遺跡の登録で尽力された方や奈良町づくりに関わってこられた方の報告、タイとカンボジアの国境付近で世界遺産のヒンズー教寺院付近の領有をめぐって紛争が起きている話など、いずれも興味深いものであったが、筆者には「世界遺産と観光は雇用の問題でもある」というデリー大学の先生の話が今も心に残っている。田渕や中澤、祐岡や筆者など「守ろう地球のたからもの　世界遺産編」の制作に関わった者が繰り返し主張するように、世界遺産を通した教育、つまり ESD に迫る世界遺産教育の可能性は十分に証明されていると思う。ただ、それを他面から見れば、それだけ世界遺産登録をめぐる問題は裾野がひろく、サイトを抱える地域社会の全般に関わる課題を包含しているとも言える。雇用問題なのだという発言は、別の地域では民族の存立に関わる宗教上の問題なのだとなるし、また別の地域では密猟の向こうにある「南北問題」や「南南問題」を解決しなければ目の前の危機はなくならないという主張になるだろう。観光客の落とす外貨がなければ遺跡の維持ができないところも少なくないし、そもそも世界遺産に登録された全てのサイトが国際機関から特別な財政援助を得られるわけでもない。それだけに、人類の宝物であり、地球の宝物である世界遺産を、未来からの預かり物として守り受け継いでいくためには、日本だけでなく世界各国の学校教育の場で世界遺産教育が実践される必要がある。本稿では自然遺産・知床を事例として授業モデルを提案したが、今後も多くの学校現場で追試可能な実践例が提案され、蓄積されていくことを願っている。

注

(1)「世界遺産が危ない－観光ブーム、温暖化、乱開発　地球の宝が消えていく」

『ニューズウィーク日本版』2006. pp.42-55

(2)祐岡武志・田渕五十生「世界遺産教育実践の事始め－ユネスコ『教師用世界遺産教育教材』を素材として」

奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要第16号 2007. pp.207-216

(3)日本では 2006 年にユネスコ北京事務所と日本ユネスコ国内委員会の依頼を受け、田渕の指導のもとで、植西浩一と筆者及び祐岡武志が「世界遺産教育のためのパイロットプロジェクト"World Heritage in Young Hands"」を実施し報告している。

(4)中澤静男・田渕五十生「ＥＳＤを視野に入れた世界遺産教育」

奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 2007.no.16 pp.59-66

(5)淡野明彦の各論考は以下の通りである。

・「小学校社会科学習における世界遺産の教材化」

奈良教育大学紀要第55巻第1号（人文・社会）2006. pp.101-111

・「中学校における世界遺産の指導の実践と生徒の認知」

奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 2007.no.18　pp.17-22　神野浩との共著

・「高等学校地理歴史（地理A、地理B）学習における 世界遺産の教材化」

奈良教育大学紀要第58巻第1号（人文・社会）2009. pp.101-106

・「高等学校地理学習における世界遺産の指導の実践」

奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 2010. no.19 pp.11-17　神野浩との共著

(6)服部円佳「世界遺産と人々の関わり～世界自然遺産白神山地の入山問題を通して～」

『世界遺産実践事例集　つながり・多様性・変化　～日本の世界遺産を教材として扱うには～』

2007 ユネスコ東アジア地域世界遺産教育国内ワークショップ実行委員会編 pp17-23 を参照

(7)(新)登録基準の(ix)および(x)は次のとおりである。

(ix) 陸上、淡水域、沿岸および海洋の生態系、動植物群集の進化や発展において、進行しつつある重要な生態学的・生物学的過程を代表する顕著な例であること。

(x) 学術上、あるいは保全上の観点から見て、顕著で普遍的な価値をもつ、絶滅のおそれがある種を含む、生物の多様性の野生状態における保全にとって、最も重要な自然の生育地を含むこと。

(8)桜井泰憲・松田裕之「保全と利用の両立を目指した知床自然遺産」

『日本水産学会誌』75(1) 2009, pp.99-101 を参照

(9)山下欣浩・田渕五十生「日本ユネスコ協会連盟の教材キット「守ろう地球のたからもの」－その制作意図と具体的事例」　奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要第19号 2010 pp.135-144

参考文献

・『世界遺産実践事例集　つながり・多様性・変化　～日本の世界遺産を教材として扱うには～』

2007 ユネスコ東アジア地域世界遺産教育国内ワークショップ実行委員会編

・『世界遺産年報 2006』、『同年報 2007』、『同年報 2010』

上記の年報はいずれも(社)日本ユネスコ協会連盟編

第６章　複合遺産「コルディリェーラの棚田群」の教材化
―教材キット「守ろう地球のたからもの」に関わって―

山下欣浩　鳥取県米子市立淀江中学校教諭
田渕五十生 奈良教育大学教授（社会科教育）

１　はじめに

2008年、社団法人「日本ユネスコ協会連盟」は東京三菱ＵＦＪファイナンシャルグループの支援を受けて「守ろう地球のたからもの　豊かな自然編」という教材キットを作成することになった。その自然編を担当したのが見上一幸教授を中心にした宮城教育大学環境教育実践センターの５名のスタッフで2008年12月に完成し[1]　、現在、全国の教育現場に配布されている。今後、英語と中国語に翻訳されて世界中の教育現場に配布される予定である。

その第２編として「世界遺産」編を、本稿の共同執筆者である田渕を中心にした奈良市内に居住する小中高の教員が制作し、2010年６月に完成予定である。この教材キットは、世界遺産を後述する４つの切り口から捉えた 14 の教材から構成されている。冊子だけではなく、映像ＤＶＤ、資料・ワークシートの入ったＣＤも含まれている。しかし、教材キットの場合、紙幅の制約上、解説が不十分であったり、割愛せざるを得ない資料が多かったりで、そのまま授業展開できないケースが想定される。

そこで、本稿の後半では、一つの教材事例を取り上げ、執筆者がその教材キットをこのように使用していただきたいという授業モデルをそのまま示した。

まず、最初に教材キットの監修者である田渕の監修意図を二つに分けて述べる。一つは、世界遺産がＥＳＤ（Education for Sustainable Development　「持続可能な開発のための教育」、文部科学省の訳語では「持続発展教育」に迫る有益なツールになることの指摘である。二つは、世界遺産を、①人権・平和、②環境の保全、③文化の多様性、④人間的なつながり・連帯・協調の四つの切り口から捉えてＥＳＤに繋げる論拠を示したものである。

引き続き、教材キットの執筆者である山下による④「人間的なつながり・連帯・協調」の切り口から、フィリピンの文化遺産「イフガオの棚田」について授業展開を意識して述べている。この山下の事例を参考にして、教材キットを使用していただけたら幸いである。

２　世界遺産はＥＳＤに迫る有益なツールである

世界遺産は過去からの単なる「遺産」ではない。むしろ我々の世代が未来の世代から預かっているものという発想に立てば、世界遺産とＥＳＤの関係が見えてくる。

２．１．世界遺産は人類の宝物

人類の宝物として普遍的な価値を持つ世界遺産が、現在（2009 年）、890 サイトある。それらは、人々の歩みや文明の進歩を刻印した優れた文化遺産、地球の歴史を記憶し、生態系が絶妙なバランスで保たれてきた自然遺産、その両者を備えた複合遺産である。

例えば、インド・イスラム建築の最高傑作であるタージマハール霊廟。どの角度から見ても完全なシンメトリーである。また、800 棟もの甍が並ぶ北京の故宮（紫禁城)。オレンジ色の瑠璃瓦の屋根が波打ち、緑の庭木とコントラストをなして、上から見るとまるで絨毯のようである。

日本の青森県と秋田県の間には、豪雪に阻まれて開発の手が入らなかったために、広大なブナ林が残された。そこには、ツキノワグマやクマゲラをはじめとする多様な動植物が生息し、生態系が保たれた自然林として世界遺産に登録された。

「天空の空中都市」と呼ばれるマチュピチュ遺跡は、1912 年、アメリカのエール大学出身の探検家ビルハム・ビンガムが、インディオの古老の言い伝えを聞いて絶壁をよじ登って「発見」した遺跡の一部が、半世紀後に完全に修復されて現在のような遺跡公園になったものである[2)] 。言い古された形容詞「かみそり刃一枚も通さない」ほどの精巧な石造建築物を通してインカ文明の技術の高さを知ることができる。また、その周囲には、」多様なランやハチドリなど、動植物の多様性が保たれた自然が豊かに残っており、人間と自然が織りなした典型的な複合遺産となっている。

時空を超えた文化遺産、微妙なバランスの生態系の自然遺産、それらは単なる過去からの遺産ではなく、我々の世代が未来の世代から預かっている「かけがえのないたからもの」であり、次の世代に無傷でバトンタッチしていかなければならないと痛感させられる。

2．2．世界遺産の危機

けれども、自動車の排気ガスや工場の排煙を含む酸性雨が、タージマハールに降り注ぎ、白亜の大理石を汚している。ヨーロッパ諸国のライムストーン(大理石)の大聖堂の石造彫刻が溶解している。いずれも大気汚染が文化遺産を傷つけているのである。　一方、紫禁城では、庭木が枯れはじめている。一日最高 12 万人もの観光客が押しかけ、地面が踏み固められて、雨水を通さないほど堅くなっているからである。観光客の増大による景観破壊と言うことができる。観光客による景観破壊は、程度の差があるものの、どの世界遺産サイトにも共通している。

白神山地では、かつて伐採したブナ林を復原するためにブナの若木を移植する植林活動が展開されている。けれども、成長の遅いブナは、樹勢の強い他の雑木に光を阻まれて枯死直前である。それが自然の摂理であり、切断されてしまった自然の生態系の回復は不可能なのである。

マチュピチュ遺跡を別の角度から鳥瞰できるスポットがワイナピチュである。そこに登山者が殺到し、自然の生態系が保てなくなりつつある。そこで、遺跡を管理する当局は、ワイナピチュへの登山者数の制限を行うようになっている。かけがえのない生態系バランスを守るための規制であるが、現在では、マチュピチュ遺跡への入山者数の上限設定さえ検討中で、そのような厳しい規制も必要だという段階にきている。

2．3．「世界遺産条約」締結の歴史的経緯

「世界遺産条約」そのものが、「人類の宝物を守れ！」という呼びかけで結ばれたものである。1960 年代、エジプト政府は増大する電力需要に応えるために、ナイル川の上流にアスワンハイダムを建設しようとした。その結果、約 4000 年前のアブシンベル神殿が水

没の危機に陥った。

そこで、ユネスコは、アブシンベル神殿は「エジプト一国の宝物」ではなく、「人類共通の宝物」だというキャンペーンを展開して、遺跡保存を訴えた。それは、高さ 33 メートル、幅 38 メート、奥行き 63 メートルの岩山そのものを移築しようとするもので、莫大な費用が必要であった。けれども、「貴重な文化遺産を守れ」というユネスコの訴えに、世界中から寄付が寄せられ、アブシンベル神殿は残った。神殿を約 1000 のブロックに切って、67 メート上の高台に移しかえる壮大なプロジェクトであった。このキャンペーンが契機となって、1972 年に「世界遺産条約」が締結され、「世界遺産基金」が設立された。経済力や技術力が弱くて、自前で文化遺産や自然遺産を守れない国や地域の人類の宝物を国際協力して守ろうという目的からである。それが、「世界遺産条約」の本来の趣旨であり、インドネシアのボロブドゥール遺跡も、「カンボディアのアンコール遺跡群も「世界遺産基金」の援助で修復されたのである[3)]。

2．4．「ＥＳＤ」と世界遺産教育

現代社会の最大の課題は、「世界中の人々が、現在のみならず、将来にわたって安心して暮らせる持続可能な社会や未来」をどう実現するかである。持続可能な未来のための意図的な教育がＥＳＤ（Education for Sustainable Development「持続発展教育」）である。ＥＳＤを簡潔な一言で要約すれば、「公正」（equity）というキーワードで説明できるだろう。

快適な生活、それを保障する石油や石炭などの有限な資源、美しい自然景観など、豊かな国の国民だけが独占して、他の国民が排除されるような不公正があってはならない。また、清浄な水や大気や資源を現代人だけで使い尽くして、次世代の人々が享受できない世代間の不公正もあってはならない。地球の生態系を破壊してしまったら、取り返しがつかなくなり、次世代の人々の生存は保障できなくなる。

ＥＳＤは、「空間的＝同世代間の公正」と「時間的＝異世代間の公正」を目指す社会の形成者を育成しようとするものである。そのような文脈に位置づけると、世界遺産はＥＳＤの典型教材になる。貴重な文化遺産を次世代に伝えること、太古の昔から保たれてきた自然の生態系を守ること、世界遺産をツールに焦点化して学ぼうというものである。

「世界遺産のある地域ならともかく、世界遺産の無い地域では不可能では」と言う疑問が発せられそうであるが、世界遺産がない地域でも実践可能である。なぜなら、それぞれの地域に優れた文化遺産、子々孫々に残したい美しい自然景観、すなわち「わが街の宝物」が存在しているからである。身近な地域の宝物を次の世代にどう残すかと学習を発展させれば、世界遺産教育はどこでも取り組める普遍性を持ちうるものになる。世界遺産教育は「世界・地域遺産教育」と言い換えてもいい。

3　ＥＳＤに迫る４つの切り口

この教材キットを作成するために、世界遺産をツールにしてＥＳＤに迫る４つのアプローチを試みた。第一は「平和・人権」の尊重。第二は、「環境」の保全問題。第三は、「文化の多様性」の尊重。そして、「持続可能な社会」に必須な「人間的つながり・連帯・協調」の問題である。以下の４つの切り口について解説したい。

3．1．「平和・人権」

優れた文化遺産や貴重な自然を守るためには、平和が保障され人々の人権が尊重されなければならない。イラクの都市遺跡サーマッラは戦火の中で放置され崩壊が進んでいる。バーミアンの大仏を爆破したタリバン政権下では女性の人権が蹂躙されて女子の学校教育は否定され、顔と体の全身を覆うブルカ着用が強制されていた。

ドイツでナチスが政権をとった1933年、「反ドイツ」と言うことでユダヤ系の人々の書籍が大量に焼かれた。その「焚書」のあと地の公園に記念碑が建っているが、そこには「本を焼くものは、ついには人間をも焼くであろう」という言葉が刻まれている。ホロコーストに先立つ100年前のハインリッヒ・ハイネの言葉である。文化を大切にしない社会は人間も大切にしない。

原爆ドームやアウシュビッツという「負の遺産」を通して戦争の悲惨な歴史について学び、平和の尊さについて考えることができる。また、奴隷貿易の拠点になったゴレ島を通して人権の発達についても学ぶことができるであろう。

3．2．「環境の保全」

近代人は、自然をコントロールするものと考え、大気汚染、酸性雨、地球温暖化を引き起こしてしまった。そして、今、やっと大切なことに気づき始めた。それは、近代以前の人々が懐いていた「人間は自然によって生かされている」と言う価値観である。

環境破壊の進行で絶滅してしまった動物や植物が無数にあり、現在進行形である。例えば温暖化で北極海の氷原が溶け、ホッキョクグマが絶滅危惧種になっている。世界遺産に登録されたコンゴの自然公園をはじめ、世界各地の自然遺産が危機遺産に登録されている。サイやゴリラなども絶滅危惧種になっており、次世代の子どもたちは、それらの動物を動物園でしか見ることができなくなるという予測さえもある。

自然遺産の第1号として登録されたガラパゴス諸島が2007年に危機遺産に陥った。ゾウガメやイグアナなど固有種が多く、ダーウィンが進化論のヒントを得た島として有名である。増加する観光客目当てに大量の住民が移住して、自然景観が変化しただけでなく、ネコやヤギなど新たな外来生物が浸入して生態系そのものが危機に陥っている。

観光客の増大による危機は日本の屋久島や知床でも起こっている。本教材キットではそれらのサイトを事例にして、自然保護と観光のあり方、自然や動物、植物と人間との深いかかわり合い（共生）について考える契機にしたいと意図している。

3．3．「文化の多様性」

「ユネスコ憲章」の前文は、お互いの風習と生活を知らないことが、疑惑や不信を引き起こし、しばしば戦争の原因となったと指摘し、永続する「平和は人類の知的及び精神的連帯の上に築かなければならない」と述べている。

21世紀になってグローバル化が進行し人々が国境を超えて移住するようになった。その結果、文化の異なる人々が地域社会に居住するようになり、ますます相互の文化を尊重することが求められている。

かつては世界遺産の登録においても、西洋中心の考え方があった。遺産が本物であるかどうかを判断する際に、材質が当初のものであるか否かという基準で「真正性」

（authenticity ）が決められていた。したがって、西洋の石の建築に比べてアジアは木を、アフリカは泥を材質にした建築が多く、補修が必要なことから「真正性」が疑われたのである。現在では、文化の多様性が認められ、アジアやアフリカの文化遺産が登録されるようになった。そのような文化の多様性が論議されたのが、１９９４年に奈良市で開催された「世界遺産国際会議」でいわゆる「奈良宣言」として確認された[4]　。

本教材キットでは、木の文化の典型である法隆寺、石の文化の典型であるパルテノンの神殿を通して、文化の多様性について学ぶことになっている。バーミアンの大仏と奈良東大寺大仏を比較しながら、それぞれの地域・社会で培われてきた文化遺産への人々の想いに触れ、文化の共通性と個別性に気づき、文化の多様性を認める心を養うことも意図されている。

３．４．「人間的つながり・連帯・協調」

持続可能な社会とは、人間的なつながりがあり、連帯し協調しあうコミュニティーが存在する社会である。けれども、現代では、経済のグローバル化に伴う自由主義競争の結果、世界的にも国内的にも人々の経済格差が拡大して、人間的な絆が切断され、人々の精神的な孤立が進行している。

本教材キットでは、白川・五箇山とフィリピンのコルディリェーラの世界遺産を通して、世界遺産の保護・保全には、人々の協力や知恵の結集が必要であったこと、特に、共同体によって伝統文化が守られてきた経緯を確認することになっている。

冷戦終結後、各地で民族間の戦争が勃発した。特に悲惨であったのが旧ユーゴスラビアである。独立を宣言したクロアティアのドブロニク旧市街は、連邦軍から意図的に激しい攻撃を受けて甚大な被害を受けた。民族的敵意が駆りたてた蛮行である。

けれども、内戦終結後、人々は心を合わせて復興に立ち上がった。中世以来の自由を求めて団結した歴史を想起したのである。人々は、破壊された石材を積み重ねて旧市街を復興させ、危機遺産から脱することができた[5]　。本教材キットでは、これらの事例を通して、現代における地域づくり、街づくりの主体者は誰かという当事者意識を育てたいと意図している。

４．「コルディリェーラの棚田群」の教材化
－伝統文化と生活を守るため、互いに支え助け合う人々の絆の大切さを学ぶ－

４．１．はじめに

本教材キットの「人間的つながり・連帯・協調」についての学習では、「世界遺産がなぜ大切なものなのか」という普遍的な価値が、児童・生徒一人ひとりに内面化される必要がある。

戦争・内戦や環境破壊で、危機遺産になったものは、児童・生徒に平和の大切さや環境を守ることの必要性を感じさせることは難しくない。しかし、「コルディリェーラの棚田群」のように、環境面の要素だけではなく、そこに住む人々の生活を維持する要素も考慮する場合には簡単に結論を出すことができない。「伝統や文化を守るか、物質的に豊かな生活をとるか。」この問いは、実は、他の世界遺産にも共通の問いであり、いわゆる「正しい答え」

は存在しない。だからこそ、児童・生徒が多面的・多角的に考察し論議することができ、社会的な見方や考え方を養うことができるのである。

ここでは、従来の世界遺産学習を再考し、世界遺産に登録されることの本当の意味を児童・生徒に考えさせるために、「コルディリェーラの棚田群」を通しての実践を紹介したい。

まず、「コルディリェーラの棚田群」の概要や無形遺産のフッドフッドについて紹介し、次に危機遺産となった背景について考察を加えていく。そして、最後に、指導の実際例を示し、その留意点を述べていく。

4．2．コルディリェーラの棚田群の概要

2000 年の歴史を持つ棚田は、自然と人間の調和を表す文化的景観として、1995 年に、世界遺産に登録された。

ルソン島北部に 300ｋｍに渡って連なるコルディリェーラ山脈の中部にあるイフガオ州には、古くから少数民族のイフガオの人々が住み、先祖伝来の文化を守り続けてきた。標高 700ｍから 1500ｍにわたり、稲穂の実る棚田はその美しさから、「天国への階段」と呼ばれている。これらの棚田の壁をすべてつなぎ合わせると 20000ｋｍにも達し、地球のおよそ半周に相当するという。

ここでは、西洋文化の影響を受けることなく古代からの伝統が守り抜かれてきた。ここに住むイフガオの人々の多くは、伝統的な木造の高床式住居で生活していた。屋根はかやの一種で葺いてあり建物には釘一本も使われていない。村の住民達は毎朝、徒歩で水田へ向かい、幅のせまい高低差のある場所での農作業を行う。水田は狭くて農機具の導入は困難で、農作業のほとんどは人の手によって行われる。棚田は高地に位置しているため、二期作はほぼ不可能である。耕作地に乏しいこの地方では必要な食料を手に入れるため、人々は工夫を凝らして土地を利用してきた。種まき、田植え、収穫、農閑期には田の壁や水路の補修などを行い、作業は一年中絶えることがない。棚田でとれた米のほとんどは自分達の村で消費する。しかし、現在では一年分の食料とするには収穫量が足りないため低地から米を買っているという。

田植えや収穫のときに歌われる素朴な歌として伝えられてきたのがフッドフッドである。およそ 40 の物語で構成され、ユネスコの無形遺産にも登録された。そして、その歌と共に、先祖伝来受け継がれてきた農耕儀式もある。儀礼を司るのは、ムンバキと呼ばれる村の呪術師である。先祖の霊魂、そして何百という自然界の霊たちを順番にムンバキが呼び出すことで儀礼が始まる。聖なる米の酒を口に運びながら豊作を願い、病から村を守るための祈りは夜を徹して続けられる。朝を迎えた村では、生贄の豚を捧げる準備を始める。「人々の嫉妬のまなざしが水田の稲を燃やす。」ムンバキの唱えるこの言葉には、この世の災いや凶作をもたらす原因の一つは、人が誰しも持っている他人を妬み羨む気持ちだということを伝えている。神々に捧げた生贄を村人全員が食べるのは、人々の間の妬みや恨みを沈める宗教的な意味が込められているのである。

しかし、こうした棚田や伝統文化を近年維持していくことが難しくなってきた。棚田での稲作には大変な労力がかかり、そのうえ収穫した米は自分達の食料となるため、収入には結びつかない。こうしたことから、現在若者達の稲作離れが進み後継者不足が大きな課題となっている。

近くの町にはホテルやマーケットもあり現金収入を得ることができる。ここでイフガオの人々は観光客相手の運転手や土産物屋の従業員として働く。街での便利な生活に慣れた若者は泥にまみれる水田の仕事には戻ってはこない。こうして、棚田の手入れをする者が減り、田は荒れていってしまう。現在3割の棚田がうち捨てられた状態にある。

イフガオの人々によって守られてきた棚田や文化は、伝統を継承して、水田での耕作を続ける人がいて初めて次の世代に伝えることができる。このままでは「天国への階段」といわれるこの美しい風景が失われてしまう。このイフガオの棚田と文化を守るために、新しい取り組みが求められている。

4．3．フッドフッド詠唱について

フッドフッド詠唱は、7世紀以前に起源をさかのぼることができるという。米の種まき、収穫の時期と通夜の時に詠われる。この詠唱は200以上もの物語と40話で構成され、すべて詠い終わるまで 3、4 日を要する。詩の全編を通して旋律は1つしかなく、地域全体に共通しており、中心となる語り手と合唱する人が交互に詠う形式で、フッドフッドの叙事詩は詠唱される。

物語は非常に表現豊かで、比喩や反復が多く、換喩、隠喩、擬音なども使われており、書き写すことは非常に困難である。フッドフッドの詩人は、民族の中で歴史家としても伝道師としても重要な立場にある。また多くの場合、中心となる語り手となるのは女性であった。イフガオの人々は母系制であるため、フッドフッドの重要な役割は妻が果たすことが多く、また夫よりも妻の兄弟のほうが、高い位置に置かれている。そのため、人類学上の記録としても、フッドフッドは高い価値をもつのである。

現在、この伝統文化について書き記した文書はほとんど存在しない。フッドフッドは人の手による米の収穫と深く結びついているが、米の収穫そのものが今は機械化されてしまった。また、かつてはフッドフッドを通夜のときの目覚まし代わりとして歌っていたが、それも今ではラジオやテレビにとって代わられている。すべての物語を知る語り部はほとんど残っていない。その上に、若い人にはこの伝統が自分たちのものだという意識がないため、フッドフッドの後継者たちは高齢者のみとなっている。

現在、フッドフッドのマニュアルや視聴覚教材を発行することによって、若い人たちにフッドフッドを教えることを支援するプロジェクトが、日本ユネスコ協会連盟の協力によって行われている。

4．4．コルディリェーラの棚田群の危機遺産登録の要因について

2004年に行われた、沖縄国際フォーラムでフィリピン国家文化芸術委員会遺産保存官である Joycelyn B.MANANGHAYA（ジョイスリン・マナンハーヤ）は、コルディリェーラの棚田群が崩壊しつつある要因を以下の8点にまとめている。この8点、一つ一つについて考えていくことで、学習はより一層深まることになると思われる。[7)]

4．4．1．若者の外部への移住

イフガオの人々の生活様式は外部への移住により大きく変化している。経済的により恵まれた生活を求め、イフガオの若者が他の地域に移住していくに従って、棚田がうち捨て

られる状況が見られるようになった。農業による収穫だけでは家族の年間の食料を賄うのが精一杯であり、子供の生活の向上に夢を託す両親は、勉学のため子供を都市部へと送り出すようになっていく。豊かな生活を求めることがイフガオの人々を他の地域に移住させることになり、棚田の遺棄の原因となっているのである。働き頭たるべき若者が他の地域に移り住み、農業に従事する者が高齢者のみになり、伝統農法が徐々に衰退していく状況にもつながっていっている。また、フッドフッド詠唱についても同様に詠い手が不足する現状につながっている。

4．4．2．インフラ整備

未開発地域へのフィリピン政府の政策は、道路、水道、 電気、 通信といった生活に必要な物やインフラの整備を目的としたもので、ライフスタイルや生活水準の向上につながるものになっている。しかし、これが同時に伝統的な生活に影響を与えている。イフガオの若者は、テレビや通信ケーブルを通じてもたらされる現代的な文化に影響を受けるようになってしまった。若い世代が外部の世界との接点を多く持つということが、他の文化に同化されてしまうことにもつながっている。

4．4．3．棚田の物理的変容

棚田については、その物理的変化も見られるようになった。棚田の壁（垣根）の部分の強度を支える控壁（バットレス）についても、石や粘土から、作業の容易化を図るため、より強度の高いセメントが用いられるようになった。この方法は、耐性・強度という点で優れているが、同時に伝統的方法の衰退にもつながっている。さらに、山道を歩く負担を軽減すべく、棚田へと連なる道路もアスファルトで舗装されるようになってしまった。これにより、生態系の変化も心配されている。日本の多くの水田地帯でホタルを見ることができなくなり、メダカが減少している状況等、同じ原因が考えられる。

4．4．4．水資源の不足と灌漑施設の破壊

地域住民による無秩序な森林の伐採による森林資源の枯渇も、棚田の維持に大きな影響を与えている。採石場への用途変更、彫刻材料としての木材の切り出し、造園のための樹木の伐採や焼き畑農業も、土壌浸食を加速させ、水資源に影響を与えている。これが水を棚田に適さないものに変えてしまっている。また、手入れ不足によって旧来の灌漑システムも破壊が進んでおり、これが水の供給不足につながっている。手入れが不足する理由の一つにコストの上昇がある。こうした事態が水の供給不足につながり、土地・土壌が脆く崩れやすいものとなり、用水路は浸食されていく。

4．4．5．気候の変化

海面の水温や海流などの変動をおこすエルニーニョ現象の影響から、 この地域に干ばつなどの不順な気象状況が見られる。土地の手入れがいきとどかないこととともあり、干ばつは棚田の崩壊へとつながっている。干上がった棚田が雨期の間に浸食を受け、棚田の側壁を崩壊してしまう。この結果、「天国への階段」と呼ばれた美しい景観を保つことが困難となった。

４．４．６．伝統的居住様式の変化

伝統的システムに対する近代化の波は、伝統的居住様式にも影響を与えている。現在、イフガオの人々の居住は、洋風化の影響を受けている。イフガオの人々の本来の住居は、4つの壁に囲まれ単一の部屋から構成される bale と呼ばれているものであった。しかし、これが現代的生活で見られる、設備の完備された複数の部屋からなる近代的な家にとってかわられた。新しい建築資材や建築方式の採用が、イフガオの人々の伝統建築に変化をもたらしたのである。家の建築資材も近代化され、稲を材料にした草葺きの屋根も亜鉛鉄板に変わっている。その結果、イフガオの人々の象徴ともなっていた伝統的住居もほとんど見ることができなくなってしまった。

４．４．７．動植物の森林や棚田への移植

住民の生活向上や所得の増加を目的とした、他地域の動植物の、森林や棚田への移植も問題になっている。この地域の森林とは相容れない植物種の繁殖が水資源に影響を与え、また日本のタニシといった食用目的の動物種の棚田への移植が、棚田に弊害をもたらしている。現金収入を得るために、商品作物の栽培を行ったり、伝統的な稲ではなく収穫増のための他品種の稲を用いたりすることの影響も少なくない。

４．４．８．都市化の進展

都市化や商業化を目指した開発を規制できない不適切な政策もまた、文化的景観の破壊につながっている。地域経済を含めた未来像の描けない行政の不機能が大きな問題であるのだが、新規の建築物や未完成のビルが場当たり的に散立し、かつては平穏であった当地域の森林の景観を損ねている。その元凶となっているのは、こうした開発を規制する建築基準法の不在である。保存という方針に連動していない土地用途制限もまた、景観を損ねる要因となっている。周辺地域を含めた棚田の景観が大きな価値を持っているという認識が政府に欠如している。

特に、山岳民族の生活水準の向上は、地域の文化的発展であると考えられているが、残念ながら、これは同時に、住民の固有の文化に対する誇りを失わせる結果につながっている。

以上、8点を紹介してきたが、これをどのように授業の中に組み入れていくかが、児童・生徒の話し合いの活発化を握る鍵となろう。対立する価値を並べ、それぞれの立場から意見を述べさせていくことで論議が深まっていくように指導したい。

４．５．学習活動展開例

具体的な学習展開例であるが、資料の学習展開例を参考にしていただきたい。ここでは、それぞれの学習活動ごとの留意点を中心に述べていきたい。

４．５．１．対象学年

○小学校６年・中学校全学年の総合的な学習の時間

○中学校１年社会科（地理的分野）「世界の様々な国々」

○中学校２年社会科（地理的分野）「日本の農業」

４．５．２．ねらい

○イフガオの人々の伝統的文化について理解し、コルディリェーラの棚田が人間の知恵と工夫と努力によって築かれていることに気づく。

○イフガオの人々の伝統的な生活を維持するのが難しくなっていることを、環境破壊による棚田の崩落・近代化に伴うライフスタイルの変化・後継者不足など様々な角度から考える。

○イフガオの人々の文化と伝統を守り、棚田の景観を維持すると共に、イフガオの人々の生活を守っていくためにはどうすればよいのかを話し合う。そして、互いに支え助け合う人々の絆やつながりの大切さについて考える。

４．５．３．単元計画

○総合的な学習の時間で扱う場合は、事前学習１時間、本時１時間（２時間扱いも可能)、事後学習２時間の計３時間（4時間扱いも可能)。

○中学校社会科で扱う場合は、本時のみの扱い。

４．５．４．事前学習「私たちの身近な地域の棚田を調べよう！」

棚田は傾斜地に階段状をなし、畦畔をつけてひらかれた小区画の水田の総称と一般的には言われている。日本のようにせまい土地を農地としてきた国では、近世以前の水田はすべて棚田だったとも言え、歴史的には「棚田」と「田」の違いはないとも考えられる。明確な定義としては、農林水産省が 1988 年「水田要整備量調査」で 対象とした傾斜 1/20（水平方向に 20 ㍍進んだときに１㍍高くなる傾斜）以上の土地にある水田を棚田とするという定義があげられる。農林水産省の示す日本の棚田百選では、36 都道府県 117 市町村に渡って棚田があげられている。また、傾斜角度が緩やかなものも含めれば多くの地域で確認することができる。そこで、事前学習では、棚田学会のホームページなどを参考にして身近にあるものを調べていく活動が可能である。身近に棚田がある地域では、実際にその棚田に出かけて行き、話を聞く活動も可能である。都市部など近くに農業地域がない場合は、社会科の学習と連携をとり、ＤＶＤなどの視聴覚教材を使って、身近に感じさせる必要がある。事後の調べ学習とあわせて計画をたてると効果的である。

４．５．５．事後学習

「日本の棚田を守る取り組みについて調べよう！」

棚田オーナー制度やグリーン・ツーリズムなど棚田学会のＨＰ等を利用して調べる。棚田だけでなく、農業全体の問題点になっていることにもふれ、社会科の学習につなげることもできる。

「コンゴの５つの世界遺産が危機遺産になった理由を考えよう！」

内戦・密猟・環境破壊などによって危機遺産になったことを知り、人々のつながりや絆が絶たれてしまう戦争や争いが、私たちの大切なものを奪っていくことに気づかせることをねらいとする。この学習では、呪術師の「人々の嫉妬のまなざしが水田の稲を燃やす。」

の言葉に着目して考えさせると本時の学習につながる。誰もが持っている他人を妬み羨む気持ちが争いをおこすという戒めになっていることを伝え、この言葉が表す意味を考えさせたい。さらに、互いに支え助け合う人のつながりが、コンゴの危機遺産の問題を解決していく糸口になることを伝えたい。

4．5．6．準備物

写真①棚田の全景
写真②イフガオの人々の農耕儀礼の様子
写真③崩壊した棚田
写真④都市化した町の様子
写真⑤日本の棚田（自分たちの地域の近くの棚田）
資料①棚田の工夫、フッドフッドと農耕儀礼
資料②棚田を維持できなくなった理由について
資料③日本ユネスコ協会連盟の取り組み
ワークシート　ＤＶＤ

4．5．7．本時の指導にあたって

理解を深めるためには映像等の補助資料が役に立つ。参考映像などを効果的に利用したい。その際、本時の展開を１時間の扱いで行わず、展開の２つ目の発問までを１時間とし、後半を２時間目として十分に話し合いの時間を確保すると議論が深まる。

次に、各発問ごとの留意点を述べていく。

導入「コルディリェーラの棚田の写真を見て、自由に気づいたことや感想を話し合う。」

この活動については、事前学習とのつながりを図る必要がある。事前学習で、児童・生徒の身近にある棚田を調べさせ、棚田とは何か理解させておく必要がある。そうすることで、コルディリェーラの棚田がいかに規模が大きく美しいものであるかを実感させたい。ここでは、棚田の美しさから、この景観を守りたいという気持ちを引き出すことができればよく、展開の活動につなげていきたい。

展開１「棚田で農業を行っていくうえで困ること不便なことはないか考えよう。」

困難な理由であるが、棚田の規模の大きさから考えさせていきたい。具体的には、棚田は高冷地になってしまうため、二期作ができないこと、農作業用の機械を入れることが難しいこと、農作業を行うために、山道を上り下りしなければならないことなどを写真から読み取らせたい。

その後、資料から、棚田の灌漑整備や伝統的家屋の工夫、すべて人の力で行う農作業のあり方について読み取らせ、そこには村の人々の協力と努力があったことに気づかせていく。

棚田の美しさは、人々の協力と努力により、自分たちの生活を守るため行われた結果生み出された産物であり、自然そのものの美しさとは異なることにも気づかせていきたい。同じような世界遺産として、日本の五箇山・白川郷の合掌造りがあげられる。合掌造りも、

生活の工夫から生み出された家屋が連なることで、その美しさができあがっている。また、この生活を維持するために、一つの家族だけではなく、村全体のつながり、共同体としての機能が維持できなければ存在できないという点でも共通性が見られる。

そして、次の学習活動に入る前に、イフガオの人々の文化やフッドフッド詠唱について紹介したい。イフガオの人々の農耕儀礼や文化は、棚田での生活の工夫の一つでもあると言える。

また、他の人への嫉妬や妬みを戒めるムンバキの言葉は、現在の棚田の抱える問題点をすでに、予期し暗示していたのかもしれない。つながりが絶たれれば、イフガオの生活は成り立たないということを。

展開２「この村で伝統的な生活を送っていくことが難しくなっているのはなぜか話し合ってみましょう。」

この活動では、大きく２つのアプローチから児童・生徒に考えさせていきたい。

一つは、環境面からのアプローチである。棚田が崩れて放置されている写真を見せ、なぜ、棚田が崩れてしまったのか、修復できない理由を考えさせる。

もう一つのアプローチは、生活の変化である。イフガオの人々の村近くのにぎわう街の様子をあらわす写真を見せ、若者の移住による後継者不足の問題を考えさせていく。

どちらの側面も、先に述べた８つの危機遺産登録の要因を例に出して考えさせていきたい。

展開３「イフガオの人々の文化・伝統を守り、棚田の景観を維持すると共に、イフガオの人々の生活を守っていくためにはどうすればよいか話し合おう。」

イフガオの人々の文化・伝統を守ること、棚田の景観を維持すること、イフガオの人々の生活を守ること、この３つが共に成り立つためにはどうすれば良いのかを、ロールプレイなどの方法を使いながら考えさせていきたい。

文化や伝統、景観を守るために、生活を犠牲にすることは許されない。ましてや、その地域で実際に生活していない人々に、それを守っていくべきと強制されるものでもない。大切なものであるから、それを守るためにはどうすれば良いかと考える。

現在、イフガオの人々にとってさえ、この文化が大切なものかどうか分からなくなってきている。この問題に向き合い解決を模索しはじめているのが、日本ユネスコ協会連盟の「イフガオの伝統的文化継承プログラム」である。この取り組みは、イフガオの子どもたちに自分たちの文化や伝統を学校の中で伝えていく活動を主としている。その結果、この地域の人々に、フッドフッドの詠い手になりたいという気持ちを持つ若者を増加させ、今まで気づくことができなかった自分たちの文化の良さをあらためて認識させている。今までは、イフガオの人々だけで、この地域の伝統や文化を守り続けてきた。しかし、これまで考えてきた様々な要因により、イフガオの人々のつながりだけでは、この文化を維持できなくなっている。だからこそ、その地域の人々だけでなく、周囲の村、フィリピン、そしてアジアの国の人々による新たなつながりが必要なのである。

まとめ「私たちの身のまわりにある棚田について考えよう。」

日本の農業が抱えてきた問題は、イフガオの人々の問題と非常によく似ている。環境問題、後継者不足、農家に伝わる伝統的な祭りの衰退など。日本の国内でも課題は多くあるが、その中でも、その解決に向けていくつかの方法がとられている。棚田の保護に向けては、棚田学会などを中心に論議されており、棚田オーナー制度のような試みもなされている。また、グリーン・ツーリズムや農業体験観光も、ある一定の効果を果たしている。こうした日本の取り組みが、イフガオの棚田を守る新たな方法につながっていくことも期待できるのではないだろうか。

学習指導要領の改訂に伴い、地域の文化の良さを児童・生徒に伝えていくことが、より強調されるようになった。今まで以上に、地域の文化を伝えていく学習も増えていくであろう。

5　おわりに

2009年１２月２日の朝日新聞の夕刊記事「棚田に響け　子の詠唱」によれば、学校でフッドフッドの授業が導入され、フッドフッドを詠うことが、再び人々の誇りになりつつあると伝えている。[8)]この記事の中には、民族衣装を着て、棚田でフッドフッドを詠う子どもたちの写真も紹介されている。また、日本ユネスコ協会連盟が行う「イフガオの伝統的文化継承プロジェクト」の取り組みでも、参加した学生から、「自分たちの村には、誇りに思うべきものがたくさんある。若い世代の人々は自分たちについて関心を持たずに育っていくべきではないと思うので、私は、彼らとの橋渡し役になりたいと思っています。」という感想が寄せられている。また、この活動には日本から多くの人々が参加し、日本の人々の中にも、その文化の素晴らしさに共感し守っていきたいという気持ちが広がっている。

もちろん、経済的な問題や森林破壊などの問題は、すぐに解決できるものではない。しかし、「大切だからこそ守りたい。」という気持ちが、住民にも周りの人々にもわきあがってこなければ、世界遺産に指定されても、次世代に受け継いでいくことは困難である。

今必要なことは、今までのつながりだけではなく、もっと大きなつながりを作ることである。イフガオの村からフィリピンへ、そして日本を通して、アジアから世界の国の人々のつながりへと広がっていけば、必ず解決の方法が見えてくるはずである。こうしたつながることの大切さは、単に世界遺産を学習するだけではなく、児童・生徒の身近な問題に置き換えて考えることもできる。この教材を通して、人がつながることで形成されたものであるならば、人のつながりによって、それを取り戻すことができるという確信を得させたいと願っている。

＜注＞

1) 見上一幸　監修　『守ろう地球のたからもの』－持続可能な社会をめざして－豊かな自然編―』2009　ユネスコ協会連盟　発行
2)柳谷紀一郎　『写真でわかる謎のへの旅　マチュピチュ』2000　雷鳥社　p.167
3)松浦晃一郎　『世界遺産―ユネスコ事務局長は訴える―』2008　講談社　p.74

4）松浦晃一郎　『ユネスコ事務局長奮闘記』2004　講談社　p.209
5）NHK「世界遺産」プロジェクト編『危機遺産からのＳＯＳ－歴史の爪あと、人類の愚

かさー』2006 p.92
6）岩本由美子「失われゆく風景コルディリェーラ」
『世界遺産年報２００７－特集 危機遺産―』日経ナショナルジオグラフィク社
p.32-37
7）Joycelyn B.MANANGHAYA 「変化する環境下におけるイフガオ族文化遺産の保護」 2003年度沖縄国際フォーラム報告書『沖縄のうたきとアジアの聖なる空間』p 68～p 76
8）「棚田に響け 子の詠唱」 朝日新聞 大阪本社版夕刊 2009年 12月2日

<参考文献>

1)The Effects of Tourism on Culture and the Environment in Asia and the Pacific IMPACT 2008年 (UNESCO Bangkok)
2）野間晴雄「フィリピン・コルディリェーラ山脈の棚田と遺産ツーリズムの課題」『関西大学東西学術研究所紀要』41巻 p103～p 136 2008年
3）熊野健「北部ルソン島イフガオ族の伝統的シャーマニズム再考」『関西大学社会学部紀要38巻1号』p 77～p 101 2006
4）四本幸夫「フィリピンの世界遺産観光－イフガオ州バナウエの棚田と地方民の暮らしの変化」（立命館大学平成１８年～２０年度科学研究費補助金研究成果報告書）

学習展開例

	資料	学習活動	教師のはたらきかけ
導入	写真①	◎写真を見て、気づいたことを話し合う。	発問：写真を見た感想や気づいたことを発表しよう。 ○地図でコルディリェーラの棚田群の位置を確認し、「天国への階段」と呼ばれるエピソードを紹介しながら棚田の美しさにも十分触れさせ、棚田が作られた理由を考える。
	資料① 写真② ワークシート	◎棚田での農作業が困難な点をどのように克服しているかについて考える。 ○各自で予想をたてた後、資料を読んで考える。 ○イフガオの人々の農耕儀礼やフッドフッドについて知る。	発問：棚田で農業を行っていくうえで困ること不便なことはないか考えよう。 ○棚田の地形的な特徴から、農作業を行う点での困難な点を簡単にワークシートに書かせた後、資料を配る。 ○資料から、棚田の灌漑整備や伝統的家屋の工夫、すべて人の力で行う農作業のあり方について読み取らせ、そこには村の人々の協力と努力があったことに気づかせる。 ○農耕儀礼やフッドフッドについてただ教えるだけでなく、豊作を祈願する儀礼の意味や、村の呪術師であるムンバキの言葉から、人々の間のねたみや恨みをしずめ、互いに助け合う人々のつながりを大切にする気持ちを読み取らせる。
	ワークシート	◎イフガオの人々の生活が困難になっている理由を話し合う。	発問：この村で伝統的な生活を送っていくことが難しくなっているのはなぜか話し合ってみましょう。
展開	写真③ 写真④ 資料②	○棚田がなぜ崩れたまま放置されているかを考える。 ○新しいライフスタイルが流入されることの影響を考える。	○地域住民による森林の伐採によって、水を保つ機能が失われる点、そして、不順な気象状況による干ばつが干上がった棚田を作り雨季の水による浸食を防ぎきれない等の点が、崩壊の原因になっていることに気づかせる。 ○経済的に豊かな生活を求める若者の流出や、フィリピン政府のインフラ整備等の新しい文化の流入が、後継者不足につながり、伝統的な生活を守り棚田を維持することが困難になっていることを写真や資料から考えさせる。 ○伝統的家屋や棚田の伝統的な工法、そして長い間伝ってきたフッドフッド等の文化がイフガオの人々の間でも失われつつあることを知らせる。
	ワークシート	◎イフガオの人々の伝統・文化・生活を守るためにはどうすればよいのかを話し合う	発問：イフガオの人々の文化・伝統を守り、棚田の景観を維持すると共に、イフガオの人々の生活を守っていくためにはどうすればよいか話し合おう。 ○世界遺産を守るということは、単にその景観を守ることだけではなく、そこにある固有の文化を尊重する気持ちを持つと共に、その文化を維持しながら、生活していくための方法を考えていかなければならないことに気づかせる。
	資料③	○日本ユネスコ協会連盟の取り組みについて知る。	○日本ユネスコ協会連盟の取り組みについての資料を読み、その目標が「イフガオに伝わる伝統的知識継承の断絶を食い止め、棚田の保全に寄与する」にあることを理解する。
		○世界遺産を守っていくための人々のつながりについて考える。	○今までのイフガオの人々だけのつながりから、そこを大切にしようとするすべての人の新しいつながりが、棚田を守るために必要であることをおさえる。
まとめ	写真⑤ ワークシート	◎私たちの身のまわりにある棚田について考える。	○次時の調べ学習につなげるため、前時で各自が調べてきた棚田にも同様な問題があって、それを守ろうとする取り組みが行われていることを知らせる。 ○棚田オーナー制度、グリーン・ツーリズム、農業体験観光などの言葉をキーワードとしてあげておく。

第Ⅲ部
世界遺産学習実践研究会の
優れた実践事例

第３学年

西大寺のひみつ発見！

～地域遺産を見つめ直そう～

奈良市立西大寺北小学校　西口美佐子

１．はじめに

本校の校区には、残念ながら世界遺産がない。もちろん、奈良の学校でも校区に世界遺産がない方が圧倒的に多い。しかし、奈良にはそれぞれの地域に、すばらしい地域遺産が残されている。そこで、自分たちの地域遺産に目を向けてみることにした。

夏休みに、「校区のすてきなところを見つけよう」という課題を与え、ワークシートにかかせたところ、児童はいろいろなところを見つけてきた。その中で、注目したのが西大寺である。

西大寺は東大寺の対の寺でありながら、奈良時代の建築等が残っていないため、惜しくも世界遺産から外れている。しかし、奈良時代に創建された西大寺が、形を変えながらも今もその地に存在するということは、現在まで守り続けてきた人々がいるということである。

現在の西大寺は、正確にいうと本校校区を外れているが、校名にもあるように児童にとって身近な寺であるといえる。奈良時代の西大寺は、本校校区の南東部分を所有し、運動場もその一部に入るほどの大きさであった。まさに本校は「西大寺の北の学校」なのである。

この学習を通して、身近な西大寺の価値に気付き、地域を誇り、大切に思う心情を育てていきたい。それが奈良の世界遺産学習につながっていくものだと考える。

２．ねらい

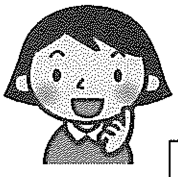
- 西大寺について理解を深め、親しみと誇りをもって大切にしようとする心情を育てる。
- 見学したことや調べたことをわかりやすくまとめ、自分の思いをきちんと伝えることができるようにする。

３．学習活動の概要（全１５時間）

主な学習活動	学習への支援	評価	備考
１，西大寺について知っていることを出し合う。（１）	・自分と西大寺との関わりについて考えるようにする。	西大寺に関心をもち、意欲的に調べようとする。	

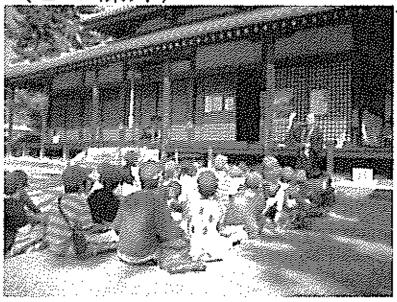
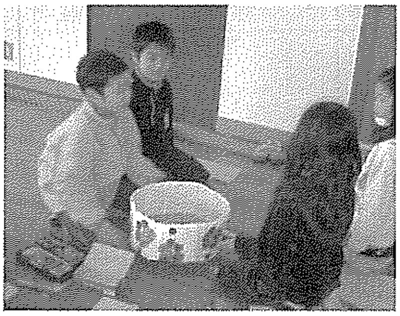
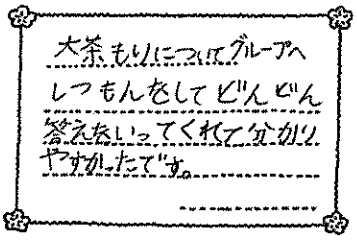
・知らない　・仏像がある
・幼稚園がある　・お祭りがある

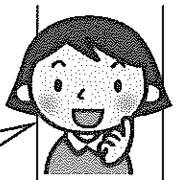
町名に「西大寺」がついている所は昔は西大寺の境内だったそうだよ



昔の西大寺は
もっと大きかったのかしら？

西大寺のひみつを調べよう！

2，調べる計画を立てる。（1） ・西大寺の歴史 ・昔の西大寺 ・今の西大寺　　・塔 ・仏像　　　・大茶盛 ・木や池　　・お祭り ・幼稚園，保育園	・西大寺について調べたいテーマごとに、３、４人のグループを作る。 ・調べる内容、調べ方、発表の仕方をグループで話し合うようにする。	調べる計画を立てることができる。	ワークシート
3，見学に行き、酒部さん、笹尾さんから話を聞く。（２＋課外） 	西大寺は、称徳天皇という人が、７６５年に日本の国の平和を願って創ったお寺です。 今は、１万坪しかないけれど、昔は２７万坪もあって、塔もありました。でも、雷などで焼けてしまい、今は、東塔の跡だけ残っています。 西大寺では、大茶盛をしています。大茶盛は、西大寺でしか行っていません。 ・話は、メモを取って聞くようにする。 ・さらに聞きたいことは尋ねる。	メモを取りながらしっかり話を聞くことができる。	ワークシート
4，見学して話を聞いたことをまとめる。（4） 	・みんなにわかりやすく伝わるような方法を考えるようにする。 ・いろんな方法で発表できるように支援する。 紙芝居　　壁新聞 ペープサート　　劇 クイズ　　など ・写真などは、必要に応じて教師が支援を行う。	調べたことをわかりやすく伝えるために、発表の仕方を考えることができる。 意欲的に制作活動に取り組むことができる。	画用紙 模造紙 ダンボール 割り箸 写真 など
5，発表会を行う。（3）   	 ・発表者は、一人ずつ感想を述べるようにする。 ・発表後には、おたずねや感想を出し合う時間を設ける。 ・聞き手は一言感想を書き、相手に渡すようにする。	調べたことがみんなに伝わるように、自分たちの考えた方法で発表することができる。 発表をしっかり聞き、分かったことや心に残ったことを感想に書くことができる。	一言感想メモ ワークシート



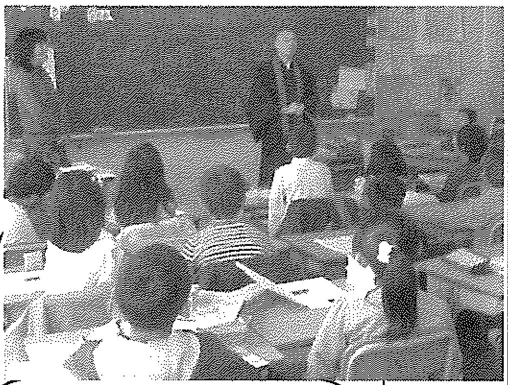
・　西大寺は焼けたり建て直したりしていると知れてよかったです。
・　愛染明王座像は手が６本もあるなんてすごいと思いました。
・　大勢の人が来てくれて、よく聞いてくれてました。終わったら拍手をしてくれたので嬉しかったです。

６，西大寺のすごいと思うところを考え、話し合う。（１）	・発表を聞き合ったことを思い出して、西大寺のすごいところを考えるようにする。	西大寺のすごいと思うところを自力で考えられる。	ワークシート

・昔は広かった　・東大寺と深い繋がりがある
・大茶盛ができる　・いろんな仏像がある
・寺の中に幼稚園と保育園がある
・日本で初めて造られた金貨「開基勝宝」が見つかった
・ペルシアからきた陶器が見つかった
・建物にすごい迫力がある
・一度焼けたのに建て直した

・話し合いのあと、酒部さんからお話を聞く。

みなさんが、私の話をしっかり聞いて、調べていて驚きました。
奈良は歴史のある古い都です。その時に建てられた西大寺を今まで守ってきたのはお坊さんだけではありません。焼かれるたびにみんなの寄付で建て直したので、寄付してくれた人、大工さん、みんなで守ってきたのです。
この西大寺をみんなも大切に守っていってほしいです。そのために、みんなは、いろんな人に西大寺の話をしてほしいです。



僕たちの先祖ってすごいんだなあ

・　昔、都といえば奈良なんて知らなかった。今まで西大寺を守ってきた人は、お坊さんだけではなかった。当時の人々の協力で建て直していったんだね。
・　１２００年前のお経を書いているもの（木簡）が今でも発見されているとは初めて知った。それらには、いたずらや落書きとかは絶対にしてはいけない！
・　ペルシャからきた壷のかけらがあるなんて初めて知りました。やっぱり西大寺はすごい！！

６，学習したことを新聞にまとめる。（２時間）	・自分で調べたこと、友だちの発表を聞いてわかったことをまとめるようにする。 ・分からないときは、教室に掲示してある資料を見たり、	西大寺についてわかったことを、図や絵、写真などを使ってわかりや	ワークシート 写真

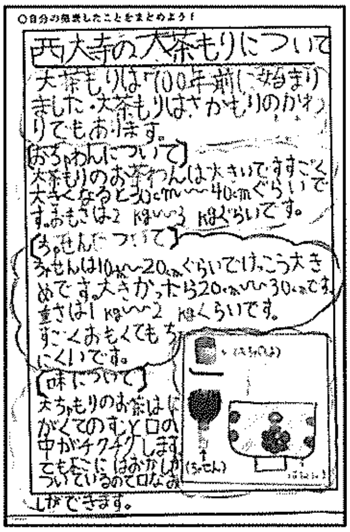
	発表した友だちに尋ねたりするように声を掛ける。	すくまとめることができる。	
7，学習のふり返りをする。（1時間） ぼくは、西大寺のことを全然知らなかったけど、今は知れてとてもよかった。ぼくは奈良にずっといたいなと思いました。これから、ほかのお寺にも行って、いろいろ昔のことを知りたいです。	・この学習で自分についた力を確かめるようにする。 ・西大寺の学習を終えて、自分はこれからどうしていきたいかを考えるようにする。 	この学習を通して、自分がどのように成長したかを見つけることができる。	ワークシート
8，家族に西大寺のことを伝える。（課外）	・自作の学習新聞を使って西大寺のことをおうちの人に紹介し、感想を書いてもらうようにする。	おうちの人に西大寺のことを詳しく紹介できる。	学習新聞 ワークシート

・　大茶盛や西大寺について、きちんと要点をついてまとめられていたので、とてもわかりやすく、説明も楽しく聞くことができました。今まで知らなかったことや分からなかったことを自分で調べて知っていくことは楽しいことだと感じているのが伝わってきて、実りの多い学習だと思いました。

・　私は生まれて〇十年、西大寺付近に住んでいましたが西大寺について知らなかったことの多さに驚きです。よく頑張りました。

4．成果と課題

学習新聞



・　学習の始めに、西大寺について知っていることを書かせたとき、約3分の1が何も知らなくて書けなかったが、「西大寺のすごいところ」を考えるときには、全員が自分の言葉ですごいところを複数書くことができた。この学習を通して、児童は、西大寺についての理解を深め、すばらしさを知り、西大寺を誇りに思うことができたと思う。

・　西大寺が昔から多くの人々に支えられ、今まで守られてきたことを知り、自分たちも守っていかなければならないという気持ちをもつことができた。また、守ってきた人々に対しても尊敬の念をもつことができた。

・　実際に西大寺を見学し、酒部さん、笹尾さんから話を聞くなど、本物に触れて学習することができたため、児童が長時間にわたり関心をもって学習に取り組むことができた。話を聞くときには、集中してメモもしっかり取ることができた。

・　課題別グループで調べたことを、自分たちで工夫しながら分かりやすく相手に伝えようとすることができた。また、発表することによって、聞き手に認めてもらう喜びを感じた児童も多く、今後の様々な学習の意欲にも繋がったと思う。

・　指導者側で資料の準備不足のため、調べ学習がやや未熟であったように思う。もう少し資料を集め、スムーズな調べ学習ができるように支援する必要がある。

第４学年

追分梅林の梅シロップ作り

～地域のたからものを生かして～

奈良市立富雄南小学校　上田　尚史

１．はじめに

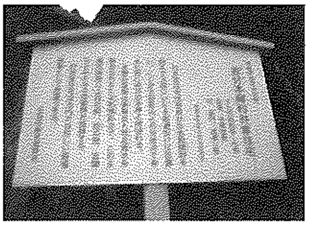
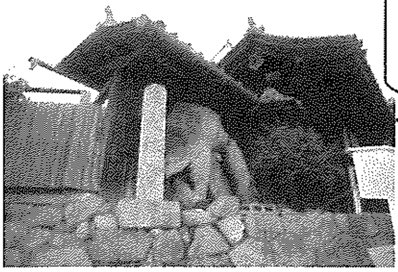
富雄南小学校の校区内には奈良市指定文化財の追分本陣がある。追分という地名の由来は、奈良方面への街道と大和郡山方面への街道に分かれる境目に当たることからきたものである。その奈良街道沿いには、追分本陣が置かれていた旧村井家住宅が残っている。19 世紀初期から中期に建てられた主屋は、茅葺きと桟瓦葺きを合わせた大和棟形式が使われている。その主屋の南東にも座敷棟が続いている。そして、この本陣は大和郡山藩主の休憩所として使われていたという歴史もある。追分本陣から奈良街道沿いに東へ向かうと「砂茶屋」という地名があり、街道沿いを行き交う人びとの休憩のための茶屋があったとされている。校区には、そのほかにも霊山寺や登美神社・木島神社など歴史的な建造物もたいへん多くある。

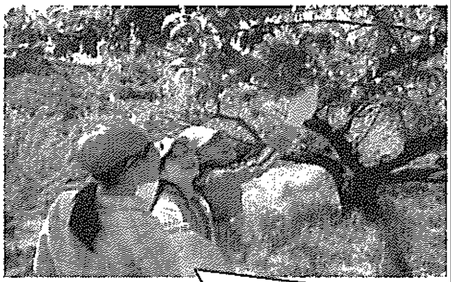
４年生では追分にある追分梅林をとりあげることにした。追分梅林は、3 月に全校で梅見に行き、大変なじみの深い場所である。追分梅林は数十年前までは、市場に出荷を行っていた梅林であった。しかしながら、中国産の梅などが輸入されるようになったので、出荷をやめて、地域の方々に開放されたという歴史がある。まず梅狩りをした後、その追分梅林を管理しておられる、西尾典子さんをゲストティーチャーにお招きして、その梅を砂糖につけ込んだ。このような体験を通じて、追分梅林を身近に感じることができると考えた。また、追分梅林の歴史や旧村井家住宅についても学習した。歴史を知ることで地域を知り、地域の文化財、遺産を大切にし地域を愛し、そして、後世にも受け継いで行くことができる子どもたちを育成したいと考えた。

２．ねらい

- 地域にある追分梅林の歴史や旧村井家住宅について学習し自分の住む地域の歴史を知り、自分の住む地に誇りをもつ。
- 地域の遺産である追分梅林で梅を収穫しシロップを作ることを通じて自然の生態に関する理解を深め、人と自然の関わりについて実感することができる。
- 地域に根ざした教育活動を実施することにより、自分の住む町を大切に思う心を育てる。

３．学習活動の概要（全１４時間）

主な学習内容	学習への支援	評価	備考
１．追分梅林に梅見に行く。 （２～３月） ※全学年が参加（日は別） 梅に種類があるな。梅林の広さはどれくらいだろう。若草山が見えるな。 たくさんの人が来ているな。高いところにあるんだな。	人との出会いを大切にし、梅林の良さを知らせる。		
・追分本陣の見学  ・いつぐらいから建っているのかな。古いな。 ・屋根の形が家とは違う。 ・追分本陣村井家住宅と言うんだな。 ・19 世紀初期から中期に建てられたと書いている。 ・主屋は、茅葺きと桟瓦葺きを合わせた大和棟形式と書いてあるな。  【奈良街道の道しるべ】 ・「郡山　大阪」と書いてあるよ。 ・どれくらい時間がかかるのかな。	追分本陣に気付くことができるように道順を工夫する。 気づいたことを出し合わせる。	追分本陣について関心をもつ。 道が分かれていることに気づく。	
２．追分本陣新聞を作成する ・こんな古い建物があるのは知らなかった。 ・砂茶屋の名前の意味がわかった気がする。 ・追分の意味がわかった。	相手意識をもって、聞いたことや調べたことをまとめるよう指導する。	追分本陣や奈良街道について気づいたこと、わかったことをまとめている。	

<table>
<tr><td>3．追分梅林に梅を収穫しに行く。
1人1.2kg程度（6月）
</td><td>どんなところで梅ができるのかを知り、他に収穫しておられる方とお話ができるようにする。</td><td>地形の違いに気づく。</td><td>長袖・長ズボンを着用</td></tr>
<tr><td colspan="4">・たくさんあるな。大きな梅があったよ。
・いつから育てているのかな。この梅はスーパーで売られているのかな。
・自分の家の梅干しはこの梅で作ったのかな。
・すごく地面が斜めだな。日当たりが良くて暑いな。矢田丘陵の地形を利用して作っているのかな。
・おじさんに高いところの梅を取ってもらったよ。</td></tr>
<tr><td>4．梅を洗う
・乾燥させておく。(1日以上あける)</td><td>丁寧に梅を洗わせる。</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">傷をつけないように洗おう。傷のある物はよけておこう。</td></tr>
<tr><td>5．梅シロップを作る
①西尾さんの説明を学年全体で聞く
②各教室で、梅のへたをとり、きれいなふきんで水気を取り瓶に詰めていく。
③グラニュー糖を1kg入れ、酢を40ml入れる。
④梅シロップのラベルを日付・レシピを含め絵や文で作成する。</td><td>手を清潔にしておくように声をかける

 </td><td>意欲的に活動している。</td><td>梅シロップ紙芝居</td></tr>
</table>

⑤毎日、砂糖が行き渡るように瓶を振る。	断続的に瓶を振らせる。 おいしくなったらいいな。加減をして振ろう。	意欲的に活動している。	30日
⑥追分梅シロップ新聞を作成する。 	追分梅シロップの良さを伝えるようにまとめさせる。 梅林があるからできたね。昔の保存食かな？ 腐らないのは不思議だな。富雄南小学校だからできたな。	追分の由来や梅林の歴史、シロップについてまとめている。	
⑦梅シロップでゼリーを作る。 梅ゼリーおいしかったな。追分梅ゼリーを販売したらいいんじゃないかな？また自分の家で作りたいな。お礼に西尾さんに食べてもらいたいな。	地域の恵みに感謝の気持ちをもって作る。	意欲的に活動している。	調理

4．成果と課題

- 地域にある追分梅林の歴史や追分本陣について学習したことで、自分の住む地域の歴史を知り「自分の住む地域にはこんな遺産があるんだな。」という気持ちをもち、「先生、こんな場所があったよ。」「これは何だろう。」という意欲やまた発見する目を培うことができたので子どもたちが学び方を学ぶための学習として大変効果的であった。
- 地域の遺産である追分梅林で梅を収穫しシロップを作ることや地域のゲストティーチャーを招いた学習を通じて、人と自然の関わりについて実感することができた。
- 地域に根ざした教育活動を実施したことによって自分の住む町を大切に思う心が育まれ、「僕らは富雄南に通ったからこんなことができたんだな。」という声が多々生まれた。
- 奈良街道も学習したので、実際に奈良街道を散策したら、当時の人びとの努力や知恵に気づくとともに、周辺の住民の方々とふれあって、つながりができたと思う。
- 地域遺産学習から世界遺産学習へのつながりがスムーズに行くように研究したいと考えている。

第４学年

発信！！平城宮跡の保存！！

—未来へ続く世界遺産—

奈良市立都跡小学校　　池見　繁

１．はじめに

都跡小学校は校区内に、平城宮跡、薬師寺、唐招提寺という３つの世界遺産をもつ。しかしながら児童にとって、それら３つのサイトの存在は当たり前のものになっており、学級で尋ねてみても、学校の活動外で行ったことがある児童は３割ほどであった。また世界遺産という言葉は、テレビなどで聞いて知っているが、その価値や、世界遺産としての素晴らしさは知らないに等しかった。「見えているようで見えていない。」世界遺産はそんな存在になっているのである。

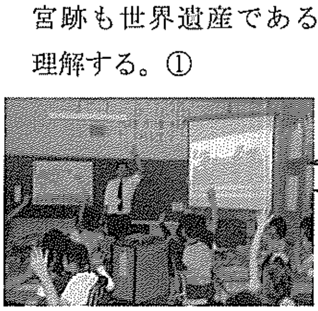
これまで本校では４年生の社会科『地域の発展に尽くした人々』の単元で、平城宮跡の保存に尽くしてきた棚田嘉十郎さんと溝辺文四郎さんに焦点を当て学習を行ってきた。校区には溝辺文四郎さんの子孫も住んでおられ、聞き取り活動なども行ってきた。また２学期には総合的な学習の時間で、福祉体験として車いすやアイマスク、疑似体験を行ってきた。

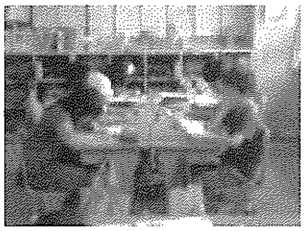
今回は、これまで本校で行ってきたそれらの実践に「世界遺産平城宮跡」という側面を持たせることによって、校区にある平城宮跡を世界遺産として認識させ、その価値や素晴らしさに気づかせ、地域に対する愛着を持たせたいと考えた。また次年度から本格的に取り組む世界遺産学習への一つのステップとなり、世界遺産に目を向けるきっかけになればと考える。

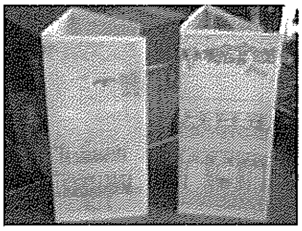
２．ねらい

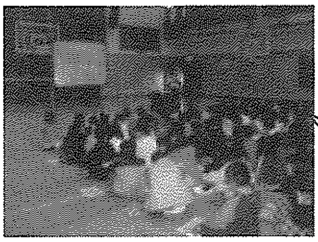
・　平城宮跡を保存し、守ってきた人、守っていこうとする人たちがいることを学習し、その願いを知り、自分たちにできることを考え、発信する。
・　世界遺産平城宮跡に触れ、自分たちの地域の素晴らしさを理解するとともに、地域に対する愛着を持つ。

３．学習活動の概要（全２５時間）

主な学習活動	学習への支援	評価	備考
１．世界遺産について知り、平城宮跡も世界遺産であることを理解する。①  平城宮跡も誰かが守ったの？ 早く平城宮跡を見に行きたい。 世界遺産に登録された建物は昔から人々に大切にされていたんだとわかった。	・　アブシンベル神殿の事例を紹介することで､世界遺産の価値を考えさせる。	世界遺産とはどんなものかを自分の言葉で書いている。	ワークシート 世界遺産の写真

2．平城宮跡の保存に尽くした人を調べる。①	・ インターネット検索の方法を指導する。	インターネットを用いて棚田嘉十郎と溝辺文四郎を検索できる。	インターネット
3．棚田嘉十郎と溝辺文四郎について学習する。②	・ 調べたことをもとに学級で話し合ったり、教師作成の資料を提示したりする。 ・ 困難や苦労があったことに留意させる。	平城宮跡保存には多くの人が関わっていたことに気づいている。 人々の保存のための願いがわかる。	資料年表 ワークシート
命をかけて平城宮跡を守ったなんてすごい。 多くの人の協力があったから平城宮跡が保存された。			
4．平城宮跡へオリエンテーリングに行く。④ 	・ 平城宮跡の広さや自然、歴史を体感させるためにオリエンテーリングを行う。 ○ 平城宮跡資料館 ○ 遺構展示館 ○ 朱雀門 ○ 東院庭園	班で協力してオリエンテーリングに参加している。 	デジタルカメラ 保護者
5．溝辺文四郎さんのお孫さんの話を聞く。① 	・ 溝辺文四郎がどんな思いで保存に取り組んだかや、孫としてそれをどう思っているかに注目するよう指導する。	聞き取ったことをメモに書いている。	ワークシート ゲストティーチャ
	お金や命をなくしてでも平城宮跡を守ったことがすごい。 平城宮跡を守ったことを誇りに思っているんだなぁ。 平城宮跡が今でもあることがすごくうれしい。		
6．パンフレットを作る。③ 	・ 自分の感動を読み手を意識して書かせる。 ・ 他のパンフレットを見ながらパンフレットのレイアウトを考えさせる。	自分の感動を伝えようと工夫している。	パンフレット 写真

<table>
<tr><td></td><td> </td><td></td><td>1300 年祭ホームページ</td></tr>
<tr><td>7．車椅子・アイマスク・疑似体験をする。③
 </td><td>・　大変なことや助けになることを考えながら体験させる。
 </td><td>意欲的に体験活動に参加している。</td><td>車椅子
アイマスクなど</td></tr>
<tr><td>8．体験を通して感じたこと、考えたことを交流し、誰にとっても訪れやすい建造物とはどんなものか話し合う。②</td><td>・　施設面だけでなく、自分が何をすべきかを考えるよう指導する。
・　班で交流することで、多様な意見に気づかせる。</td><td>自分の考えを書いたり、発表したりする。</td><td>ワークシート</td></tr>
<tr><td colspan="4">車椅子やアイマスク体験をしてどんな点が不自由だと感じましたか。
・下り坂やみぞ、段差がこわい・でこぼこ道が通りにくい・のぼり坂がつらい(車椅子)
・階段をおりるのがこわい・真っ暗でどこへ向かっているのかわからない(アイマスク)</td></tr>
<tr><td colspan="4">目や体の不自由な人の助けになることはどんな事がありますか。
・声をかける・車椅子を押す・付きそいの人・物を触らせてあげる・道をあける
・バリアフリーになっていること・手すり・車椅子・車が通らないこと・エレベーター・道が平らになっていること</td></tr>
<tr><td>9．ユニバーサルデザインの視点で平城宮跡を見学する。②(写真による学習①)
 </td><td>・　これまでの体験を基に考えるよう指導する。</td><td>スライドをもとに自分の考えを持つ。</td><td>写真
ワークシート</td></tr>
<tr><td colspan="4">・いすの数が少ない・屋根のあるところが少ない・階段が多い・エレベーターを作ろう・点字がいる・平城宮跡に似合わないものは作ってはいけない・外国語ができるガイドがいる・スロープを増やすなど</td></tr>
</table>

１０．朱雀門や平城宮跡の保存・活用がどのような視点でなされているのかの聞き取り。①  ・史跡として残しておくことが大切だ。 ・なぜ平城宮跡に電車が走っているのか？ ・いろんな人が関わって平城宮跡を保存しているんだ。 ・昔に行きたい。もっと平城宮跡を知りたくなった。 ・保存の計画がしれておもしろかった。	・　次の内容を話していただくよう依頼する。 ○　保存と活用のバランス ○　活用におけるバリアフリー ○　これまでの保存運動	聞き取ったことをメモに書いている。	ゲストティーチャー
１１．未来へ向かって全ての人が訪れやすい世界遺産がどのようなものかを考える。⑤	・　景観と福祉のバランスを考えた計画が立てられるようにする。 ・　これからの平城宮跡の保存・活用について話してもらう。	福祉と景観のバランスを考え、聞き手に伝わるように工夫している。 グループで協力して活動している。	ポスターセッション。 ゲストティーチャー
１２．学習を振り返る。①			

４．成果と課題

○　実際に現地を訪れ、その場の雰囲気を体感したことと、保存にかかわってこられた人物と出会いその思いに触れることが、子どもの意識の変革に重要であると考える。これまで以上に平城宮跡についての知識が増えることで、校区に対する愛着や興味を持ってくれたように感じる。平城宮跡の話題が出たときの反応が変わった。

○　実際に保存してきた人々やその子孫の想いに触れることで、平城宮跡が今あるのは当たり前のことなのではなく、多くの人の努力や願いの結果であることに気づくことができた。さらに保存と活用について話し合う学習を通して、これから先どうなっていくのだろうという関心が深まり、当事者意識を持つ子が増えてきた。

○　自分たちが作ったパンフレットを平城宮跡内に置いてもらえると言うことで、子どもたちは読みやすく見やすく、また手にとってもらえるようなパンフレットの工夫を協力して行っていた。また発信を意識したグループでの共同制作により、自分とは異なる友だちの意見や感じ方に触れて、見方や考え方が広がるとともに表現方法も向上させることができた。

●　自分たちの活動を振り返ることができるような、児童自身が自分の学びの過程や結果を評価できるような工夫が必要であった。

●　限られた時間数の中で有意義な活動を行うために、他の教科とさらに連携して学習活動を進めていく必要がある。

第５学年

「東大寺」探り隊・広め隊・守り隊

奈良市立鼓阪北小学校　教諭　小西　慶子

１．はじめに

校区の高台から奈良市街を見ると、東大寺大仏殿がとても美しく見える。東大寺は本校の児童にとって地理的に身近な存在である。しかし、実際に東大寺に行ったことのある児童は、一学期の世界遺産見学の前にはクラスの約半数で、「観光客の多い場所」「奈良の観光名所」といった漠然とした印象をもつ児童が多かった。

そこで、この取り組みでは、身近にある「東大寺」という題材を多様な観点から捉え直すことから課題を持ち、調査研究を行わせたいと考えた。実際に自分の目で見、足を使った調べ学習を展開し、友だちとの意見交流といった具体的で協同的な学習を体験させることで、学習の楽しさを感じさせたい。そして、児童一人一人が身近にある人類の宝を広め、守っていこう、奈良や地域の良さを見つめ直し、奈良を大切にしようとする心を育てたい。さらに追究した事柄を「東大寺の魅力」として自分たちの言葉で伝え合うなど発信型の学習とすることで、理解を深めたり、自分と異なる視点に気づいたりする機会としたい。

２．ねらい

- 東大寺について多様な観点から捉えることにより、現在まで守り継がれてきたことの素晴らしさや、人々の願いを感じ、文化財を尊重する態度を養う。
- 東大寺の魅力を伝え合う中で、奈良や地域の良さに気付き、大切にしようとする心や態度を養う。

３．学習活動の概要（全 40 時間）

主な学習活動	学習への支援	評価	備考
１．世界遺産見学に行こう。 （10 時間） ・　東大寺で外国人観光客へインタビューをする。	東大寺にはどんな魅力があるのかな？ ○　「ハローイングリッシュ事業」と連携してインタビューの指導をする。		
外国人観光客が多いなぁ。なぜ、東大寺に来るのだろう。			
・　東大寺でインタビューしてわかったことを新聞にまとめる。	・　実際にインタビューした内容を中心に書くことを指導する。	◇　見学やインタビューからわかったことをまとめることができる。	

2．東大寺の方にお話を聞こう。（2時間）
東大寺　森本公穣 氏

・　東大寺の歴史的背景や人々との関わりについて話していただく。

東大寺の大仏様は今から約 1250 年前に、聖武天皇によって造られました。聖武天皇は「世界中のすべての動物やすべての植物がみんな幸せに暮らすことのできる世界をつくりたい」と考えてこの大仏様を造られました。また、聖武天皇はできるだけ多くの人に大仏様造りを手伝って欲しいと考えていました。少しでも手伝いたいという気持ちがある人には喜んで手伝ってもらいました。当時の日本にいた人の約半分にあたる約 260 万人の人が大仏様を造るのを手伝ったといわれています。

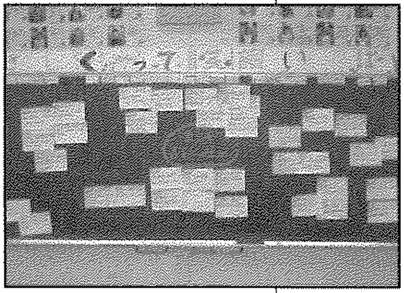
聖武天皇は、「人間だけじゃなくて、動物や植物も幸せに暮らせるように」と考えていたなんてすごいと思います。

こんなに近くで大仏様を見たのは初めてだったので、その大きさにびっくりしました。(台座付近で大仏様を見せていただいて)

3．東大寺について学習課題をもとう。（2時間）

・　東大寺について疑問に思ったことを出し合う。

・　疑問に思ったことを出し合わせ、ウェービングを行う。そして、みんなで学ぶ価値を共有するようにする。



・課題を設定する。

「○○○について調べよう」
・大仏について　・大仏殿のつくりについて
・「修二会」について　・南大門について
・観光客について　・奈良の鹿と東大寺の関係
・三月堂について　・正倉院について
・なら燈花会について

◇　東大寺を多様な観点から捉え、追究しがいのある課題を設定することができる。

4．設定した課題について調べよう。（15 時間）

・　現地学習、話を聞く、本で調べるなど、グループに分かれて学習する。

・　できるだけ現地に行き、話を聞いたり、アンケートをとったりすることを促す。

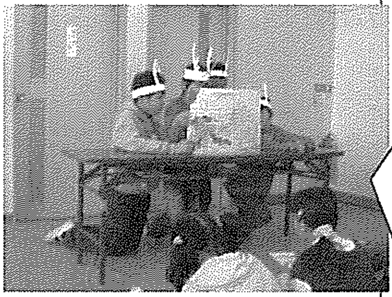
○　「ハローイングリッシュ」の先生とも連携する。

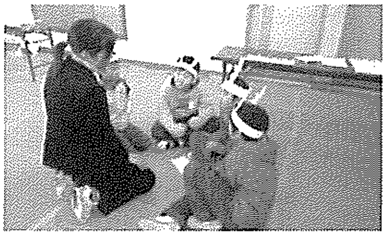
◇　設定課題に向けて追究し続けることができる。

ぼくたちは、「修二会」について調べています。
①「修二会」を知っていますか。
②「修二会」に関連のあることなのですが、「竹送り」をご存じでしょうか。

インタビューで約半分の人は「修二会」を知っていると答えているけれど、「竹送り」は知られていない。「修二会」を知っていると答えた人も、何をどのくらい知っているのかわからないなあ…。

・　調べたことを参考に東大寺の魅力を考える。	・　自分たちのグループが思う「東大寺の魅力」を選ばせる。	◇　自分の考えをもつことができる。	
5．ポスターセッションをしよう。（3時間） ・　ポスターセッションをする。	・　自分の考えをわかりやすく表現できるようにラベリング、ナンバーリングを指導する。 ・　自分のグループが考えた魅力と比べながら聞くように促す。	◇　伝えたいことを相手にわかりやすく伝えるための工夫ができる。	画用紙 模造紙





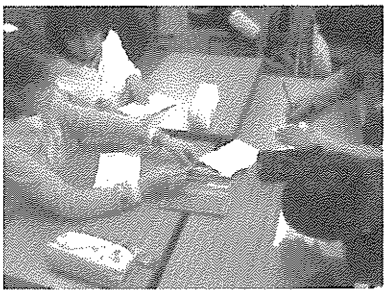
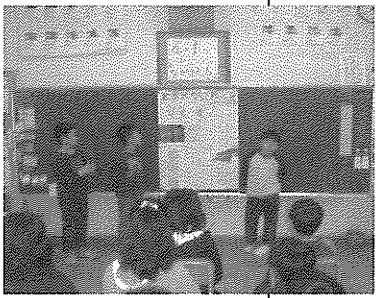
ぼくたちは「鹿と奈良の関係」について調べました。ここで伝えたいことは3つあります。
1つめは、「鹿の頭数と救助」についてです。
2つめは、「鹿と奈良の関係」についてです。
3つめは、「奈良に鹿がいなかったらどうなのか」についてです。
（中略）
最後に、「奈良に鹿がいなかったらどうなのか」ですが、奈良の鹿は天然記念物であり、奈良の代表のようであります。また、奈良の魅力の一つでもあります。・・・鹿がいて、自然があり美しいということが東大寺の魅力だと思います。もし、鹿がいなかったら、草がぼうぼうに生え広がり、東大寺の美しさがなくなります。東大寺がさびしくなってしまいます。東大寺の魅力がなくなってしまいます。・・・

・　発表を聞いて新たに気づいた東大寺の魅力を話し合う。	新たに気づいた東大寺の魅力は、「日本の文化の歴史がわかること」です。 なぜなら、1000年以上も続く行事や建物がたくさんのこっているからです。	◇　友だちの発表を聞き、東大寺を残してきた人々の思いにふれることができる。	

新たに気づいた東大寺の魅力は、「なぞめいていること」です。
なぜなら、東大寺は、調べれば調べるほど知らなかったことがでてきて、わからなくなるからです。
「修二会」について初めは「お水取り」のことを調べていました。調べていくと他の儀式がたくさんあることがわかってきました。また、修二会は1250年も続いていますが、3度も途切れそうになった危機があったこともわかりました。調べるほどに新しいことがでてくるので、東大寺はなぞめいています。

6．ガイドブックを作ろう。（6時間） ・　クラスごとに「東大寺の魅力ベスト3」を話し合う。	・　たくさんの魅力の中から3つを選び、根拠を明確に発表させる。	◇　根拠を明確に、考えを述べる。	

1位：自然や風景が美しいこと
2位：日本の文化が感じられること
3位：人々から愛されていること

・　東大寺の魅力を紹介する「ガイドブック」を作ろう。 	・　絵本の形（見開き３ページ）のガイドブックで、東大寺の魅力がわかりやすいように表現を工夫させる。 	◇　意見の中心について、工夫して表現できる。	Ａ３紙
7．４年生に伝えよう。 （１時間） ・　来年度世界遺産見学を行う４年生に、「東大寺の魅力」についてわかりやすい言葉で伝える。	・　相手意識をもって、使う言葉や伝えたい内容を工夫するよう指導する。		
8．まとめをしよう。 （1 時間）	・　未来の東大寺のために自分たちにできることを考えさせる。	◇　奈良の魅力をこれからも守っていこうと考えることができる。	

4．成果と課題

・　本実践で子どもたちは、「東大寺」を多様な観点で捉え、東大寺の方や正倉院事務所の方、観光客など多くの人々と関わりながら「東大寺の魅力は何なのか」と追究していった。その中で、東大寺に対する人々の思いや、現在まで守り継がれてきたことの素晴らしさを感じ、「東大寺や奈良を大切にしよう」という考えにつながったことは大きな成果だと思う。

・　初めのうちは、「東大寺」といっても特別な思いをもたない児童が多かった。しかし、自分の課題について調査・研究を進めるにつれて、休み時間も使って意欲的に活動する児童が増えた。そして、自分たちの調べたことを「他の人に教えたい」と思うグループが多くなった。また、他のグループが調べたことを知りたいと思う児童も多くなった。現在では、「東大寺」について自分の調べた魅力を堂々と発表できる児童が多数いる。「知る」ことから始め、「調べること」「人物と出会うこと」「人に伝えること」など、自分から対象に関わっていくことで、それを守り伝えたいという思いが強くなると思われる。

・　発表での表現方法として、「ラベリング」、「ナンバーリング」を指導した。５年生の児童にとって初めて出会う表現方法であったので、初めのうちは戸惑っていたが、繰り返し指導を続けるうちに相手にわかりやすく伝える方法であることを理解できたようである。この表現方法を理解した後では、日記にも「ラベリング」、「ナンバーリング」を使うといった表現方法の工夫がみられることから、今回の学習の成果が出ていることが窺える。

第５学年

校区再発見！地域の人々が大切にしてきたもの

― 世界遺産見学をきっかけとした総合的な学習 ―

奈良市立二名小学校　教頭　寒川　茂

１．はじめに

１学期に世界遺産現地見学を実施し、薬師寺、唐招提寺、東大寺、春日大社を見学した。ボランティアガイドの方々の説明を聞き、子どもたちは改めて古都奈良の素晴らしさを実感したようである。

自分たちの住む校区には、薬師寺や東大寺のように有名ではないけれど、昔から大切にされてきたお寺や神社が存在する。そこで、「総合的な学習の時間」において、校区を今一度しっかりと見つめ直し、探究活動を行うことによって、自分たちが住む地域の素晴らしさを再発見していきたい。

２．ねらい

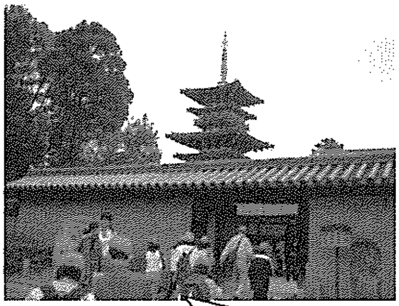
・　地域の人々が大切に守ってきた文化財の素晴らしさや価値を理解し、自分たちが住む地域を愛し大切にしていこうとする態度や心情を育てる。
・　探究的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び・考え、主体的に判断・行動し、問題解決の能力を育てる（「総合的な学習の時間」としてのねらい）。

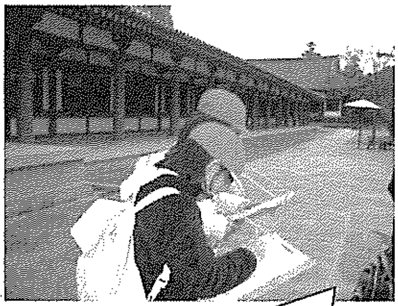
３．学習活動の概要　「総合的な学習の時間」…７５時間

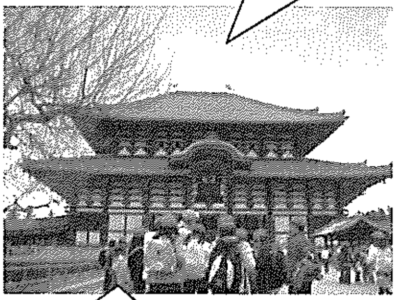
（１学期）

世界遺産現地見学　…　薬師寺・唐招提寺・東大寺・春日大社

いつ見ても
大きいなあ。







たくさんの観光客が来ている。外国の人もたくさんいるなあ。

ボランティアガイドの方の説明は丁寧ですごく分かりやすい。

ガイドの方は奈良のよさを一生懸命伝えてくださっている。

世界遺産見学のまとめと感想

・　ガイドさんは一生懸命私たちに奈良の良さを教えて下さった。
・　東大寺はいつも来ていたが、説明を聞いていろんなことが分かった。
・　自分たちが住んでいる奈良の素晴らしさを改めて知った。すごい所だと思った。
・　ボランティアガイドの方の説明は大変分かりやすく、勉強になった。
・　今度は家族と一緒に来て教えてあげたい。
・　奈良の世界遺産の価値に気付いた。

奈良に住む私たちが世界遺産を
大切にしていきたい。

いつまでも多くの人々から愛
される奈良にしていきたい。

私たちの校区に目を向け
てみよう！

王龍寺！？

杵築神社！？

校区にも、地域の人々が昔からずっと大切にしてきた文化財があるんですよ。
校区を流れる富雄川をはさんで両側にあるお寺と神社を知っていますか。

長い石の階段の
お寺だ！

お祭りやお餅つき大会に
いつも行っている。

家の近くの
神社だ！

王龍寺と杵築神社は、東大寺のように有名ではないけれど、地域の人々が昔から大切にしてきた所です。王龍寺の境内には、奈良市の文化財に指定されているものがあります。

文化財って何？

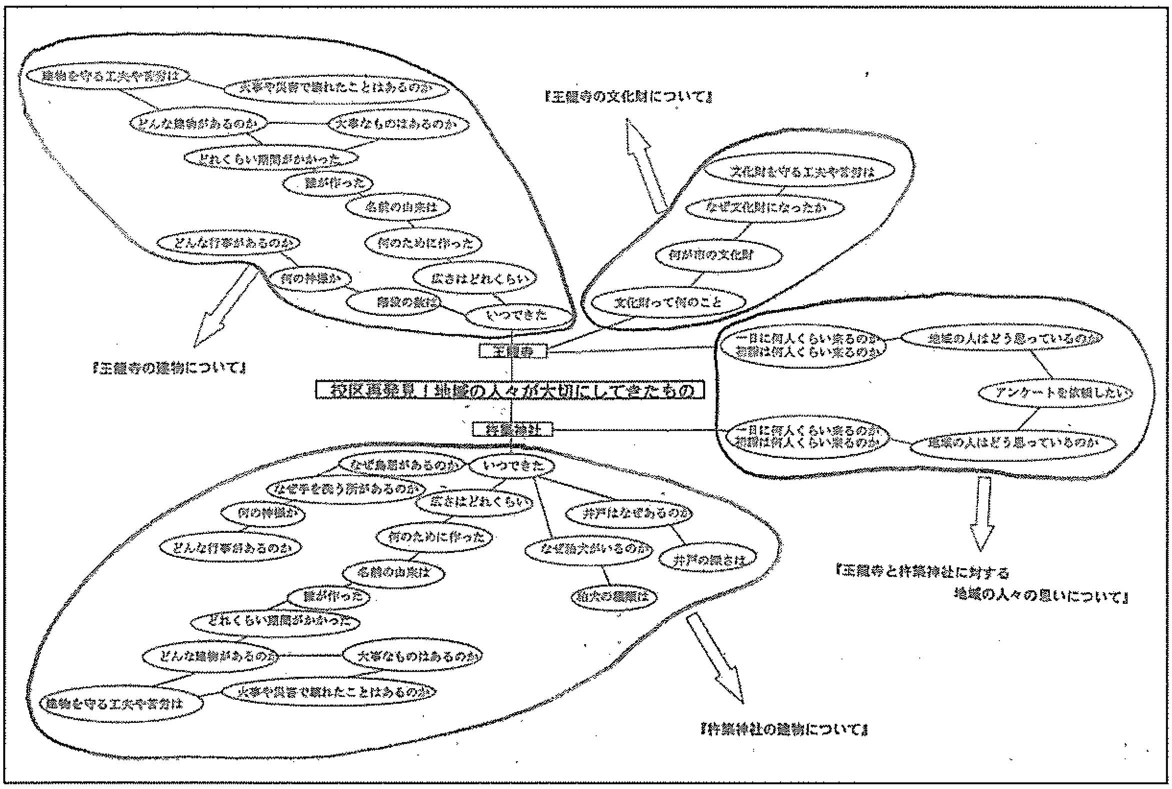
どんな文化財があるのだろう？

地域の人々が昔から大切にしてきた
王龍寺と杵築神社について調べてみたい！

○テーマづくり・課題づくり

みんなで考えたテーマ　…「校区再発見！地域の人々が大切にしてきたもの」

このテーマについて具体的に学習を進めていくために、王龍寺と杵築神社について、調べてみたいこと（課題）をみんなで出し合いウエビングをしよう。



ウエビングのウエブとは、クモの巣という意味で、子どもたちから出た課題をクモの巣のようにつなげていく手法である。完成したウエビング図をもとに、『王龍寺の建物について』『王龍寺の文化財について』『杵築神社の建物について』『王龍寺と杵築神社に対する地域の人々の思いについて』の４つのサブテーマを設定し、子どもたちの興味・関心にそって４つのグループに分かれて探究活動を進めていくことにした。

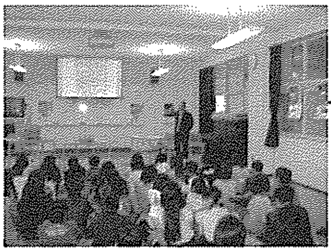
（２学期）

探究活動

○　地域のお年寄りに杵築神社のお話を聞こう

お祭りに
行きたくなった

地域の人にとって
大切な神社なんだ



たくさんの行事があるんだなぁ！

○　王龍寺でお話を聞こう

山門をくぐると奈良市指定文化財のコジイ林。この自然林にはアセビ、ヤマツバキ、ヤマモモなどがあり、木々の根元には多くのシダ類やスギゴケも生えている。木々がうっそうと繁る静かな参道を歩いていると、いろんな鳥の声が聞こえてくる。あちこちの木々の幹には、セミのぬけがらがくっついていた。

石の階段を上りきった本堂付近の草むらには、たくさんのバッタやチョウがいる。
本堂にある磨崖仏も奈良市の指定文化財だ。

コジイの木。
この林が、たくさんの鳥や昆虫のすみかになっている。たくさんの生き物が、助け合って一緒に生活しているんだなぁ。

（資料）

○　奈良市指定文化財「王龍寺境内のコジイ林」（平成 15 年 3 月 6 日指定）
王龍寺の境内地と参道南側を中心に残る自然林。森林の本体はコジイ（ツブラジイ）、ヤブツバキ、アセビ、ヤマモモ、ナナメノキにヒサカキ、ベニシダなどを林床にまじえる照葉樹林で、胸高幹囲 150ｃｍ以上の巨樹も多い。

○　奈良市指定文化財「王龍寺磨崖仏」（昭和 61 年 3 月 4 日指定）
本堂にある大きな花崗岩の正面に十一面観音立像（175ｃｍ）と不動明王立像（85ｃｍ）が彫られている。

奈良市指定文化財のヤマモモ。
古くから「ヤマモモの巨樹」として参拝者に親しまれてきたそうだ。250年もの長い間大切に守られてきたんだ！

（資料）
○　奈良市指定文化財「王龍寺のヤマモモ」（昭和54年5月14日指定）
雄株で樹高約10m。主幹は内部が朽ちて空洞になっているが幹の直径は約2.7m。側幹は3本あって、その最大木は直径約1.7m。樹幹の基部での周囲は約5m。樹齢約250年。

地域の人・お父さん・お母さん・おじいちゃん・おばあちゃんにアンケートを依頼

⇒ 地域の人々にとって王龍寺・杵築神社とは…？

（３学期）

○　まとめ・発信

参観日に発表会をする。

アンケートを依頼した人々に、学習の成果をまとめた冊子を贈る。

お家の人や
先生からのことば

凝縮ポートフォリオを作り学習の足跡とする。

自己評価
相互評価

４．成果と課題

世界遺産現地見学終了後、「今度、家族と来たときは自分が説明してあげたい。」「ガイドさんに教えてもらったことを家に帰ってから家族に教えてあげた。」等の感想にあるように、子どもたちは、ガイドの方々の分かりやすい説明を聞くことにより、改めて奈良の素晴らしさを理解し実感したようである。

見学後は、自分たちの住む地域に目を向けて探究活動を進めていった。課題づくりの場面では、ウエビングの手法を用いた。教室の黒板に子どもたちから出た課題を書きつなげていくことにより、これから探究していく課題をクラスで共有することができ、課題というものをどう考えてよいか分からなかった子どもたちへの支援の場となった。学習を進めていくうちに、これまで何気なく横を通ったり遊んだりしていた神社やお寺が、素晴らしい所であることがだんだんと分かってきた。特に王龍寺の学習では、コジイやヤマモモに焦点を当てることで、植物や動物の生態系への関心を高めたいと考えた。「王龍寺の参道にあるきれいな林が無くならないように近くに住んでいる私たちが守っていかなければならない。」「いつまでも、たくさんの鳥や虫がやって来るお寺や神社の森であってほしい。」これらは、学習終了後の子どもたちの感想である。

学習した事柄をより身近な形で生活に生かしていくためには、地域にしっかりと目を向け、子どもたち自身が地域や地域の人々と積極的に関わりながら自分の足で調査を繰り返していけるような学習素材を見つけることが大切であると考える。今後、子どもたちそれぞれが、自分にできることは何かを考え、地域の人々が昔から大切にしてきたものをしっかり守っていってくれることを期待している。

小学校の世界遺産学習は、総合的な学習の時間に行うことが最も現実的ではないかと考える。その場合、内容だけの学習で終わってしまうことなく、総合的な学習の時間のねらいである方法知を身に付けるべく探究的な学習の要素を欠落させぬように留意していきたい。

第６学年

伏見のここがすごい

～伏見遺産発見 、発信！～

奈良市立伏見小学校　堀内敏一

１．はじめに

５年生では世界遺産現地学習を行ったが、６年生でも世界遺産学習を行い、奈良の良さを知り郷土に愛着をもてるように学習を進めた。とりわけ、酸性雨による東大寺の八角灯籠の劣化問題から、この貴重な奈良の世界遺産を守るためにどんなことが出来るのかを考えた。

本単元ではこの世界遺産学習を起点にして、自分たちの実際の生活の場である伏見に目を向け、伏見の素晴らしさをみつけ、調べて、まとめて、多くの人々に伝えることを目的としている。

校区には、「大茶盛り」で有名な南都七大寺の一つ西大寺や、「行基の寺」と言われる喜光寺、そして、菅原道真ゆかりの菅原天満宮がある。菅原天満宮と伏見小学校の関わりは深く、校章の梅は菅原道真が好んだ梅をモチーフしている。また、校庭には、道真の祖先である野見宿禰にまつわる石碑が残されている。これらの校区の文化的・歴史的な事象や事物を調べ子ども達自身で様々な発見をすることで、伏見の素晴らしさを実感出来るものと思われる。そして、伏見の町を好きになり、伏見を良くしていこうとする姿勢が身に付くものと考えられる。また、本校の研究テーマである「子どもが活きる授業づくり」～思いを伝え合う力の育成～についても、実際に自分の目で見、手で触れる体験的な学習を通して学習意欲が高まることが期待される。調査活動では地域の人に直接話を聞き、人とふれあうことでコミュニケーション力も高まるものと思われる。

身近な子ども達の生活の場を学習の場とし、意欲的に学習に取り組ませ、人と関わる力を育てるという面からも、本題材は十分に価値のある題材と考える。

２．ねらい

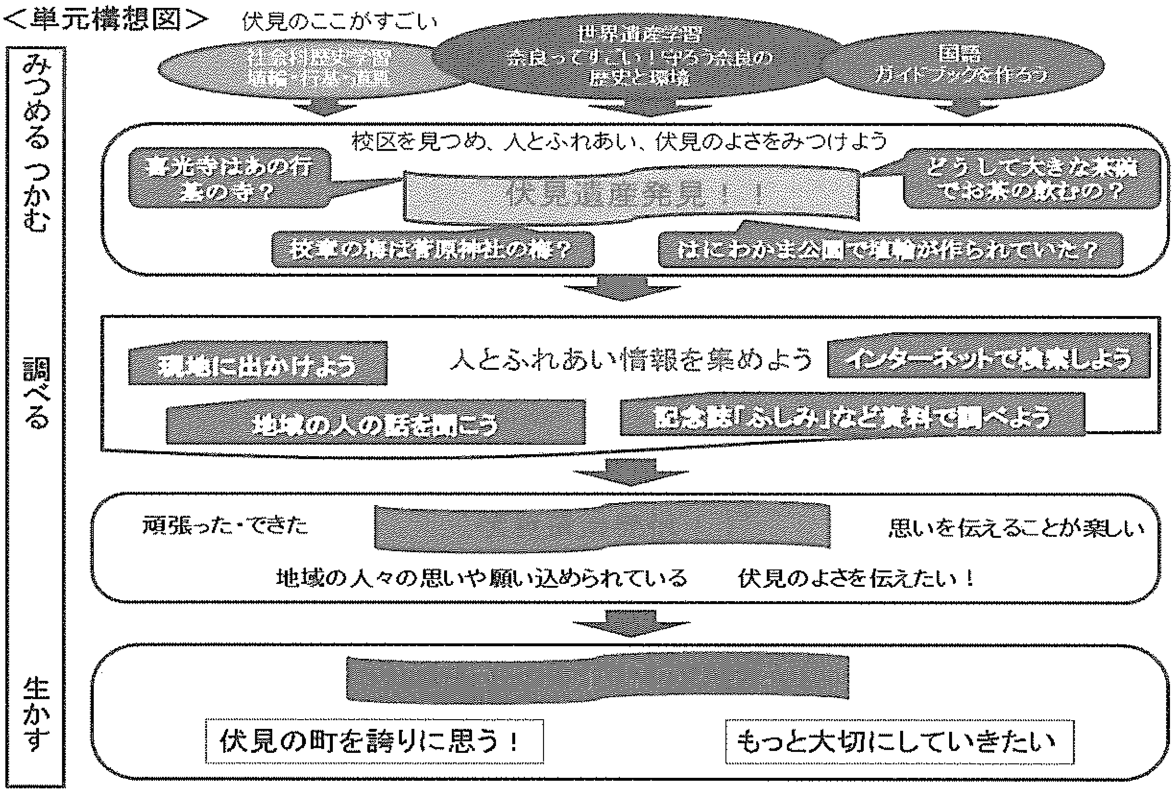
・　伏見をみつめ、課題をみつけ、人とふれあいながら調査追究活動ができる。
・　調査活動から得た情報を効果的にまとめ、伏見の良さを知り、進んで表現活動ができる。
・　伏見に愛着を持ち、進んで地域に貢献しようとする態度を身に付ける。
・　学習活動を通して自分の成長に気づくことができる。

３．学習活動の概要

「みつける」「つかむ」「調べる」「生かす」の４つの学習過程を大切にして本単元の学習を進めていく。そこで問題をじっくりとみつけ追究すべき価値のある課題と出会うまでを「みつめる」、仲間と共に学習課題を練り合い決定して学習計画を立てる過程を「つかむ」、調査追究しまとめる過程を「調べる」、そしてそれを伝え合い地域に生かし自分の成長に気づく過程を「生かす」として、過程ごとに児童につけたい力を設

定して学習の様子を見取っていく。

＜単元構想図＞



・「みつめる」

「伏見のここがすごい！伏見遺産発見！！」をスローガンにして、１２０周年記念誌「伏見」やインターネット、聞き取り調査、現地見学を繰り返し、校区の良さをじっくりと探る目を養っていきたい。興味や関心が持続するようにワークシートの工夫や社会科で学習した行基や道真のことも関連づけていきたい。また、より問題意識を焦点化するためにデジタルカメラを用い、自分の興味や関心を写真という形で具体的に表せるようにしたい。

・「つかむ」

ここではＫＪ法やウェビングを用い自分の考えを整理し学習課題を絞り込んでいく。一人一人の思いを大切にするため、ワークシート等の提出物や発言から児童の思いを受け止め、指導助言する。また、学習効果を上げるグループを構成して、互いに学習課題を練り合い、よりよい課題を設定させる。ここでは、小グループで意見を出し合えるだけの話し合いの技能と課題に対する十分な知識が必要である。また、お互いに気軽に話せる人間関係を築くことも大切である。

課題設定後は、今後の活動予定を話し合わせる。自分たちの集めた情報を元に学習活動の見通しを立てさせることで、自主的な活動を促進させたい。

・「調べる」

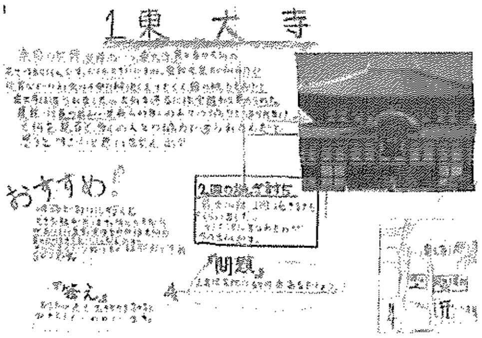
出来るだけ多くの人と関わり調査することでコミュニケーション力を高めると共に自分たちだけの特別な情報を発見させたい。地域に埋もれるスクープを見つけ出すことで、調査する楽しさを味わい、感動を人に伝えようとす情報発信の原動力にしたい。

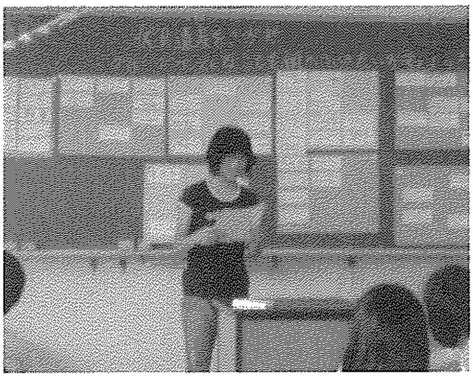
記憶よりも記録、調べたことはその都度まとめ、定期的にグループごとに掲示資料を作っていく。こうすることで互いの調べ方や活動状況をみんなに知らせていく。

・「生かす」

発見したことや感動したことを掲示資料や発表資料にまとめ、多くの人に知らせる。ここでは、誰にどんな方法で何を何のために伝えたいのかをはっきりとさせて表現活動をさせたい。自分の思いが伝わる楽しさと充実感を持たせ次の活動の意欲を高めると共に自分を見つめ直し自分の頑張りや良さに気づかせることが大切である。自己評価カードや相互評価カードなどワークシートの工夫をしていきたい。また、できればホームページ等で地域の人々に情報を発信できるようにしていきたい。

全学習活動の概要（全４５時間）

	主な学習活動	学習への指導・支援	評価
地域をみつめる	1　世界遺産のガイドブックを作ろう。（国語） ・　５年生の世界遺産学習を振り返り今の５年生の役に立つガイド　ブックを作る。 ・　互いのガイドブックを見せ合い改善点を話し合う。  	・　国語のガイドブック作りのテーマを世界遺産の紹介に絞り作成することで、奈良のよさを再確認させる。 ・　ビデオ「大仏様がおこってる」を見せ、既習の学習を環境や保存という視点で見つめる機会をつくる。	・　奈良市の世界遺産の素晴らしさを知る。 ・　課題をみつけ調査することの大切さに気づくことができる。
		奈良には、たくさんの世界遺産があることを改めて実感しました。たくさんの人が関わり、守られてきたことを知りました。	
課題をつかむ	2　伏見校区の文化や歴史に目を向け伏見のいいところをみつけよう。 ・　伏見の素晴らしいところを伏見遺産とし、それに相応しいものを出し合う。 ・　お家の人や地域の人に伏見遺産に相応しいところについてインタビューする。	・　世界遺産学習と同じようによく調べていくと伏見にもすごい発見があるという思いをもたせる。 ・　自分達の予想と比べて考えさせる。	・　校区を見つめ、進んで課題をみつけようとする。 ・　地域の人の考えを知ることができる。
	ほとんどの人が、伏見遺産に西大寺や喜光寺、菅原天満宮をあげた。大茶盛りや大仏殿のひな形のことは知っていたが、その他のことは意外と知られていなかった。調べて、みんなに伝えていこう。		

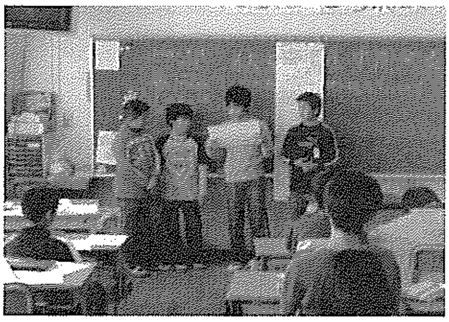
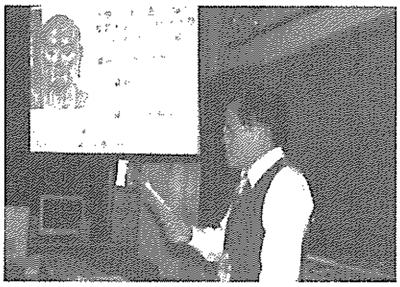
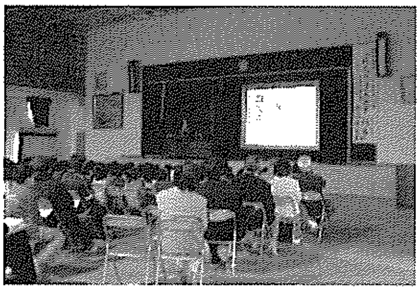
	・ 興味や関心が同じ者同士でグループを作り、課題を絞り込んでいく。 	・ ウェビングを書かせ、発想を豊かにさせる。 ・ 西大寺や喜光寺、菅原天満宮など興味を示した所の多様な写真を掲示す	・ 課題を決めその理由も説明することができる。

埴輪窯公園を普通の公園と思っている人が多かった。昔、どんなふうにしてここで埴輪を焼いていたのか知りたい。

	・ 西大寺や菅原天満宮へ見学に行く。 	・ デジタルカメラで撮影することで、興味や関心を焦点化させる。 	・ 追究する課題に興味を持ったり、必要な情報を集めたりできる。

西大寺のお寺のマークは、私の保育園のマークと同じ、何か意味があるのだろうか。伏見小学校の校章の梅のマークにも意味があるから。

調べ伝え合う	・ グループごとに役割を決め、設定した課題について調べる。	・ 書籍やホームページ、冊子などの資料を紹介し調べ方を示唆する。 ・ 毎時間ごとに調べたことをワークに記録させる	・ 調査したことを記録し資料として残すことができる。
	・ 喜光寺、菅原天満宮に見学に行きお話を聞いたり質問したりする。 	・ 調べて分からなかったことを整理して、問題意識を持たせておく。 	・ 欲しい情報を集めることができる。
	・ 今後の活動予定を立てる。	・ これからの大まかな活動内容や総合の時間の取り方を示す。	・ 今後の活動の見通しをもつことができる。

	・　調べたことをグループごとに画用紙にまとめ中間発表会を開く。 	＜道真公グループさんへ＞ 私たちのグループも飛び梅伝説のことを調べているけど、道真さんの歌のことは書いていなかったから、その説明が入っていてよかったと思う。	・　それぞれのグループと意見交換し今後の励みにすることができる。
	・　ゲストティーチャーから行基菩薩についてのお話を聞く。 	子どもの頃から行基さんは、役人や天皇まで感動させる話をするなんて、すごいと思いました。	・　人の話から自分の課題に関係のある情報を集めることができる。
	・　１３０周年記念講演会で叡尊さんについてのお話を聞く。 	叡尊さんは、正しい仏教を盛んにして、一人だけではなくてみんなで幸せになろうとした。かつて伏見には、こんなすごい人がいた。	・　講師の方の思いや生き方を感じることができる。
	・　伏見遺産選定の基準について話し合う。	・　多くの情報から必要な情報を選択するための条件を考えさせる。	・　情報を絞り込む条件を考えることができる。
	・　発表資料をつくる。	・発表用の資料としての写真や絵の使い方や小見出しに工夫させる。	・　情報を選択し効果的な資料を作ることが出来る。
	・　参観日に、保護者に伏見遺産を発表する。	・　より多くの人に伏見のよさを分かってもらおうとする使命感をもたせる	・　思いを伝えることができる。

	・ 学年でポスターセッションを行い伏見遺産について意見交換をする。 	・ １組が発表し、２組，３組の子ども達が意見や質問をし互いに伏見遺産についての考えを深めさせる。	・ 互いに意見を出し交流することができる。
	・ 凝縮ポートフォリオを作り、伏見遺産研究の成果をまとめ、伏見のよさや自分の成長に気付く。	・ 絵や写真、小見出し、文章等を効果的に使い、学習の成果を分かりやすくまとめさせる。	・ 伏見に誇りを持ち、よりよくしていこうとする態度を身に付ける。

４．成果と課題

・ 伏見を見つめる段階で現地見学やワークシートの工夫、写真撮影と時間をかけて課題を設定させた。この過程で追究すべき課題の練り合いができて目的意識をもって調べることができたと思われる。今後は、集めた情報をネットワーク化して総合的に物事を見つめ、自分なりの考えがもてるようにしていきたい。

・ 中間発表会では、発表の技能面だけでなく、自分たちの調べた内容と比較して質問したり意見を出したりするようになってきた。これは、課題が違っても同じように学習（見学や講演）し、共通の体験をした成果と考えられる。

・ 地域の人々との交流は不十分であったが、関わった人々から多くの情報を集めることができた。この活動を通して人と関わる力の高まりが見られた。また、その人達の伏見に対する思いにもふれることができた。

・ 行基や叡尊、菅原道真と伏見にまつわる先人の偉大さを知ることができてきた。これを伏見の素晴らしさと感じ取り伏見に誇りをもてるようになった。

・ 参観日授業での発表会や学年でのポスターセッションなど目標を明確にすることで、意欲的に表現活動に取り組めた。

第６学年

未来に残したい『美しい奈良』の風景を見つけよう

奈良市立済美小学校　教諭　大西　浩明

１．はじめに

江戸時代中期、約 140 年間雨ざらしになっていた東大寺大仏の復興がなり、奈良は一大観光地となっていく。その中でガイドブック的な役割を果たしたのが「南都八景」である。その八景とは、「春日野の鹿」、「猿沢池の月」、「佐保川の蛍」、「南円堂の藤」、「東大寺の鐘」、「三笠山の雪」、「雲井阪の雨」、「轟橋の旅人」である。この中には、現在においても当時のままで見られるものもあるが、様々な要因で見られなくなっているものもある。『美しい風景』は、どの場所でも必ずあり、その地域のかけがえのない財産である。にもかかわらず、時を経て見られなくなってしまうのは、その地域の人の「心の損失」といっても過言ではない。そこで、奈良の『美しい風景』とは、どこのどんな風景なのかを見つけることで新たな奈良の財産に気づくとともに、昔の「南都八景」のように見られなくなるということが起こらないように、自分たちが選んだ「新南都八景」をより多くの人に知ってもらい、奈良への誇りと愛着をもてるようにしたいと考えた。

２．ねらい

- 南都八景を調べることを契機として、奈良の様々なことを調べたり、未来に残したい『美しい奈良』の風景についてアンケート調査をしたり考えたりする活動を通して、新たな奈良の財産に気づく。
- 調べたことを効果的な方法でまとめたり、友だちと意見を交流したりすることを通して、地域に対する自分の考えを練り上げ、それらを分かりやすく伝えることができる。
- 身近な地域に誇りをもち、今後自分が積極的に地域と関わりながらよりよく生きようとする意欲と態度をもつ。

３．学習活動の概要（全６０時間）

現地へも行ってみよう。

江戸のころ、「南都八景」というのがあったのを知ってる？　⇒　調べてみよう

猿沢池の月
- 采女伝説というのがあるんだ。
- 采女祭りのときに来たいな。

南円堂の藤
- 藤が咲いていたらきれいだろうな。
- 花がきれいな場所ってあるなあ。

春日野の鹿
- 奈良の鹿はいつからいるんだろう？
- 奈良公園ってやっぱりいいなあ。

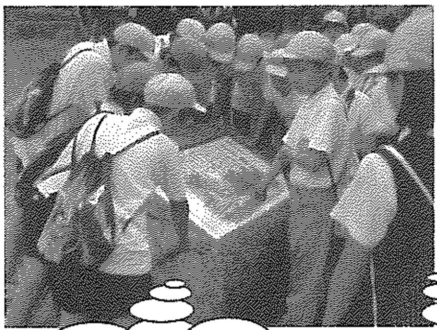
三笠山の雪
- 最近はあまり奈良に雪が積もらない。
- 奈良も温暖化してきているのかな。

東大寺の鐘
- 実際に鐘の音を聞いてみたいな。
- 奈良には国宝がいっぱいあるだろうな。

佐保川の蛍
- 昔は蛍がいたのに残念だなあ。
- なんとか蛍を佐保川に取り戻したいなあ。

雲井阪の雨
- 昔は雨が降ると、水墨画のようだったとか。
- ずいぶん様子が変わってしまったんだろうな。

轟橋の旅人
- 橋はいったいどこにあったのかな。
- 多くの観光客が奈良に来ていたんだな。



奈良のことでも知らないことがたくさんあるなあ。

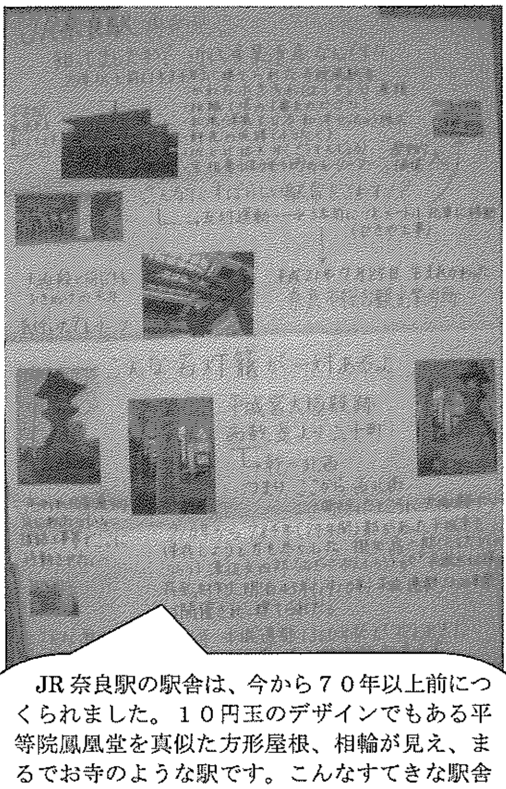
昔から奈良には美しい風景がたくさんあったんだな。

今はもう見られなくなったものがあるのが残念だな。

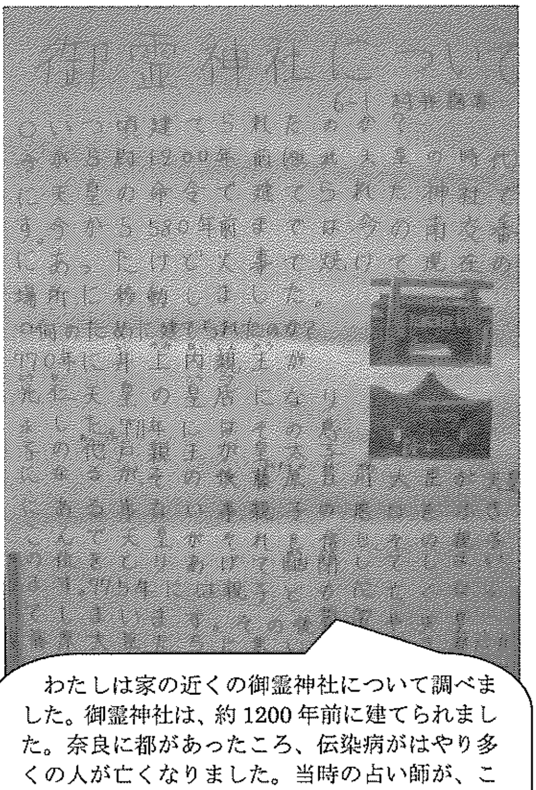
夏休みの自由研究

『済美のまち　奈良のまち　再発見！』

○奈良にある国宝や重要文化財　○済美の町名の由来　○奈良公園の鹿
○若草山のすべて　○花の寺　○まんじゅうの神様　○奈良の伝説
○平城遷都 1300 年祭　○奈良を歌った短歌　○佐保川のホタル　○大仏蛍
○奈良のみやげ　○奈良のキャラクター　○江戸のころの奈良観光　など



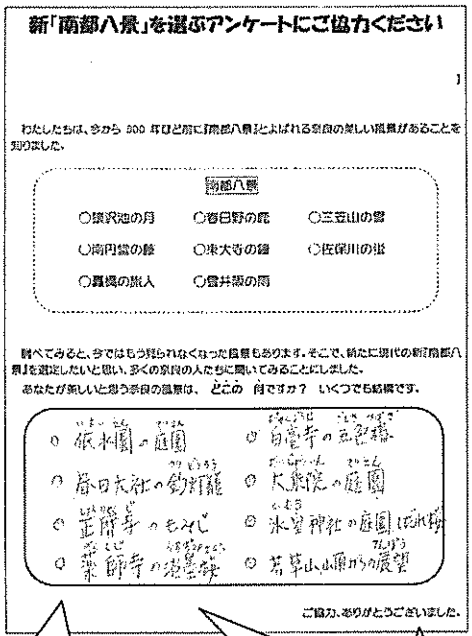
JR 奈良駅の駅舎は、今から７０年以上前につくられました。１０円玉のデザインでもある平等院鳳凰堂を真似た方形屋根、相輪が見え、まるでお寺のような駅です。こんなすてきな駅舎が、ＪＲ奈良駅を新しくする工事のために取り壊される予定でしたが、反対運動が起こり、保存されることになりました。３年前、北東へそのまま１８ｍ移動する大工事が行われ、現在では観光案内所として生まれ変わりました。奈良の人々によってこんな遺産も守られたのです。



わたしは家の近くの御霊神社について調べました。御霊神社は、約 1200 年前に建てられました。奈良に都があったころ、伝染病がはやり多くの人が亡くなりました。当時の占い師が、これは天皇の家族が８人も不幸な死に方をした、そのたたりであると言ったので、その霊をしずめるために御霊神社が建てられました。もとは、今の南交番のところにあったそうですが、580 年ほど前に火事で焼け、今の場所に移ったそうです。自分の家の近くにある神社にこんなすごい歴史があるなんてびっくりしました。

現代の「新南都八景」を選定しよう

たくさんの人（奈良市に住んでいる 20 才以上の人）にアンケートをとって調べよう。


新「南都八景」を選ぶアンケートにご協力ください

わたしたちは、今から 600 年ほど前に「南都八景」とよばれる奈良の美しい風景があることを知りました。

南都八景

○猿沢池の月　○春日野の鹿　○三笠山の雪
○南円堂の藤　○東大寺の鐘　○佐保川の蛍
○轟橋の旅人　○雲井坂の雨

調べてみると、今ではもう見られなくなった風景もあります。そこで、新たに現代の「新南都八景」を選定したいと思い、多くの奈良の人たちに聞いてみることにしました。
あなたが美しいと思う奈良の風景は、どこの何ですか？ いくつでも結構です。

○ 依水園の庭園　○ 白毫寺の五色椿
○ 春日大社の釣灯籠　○ 大乗院の庭園
○ 正暦寺のもみじ　○ 氷室神社の庭園しだれ桜
○ 薬師寺の[illegible]　○ 若草山山頂からの展望

ご協力、ありがとうございました。

家族に聞こう。

近所の人に聞こう。

塾の先生に聞こう。

816 人から協力を得る。（175 の項目が見つかる）

1	佐保川の桜	136
2	奈良公園の燈花会	88
3	奈良公園の鹿（鹿寄せ・角きり）	84
4	若草山山頂からの奈良のまち・夜景・夕日	76
5	若草山の山焼き	73
6	奈良町の格子窓・静けさ	47
7	二月堂からの夕焼け・奈良のまち	42
8	奈良公園の紅葉	41
9	氷室神社のしだれ桜	40
10	五重塔のライトアップ・青空	39
11	猿沢池の月（采女祭り）	36
12	大池からの薬師寺の塔	36
13	二月堂のお水取り	29
14	般若寺のコスモス	25
15	浮見堂の朝もや	24
16	南円堂の藤	23
17	春日大社の万燈籠	22
18	飛火野の朝	22
19	大極殿のススキ	20
20	春日山原始の森・鳥の鳴き声・紅葉	19
21	飛火野からの大文字送り火	17
22	朱雀門の朱	16
23	朱雀門の夕焼け	15
24	庚申さんの身代わり猿	14
25	奈良公園・若草山の新緑	14
26	猿沢池の柳	13
27	白毫寺の椿・萩	13
28	春日大社の砂ずりの藤	13
29	奈良阪からの大仏殿	13
30	浮見堂の桜	12
31	大仏様のお顔開き	12
32	浮見堂の夜	11
33	大仏殿の蛍	11
⋮		
173	ウワナベ・コナベ古墳の水鳥	1
174	大平尾神社のイチョウ	1
175	興福院への桜並木	1

・175 もあるなんて･･･。
・身近なところにも美しい風景はあるんだ。
・同じ場所でも季節や時間、天気が変わればちがった美しさがあるんだな。

アンケート上位の風景から、一人一つの風景をインターネットなどから見つけ、プリントアウトしておく。

⇩

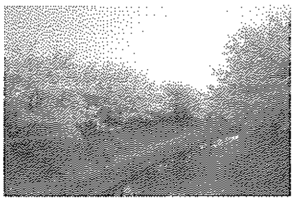
みんなで「新南都八景」を決めよう

「佐保川の桜」は 1 位だから絶対入れます。

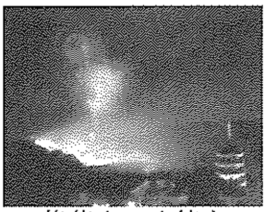
「若草山の山焼き」は観光客も多いから入れます。

「燈花会」は、歴史は新しいけど、奈良の夏の代表的な行事になっているから。

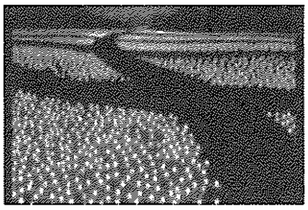
子どもたちが選定した「新南都八景」



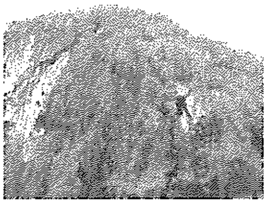
佐保川の桜並木



若草山の山焼き

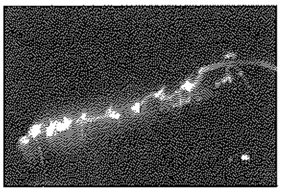


奈良公園の燈花会



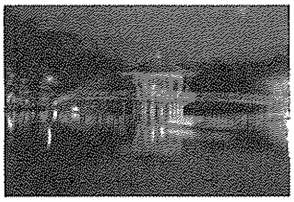
氷室神社のしだれ桜

奈良公園の紅葉



二月堂のお水取り

五重塔の青空



浮見堂の夜

この美しい奈良をこのまま未来に残さなければ。

そのためには、より多くの人たちにこの風景を伝えたい。

奈良は「美しい」ところがたくさんあるすてきなところだ。

奈良に住んでいる多くの人たちに知らせたい。
奈良にやって来る観光客にも知らせたい。

「新南都八景」を多くの人に知ってもらおう

地域の人を招いた「ありがとう集会」において
(2009. 11. 10　本校)

世界遺産学習全国プレサミットにおいて
(2009. 12. 23　奈良教育大学)

4．成果と今後の課題

「新南都八景」を選定するという作業は、自分たちの身近な地域にはまだまだ知らないことが多いことや、見ているようで見ていないことがあまりにも多いことなどに気づくとともに、奈良にはこんなにも美しい風景がたくさんあるんだという誇りをもつことができた。「美しい風景を見つける」という活動は、どの地域においてもできることである。ふだん何気なく目にしている景色も、実はとてもすばらしく、美しい風景なんだということが実感できれば、自分の住む地域に誇りと愛着が生まれる。そのためには、今回816人にアンケートをとったように、外からのより多くの目が必要であると思う。また、そのことで「奈良を愛している人がこんなにもたくさんいるんだなあ。」という実感ができ、自分もそれに続いていこうとする能動的な態度に発展していくと思われる。

第６学年

世界遺産を大切にできる社会をつくる

～公慶上人の大仏再興を通して～

奈良市立佐保台小学校　教諭　西谷　隆詞

１．はじめに

５年生の時に世界遺産現地見学を実施し、なら観光ボランティアガイドの方から説明を受けながら平城宮跡、東大寺、奈良国立博物館を見学した。学校から比較的近くにある世界遺産の価値を再認識するいい機会になったようで、子どもたちは見学した内容に、自分たちが調べた内容をくわえ佐保台フェスティバル（文化祭的行事）において他学年、保護者、地域に向けて発表した。

しかし、発表の内容を確認すると、身近な場所に世界遺産があるという喜びは伝わってくるが、その世界遺産のすばらしさ、世界遺産を守ってきた人々の思いを理解しているとは言えないものであった。子どもたちの感想等を見ていると、身近すぎるがゆえにすばらしさを理解するところにまでいたらないように思われた。

そこで、今回、江戸時代に大仏を再興した公慶上人を通して世界遺産のすばらしさにせまることを考えた。大仏は５年の見学の際、子どもたちが一番興味を持った世界遺産である。また歴史学習のなかでも聖武天皇の思いとともにくわしく学習する教材であり、関心をもって学習できると思われる。

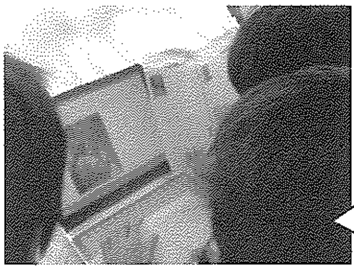
世界遺産を守った人について学び、世界遺産のすばらしさ、世界遺産があることのすばらしさを理解し、大切にできる社会をつくる一員になろうとする思いをもたせることができればと思う。

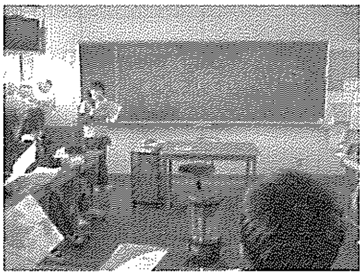
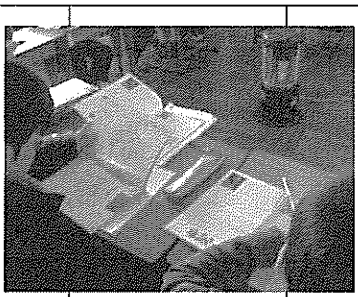
２．ねらい

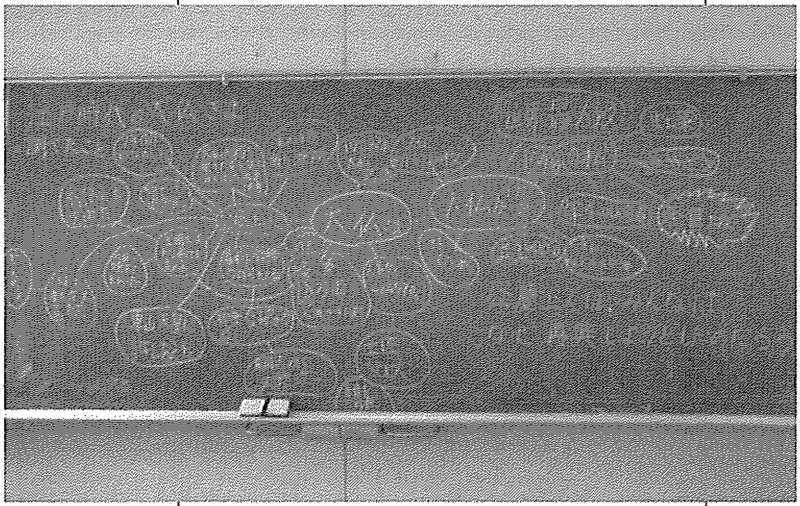
・奈良の世界遺産を守った人々のことを知り、世界遺産を大切に守っていくための自分の考えをもつ。
・世界遺産を大切にできる社会をつくることに参画する意識を育てる。

３．学習活動の概要（全８時間）

主な学習活動	学習への支援	評価	備考
１．江戸時代の大仏がどのような様子だったか、想像する。（１時間）	・社会科で学習した奈良時代～江戸時代の様子、なぜ大仏が作られたかから推測させる。 ・推測した内容を江戸時代のガイドになったつもりで発表し交流させる。	江戸時代の大仏の様子について自分の考えをもち、発表できる。	社会科教科書
日本を守る大仏様なので建物の中で大事にされている。			

観光地になっていて、しかせんべいも売られている。（皇居のある京都に近いので）聖武天皇のことが解説されている。			
仏教中心の国作りという考え方は薄れていたが、大切にされ観光地になっていた。			
世界遺産である大仏さんは、当然、いつの時代でも大切にされて守られている。			
2．江戸時代の再興まで、大仏は崩れていて大仏殿もなかったことを知る。（1時間） 昔は大仏殿がなかった？	・大仏のわらべうたを紹介し、なぜそのような歌が作られたのか考えさせる。 5年生の世界遺産学習の時に、松永久秀に焼かれたって言っていた。 ・公慶上人による大仏再[illegible]際の開眼供 大仏さんは江戸時代に作り直された。	わらべうたから江戸時代の大仏の様子に気づくことができる。	わらべうたのプリント インターネット上の写真資料
大仏さんは当たり前のようにただあったのではなく、作り直した人がいた。			
3．江戸時代の再興は誰がどのようにして行ったのかを調べる。（1時間） 公慶上人という名前が何度も出てきた。	・インターネットを使って江戸時代の大仏再興について調べるようにする。  大仏殿の梁になる木は、九州から多くの人の手で運ばれてきた。 その木は自分たちの住むすぐ近くを通って運ばれている。 自分の先祖も運ぶのに参加しているかもしれない	江戸時代の大仏再興について意欲的に調べることができる	「奈良大好き世界遺産学習」インターネット
大仏さんは多くの人々の協力があって再興され守られてきた。			
4．江戸時代の大仏再興について調べた内容を交流する。（1時間）	・それぞれの調べた中からキーワードとなる言葉を出し、黒板に書き込みながら発表させる。	調べた内容を自分の言葉で発表することができる。	



５．公慶上人を扱ったテレビ番組を見る。（２時間）	・調べたことと、テレビ番組から知ったことから、公慶上人や大仏再興に協力した人々の気持ちについて意見をもたせる。	公慶上人や大仏再興に協力した人々の気持ちを考えることができる。	NHK総合ヒストリア「奈良の大仏奇跡の復活劇～それは少年の涙から始まった～」
６．公慶上人や協力した人々は、なぜ大仏を再興しようとしたか意見をもつ。（１時間）	・公慶上人や協力した人々の気持ちについて前時でもった意見を出し合い、話し合わせる。	なぜ大仏を再興しようとしたかについて自分の考えをもつことができる。	

公慶上人は、今までお世話になった人たちに恩返しをするつもりだったと思います。…みんなは寄付をすることなどで大仏とつながれる、自分にも何かできると思っていたと思います。

大仏殿を作ることに関われるのは誇りだと思って、みんな手伝ったのだと思います。

ただ大仏様ができたらいいだけでなく、皆の思いを集めて大仏様を作りたいと思ったのだと思います。みんなも自分が動いて、みんなと力を合わせればできると思ったのだと思います。

朽ち果てた大仏も公慶の心を動かしたと思うけど、元気がなかった国を元気づけようとして、聖武天皇と同じようにみんなで協力してつくったと思います。

公慶上人はみんなで協力することが大事だと考え、協力した人々はそれぞれが自分にできることで協力しようと思った。			
7．これからも世界遺産を守っていける社会を作るため、自分たちにできることは何か考える。（1時間）	・世界遺産を守るために、今の自分ならどんなことができるかを考えるようにする。	世界遺産を守るために、自分がどんなことができるかを考えることができる。	

大仏と大仏のすごした歴史を後世へと残していかなくてはいけない。そのためには戦争をしてはいけない。

それぞれの信じる宗教を尊重できる社会にすることが大切だと思う。

戦争をしないことが大事だと思う。政治への関心を高め、現状を伝えられる人に伝えるべきだと思う。

これからも世界遺産を大切にしていくために、自分たちにできることは何だろう。

- 社会に関心をもつ、ニュースを見る。
- 他の国とも仲良くし、文化や宗教を理解する。
- 学んだこと考えたことを知らせていく。環境や平和の大切さについてそれぞれができることを考える。
- おとなになったら選挙に行く。
- 家族や友だち、身近な人に学んだことを知ってもらう。

４．成果と課題

今回の学習を行って、子どもたちは世界遺産を守ることのできる社会のすばらしさに気付くとともに、世界遺産はただそこにあるのではなく、守り抜いてきた多くの人々がいることにも気付くことができた。

だから、これからの世界遺産は、自分たちが守っていかなくてはいけないものであることに気づき、守っていく一員として自分に何ができるのかを考えることができた。

また、社会科で第二次世界大戦について学んだ直後だったこともあって、世界遺産を守り続けるためには、平和な社会を築くことが大切だということも再認識したようである。

今回、世界遺産について関心をもった子どもたちであるが、その関心が持続できるかどうかは今後の課題である。小中が連携し明確な指導計画の元に世界遺産学習を実施できれば、関心を持続し、自分たちの暮らす地域や社会に一層の愛着と誇りをもつことができるようになると考えるところである。

中学校

ふるさとに夢と誇りを持とう

－地域の支援を受けて－

奈良市立月ヶ瀬中学校　教諭　井本章子

1. はじめに

本校は、奈良市の北東部に位置し、名勝月ヶ瀬梅渓(ばいけい)をはじめ、豊かな自然に囲まれた、生徒数４３名の小規模校である。江戸時代から「月ヶ瀬梅渓」として世に知られ、多数の文人墨客が訪れたことでも有名である。しかしダム建設により梅渓が変貌し観光客は減少、若い世代が都市に流失し、人口減少が進んでいる。地域は人情も厚く、支援を受けやすい環境である。１４年間続いている本校のアルミ缶回収活動は地域あげての取り組みとして定着し、環境保全や福祉活動に成果が上がっている。このようなさまざまな人やものとの出会いの中で歴史や産業、文化の継承、環境保護に取り組んでいる。

その中で「ふるさと月ヶ瀬の良さを知り、夢と誇りを持とう」という取り組みを行ってきた。これは地元郷土史家で本校の校長であった稲葉長輝先生の支援を受けている。歴史・文化遺産やすばらしい景観、地域の人の温かさに触れる中で、ふるさとに誇りを持ってほしいという願いから始まった。またこの地を訪れた有名な方やふるさとを守り育ててきた先人を知ることで、人間としての生き方を学び、夢を持つ人間に育ってほしいという思いもある。

先生は、ライフワークとして郷土研究に取り組まれ、現在も後世に伝えていく活動をされている。まさにＥＳＤ（持続発展教育）そのものである。私たちもそれを受け継ぎ、郷土に誇りを持ち、守り育てていく人間でありたい。

2. ねらい

①ふるさと月ヶ瀬の歴史・文化遺産を通じて、良さに気づき誇りを持つ。
Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ　ａｂｏｕｔ　Ｗｏｒｌｄ　Ｈｅｒｉｔａｇｅ

②さまざまな人の生き方、仕事に触れ自分も夢を持ち生きていこうとする態度を育てる。
Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ　ｔｈｒｏｕｇｈ　Ｗｏｒｌｄ　Ｈｅｒｉｔａｇｅ

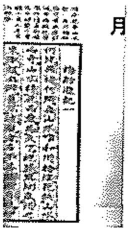
③ふるさとの良さをまとめ発信したり、守っていこうとする主体的な態度を育てる。
Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ　ｆｏｒ　Ｗｏｒｌｄ　Ｈｅｒｉｔａｇｅ

3. 学習活動の概要　（全40時間）

①ふるさと月ヶ瀬の歴史・文化遺産を通じて、良さに気づき誇りを持つ。

○「月ヶ瀬の良さを知り誇りと夢を持とう。」稲葉先生講演　全校総合的な学習の時間
月ヶ瀬を訪れた文人墨客、守ってきた地域の先人、月ヶ瀬に深く関わりのある人の話を聞く。ふるさと学習のオリエンテーションとして、興味・関心を持たせる。

ふるさとの先人たちは、苦労して、この景色を守りました。文化の香りを絶やすことなくこられたのだよ。君たちも、ふるさと月ヶ瀬に誇りを持ち、夢を持って進んでいってほしい。

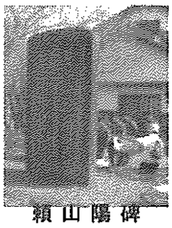


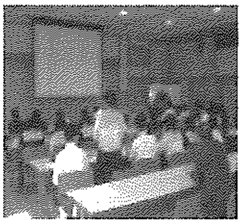
月瀬記勝　斉藤拙堂

《講演のおもな内容》
〈月ヶ瀬のキャッチフレーズ〉
・月ヶ瀬村民憲章
「花と緑と水に恵まれた自然の中で、名勝月ヶ瀬梅林の歴史と共に、すぐれた伝統と豊かな人情を育ててきました。…」
・「夢・未来・誇りを持てる月ヶ瀬の郷」－月ヶ瀬公民館前の碑
・「山と水、清き天下の梅の里」－元東大寺管長の句

〈月ヶ瀬梅渓の功労者と建碑〉
〈月ヶ瀬出身の先輩、有名人〉

月ヶ瀬の歴史、文化について先生の話に合わせＰＰをつくり、紹介する。美しいだけではない、多数の文人が訪れ、文化の薫り高かったふるさと、それを守ってきた人、夢を持ち、頑張ってこられた先人。今も研究し伝えてくださる稲葉先生。聞き取りシートを用意し、講演後に生徒の感想を発表させて、皆の思いを共感させる。事後には感想文を書き、ふるさと学習のオリエンテーションとした。


頼山陽碑



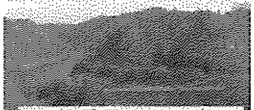
初めて稲葉先生のお話を聞きました。先生の話し方は心に響く話し方ですごく不思議な感じがしました。月ヶ瀬に住んでいるのに知らないことがたくさんあり、いつも何気なく通っている場所に歴史の深い碑がたくさんあることに驚きました。一番心に残ったのは「山と水　清き天下の　梅の里」という句でした。月ヶ瀬にぴったりだなあと思います。これからもこの句が合うきれいな月ヶ瀬であってほしいです。

〇稲葉長輝先生とともに古道を歩こう！　総合的な学習の時間・選択発展社会の時間
実際に古道を歩く「ふるさとＷＡＬＫ」校区を見所や方面で４つに分けて探索する。
「百聞は一見にしかず」のことば通り、美しい景観と先生のお話に引き込まれる体験。
フィールドワークは１年間に２回ずつ２年に分けて実践する。

・第1回桃香野walk

谷崎潤一郎碑前で

重要文化財菊家家


桃香野よりの湖面

今日は実際に月ヶ瀬の歴史に触れるふるさとwalkということで、桃香野へ行きました。一番興味を持ったのは国の文化財指定の菊家家住宅です。今の家では見られないものばかりで特におもしろかったのは屋根です。今とは全然違う茅拭きの屋根です。他にもお寺や石碑、摩崖仏も見ることができました。二番目に印象に残ったのは、竜王の滝です。自然がきれいで、心が落ち着きます。いろいろな所へまた行ってみたいです。

・第２回嵩・月瀬walk

第2回の月ふるさとwalkは一度も行ったことのない嵩・月瀬だったので楽しみでした。美しい紅葉と渓谷が見えました。騎鶴楼(きかくろう)の公園で見たあの景色は今でも鮮明に目に焼きついて離れません。"これぞ、月ヶ瀬の自然"と言わんばかりの美しさ、もっともっとたくさんの人に月ヶ瀬を知ってもらいたくなりました。芭蕉の俳句「春もやや　景色ととのふ　月と梅」のように見えてきて、月ヶ瀬にぴったりの句だと思いました。これから冬も厳しくなりますがその先の美しい春を感じるのが今から楽しみです。

月瀬・頂上広場より…紅葉がきれい

富岡鉄斎という有名な画家が月ヶ瀬の景色を描いてくれていたなんてうれしいな。「一目万本」は梅が湖面に沿って万本見渡せる景色の良いところだということを！
「ダムがなかった昔はもっとすばらしかった。」と先生より聞き、少し残念に思いました。見たかったな。

「ダムのない昔、澄んだ水のせせらぎともっとたくさんの梅の木があった。住居と梅の木、大切な石碑もダム湖に沈んでしまった。橋や幹線道路ができ生活は便利になったが、あの美しい景色はなくなってしまった。」先生のことばから開発の光と陰を考えることができた。

・第３回石打walk

郷土資料館の中に江戸時代、境の白樫村と石打との争いがあり徳川の将軍の所まで行って境界を決めてもらった書画が残されていた。すごいなあ！そのほかにも大地震の記録や、年貢を減らしてという嘆願書まで残してあった！ちゃんと民衆は村を守ってきたんだな。

佐々木信綱歌碑前で

私は95歳、まだ足腰は達者です。石打の歴史や見所を話して、古道や史跡を廻ってみよう。私の生まれ育った石打だよ。君たちに伝えたいんだ。

城山は、中世の武士が石打を守る為に築いた山城で、空堀や武者隠しの穴が残っていたのには驚いた。昔の人は、故郷を守るためにがんばっていたんだなあ。

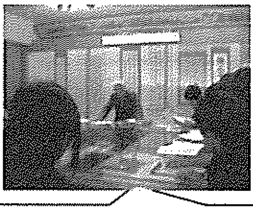
稲葉先生はとても元気に、城山を案内してくださった。すごいなあ。

・第４回尾山walk

真福寺　村部さんと

歴史で学習する「支配者だけの歴史ではなく民衆の日々の暮らしや闘い」がふるさとにあったことを実感する。先人の生き様を身近に感じとれた。

真福寺の村部さんのお話はお寺の歴史と日本の歴史が関係していて、すごくおもしろかったです。他にも頼山陽直筆の「萬玉亭」の書を見たり、観光会館の展示室にもびっくりしました。月ヶ瀬を訪れた人には伊藤博文や新渡戸稲造などの有名人の名前があり月ヶ瀬はすごい所なんだと改めて思いました。あの急な代官坂を昔は上り下りしたんだなあ。



この資料館には富岡鉄斎や斉藤拙堂の書画、東郷平八郎の書もあるんだ。碑も文化や歴史が風化しないように運動して作ってきたんだよ。君たちも故郷を守り誇りに思ってほしい。

②さまざまな人の生き方、仕事に触れ、自分も夢を持ち生きていこうとする態度を育てる。

○故郷に誇りを持とう。稲葉先生の人生から学ぶ。講話　全校道徳

先生の歩んで来られた道「なぜ、郷土研究に取り組まれたのか？子ども・青春・先生時代〜退職後の生き甲斐」についての講話。全校道徳として生徒・職員が聞き入った。

子どもの頃、貧しくて学びたくても進学できなかったこと、先生になるまでの苦労や戦争の話、名勝月ヶ瀬を守り伝えるための活動など、今日は先生の人生からいろいろなことを知りました。先生は１４歳からずっと日記を書いておられる。８０年間続けているってすごいな。私も誇りをもち生きていきたい。

人生の大先輩の話は「夢と情熱、勇気」を与えてくれた。

子どもの頃から本が好きだった。父が死に上級学校には進めず、農業の資格で教師を始めた。青年団活動で東京に行き、皆が月ヶ瀬を知っていることがうれしく、斉藤拙堂の月瀬記勝を独学で勉強した。苦労して教師になったよ。月ヶ瀬の歴史を研究し、後世に伝えるのが楽しみなんだ。君たち夢はあきらめずに努力すればきっとかなうんだ。しっかり学べよ。

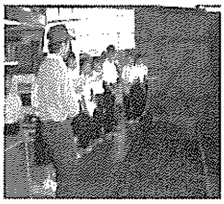
○故郷の産業を知り、文化を体験しよう。総合的な学習の時間

月ヶ瀬の地場産業である梅・茶産業を理解し発展させるために地域の支援を受けて体験。さらに伝統文化を継承するために、闘茶・煎茶道を地元講師に指導してもらい、文化の薫りを味わう。作法を通じ「礼儀や相手を思いやる心」を体得する貴重な機会。

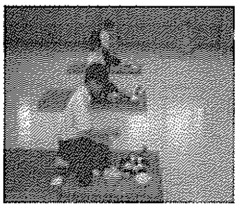
小中合同梅採り

茶摘み体験

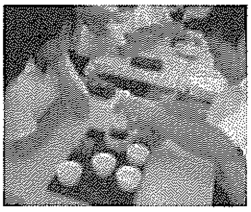
製茶工場見学



煎茶道全校茶会



茶ムリエさん 闘茶会



③ふるさとの良さをまとめ発信したり、守っていこうとする主体的な態度を育てる。

○地域の支援を受け環境保護や福祉活動を実践する。総合的な学習の時間・生徒会活動
ふるさとの自然や文化に触れ「自分達も地域に何か貢献できないか。」生徒会が中心になり環境保護やボランティア活動を実践。お年寄りとコミュニケーションも進める。

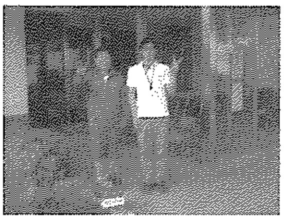
生徒会梅林清掃

地域あげてのアルミ缶回収活動

一人暮らし老人宅へ友愛訪問・賀状作成

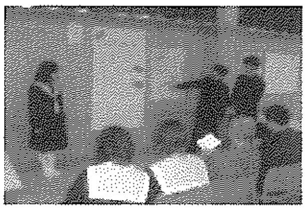
紙パック・アルミ缶リサイクル工場視察

地域への花のプランター寄贈

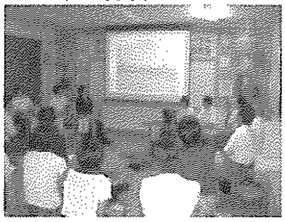


○ふるさとや月ヶ瀬中学校の良さを発信・交流する。総合的な学習の時間・生徒会活動
ふるさと学習をいかに継続し、伝えていくか？学校・家庭・地域へ発信する。アルミ缶回収活動は１４年目を迎え、生徒会が多方面で発信。３年生は集大成として、ＤＶＤにまとめる。ユネスコスクールにも登録し国際理解や多文化共生学習に取り組む。

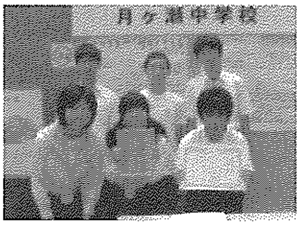
ふるさと学習発表会
ポスターセッション



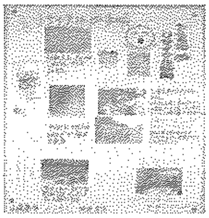
奈良市教育改革フォーラム発表



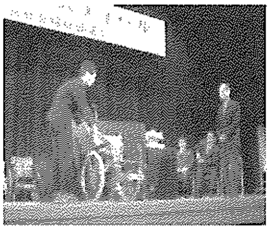
奈良県環境フェスタ発表



リサイクル工場視察～
リサイクル新聞発行へ

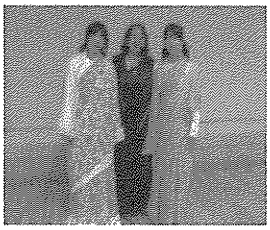


福祉フェスティバル



車いすを福祉施設へ

国際理解・シャルマさん
と多文化共生



世界遺産・地域遺産・伝統文化
すぐれた地域の人物との出会い
} 環境・国際理解・平和・人権
伝統・文化・地域理解・歴史
} 繋がる探求・ユネスコスクール・ＥＳＤ

４. 成果と課題

一連の活動は稲葉先生という素晴らしい人物との出会いにより始まった。フィールドワークを中心に世代間のつながりができ、ふるさとを愛する心を育むことができた。課題は自分が遺産を守っていくという当事者意識の育成を図り、それを発信することである。地域への愛着をもつことは他地域とのつながり、それぞれの個性や文化を尊重する人権、国際理解など多様な学びに発展させることができる。受動的姿勢から、地球市民として自分は何をすべきかを考え、行動するグローバルな視野を持つことが必要である。学校も取り組みを単年で終わらせないプログラム（知る→体験する→行動する）を構築する必要がある。ＰＴＣＡで取り組む「アルミ缶回収で車椅子を」活動も地域の支援を受け１４年間続いている。郷土を愛し、子どもの活動を支えてくださる稲葉先生や温かい地域の支援に感謝して、ＥＳＤの理念を「ふるさとに夢と誇りを持とう」という思いで続けていきたい。

第５学年

暈繝（うんげん）彩色切り絵

奈良市立佐保川小学校　　山崎　智子

１．はじめに

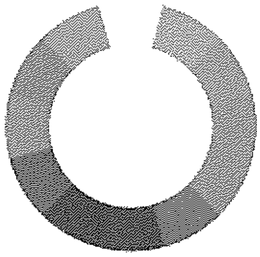
奈良に数多くある文化財のひとつに東大寺がある。東大寺正倉院の宝物は、整理済みのもので約9000 点にのぼり、それらは歴史的資料としてだけでなく、美術品としても高い価値をもつ。毎秋開催される正倉院展には各地から大勢の人々が足を運んでくる。正倉院の宝物の中に「漆金薄絵盤（うるしきんぱくえのばん）」、「粉地彩絵八角几（ふんじさいえのはっかくき）」などがあり、これらには、暈繝彩色といわれる中国から伝わった意匠表現が見られる。暈繝彩色とは伝統的な文様の彩色法のひとつで、限られた色料でグラデーションにより表現する技法である。立体的な感じに見えたり、少ない種類の色料で多くの色を使っているように感じさせたりする効果のある彩色法である。

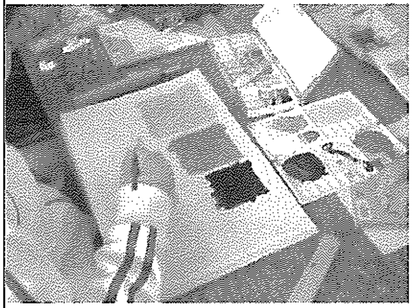
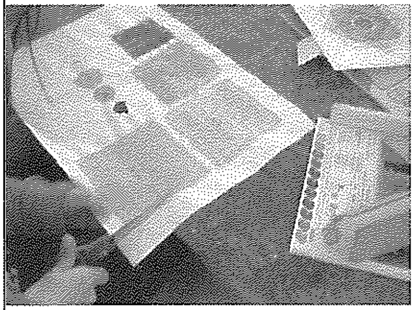
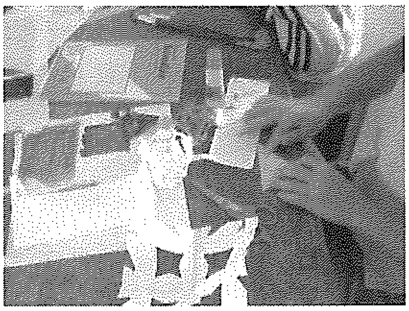
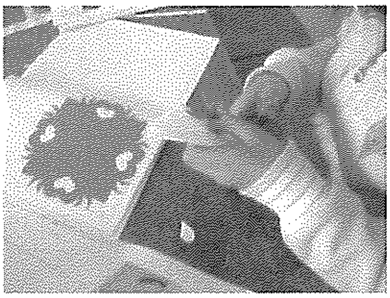
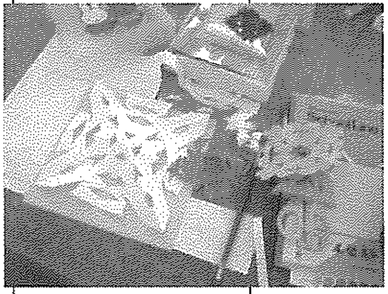
暈繝彩色という言葉を知る人は少ないが、縁あって奈良という地に学ぶ子どもたちがその彩色法を知ることによって、文化財やそれを守り継承してきた人々への想いを深め、本物に触れる機会をもつきっかけになればと考えている。

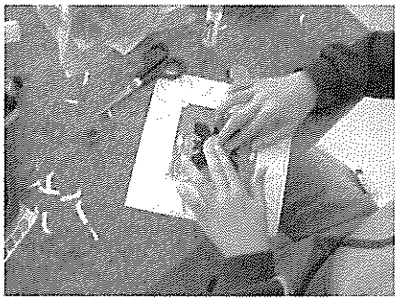
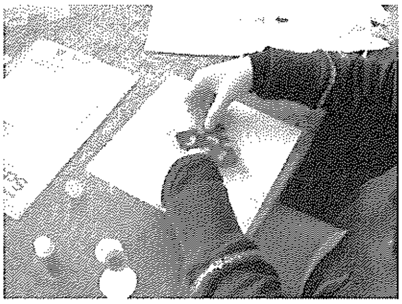
２．ねらい

- 暈繝彩色の作品の美しさを味わう。
- 暈繝彩色について学習し、追体験し、先人の知恵を知ることによって文化財への理解を深める。
- はさみやのりを使って、８枚重ねにした紙を切る、貼るなど、細かい作業ができるようにする。

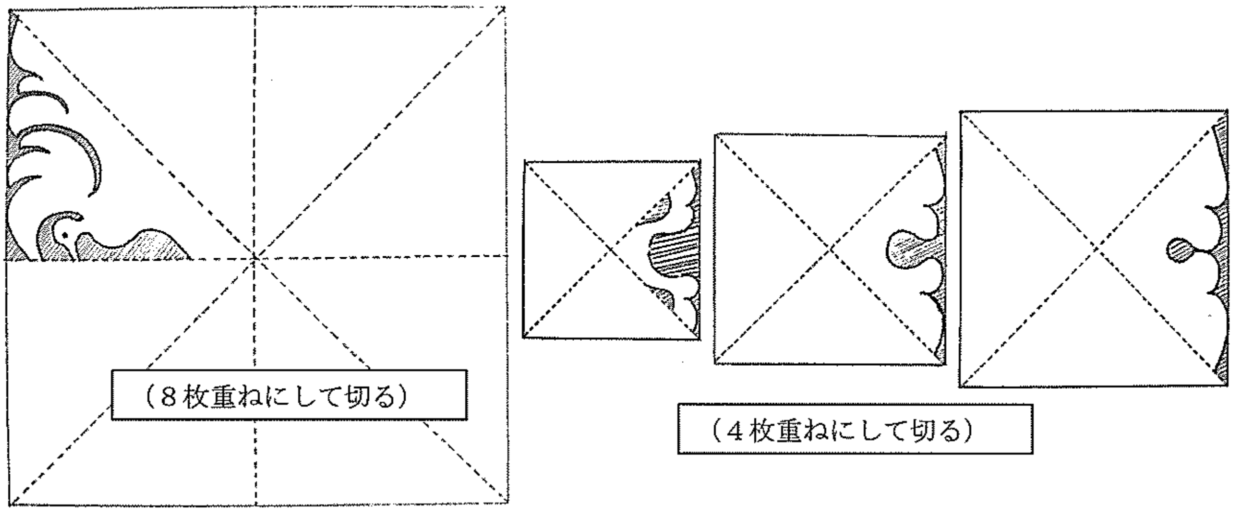
３．学習活動の概要（全５時間）

主な学習活動	学習への支援・留意点	評価	備考
１．１２色相環図を見て、各色の関係を復習し、奈良時代に使うことができた色料について考える。 	・　三原色の混色等について考えるようにする。 ・　奈良時代の色料は鉱物、動植物からとった顔料で、現代ほどの色数はなく限られていたことを伝える。 ・　暈繝彩色は古代建築だけでなく、現代に至るまで社寺の装飾などに用いられていることに気づかせる。 ・　暈繝彩色の配色は、純色における色相環上の対照的な色味をもった４色であることを理解させる。	・　暈繝彩色について理解することができる。 暈繝彩色は、多くの神社仏閣で目にすることのできる装飾で、一般に外側の薄い色から中心に向って濃い色にしていくことが多く、青・赤・緑・紫の４色が使われる。	１２色相環図

２．作品を製作する。 ・　対照的な色の組み合わせの２組のグラデーションを作り、和紙に着色する。 	・　型紙がプリントされている方を裏にし、型紙から少しはみ出るぐらいに着色するように声をかける。 ・　ムラを残す方が良いことを伝える。	・　暈繝彩色を追体験することにより、先人の知恵を知ることができる。	型紙をプリントした和紙 絵の具
・　乾燥させている間に、正方形の紙(色紙)を四つ折(１/４サイズ)にして、切り取るための下描き線をかき、はさみで切る。 ・　乾燥したら、裏側にプリントしてある四角形に沿って切り、彩色した方を内側にして折る。 	・　ノートにどんな下描き線をかいたか記録をさせ、できた作品をその横に貼らせるようにする。 ・　あまり複雑にならないように声をかける。 ・　プリント線が見えないようにするためであることをおさえる。 		ノート 色紙 はさみ
・　折った和紙にノートの記録を基に下描き線をかき、はさみで切る。 		・　はさみを正しく使って、丁寧に切ることができる。 	

・ 広げたものを台紙に順番に貼っていく。 	・ 中心に向かって濃い色にするように促す。 ・ 台紙は何色か用意し、一枚選択できるようにする。 ・ 全面べったり貼らずに、端はめくれるくらいが良いことを伝える。	・ のりを使って、丁寧に作品を仕上げることができる。	色画用紙 のり
			
3． 出来上がった作品を掲示板に貼り、図工ノートに感想を記入する。	・ 一人一人の作品が違うことに気付かせる。 ・ 当時の人々が乏しい色料で豊かな表現をしていたことに気付かせる。 ・ 本物の暈繝彩色が古代建築、現代の社寺装飾、博物館、美術館の中にないか、探してみようと声をかける。	・ 暈繝彩色の作品の美しさに気付き、文化財の暈繝彩色に対して関心をもつことができる。	ノート

<切り方の例>

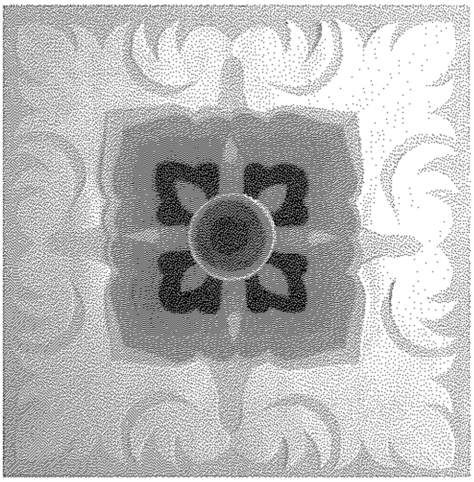
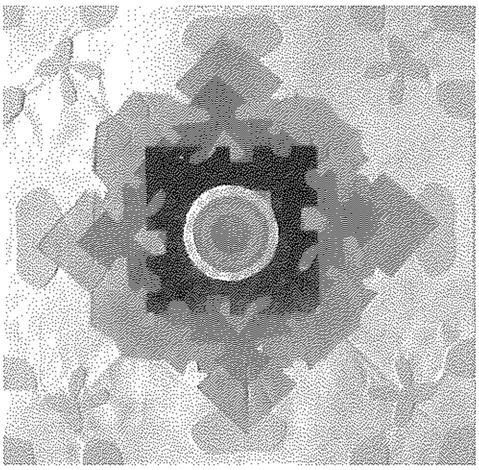
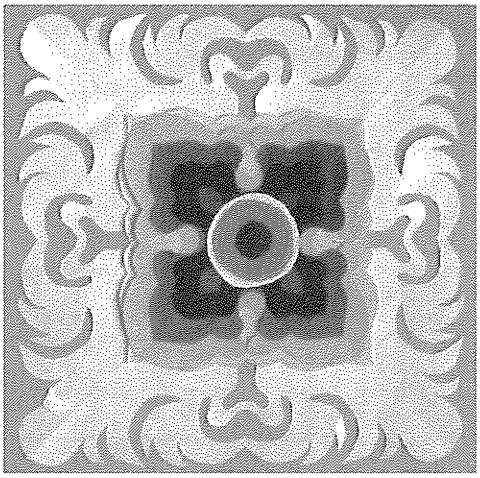
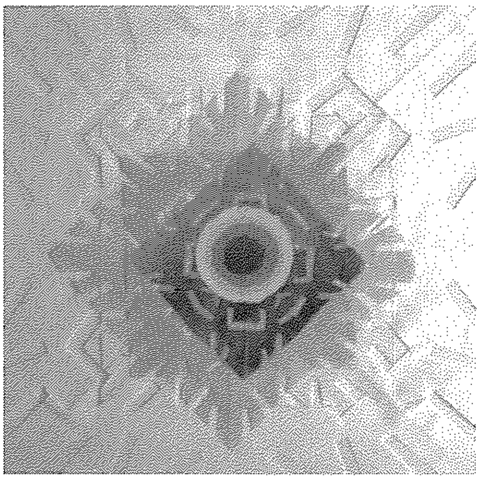


４．成果と課題

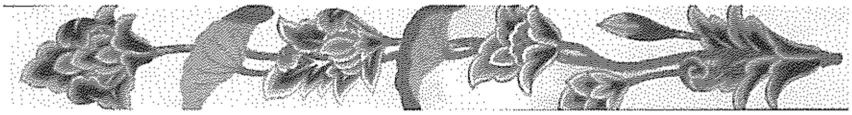
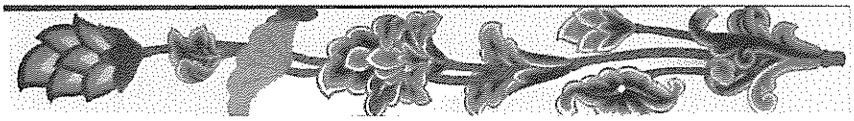
暈繝彩色について学習し、追体験することにより、昔、限られた色しかなかった時代に、先人が苦労をし、工夫をして、この彩色法を編み出したことを感じることができたであろう。今までなんとなく見てきた古い建造物の彩色を、この学習を行ったことにより、関心をもって新鮮な思いで見てくれるのではないかと考える。

これからも、我々はいろいろな角度から、子どもたちの「文化遺産をみる目」を育てる必要がある。

５．児童作品及び参考作品

薬師寺金堂の軒裏で見つけた装飾＜宝相華＞これも暈繝彩色

＜参考資料の提供及び助言：奈良教育大学　大山明彦准教授＞

第５学年

すてきNARA発見！

奈良市立左京小学校　教諭　西村　愛子

１．はじめに

本校では、今年度より５・６年生は、外国語活動を週１時間、年間３５時間学習することにした。年間３５時間の内、１５時間は小学校ハローイングリッシュの時間として英語アシスタント（外国語指導助手）とティームティーチングで行い、２０時間は学級担任のみで授業を行っている。

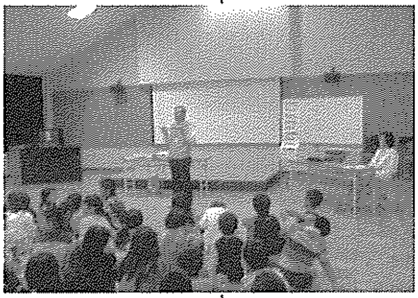
外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」である。そこで、世界遺産学習を進める中で、外国の方と触れ合うことにより、外国をより身近に感じ、更には自分たちが住んでいる奈良のよさに気付くことを目指し、外国語活動を組み込んで学習することにした。

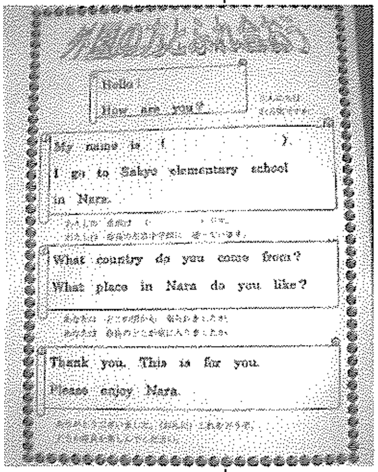
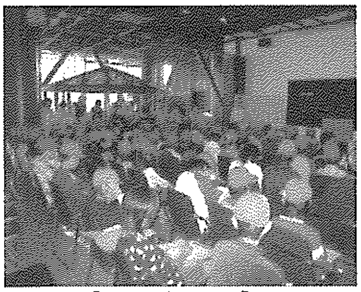
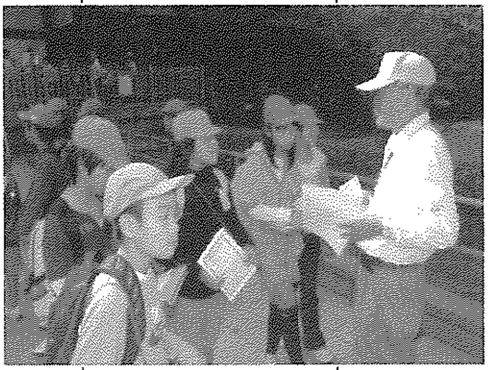
２．ねらい

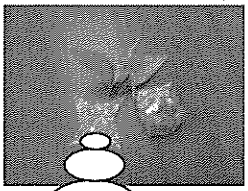
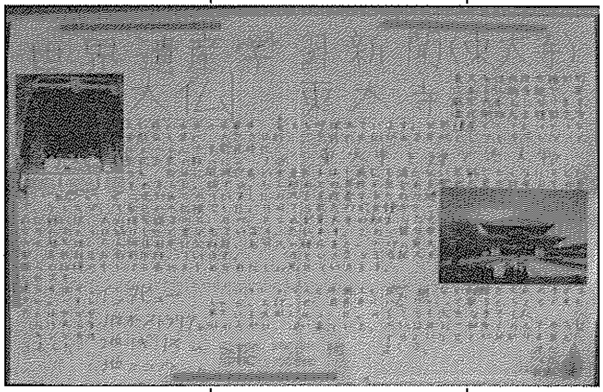
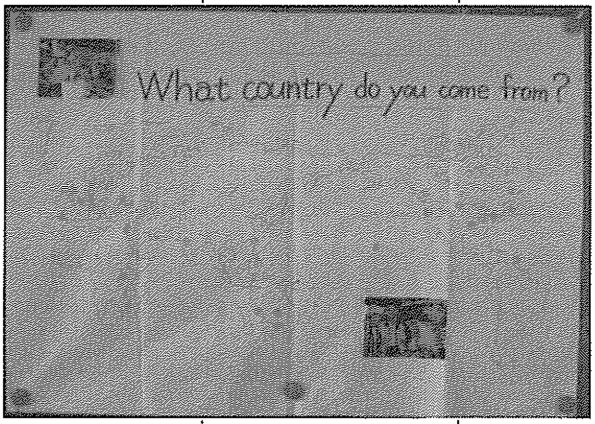
・　奈良にある世界遺産の見学を通して奈良のよさを発見し、大切にしていこうとする態度を養う。

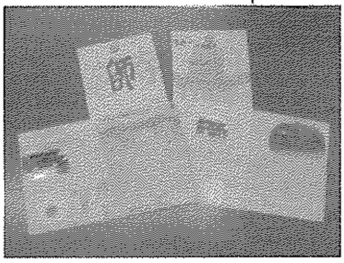
・　外国から来られた観光客にインタビューをすることで新しい奈良を発見したり、積極的に英語で伝えたりする。

３．学習活動の概要（総合的な学習の時間１５時間、外国語活動６時間　　全２１時間）

主な学習活動	学習への支援・留意点	評　価	備　考
１．ビデオ『古都奈良の文化財』を視聴する。（総合）	・　初めて知ったことや、もっと知りたいことなど感想を書かせる。	・せっかく奈良に住んでいるのだから文化財などに興味をもってみようと思った。（O） ・古都奈良の文化財として、８つも世界遺産に登録されているなんてすごくびっくりした。（M）	
２．ボランティアガイドによる事前学習をする。（総合） 	・　校区に住んでおられるボランティアガイドの方に来ていただいてお話をしていただく。 ・　詳しく知りたいことや調べたいことを決めさせる。（課題の設定）	・防火訓練などをして、貴重な文化財を守ったりすることを初めて知った。（N） ・世界中からたくさんの観光客が来るということを知った。（Y） ・何年も何年もかけられたものは、ずっと残していきたい。（I）	

3．外国の方にインタビューをしよう。（外国語） ・好きなものや嫌いなものを聞いたり、自分で言ったりすることができるようにする。 （英語ノート1　Lesson 4 「自己紹介をしよう」）	・　自己紹介することで、人前で英語を話すことに慣れさせる。 〔ジェスチャーゲーム〕	・ゲームをしながらいろいろな英語を覚えるのはおもしろい。(O) ・今日はたくさん英語でしゃべることができてよかった。(M) ・ゲームで英語が自然に覚えることができてうれしかった。(O) ・自分の好きなもの嫌いなものを相手に伝えるようにする。	
・奈良市内の世界遺産の場所を知る。 ・インタビューの練習をしよう。	・　奈良市内の地図を使って、英語で案内したり、案内されたりする。 ・　しおりの「外国の方と触れ合おう」を2人1組になって練習させる。 ・　しおりの英文を読むのではなく、耳で聞いて発音させる。	 Hello! How are you? My name is (　　　　). I go to Sakyo elementary school in Nara. What country do you come from? What place in Nara do you like? Thank you. This is for you. Please enjoy Nara.	
4．世界遺産学現地見学を行う。　（総合と外国語） ・なら奈良館 ・東大寺、二月堂 ・薬師寺 ・唐招提寺  [なら奈良館]	・　グループ（5～6人）でボランティアガイドから説明を受けながら見学する。  ・　自分の設定した課題を中心に自分が実際に見たり聞いたり感じたりしたことをメモさせる。		

・外国の方にインタビューをして、コミュニケーションを図る。 	・　外国の方がどこから来られたかを聞き、世界地図にシールを貼ってもらう。 ・　外国の方の好きな場所を聞き、奈良市内の地図にシールを貼ってもらう。  インタビューに答えて下さったお礼に千代紙で折った鶴や手裏剣、紙風船をプレゼントした。とても喜んで下さった。	・積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。 	
5．現地見学で学んだことをもとにまとめる。 （総合） ・壁新聞作り 	・　グループごとに絵や写真、クイズなどを入れ、それぞれ工夫してまとめさせる。	・設定した課題についてまとめることができる。   	

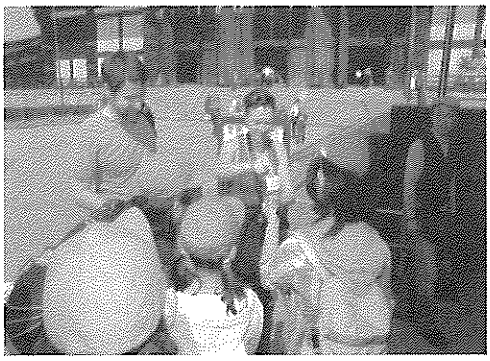
	・ 奈良のよさを外国の方に知ってもらえるように写真や絵などを採り入れ、工夫させる。	
6．世界遺産学習発表会でグループごとに報告をする。　　（総合） ・トピックアルバム作り（青少年赤十字を通じて外国へ発信）	・ 発表をする時は、はっきりと分かりやすい声で発表するように指導する。 ・ 発表を聞く時は、メモを取りながら聞くように指導する。	・きちんとメモをとって聞くことができる。

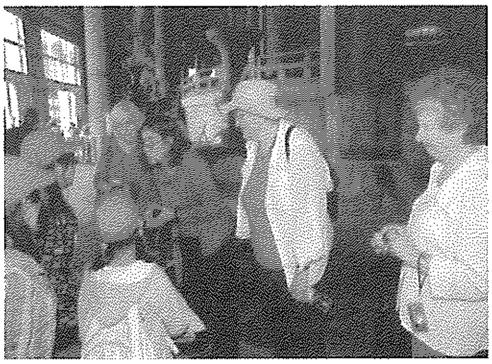
4．成果と課題

・ 外国語活動の時間に英語で自己紹介をすることにより、英語で話すことに対する抵抗が少なくなったように思う。見学当日は、外国の方が優しく接してくださり、言葉が分からなくてもジェスチャーなどで交流することができた。子どもたちは、様々な出会いの中で英語を使って話すことにより、外国の方と話すことに対する自信をつけることができた。

・ 外国の方にインタビューする際、どこから来られたか聞いたところ、世界のいろいろな国から来られていることがわかり、改めて奈良の素晴らしさを確かめることができた。そして、もっと世界の多くの方に奈良の素晴らしさを知ってもらおうと、パンフレットを作り、外国へ送ることにした。そのことにより、更に多くの方に奈良に足を運んでいただき、国際都市としての奈良を願う気持ちに広げることができた。

・ 本校では、３年生で校区の瓦窯跡を見学して、実際に鬼瓦を作る学習をしている。その昔、瓦窯跡で作られていた鬼瓦は東大寺建立の際に使用されていたものである。今回の学習では、このことについて深めることができなかった。今後、系統的に考えていくことができるように年間計画を見直していきたい。





第６学年

文字を深く学ぼうⅡ

― 聖武天皇「雑集」の臨書で作品をつくる ―

奈良市立登美ヶ丘小学校　教諭　辻倉　史子

１．はじめに

昨年の「心で感じて、心で書こう」の実践に引き続き、奈良ならではの世界遺産学習と国語科書写領域とを結びつけた授業の可能性をさぐることを目的に取り組んだ。

小・中学校における書写学習では、毛筆は「硬筆の基本」として、文字を「正しく」、「整えて」書くことをねらいとしている。「臨書」という名蹟を追体験する機会は、高等学校における芸術科書道まで与えられない。それゆえ、古い書の美しさや、書にまつわる歴史、それらから得られる感動を知らないまま、小・中学生の時期を終える児童が大半である。

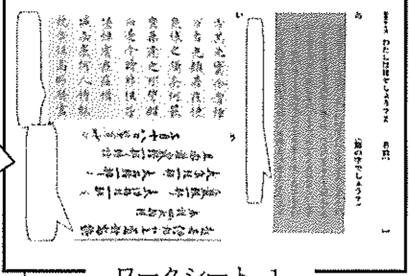
新しい小学校国語科学習指導要領では、高学年書写に関する事項に「書く速さ」「筆の穂先の動きと点画のつながり」を意識することが加えられ、「硬筆の基本」を超える毛筆のより高度な技術が要求されている。これらの技術の体得には、範書における筆の動きを注意深く観察することを必要とされるが、昨年の試みによって、聖武天皇の「雑集」が、子どもたちの集中力とやる気を引き出す力をもつ教材になることを実感した。

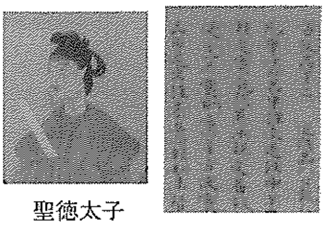
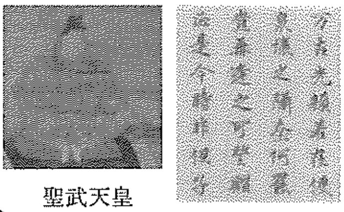
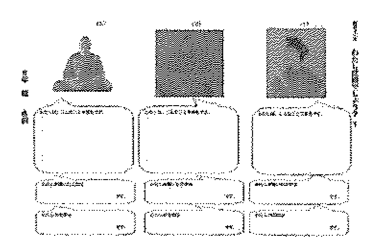
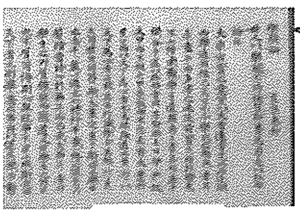
奈良には世界遺産のみならず、奈良の地にゆかりのある歴史上の人物の書に優れたものが多く残されている。これらは大陸から文字表記を学び、今日の私たちの国語表記を支える礎を築いた時代の足跡であり、文字の文化と歴史を考えると、この奈良の地に生きた先人の功績は大きい。今回の実践を通して、このような歴史をもつ奈良を誇りに思う心情を育てたいと考えた。

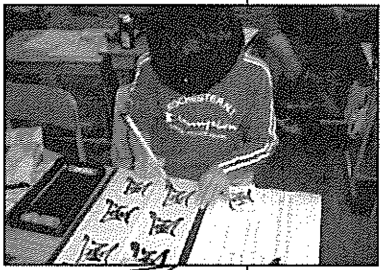
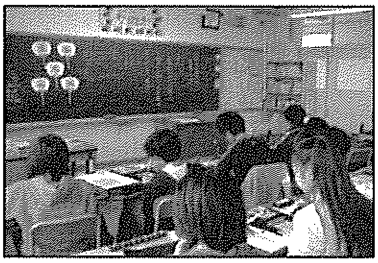
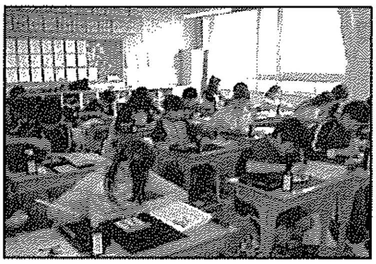
２．ねらい

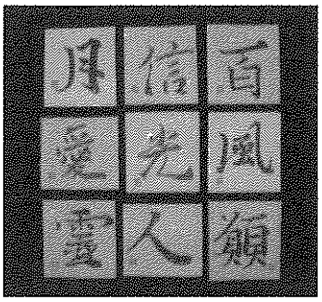
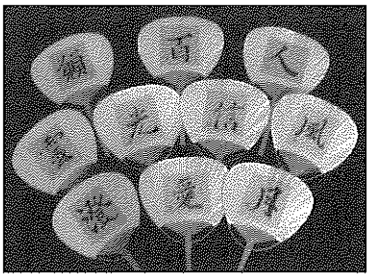
- 奈良時代にはすばらしい書蹟が多く残されていることを知る。
- 奈良にゆかりある歴史人物と、その筆跡に興味・関心をもつ。
- 優れた古典作品にふれることで、より文字の形に注意しながら、丁寧に書くことを意識する。

３．学習活動の概要（全１６時間）

主な学習活動	学習への支援	評価	備考
１．“わたしはだれでしょう”	社会科で学んだ歴史事項と肖像画をヒントに奈良にゆかりある歴史人物と、その人の字をあててみよう。		
・奈良にゆかりのある歴史人物の筆跡を知る。 （３時間） ○　聖徳太子「法華義疏」 ○　聖武天皇「雑集」 ○　鑑真「奉請経巻状」	・筆跡から受けた印象を書き込むワークシートを準備する。 （ワークシート１） これは、どんな人物が書いた文字なんだろう？ 「奈良にゆかりの人物」って？	 ワークシート　１	

・書かれた文字から受ける印象から人柄を想像する。 ・せっかちな偉いさん(？)器用。 ・万葉仮名が入ってるから古そう。 ・何でもできそうな人  聖徳太子	・黒板掲示資料（肖像と筆跡）を準備する。 鑑真和上 ・ゴツくて、力強い人 ・おおらか、心が強い人 ・おとなしくて、まじめそう	 聖武天皇 ・几帳面でまじめそう ・しっかり者、優しそう 古くに書かれた文字に、自分なりの感想をもつことができる。	
・奈良にゆかりのある歴史上の人物について知る。 ・ワークシートの書き込みを発表しながら学び合う。	・人物名や歴史的な事項を書き込むワークシートを準備する。 （ワークシート２） ・社会科資料集や『奈良大好き世界遺産学習』から、仲間に教えてあげたくなるような驚きの情報を書き込むように促す。 聖徳太子、聖武天皇や鑑真のこんなエピソードを見つけたよ。	 ワークシート２ 人物と歴史的な事項、人物と文字を結びつけることができる。	
２．奈良ってすばらしい！ ＤＶＤ鑑賞（総合２時間） ・「天平文化の演出者 聖武天皇と光明皇后」 ・「天平の甍 唐招提寺」 ・光明皇后「楽毅論」って？ ・光明皇后の筆跡から人柄を想像する ○　光明皇后「楽毅論」  楽毅論	・鑑真が日本に来るまですごく苦労したんだなぁ。船が難破したときに、鑑真だけが海に浮いていたと伝わっているのがおもしろい！ ・鑑真さん（鑑真和上坐像）って国宝なんだ！ ・本当の像を見に唐招提寺に行ってみたい！ 教科書に一部紹介されている「中国から伝えられた書を写した書（正倉院）」は光明皇后の直筆であることを紹介。 ・光明皇后の字はすごく強そう！ ・意外と長くてきれい。名前だけ、違う人が書いたみたい。 ・美しい漢字の書が奈良時代に盛んに学ばれた歴史を意識するように促す。		・『正倉院の宝物』 第4集-２ ・『日本の国宝至宝』 第4集－１ (NHK DVD)

3．文字を深く学ぼう （総合６時間） ・表意文字の漢字、表音文字の仮名とハングルの成立ちを知る 韓国でも漢字が使われてたんだ。	・変体仮名資料の準備 ・ハングル文字資料の準備 ハングル文字って分かりやすくて読みやすい。覚えやすいなぁ。仮名とちょっと違う出来方なんだ。	・日本、韓国、中国の文字文化をくらべてみることができる。 ・文字文化に対して関心をもつことができる。	・書写6年（大阪書籍）
4．聖武天皇の字で作品づくり （国語科書写４時間） ・正倉院の宝物の一つである聖武天皇の「雑集」から、気に入った一文字を選ぶ。 ・選んだ一文字を練習する。 ・清書用紙（装飾紙）に清書する。	・「雑集」の中から、集字に適当な文字が含まれる部分資料を作成する。 ・団扇に貼る小作品として仕上げることを告げる。 ・作品に書く文字は、文字の美しさや意味など、気に入ったものを選ぶように促す。 ・半紙を１／６に折り練習するようにアドバイスする。 ・児童が選んだ文字の範書を準備する。	直江兼続の「愛」を書こう  自分の名前の文字を書こう	
	聖武天皇「雑集」の字を書こう（めあて） 一、　常に筆をまっすぐ立てて持つ 二、　始まり（始筆）と終わり（終筆）をよく観察する 三、　心をこめて、集中！！ ・範書をよく観察するように、一点一画に心を込めて書くように促す。	範書を観察し、筆づかいを意識して書くことができる。	・清書用紙（色箔紙11×12cm 4色×5枚／1人を配布） ・団扇
 ・めあてと取り組み（姿勢）の自己評価、感想を書く。	・習字の奥深さが改めて分かった…。字にはそれぞれの人の性格が出るんだなぁと思った。今回は難しかったけど楽しかった。（I） ・すごくきれいに書けた。心をこめたのできれいだった。（S） ・だいぶ苦戦したけど、うまく出来た。（K） ・最初はにじんだりして難しかったけど、最後はいいのができたと思います。これを書いて聖武天皇はよっぽど字がきれいなんだと思いました。（T） ・最初はすごく下手だったけど練習していくごとに上手になっていくのを見るのがすごく楽しかった。（H） ・いつもよりいっぱい書いて、自分でもよくがんばったと思う。（N）		

	・がんばっても、やっぱり聖武天皇のようには書けなかったけど、心をこめて集中することができました。(M) ・いくらがんばっても、なかなか上手にならなくてじれったかったけど、書けた時は気持ちよかったです。(Y) ・すっごく難しかったけど、よくよく観察して書きました。音楽会よりも緊張しました。(T) ・「風」の上の部分が少し独特な感じがして、とても心をこめて書けた。(N) ・ふつうの習字と違って昔の字をまねするのが楽しかった。(O)		
5．作品発表会（鑑賞会） （国語科書写１時間）  ・文字を選んだ理由や、書く際に苦心したことを述べると共に作品を発表する。	・作品づくりという目標をもち、集中して取り組んで達成感が得られたことを確認する。 ・今後の書写に対する学習と、古くに書かれた美しい文字に対する関心へと導く。 ・美術館・博物館に展示される、昔の人の本物の書にも目をむけてみることを薦める。	心をこめて一生懸命に書いた成果を認めあう。 奈良国立博物館 奈良県立美術館 奈良文華館 松柏美術館　等	・作品には押印

4．成果と課題

・　本年度は、昨年度のゲストティーチャーの講話を、奈良にゆかりの人物や書のもつ歴史背景についてのＤＶＤ映像を用いた学習に代えることを試みた。ゲストティーチャーほどの感動が期待できるかという心配もあったが、教科書では知り得ない鑑真和上や聖武天皇のエピソードを丁寧に扱うことで、奈良と奈良にゆかりの人物への興味と関心を引き出すことができた。

・　「書は人なり」といわれるが、過去に生きた人の書を通じて、その人物を想うことも書のひとつの楽しみ方である。歴史学習では迫りえない歴史人物の人柄を、自分自身の目で見た印象から想像することができたことも子どもたちの感動のひとつとなっていた。

・　“学ぶは真似ぶ”である。感動を覚えた文字を実際に書くことは、観察する目を養うとともに、無意識のうちに丁寧に書こうという姿勢を育む。歴史上の人物の筆跡を手本とすることは、教科書範書とは一味違う楽しみを与えていたようである。書写に苦手意識をもつ児童も、美しい色と箔のほどこされた紙を手にして興奮し、普段はみられないこだわりと集中力を発揮していた。

・　国語科「仮名文字の成り立ち」の発展学習として、総合的な学習で「文字を深く学ぼう」と題して変体仮名の歴史とハングル文字を学習した。文字についてより深く学ぶことも、子どもたちの筆を持つ意識に少なからぬ変化を与えていたようである。文字文化と深く関わるこの奈良の地で、その成り立ちを学んだり、残されている書という小さな遺産に目を向けたりすることができることも奈良の魅力の一つかもしれない。

中学校（第３学年）

国際情勢と危機遺産

奈良市立京西中学校　教諭　中原恭輔

１．はじめに

京西中学校の近くには唐招提寺や薬師寺等の世界遺産がある。生徒たちは、唐招提寺のうちわまきなどの行事を通して、それらの世界遺産に親しみながら生活をしてきた。日常での出来事や生活は、実は何物にも代え難い貴重な財産であるのだが、ほとんどの生徒はそのことに気づいていない。

また、その一方で世界全体に目を向けると世界遺産に対しての落書きや破壊行為など嘆かわしい出来事がおこり、大きな社会問題として取り上げられている。世界遺産は、その国にとって価値のある遺産であるだけでなく、先人が現在に残してくれた人類全体の遺産でもある。ゆえに我々は、そのような世界遺産を人類全体で守り、後世に伝えていかなければならない。一方で、危機にさらされることで世界遺産としての価値が失われたと判断されれば、世界遺産としてそれ自体、世界遺産リストから削除される可能性もあることを忘れてはならない。

社会科教育に期待されていることの一つとして、歴史・文化の継承や、歴史的な事実の学習から、よりよい未来を切り拓いていくこと等が挙げられる。その意味では、世界遺産学習の土台として社会科教育の占める割合は大きいといえる。

そこで、公民的分野の世界遺産学習として、貧困・内戦・難民問題に起因するコンゴ共和国の危機遺産とパレスチナ問題に起因するエルサレムの危機遺産に焦点を当て、「世界平和と人類の福祉の増大」について考えさせるとともに、歴史・文化や人類にとってかけがえのない遺産を継承し後世に伝えていくために、何を考えてどのような行動をとっていくことが最善なのかを考えさせることとした。

２．ねらい　　社会科公民的分野（２時間）

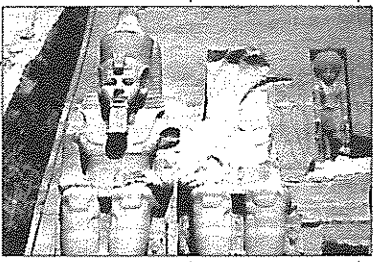
- 世界遺産とは、我々全体に普遍的な価値をもつものであり、守り続けていくべき宝物であることを理解する。
- 危機遺産の存在を知り、戦争・紛争・テロ・無秩序な開発行為等が原因で自然遺産や文化遺産の喪失がおこることを理解する。
- 様々な理由から世界遺産としての普遍的な価値がなくなり、世界遺産リストから登録が消えてしまうということは一体何を意味しているのかを考える。
- 今後自分たちが世界遺産だけでなく、身近な文化や自然を守っていくことの大切さに気づき、何ができるかを考える。

３．学習活動の概要

おもな学習活動	学習への支援	評価	備考
１．世界遺産について、理解を深める。 ● 古都奈良の文化財について	● １年で、唐招提寺や薬師寺へボランティア清掃を思いだし振り返りながら、古都奈良の文化財について理解させる	世界遺産が身近にあり、世界的に価値があることを再確認する。	プレゼンテーション

● 世界遺産の意義について	● 世界遺産の意義について『奈良大好き世界遺産学習』・『世界遺産ガイド -シンクタンクせとうち総合研究機構発行-』※1 を使いながら理解させる。		画像

※2

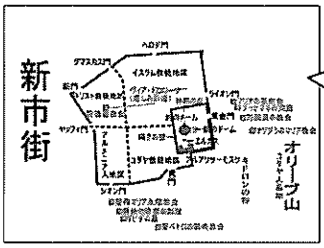


このアブ・シンベル神殿等のヌビア遺跡は、ナイル川のアスワン・ハイ・ダムの建設計画で 1959 年に水没の危機に晒されたんだ。この遺跡群の救済問題から世界遺産の考え方が生まれたんだ。

「唐招提寺」や「薬師寺」は京西中学校の生徒や奈良市民だけでなく、日本やその他の国々においても大変価値あるものである。世界遺産に登録されることは、その物件自体に「顕著な普遍的価値 (outstanding universal value)」があることを世界が認め、保護し後世に継承していこうとしているものである。全人類で守っていこうとする宝物である。

2．危機遺産について、理解を深める。 ● 危機遺産について ● 危機遺産となる原因について ● 危機遺産リストに登録されている物件について ● 危機遺産の原因となる、地域紛争や内政情勢の不安定さについて	● 危機遺産リストに登録される原因としては、暴風雨や地震・洪水・噴火などの大規模災害、内戦や戦争などの武力紛争、ダムや堤防建設などの大規模な開発事業、自然環境の悪化による破壊等である。 ● 現在危機遺産は、３１の遺産が危機遺産リストに登録されているが、その中から、コンゴの世界遺産すべてとエルサレムの旧市街とその城壁について考えさせる。 ● 「国際社会と世界平和」の単元と関連づけて、地域紛争や、内政情勢の不安定さに焦点を当てて考えさせる。	危機遺産の存在を知る。	※3 タリバーンによって破壊されたバーミヤン渓谷の古代遺跡群
3．コンゴの世界遺産について、理解を深める。 ● コンゴの５つの世界遺産とその現状について ● 既存学習内容の地域紛争について ※4 	● コンゴの世界遺産は５件すべてが危機遺産リストに登録されており、なぜそのような状況になっているかを考えさせる。 ● コンゴが抱えている課題について、既存学習内容の地域紛争と関連付けながら、危機遺産と地域紛争や貧困について理解を深めさせる。 キタシロサイの密漁、治安の悪化等が原因のガラバン国立公園	コンゴの世界遺産の実情を知る。 原因として地域紛争があることを知る。 背景には多くの問題があることに気づく。	プレゼンテーション 画像

４.世界遺産であるエルサレムの旧市街とその城壁群について理解を深める。 ● パレスチナの歴史について ● 聖地エルサレムについて ※５	● パレスチナ地方が抱えている課題について、教科書（公民的分野p166・167）を使い理解する。 ● エルサレムの旧市街とその城壁群が、最も長い期間、危機遺産に登録されている現状について考える。	民族・宗教・歴史・文化の違いが紛争の原因となっていることに気づく。	プレゼンテーション画像



聖地エルサレムの旧市街図
イスラム教徒地区、キリスト教徒地区、ユダヤ教徒地区、アルメニア人地区があり、宗教の異なる歴史的に重要な遺跡を含んでいる。

✧ コンゴには「ガランバ国立公園」や「ヴィルンガ国立公園」等５つの世界遺産が登録されているが、そのすべてが危機遺産に登録されている。その理由として内戦による難民の流入や武力衝突、武力紛争、または密猟や伐採など人為的な要素があげられ、この国が抱える政情不安や貧困・難民問題に起因するところが大きい。
✧ エルサレムが属するパレスチナ地方は周辺の社会情勢の不安定さが、一番長く危機遺産リストに登録されている原因でもある。

５.世界遺産を、後世に残していくために、必要なことは何かを考える。	● 世界遺産としての価値がなくなることは何を意味しているのかを考えさせる。 ● 世界遺産を保存・継承していくために、どのような行動をすればよいのか考える。	世界遺産などを守っていく大切さに気づき、自分のできることを考える。	ワークシートに自分の考えをまとめる。

様々な理由により、世界遺産としての普遍的な価値がなくなり、世界遺産リストから消されてしまうことは、リストから消されることだけでなく、世界遺産としての普遍的な価値を守り継承していけなかったことが、人類として残念なことである。世界遺産だから後世に伝えていくというだけでなく、環境問題が叫ばれている昨今、身近な自然や文化財に目を向けグローバルな視点で世界遺産や美しい地球環境を守っていくことの大切さを知ることが重要である。

４.生徒の感想

- 何年も昔の人々が私たちに残してくれた大切な宝物をこれからも残していくことが、未来のためであり昔の人々の思いを伝えていくことにつながっていくと思います。また、世界遺産学習を学んで、自然遺産などのことを考えてみると、現在進んでいる地球温暖化や自然破壊のことにもつながっているのかなと思いました。
- 私は、出来るだけ世界遺産のことを学び世界遺産を守る動きに努めていきたいと思います。例えばボランティア清掃に参加するとか、見学に行った時にはごみを落とさない、できれば周りの人の分まできれいにして帰るなど、自分の身近な世界遺産からでもすぐに実行していきたい。

- 内戦や戦争を自分の力で防ぐというのは不可能に近いと思う。しかし、戦争や内戦の原因が貧困問題なら、私たちにも何かできることがあるのかもしれない。危機遺産に関しても、私たち人間一人一人が、危機遺産についてもっとよく知り、その中で対策を考えていくことが大切だと思う。
- 世界遺産は、今までの歴史が刻み込まれているとても大切なものです。自分たちが今いる地球で、ずっと残されてきたのものだからこそ、その遺産についてしっかり学び、これからの未来へ伝えていくべきだと思います。一人で頑張るだけでは、どうすることもできないけれど、皆一人一人がそういう意識を持っていくと「世界遺産」に対する考えが変わり、世界遺産を未来へ伝えていくことができるのではないかと思います。
- 私たちの周りには、たくさんの世界遺産があるので、その大切さにあまり気づかなかったのかなと思いました。テロによって爆破された像を見て悲しくなりました。エルサレムの地域のことはとても頭を悩ます問題だと思います。私たちの宗教の感覚では、わからない問題だと思います。私はみんなが仲良くし、聖地を共有していければいいのにと思いました。
- 私の周りにはたくさんの世界遺産があり、それが今もちゃんと整備されてあることが普通だったから、世界遺産の大切さや、守り続けることの意味をあまり解っていなかったと思いました。
- 世界遺産を後世に伝えるために、自分の地域のことを考える必要があると思います。また、伝えていくために、大きな行動をとるのではなく、小さな行動から始めていかなければならないと思います。自分たちの住んでいる地域のごみ拾いとか、その地域のボランティア活動に積極的に参画していくことが、世界遺産を後世に伝えていくことにつながるのだと思います。

5.成果と課題

生徒たちは、世界遺産学習を進めていくうちに、世界遺産についての価値を再認識するとともに、今まで以上にその大切さに気づくこともできた。中学生として、戦争・内戦・密猟・自然破壊等その原因を解決していくことは難しいといえるが、自分たち一人一人の考え方や行動で大切な遺産を守り、後世へ伝えていくことは可能である。また、その考え方や行動として、身近な文化遺産や自然について「自分たちの地域だけ、自分たちが住んでいる場所だけのものではない」という意識を持つことやゴミ問題や落書き等の身近な問題に目を向け、積極的にボランティア清掃活動等に参加していこうと思うことができたことは大きな成果だと言える。

公民的分野での世界遺産学習の実施については、当初は困難を予想したが、教科書【新編　新しい社会公民　〈東京書籍〉】第５章の「地球とわたしたち」の《地球環境問題》《人口・食料問題》《世界の子どもの問題》《地域紛争》の単元との関連や、その内容に広がりを付けることにより実施することもができた。

世界遺産学習には、世界遺産の物件やその歴史等を学習することのみではなく、さらに発展させ規範意識の向上や人権意識の成長等様々な幅広い学習へとつなげていく、つまり世界遺産学習を通して、グローバルな視点で経済問題や人権学習、平和問題学習へと発展させていく狙いがある。

今回、公民的分野の授業時数の関係から２時間編成で考えてみたが、総合的な学習の時間や学活・道徳の時間と関連付けて、教科担当から学級担任の指導へとさらに、学年全体の指導へと広げていくことを考えることも必要である。

参考資料

※１　世界遺産ガイド-世界遺産の基礎知識-2009 改訂版　同書　-危機遺産編-2010 改訂版
※２　世界遺産ガイド-世界遺産の基礎知識-2009 改訂版　６頁
※３　世界遺産ガイド-危機遺産編-2010 改訂版　75 頁
※４　同上書　49 頁
※５　http://homepage2.nifty.com/hashim/israel/jerusalemmap.htm

地域・世界遺産学習を通してESDに！

－地域・世界遺産の教材化の理論と実践－

国立大学法人　奈良教育大学

〒630-8528　奈良県奈良市高畑町